
升能力者の幻想入り

グラ公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

升能力者の幻想入り

【Nコード】

N1234Q

【作者名】

グラ公

【あらすじ】

東方二次

升オリ主

やりたい放題

ok？

この作品について

本作品は東方projectの二次創作です。

しかも升オリ主無双予定かつ文章力皆無シナリオ破綻といった駄文で、

極稀に投稿しようかと思っている程度のものなので、これはダメだなとか

危険を感じる人は読まないほうが時間をドブに捨てずにすむのでオススメです。

それでも読むって人は心を落ち着けて覚悟を決めて、びっくりするほどユートピア！と叫んだ後に、一度冷静になつて、今から自分が何をしようとしているのかよく考えた上でご覧下さい。

それでは、ゆっくりしていつてね！！！！

プロローグ（前書き）

フィクションだから意味不明な流れでも気にしない。
現実とは違うのだよ、現実とは。

ブローグ

俺の名前は佐原公一。フランの大学2年生。

大学生という名のニートに近い何かだ。多少のバイトしてるけど。

今日も午前の講義をサボり、昼過ぎにメシを食いに大学へ。

今日の昼はポーク鉄板にしよう。安くて多いので大学では人気メニュー。

一人のんびり食べていると見慣れた奴等が相席してきた。

「今日も相変わらずサボりか」

「朝の占いが12位だったから仕方ないだろ」

話かけてきたのは、天満屋敷一郎。苗字が珍しい友人だ。

俺は適当な答えを返してやった。

「嘘つけよwwwお前が朝起きるわけ無いだろwwwニート乙www」

うるさいのは、内藤裕也。友人のようなそうでもないような奴だ。

草はやすな、鬱陶しい。死ぬ。でも事実だから言い返せない。

「あ、そうそう出席は代わりにやっといたから100円よこせ」

「断固辞退する」

がめついのは、佐藤誠。コンビニのバイト仲間だ。

俺は某ガンデレ上級大尉のような返答をした。

昼を食べ終え、いつものようにゲーセンに向かう。

午後の講義は量子化しました。大丈夫、来週こそ出るから。

ゲーセンで遊び倒して友人達に別れを告げて帰宅。いつもの日常。

だらけきった毎日。ぶっちゃけやる気とかそういう類のものが起きない。

ふと家の醤油が切れたのに気づき、明日は醤油買いに行くから大学無理だなとか

圧倒的クズの発想で大学行かないための理由をつけて寝た。

起きるとそこは森だった（笑）

いや笑ってる場合じゃねえよ、なんぞこれ。

俺はわけがわからなすぎて呆然としていた。

プロローグ（後書き）

なんやかんやと人物出したけど、オリ主以外二度と出番はないかな

一話 異世界ですね、分かりません（前書き）

誤字とかあっても気にしない。面倒だし。

一話 異世界ですね、分かりません

家で寝て起きたら森にいました。

え？何事？幻覚？俺麻薬とかやってないんでいすけど。

しばらく呆然としてアホっぽいことばかり考えた後、死ぬほど錯乱した。

錯乱中は見苦しいので詳しくは言わないけど、3回気絶して体中怪我だらけで貧血を起こしている。

それである程度落ち着いたところで、状況を確認する。

ここは森の中。俺は寝巻きのジャージ姿で持ち物なし。

髭はほとんど伸びていないことから、今は寝てから2、3日以内だろう。

喉は渴き、腹が減っている。しかし、そこらに生えてる怪しい木の実には手を出したくは無い。

そんなことより体が痛い。錯乱中の傷が癒えていないし、治療する道具も無い。

貧血起こすくらい失血した上、治療できない傷口から今も少しずつ血を失い続けている。

あれ、やばくね？このままじゃ俺死ぬんじゃない？

とにかくこのままじゃ危ない、動けなくなる前に病院行かないと！ここがどこかは知らんけど、まず森から出よう。森に病院とか有り得ないし。

よし、動こう。どっち行っていいかは知らん。仕方ないね。こういう時の棒倒し。・・・よし、あっちだな。

おっと、フラつくから気をつけて歩かないとな。

・ ・ ・ ・ ・ 青年移動中 ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ 三時間後

「ダメだ、出口が見えない・・・。」

見渡す限り、木、木、木。実に深い森である。

一応、方向感覚なくしてループしないように木に印を付けて歩き回っている。

印は分かりやすいように

ループはしてないようだけど、全く出口が見えない。

絶望感が漂ってきたので、一旦腰を下ろす。

「ああ、眠くなってきたな・・・疲れたしちょっと一眠りしよう・・・。」

現実逃避は寝るに限る。今回はどっちかとういと気絶に近いが。

目が覚めると、枯れ木だらけの森の中の空き地？みたいなところにいた。

体が軽い、傷は全て塞がり疲労も回復している。どんだけ寝たんだろ俺。

というか状況がイミフすぎてヤバイ。

またちょっと考えよう。

まず、ここは俺が寝た場所じゃないだろう。木が枯れてる場所じゃなかったし。

ということは、誰かしらに移動させられているということか。

傷が塞がってるし、打撲とかの痛みも全く無いから、治療を受けたのは間違いないだろう。

しかし、すぐに治る程の怪我でもないし、しばらく寝かされていたってことか？

まとめると、俺を森に死なないように監禁しつつ様子を見てる奴がいるってことか。

まったくわけが分からない。

なんだってんだ、畜生。

じっとしてても何にもならないので、とりあえず周りを警戒しつつ、

探索再開しよう。

探索開始一分三十秒。探索中止。

「なんで、この印がここに・・・」

俺が付けた印のある木が枯れ木の隣にあった。

つまり起きた場所は寝た場所で、寝て起きるまでに緑豊かな木々が枯れ果てたということ。

なんだそりゃ。

「あら？ここだけ木が枯れているわ」

あ、人の声だ。やった、助かるかもしれない！

「すいませ・・・」

声をかけようとしたところでこちらを振り向く女性。

あれ、あの赤青の服と銀髪に弓持ったあの人って・・・

「・・・永・・・琳・・・？」

「あら、あなた何故私の名前を知っているの？」

本物？だとしたらここは東方の世界なのか・・・？

・・・・・・・・・青年説明中

「ふうん。つまりあなたは旅人ということね。」

「まあ、そんな感じになりますね。」

永琳に外の世界から来たとか何とかいったところ、精神安定剤を処方された。

小一時間の簡易検査で俺が正常だと判断されてから、まともに取り合ってもらった。

どうやらこの時代は月移住前らしいので、外の世界といっても通用しなかった。

とりあえず、遠く離れた村から来て永琳の名前は風の噂で聞いたとか言っておいた。

「それで旅人さんはこんなところで一体何をしているの？」

「正直、道が分からず迷ってました。」

俺がそういうと、永琳はかわいそうなものを見る目で俺を見た。やめろ、そんな目で俺を見るな！

「それで？迷子さんはどこに行こうとしているの？」

旅人から迷子にランクダウンなう。泣きたい。

「いやー、どこにとかは特に無いかな。」

ぶっちゃけ知らない世界でどこ行こうとか思いつくわけないだろ常考

「じゃあ、私の家に来る？多少の持て成しくらいはするわよ？」

「え、マジでございますか。」

「ええ、代わりにあなたの居た村の話を聞かせて頂戴？」

「いいですとも！」

即答だった。メ。才は使えないけど。

二話 永琳天才杉ワロタ（前書き）

今日二話目ができるとはおもってなかったぜ・・・

二話 永琳天才杉ワロタ

永琳にホイホイついて行っちまった俺。

案内された村は村っていうか科学の粋を集めた城塞的な何かだった。なんでも、時間を操る程度の能力を持った人間の能力研究の成果の一つで

広範囲の周囲の時間を加速させつつ、効果範囲内の人間が時間が加速した世界に

対応できるようになる薬ができてから約1万倍速で文明が発展しているらしい。

店頭モニターと思しきものは空中にホログラムみたいな感じで浮かんでる。すげえ。

サテ。イトキ。ノン入荷！いまならトリプルメガ。二。クがついてお買い得！！

世界が滅びそうな気がしてきた。やべえ。

ちなみにこの人間は寿命がやたら長いらしく、そんな速さで進む世界にも関わらず全然死なない。

永琳に年齢を聞いたら、背筋の凍るような笑顔をして無言で右腕の関節全部外された。

もう二度と永琳の前で年齢の話はしないようにしようと魂に刻んだ。

そんなこんなで永琳の家に到着。

「じゃあ、あがって適当にくつろいで。私はコーヒーでも淹れてくるわ。」

「そんじゃお邪魔します。」

永琳の家は天才だった。

何がって、まず表札にでかでかと天才・八意と書かれていた。さらに調度品の全てがなんらかの形で天才とをあらわしている。どの床と壁も青い塗りに赤文字で天才と書かれている始末。まあ、人の趣味はそれぞれだしできるだけ気にしないようにしようと思い、クッションに座るとクッションから「天才」って音がした。まるでくつろげない。

「おまたせ。」

永琳がコーヒー持ってきた。カップには天才と書かれている。コーヒーはすごく美味い。あとなんか疲れがとれた気がする。

「美味しいねコレ。それになんかすつきりした。」

「ええ、そうでしょう。私の特製ブレンドよ。」

「なるほど、永琳の特製ブレンドなら納得だな。」
天才だし。

「さて、あなたは私を知っているようだけど、改めて自己紹介するわ。」

私は八意××、名前を発音できない人には永琳と名乗っているわ。超天才美少女よ。よろしくね。」

超天才美少女とか自分で言っただよこの人。

でも、これは口に出さない。言ったらヤバイって俺の勘が訴えてる。

「俺は佐原公一。こちらこそよろしく。」

コーヒーを飲んで一息ついたところで、ここがどついうところか説明してもらった。

分かりやすくいうと恐竜みたいな生き物が跋扈するところらしい。妖怪とかもいる。

この村？ではとんでもなく進んだ文明によって、それらに対処できるそうさ。

あと、明日には時間加速が解かれるらしい。時を操る能力者が事故死したそうさ。

死んでなお加速が残ってはいいるが、徐々に効果が薄まって明日には消えるとのこと。

「まあ、こんなところね。それじゃああなたのお話を聞かせて貰おうかしら。」

「うーん、とりあえず、何から話したのか・・・」

何を話すか困っていると、永琳から色々質問されたので答えていった。

俺のいたところでは、恐竜とか妖怪はいなかったとか、文明もここまで進んでないとか。

俺が森に居た理由とかは適当に旅してたとか言っでごまかした。

そんなこんなで数時間ほど話し込んでいた。

話すこともそろそろ無いかなと思ったところで永琳から質問が出た。

「ところで、あなたの能力は一体何？」

俺に能力なんてない。

こんなこと聞いてくるってことは、この世界の人は能力持ちが普通なのか？

「俺に能力はないよ。」

「隠さなくてもいいじゃない。ちなみに私はあらゆる薬を作る程度の能力よ。」

「いや、隠してるんじゃない。俺には能力とか無いから。」

「嘘ね、そんなに私に能力を明かしたくないのかしら。」

「いやいや、ほんとに無いんだってヴぁ。」

なかなかにしつこいですな。自分で無能っていつてると心に傷を負うからあまり言わせないでほしい。

「……………」

「・・・・・・・・」

「・・・本当に何の能力も無いの？」

「無い。」

きつぱりと言いつた。

「・・・なるほど、まだ自分の能力に気づいていないのね。」

「へ？」

「あなたは何かしらの能力を持っているわ。実はさっきのコーヒーに能力者判別用の薬を入れたの。能力を持たない者であれば、眠ってしまう薬よ。そして今あなたは起きています。」

なるほど、一服盛られていたのか。薬師怖い。

「・・・いやいや、そうじゃなくて俺に能力があるって言ったのか・・・？」

「俺に能力があると申すか。」

「申したわ。ところであなたは自分の能力がなんなのか知りたくない？」

「分かるの？」

「ええ、研究すれば解析できるわ。私天才だもの。」

「研究ってなにをするの？」

「色々、よ。時間はかかるけれど危険なことはしないわ。私の家で生活してもらうことになるけど。」

美女と同棲とな！？なんというご褒美！！

しかし問題があるな

「俺、金とか持っていないんだけど・・・。」

「お金なんていらないわ。研究に協力してもらえれば十分よ。」

「え、それだけでいいの？」

「ええ、そもそも森にいたのは時の能力者が死んで研究できなくなつて、気晴らしに出かけていたのよ。次の研究素z・・・あなたが見つかつてちょうど良かったわ。」

なにやら不審な言葉が見え隠れしたがスルーしとこう。

「それじゃ、これからお世話になります。」

「ええ、歓迎するわ。」

永琳の目に若干狂気が宿っているのは見間違いだつたと信じよう。

三話 能力解析は あっ あっ 八意式という方法が あっ 最も（ry）前書

”さんわ”を変換したら三和ってでた。

某音ゲのコントローラ自作した時、三和ボタン買ったのを今では懐かしく思う。

三話 能力解析は あっあっ 八意式という方法が あっ 最も（ry

歓迎されたのも束の間。早速能力の研究をはじめると言われた。

「まずはどんな能力なのかの調査からね。」

「どうやって調べるんだ？」

「一応過去の研究成果で、ある程度 of 能力系統毎に反応する薬はあるけど、数がねえ・・・」

「どのくらいあるんだ？」

「ざっと2000はあるわね。」

「2000・・・が多いのか判断できないけど、時間がかかるのか？」

「そうね、一つあたり反応を見るまで1日はかかるわ。」

「なら、総当りで2000日はかかるのか・・・。」

「いいえ、総当りなら6000日はかかるわ。それぞれ効果が切れるまでに他の薬を服用すると効果がでないのよ。そして一つあたり30日ほど効果が続くわ。」

長持ちですね。でも調べるだけで6000日はいわ。

「えーと、他の方法はないんですかね・・・？」

「ある程度絞込むだけなら、あなた自身のお話を聞かせてもらえばできるかも知れないわ。」

「俺自身？」

「そう、例えば生まれつき自分の周りがどうだったとかこういうところが他の人とは違ったとか。あと不思議な経験をしたとか。ちょっとしたことでもいいわ。」

「例えば、何かとやる気が起きないとか？」

「そんな感じね。」

やる気が起きない程度 of 能力とかだったらやだなあ・・・。

とりあえず、箸捌きが異常にへたとかそんなことから話し始め、小一時間ほど考え付くまま話した。

永琳は超高速でホログラムのカルテみたいなのにデータ入力してた。

一息ついたところで、トイレを借りてすっきりしたところで一番不思議な体験を話してないことに気づいた。

俺がここにいるってことだ。こんなにおかしなことは無い。

でも別世界とかいうと精神安定剤を処方されるので、多少ぼかして話そう。

寝て起きたら知らない場所に居たこと、森で傷だらけで寝たら傷が

治り、周りの木が枯れていたことを話した。

「・・・成程。恐らくそれはあなたの能力が関係している可能性が高いわ。」

そういつて永琳は薬棚から一つ丸薬を取り出した。

「なあにこれ」

「とりあえず、それを飲んで。あなたの話から一番可能性の高い系統の調査薬よ」

渡された薬を飲む。あ、甘いなこれ。

ぐうーーー。

薬を飲み込んだタイミングで腹が鳴った。そういや長いこと飯食ってないや。腹ペコだ。

永琳を見るとニヤニヤして笑いを堪えている。恥ずかしい。でもしよугがないじゃない！

「・・・つぐ・・・そろそろ・・・ぶふっ・・・ごはん・・・っふ・・・しましようか。」

「・・・堪えるなよ。余計恥ずかしい。」

「そ、そう？・・・っふ・・・それじゃ遠慮なく。」

それから少しの間、声を大にして永琳が笑った。可愛い。超可愛い。生き恥をさらした甲斐があったというもの！俺の脳内美女画像フォルダに永久保存した。

「ふう、落ち着いたわ。ところで嫌いなものとかある？」

「苦い野菜とかは苦手だな。あとは別にない。」

「そう、じゃあお腹もすぐ減ってるようだし私が腕によりをかけて作ってあげるわ。」

マジで！？美女の手料理キタ！これで勝つる！！

待つこと三十分。

「お待ちどうさま。」

「うぉぁ・・・」

すごい。この一言に過ぎる。食欲をそそる香り、鮮やかな彩り、豊富な種類。

永琳は料理すら天才だった・・・！

ただ、歴戦のフードファイターでも食べきるのは不可能と言える量はどうかと思う。

「遠慮しないで沢山食べてね？これの他にもまだ料理はあるから。」

「なん・・・だと・・・」

今ある量ですら俺の体積くらいあるのに、更なる料理があるというのか。

永琳もある程度食べるとしてもこれは・・・。

料理「これが私の本気です。」

俺「私はそのくらい食べきます。」

料理「実は物量を隠してました。」

←

ドン！

この流れだね、間違いない。

俺にオサレポイントがもう少しあれば・・・っ！

諦めんなよ… 諦めんなよ、お前！

どうしてそこで諦めるんだ！？そこで！！

ダメダメダメダメ諦めたら。

永琳のことと思えよ！食材育てた人達のことも思ってみろって！！

まだ食い始める前のところなんだから。

ずっと食ってみろ！必ず完食を達成できる！

だからこそNever Give Up！！

といった気持ちが一瞬わいたけど、現実是非常であるので無理ですね。

うん、できる限り食べよう。そうしよう。

「いただきます」「」

・・・・・・男女食事中

「どれもこれも美味しいなー。結婚してくれ。」

ガチで美味しい。こんなに美味しいものは食ったことが無い。

「あら、ありがとう。お口にあって何よりね。」

「この・・・ステーキ？生肉？」

「ステーキよ。焼き方がブルーだからほとんど生だけど。」

「ステーキか。これうまいね、何の肉？」

「レックスよ。」

「え？」

「ああ、あなたの居た場所ではなじみの無い生物だったわね。ティ
ラノサウルスといって凶暴な肉食の生物よ。」

なんと！こんなところで地上最強の肉を食べるとは！！

ア○ンくんの言っていたようにスジっばいけど十分いけるじゃん！

「肉食動物の肉でもうまいんだな！」

「私の天才的な料理の腕にかかればなんだっておいしくなるわ。」

「そうですか。天才すごいですね。」

「それほどでもないわ。」

謙虚な永琳には何故かネタが通じたようだ。これも天才の成せる技
なのか・・・。天才パネエ

物量のことは忘れて、
もにゅもにゅうつつと楽しく食事のひと時
を過ごした。

四話 升能力

食事も終わり、今後の生活についての話をしてもらった。

ちなみに食事は料理の圧倒的物量に俺は割りと早い段階でダウンしたが、

永琳はフードファイターとしても天才だったので余裕で食いきった。

さて、今後の生活だが、研究作業員という名の永琳の助手をするこ
とになった。

助手といっても特にやることはない。というかできることがほとんどない。

唯一できるのは能力研究の研究対象として大人しく指示に従うことくらい。

永琳は薬物研究だとか武術研究だとか色々やっているが天才の研究についていけないので手伝うだけ邪魔になる。

だから基本的に暇。空いた時間は好きにしていいたい。ちなみに金は腐るほどあるので自由に使っていいそうだ。

ようするに俺はヒモにジョブチェンジした。

美人で金持ちのヒモとか最高じゃねーかヒャッハー！……とか思う腐った性根は直す気がない。

話の後、永琳が風呂に入るのようなので男の使命（覗き）を果たしに行ったら、

矢が飛んできて危うく命を落とすところだった。

それから、風呂に入って寝た。

朝起きると体から湯気みたいのが出ていた。
別に風呂上りでホカホカしてるわけではない。 注「ホカホカ
ボ」でぐるな危険！

そんなことはまあどうでもよく、布団が気持ちいいので二度寝しようとする。と永琳がやって来た。

「おはよう。そろそろ薬の効果が始める頃だと・・・あら。」

「おはよう。・・・どうした？」

永琳は何か予想外のような表情をしていた。

「薬の反応が思った以上に強く出ているから少し驚いただけよ。」

「そうか、ところで強いと何かやばかったりする・・・？」

「いいえ、能力が強いほど強い反応を示すだけ。副作用等はないわ。」

「それって、なんか反則的な能力だったこと？」

「能力の種類ではないわ。持つてる能力の質といったところかしら。」

「よく分かんないです><」

「時間を操る能力でいえば、弱ければ自分限定だったり操作時間も短かったり、

強ければ任意広範囲だったり操作時間も長かったりするわね。」

「おk、把握。」

そうか、能力の使える幅が広がってことだな。そういえば反応が出たって事は・・・

「俺の能力、ある程度絞れるたのか？」

「ええ、あなたの能力は吸収するタイプに含まれるわね。」

「吸収？ああ、なるほど。」

吸収からドレ。ンを連想すると森で寝たら傷が癒えてた理由も分かるな。

木は犠牲になったのだ。

「あなたの話からすると他系統の能力もありそうだけど、薬の効果が切れるまでは試せないわね。」

「もしかして、この湯気みたいなのって・・・」

「一月程の我慢よ。」

「（・・・）」

こうして俺は（物理的に）もやもやした一ヶ月を送った。

一ヶ月の間、色んなことをした。

能力については自分の能力を意識したり使ったりしているうちに自分の能力の自覚が芽生えるのが大半ということなので、とにかく使いまくった。

というかわせまきったというのが正しい。永琳の天才頭脳ではじき出された能力が使用される可能性があることをものすごい勢いでやらされた。

特にきつかったのは傷薬を周囲において体を傷つけるというものだ。これは傷を癒すために薬の効力を吸収するはずという予測から行われた、実際そうだった。

ちなみに傷を付けるのは永琳。武術研究のためにサンドバックにされたりした。

これを初めてやったときは、永琳が怖くて数日はまともに話もできなかったが、今ではなにか若干の快感がある。

いや俺Mじゃないよ？美女にされることならなんでも受け入れる紳士だってただだよ？

快k…痛みに耐えた甲斐もあり、俺は自分の能力を自覚することができた。

”あらゆる力を奪い、扱う程度の能力”

これが俺の能力だ。能力、効力、生命力等、力であればなんだって奪えるし、扱える。正にチート。

今はまだ能力の制御がうまくいかないから上手く奪えなかったり、思い通りに扱えなかったりするが。

20日目あたりで自覚して、もやを払うために薬の効力を奪って消そうとしたら、永琳の保管している貴重な薬品の効力を消してしまい、三日間に渡って新薬の実験体にされたらしい。

らしいっていうのは、その三日間の記憶がないから。俺、何されただろ……。

ちなみにこの一ヶ月、幾度と無く寝起きや着替え、風呂を覗こうとしてみたものの軽くあしらわれた。

一ヶ月も一緒に住んで下着姿すら拝めないなんて……畜生俺の低スペック!!

そして、今日もやが晴れた。

すがすがしい気分朝のコーヒーを飲む。美味い。

そういや、俺って他の能力もあるかもしれないんだっただな。またもや生活に戻るかもしれないのか……。

「あなたの能力は他にないわよ。」

おお、心を読まれた。こわい。

「そうか、でもなんで分かるの？」

「そのコーヒーには吸収系統の能力以外の能力を持つ者が飲むと胃が爛れて血を吐く薬が入っているのよ。でもあなたは今、血を吐いていない。」

なにそれこわい。前より超凶悪になってる。薬師怖い。

「俺、他に能力持ってたら大惨事だったんじゃ……。」「

「あら、その心配は無いわ。胃を回復させる薬は常備してるもの。」

なるほど、アフターケアは完璧ですね。

駄目だ、この薬師・・・、早く何とかしないと。

「さて、それじゃ今日のメニューの説明に入るわね。」

俺の能力制御練習は必ず毎日行われる。能力を使いこなせなければ危険な能力だからだ。

練習自体、下手に力を扱ったりすると危険ではあるはずだが、永琳の天才的な練習メニューによって失敗することなく徐々に力を付けている。

ついでに八意式武術等、戦いに関するものも習っていたりする。

いつの日か、必ず永琳に追いついて覗きミッションを成功させるのだ。

こうして今日もまた永琳と共に刺激的だが平穏な日を送った。

五話 キンクリするけど大丈夫か？（前書き）

2011/4/28発売予定の注目のPSS3ソフトが楽しみでし
うがない。

五話 キンクリするけど大丈夫か？

この世界に来て早十年。月日の経つのは早いものだ。

俺の能力が判明してからというものの、来る日も来る日も能力の鍛錬に励んだ。

永琳の天才頭脳のおかげで、使いこなしていると十分言える程になっただろう。

使用するにあたってちよつとした弱点がある程度で基本的には能力を自在に使える。

今でも鍛錬は続けているが、最近はおつぱら能力の新しい使い方の研究に協力している。

ちなみに八意式武術もすごいもので、今では海〇の称号をいともたやすく取れるであろうレベルになった。

八意式潜伏術なんかかなりのもので、スネ〇クを超えたと言っても過言ではないだろう。

それでも未だに覗きミッションは成功していない。永琳は化け物だと思う。

あまりに覗けず、性欲を持余し過ぎているのを直接言ってみたら賢者になれる薬を飲まれた。

たまに抑えきれなくなりそうな時だけこの効力を扱うようにして日照る日々を耐え抜いた。

良く我慢したよ俺。クマ吉から普通の紳士に格下げしてもいいだろう。

あと俺は不老不死に近くなった。

能力練習のために妖怪の相手をしたり、俺の好物の天然のT・re
xを散々狩ったりしたからだ。

狩るときに能力を使って生命力とか奪ってたらそうなる罫。

ついでに言うとなんか身体能力や知力、妖力なんかもやばい。というか力
という力が大体やばい。

霊力とかは普通だけど。人から奪ったりしないし。

とにかくそんな感じで村一番のやばい人認定されてる。いや悪い意
味じゃないよ？

ちよつと遠出する際の護衛とかで兵器類より頼りにされてるし。

まあそれはさておき、ついに月移住の時期が迫ってきた。

いわゆる穢れつてのが地上に溢れてきてて、この前の村会議で

「このままだと寿命がマツハ。」

「命ロストしたくないです！」

「月に行けばいいじゃない。」

「さすが永琳は格が違った。」

という流れで月移住が決定したわけだ。

一ヶ月前に月面都市開発の為に先行した人達は既に居住区の開発を
済ませているらしい。

まあ、永琳がメンバーに含まれてたんだから当然か。

明日、食品生産等、ライフラインのインフラ整備に関わる人達と高
齢者、子供が出発する。

そして環境が整い次第、流通、サービス、軍事業の人達が出発して
終わり。そんな計画だ。

もちろんやばい人である俺はこちらの村の防衛に当たるので最後に
出発することになる。

滞りなく事が運べば、再来週あたりには月に行けるそうだと。

しばらく地球は見納めだと思うと感慨深い。

この月に行くまではのんびりと地上を楽しもうと決めた。
とりあえず、今日は秘蔵の酒を飲んで寝るとしよう。

翌朝

二日酔いか。頭が痛い。

八意印の特製薬を飲んで回復しておく。でも気だるさが残るのでも
う一眠りする。

そして昼。

今日月に出発する人達が準備を済ませ、宇宙船に乗り込む。
見送りの集まり、すごい人ばかりである。出発まで5分前といった
ところだ。

その時だ。

けたたましい警報が鳴り、アナウンスが流れた。

「緊急事態発生！緊急事態発生！防衛システムが竜に突破された！
！」

「東南3区進入を確認！直ちに増援を送れ！フル装備でだ！！」
「非戦闘員は速やかに中央非難所へ非難しろ！繰り返し！非戦闘員
は……」

ドゴオオオオン！！

アナウンスがかき消されるほどの轟音。急がないとまずい！

俺は即座に駆けつけた。轟音から五秒も経っていないだろう。

そして俺は啞然とした。

建物は跡形も無く、100名以上の警備は消え去り、残された兵器も金属片になっていた。

さっきの轟音以外、戦闘音は聞こえなかった。

つまり、この惨状は一撃の下に引き起こされたものということだ。

そしてそれを起こした怪物は見たことの無いものだった。

いや、正確には見覚えがあるがサイズが違いすぎて同じ生物とは思えなかった。

通常の10倍以上のティラノサウルス

正に化け物だ。

しかし、これ以上被害を広めるわけには行かない。

俺は能力を使って相手の力を奪い始めた。が、そこで予想外の出来事が起きた。

「奪い尽くせない！？」

奪っても奪っても、次々と力が沸いてきている。
これじゃ、いくら奪っても殺せない。

「しかも、これは妖力・・!？」

確かに間違いなく強大な妖力だ。

しかし、竜は妖怪ではない。これは一体・・・？

「グロオオアアアアアアア!!!!」

考えてる場合じゃない！

竜は妖力を込めて尻尾をなぎ払ってきた。速度は音を置き去りにするほどだ。

「ぐっ・・・!!」

俺は全力で破壊力を奪い取った。しかし奪いきれず残った力の一撃を貰った。

俺の耐久力はこれまで奪った力の積み重ねであり、とてつもなく高い為、深刻なダメージではない。

しかし余波で更に建物が壊れていく。

「もう、やめろーッ!!」

俺は力を奪いつつ、自分の力を操りできる限りの密度の高い力を作る。

そして、最高の破壊力を備えた拳を作り、竜の頭に殴りかかった。

「しいいゝめええええええええええ！！！」

光に近い速さで突撃する。竜は反応できずにいる。

ド
パ
ン
ツ
！
！
！

俺は拳を振りぬき、竜の頭を粉碎した。

竜は崩れ落ちるように倒れ、死んだ。

「殺つたか……はあ……。」

俺もその場に倒れた。すごく疲れた。

これが俺の能力の弱点の最たるものだ。

過度な能力の使用は疲弊する。そしてこれによる疲労は睡眠でしか取れない。

ここまででもなかなかの欠点。要は物量に弱いわけだ。

さらに疲労が溜まりすぎて意識を失うと暴走することがある。

これがまずい。あたり構わず様々な力を奪ってしまう。

最悪、周りの人の命を奪いかねない。

「まあ、何とかなつたし……休むとしよう。」

とりあえず、疲れた体を休める為、家に帰って寝ることにした。

一抹の不安を残しながらもぐっすりと寝た。

六話 全力

ぐっすり12時間は寝たおかげで疲れも取れた。

今のところ昨日来た竜以外には特に何も来ていない。

昨日月へ出発した人達も無事に到着したそうだ。

昨日の竜について、月に居る永琳への報告と対策会議が開かれた。竜は穢れによる変異体である可能性が高く、今まさに溢れ出して来ている穢れを力の元に行っているだろうとのこと。

俺の全力でやっとな討伐という点から兵器類では意味を成さないと考えられる。

結論として、複数体の相手は不可能であり、一刻も早くこの地を離れることが決定した。

宇宙船の整備は最短でも三日かかる為、それまでは警戒を怠ることなく警備する。

300km圏内での力の強い生物の捕捉と対処が俺の役目になった。俺以外は整備の突貫作業の従事する者、それを支援する者に分かれた。

ちなみにもし竜が複数体こちらに来たのなら、俺は暴走覚悟で能力を使う。

これについては、すでに皆の同意をとっている。というかそうしてくれと頼まれた。

そりゃ必ず殺されるよりは少しでも生き残れる可能性があるほうがいいし、当たり前か。

死を意識するから、生きる事が実感できるッ！・・・だったかな。まったくもってその通りだよ、御大将。

まあ、一番いいのは奴等が三日間来なけりゃいい。

「・・・つと、早速強めなのが圈内に入ってきたな。」

でも、あの竜じゃない。

「移動方向からしてこっちに来るわけでもないな。」

とりあえずスルー。力はできるだけ温存しないとな。

こんな感じで一日目は特に問題なく済んだ。

ちなみに俺は警備を怠るわけには行かないので不眠不休だ。

ただの疲労であれば永琳の薬で回復できるから問題ない。永琳すごい。

そして二日目、朝飯を食べている時だ。俺は腹を括った。

「あいつらだ・・・。しかも数百はいるな・・・。」

ヤバイなんてモンじゃない。

「進行方向は・・・くそっ・・・！！・・・全部こっち向かってやがる。」

「

詰んだ。これほどの強さと数を前に勝利を得るなら確実に暴走する。

俺はすぐに避難するように村人達に勧告した。

村人達は絶望の表情を浮かべながらも、中央避難所に向かっていった。

避難所は強力な力で防壁を張られているので、他のところに居るよりは安全だ。

俺の力からすると気休め程度ではあるが。

そして俺は竜の討伐へ向かおうとした。

しかし、竜は何故か、200km地点で止まった。

「なんだ・・・一体・・・？」

直後、俺は理由を理解する。

砲撃だ。竜が妖力を吐き出し砲撃してきた。

俺は全力でその砲撃の力を奪うが、数が多く質も高く奪いきれなかった。

それでも俺は無事だ、持ち前の耐久力のおかげだ。

しかし、村は壊滅した。跡形も残っていない。

もう守るべきものはなく、虚脱感、無力感などが俺を襲った。

そして俺は能力の制限を放棄した。

ありとあらゆる力を奪い尽くす。俺の意識など、瞬時になくなった。

俺が目覚めると途方もない力が俺にあった。そして全てが滅んでいた。

滅びた大地を見て呆然とする。

これからどうするか。

もしかしたら、月なら俺の能力の影響を受けていないかもしれない。俺の耐久力や生命力、速力にものをいわせれば月に行くことも可能かもしれない。

ここに居てもしょうがないし。

思案していると不意に何かの気配がした。

「あらら、綺麗に滅んだなー地球。」

人！？そんなばかな、星が滅んだのに生物が居るはずない。しかし、どう見ても声の主は人の形をしている。

「お、あんたがイレギュラーさんかい？」

話しかけられた。イレギュラー？

「イレギュラーってのはな、他の世界から来たもののことを言うんだよ。」

心を読まれた。・・・いや、そんなことより

「なんでその事を知ってるんだ？」

「いや、この世界の主だし。」

世界の主？なに言ってるんだこいつ。

「おいおい、人を頭のおかしい奴みたいに考えんなよ。失礼な奴だな。」

「これは失礼。」

俺はかわいそうな人を見る目で見ながらそう言った。

「その目も失礼だ。ひどい奴だな、心に傷を負ったよ今。」

「失礼だといった。」

「・・・はあ、もういいや。本題に入ろう。」

「本題？」

「そう、あんたこの星滅ぼしたでしょ？長らくほったらかしにしてたとはいえ、文明を築くはずの星が滅んだのはちよつと困るんだよね。」

あれ？この物言い、本当に世界の主なのか・・・？

「さっきそういったじゃん。やつと信じたか？…で、まあ滅んだものは仕方ないし命の源をまた吹き込みに来たわけ。」

「それで、なんで俺にそれを話したんだ？」

「そりゃ、滅びの再発防止の為に決まってるだろ？」

「再発防止・・・。」

あれ？もしかして俺危ないから消されるとかか？

「いや、そんなことはせんよ。イレギュラーは他の世界の主がなんらかの理由で放り込んでるもんだからな。主同士の暗黙の了解で手を出さないことになつとる。」

「よかった・・・。それじゃ再発防止ってなにすんの？」

「今度は滅ぼすなよっていう警告。」

「それだけ？」

「あと、あんたの感覚のうち、一つ共有させてもらつ。」

「共有？何を？」

「星が滅びそうな予感の感覚。」

「何その超限定的な感覚。」

「これしかないし。あ、それとあなたにはこの星で生活しても
らうから。」

「なんで？」

「そりゃ、あんたがこの星に居れば星が滅びそうな時、ワシにその
感覚が伝わるから。」

「ああ、俺アラート代わりなのね。」

「まあそうだな、星を滅ぼした代償としては安いと思うが？」

「全くだな、反論できない。」

「じゃあ、この星に居てくれるな？」

「その旨を良しとする。」

「よし、そんじゃ命の源吹き込んだらワシは帰るから、あとよろし
く。」

「ちょっと待ってくれ。」

「なんじゃい。ワシ早く帰ってデスレーベルに挑戦する作業に入ら
ないといけないんだけど。」

「それはまた無謀な挑戦だな。ところでこの世界は東方の世界であつてるのか？」

「ん、そうでもあるしそうでもないな。そうなるような因子は含んでるけど、お前の知る東方の通りにはなんかもしれん。」

「そうか、分かった。」

「それじゃ、ワシ忙しいから源吹き込んで帰るわ。」

そう言つて、なんかきれいな光を大地に落として消えた。

こうして俺は新世界の警報となつた。

七話 神様かわいい（前書き）

上級大尉に惚れ込んでエクバやってたら武士道機 4まできた。
うん、どうでもいいよね。

なにが言いたかったかっていうと7話はハム分が無理やり含まれて
る感があるので注意してください。

七話 神様かわいい

新世界になって早・・・何億かもう数えるのやめたんだった。

とにかく圧倒的な時間が過ぎた。

原初の時代とか現代っ子の俺は耐えられるはずもなく、奪った能力の中にあつた

”独自空間を作る程度の能力”で現代的な部屋を作り、基本的にはその部屋ですごした。

部屋では日夜暇つぶしの為の様々な研究や作物の栽培、酒造り等をしている。

ずっと引きこもっていてもアレなので、ちょっとしたサバイバル気分を外に出て、

武術鍛錬とか能力鍛錬とかもした。あとお肉食べたいから狩りもした。

そうそう、この世界でも俺の好物であるT・rexがいた。

おいしそうなんで ころし

うまかつ です。

あと、T・rexが居る時代に既に人類が居た。

若い奴はまだ四足歩行だが、あれは人類と言ってもいいだろう。

人類のうち一人が俺に興味を持ったようで、T・rex屠った時にこっちを覗いていた。

それから数年後、そいつは恐竜達を捕食していた。

あいつ絶対塩漬け君だよ・・・。絶対岩塩層にきれいに保存される

よ．．．。

それから氷河期的な時期が来たりとかして、神とかが生まれて、今に至る。

俺は今、日本にいる。諏訪子とか生まれるのって日本じゃん？会いたくない。

今は大体、弥生時代くらい？場所によつては稲作してたりするけどよう分からん。

ちなみに稲作はじめた所には酒の造り方を教えている。

古代の米からできた酒つても美味そうだし。

今の文明でできる範囲でしか教えてないから問題はないはず。

そんな感じで日本各地を放浪している。

諏訪子目当てなら洩矢の王国に行けばいい、そう思っていた時期が俺にもありました。

場所知らないから行くもクソもないんだよね。

ということ放浪していればいずれ見つかるだろうと、のんびり旅を楽しんでいます。

そうそう旅して気づいたんだけど、この時代の神つてのは掃いて捨てるほどいるもので、

いわゆる邪神モッコスではないつていうのもまたものすごい数いたんだよ。

しかも、すでにものすごい数が居るのにまだまだ沸いて出てくる。

で、まあ俺の目の届く範囲で人に仇名す事してる奴は片っ端から力奪っていったわけ。

そしたら、神力がものすごいことになった。

力は隠してるからいいものの、これ解放したら多分創造神とか飛んでくるぞってレベル。

いや、下手したら創造神（笑）になる位あるかもしれない。

俺としてはこの無敵感は気持ちいいものの面倒事は嫌なので見つからないのを祈る。

あ、祈りが通じたら見つかるのか。相手神だし。

まあ、八意式隠蔽術がたやすく破られることもないだろうし、多分問題ない。

それからまたしばらくしたある日、獣道のような山道を歩いていたら変な蛇に襲われた。

なんか白くてもやもやした蛇だ。珍しい、見たことない種類だ。

その蛇が「タタラレテー」ってうるさいから

晩飯用に捕まえといた猪差し出して、死ぬほど崇らせたら

「キシヤー…カロロロ…キシヤー…カロロロ…キシヤー」って鳴いた。

最初は珍しかったけど、なんかキモくなったので首元を横から思い切りチョップしたら

「モリヤア」みたいな言いながらすごい勢いで飛んで行った。

今考えるとあの蛇、ミシャグジ様だったんじゃないかと思った。だとすると、洩矢の王国に辿り着いたのかもしれない。

「なんという僥倖ツ・・・！」

確か神社は山にあるんだったな。

つまりこの辺の山を探れば諏訪子に会える！

そう考えてからの俺の行動は早かった。どんくらい速かったかという

風を超え、音を超越し、亜光速となった！ってくらい。

そんな速さで探索した甲斐もあり、立派な神社が見つかった。きつとここだろう。

初対面にはまず挨拶だよな。神様相手だからとりあえず神社に向かつて

「はじめましてだな、洩矢ツ！」

「神を敬わぬ愚かな人間よ。我が力で崇めたいのか・・・？」

そう言いながら、神力で威圧しつつ姿を現した諏訪子。

普通の人間なら威圧に耐え切れず、身体は平伏し意識を保つのも難しいだろう。

俺にとってはちっちゃい子が無理して頑張ってるようにしか感じられないが。

だがそれがいい。すげえかわいい。頭をなでてあげたい。

「逢いたかった、逢いたかったぞ！幼女ツ！！」

なでてあげたいと思ったただけのはずが、いつの間にか俺はなでなでしていた。

どうやら欲望が体の端から滲み出てしまったようだ。

「やめろっ！この無礼者！！」

諏訪子は神力を込めた鉄の輪を使い、殴る蹴る等の暴行を加えてきた。

まあ俺にはその程度の攻撃じゃかすり傷一つつかないんだけど。

「離せ！！祟るぞ！！」

そう言う俺の後ろからもの凄い勢いで白蛇が大量に襲い掛かってきた。

で、なんか呪力を纏った体当たりを仕掛けてきた。サイコクラ。シヤーみたい。

呪いの類は効くかもしれないので呪力を奪う。呪力がなくなると、ちよつともやつとした白蛇の体当たりだ。問題ない。

と、思ったけど白くてにょろつとしてるのが飛んでくるのを見てたら、

特大の精。に見えてきてキモかったので妖力弾で迎撃したら

やっぱり「モリヤア」みたいな言いながらすごい勢いで飛んで行った。

「あーうー、あんた何者なのさ？」

参りました、といわんばかりの顔をして聞いてきた。

ああ、俺としたことがまだ名乗っていなかったな。

紳士にあるまじきことだ。なんという失態。

「俺は佐原公一。長いこと生きてるけど人間だ。」

「え、うそ？人間？」

「正真正銘、100%純粋な人間だよ。」

「人間が何で妖力使えるの？しかもあんな規格外の。」

「ああ、それは俺の能力のおかげで。」

「能力持ちか。一体どんな能力？」

「あらゆる力を奪い、扱う程度の能力。これのおかげで超長生きしてる。」

「長生きねえ……。どれくらい？」

「んー……。この世界ができるよりも前から生きてるけど、正確には数えてない。」

「はあ？」

なにいつてんだこいつみたいな目で見られた。

「いや、ホントだってば。」

「はいはい、分かった分かった。それでその長生きさんが何の用？」

あ、信じてないな。別にいいけど。

「これといった用事はないよ。」

「何の用もなく神の居所に殴りこんだと申すか。」

「争うつもりはなかったんだよ。諏訪子に会いにきただけだから。」

「へ？私に会う為？なんで？」

「あー……。いやほら有名な神様だし、ちょっと拝見してみたくなるじゃん？」

まあ、実際はかわいいケロちゃんを見たかったってとこだけど。

「それだけ？」

あ、疑われた。するどいなケロちゃん。

「それだけ。」

「本当に？」

「ホントに。」

「……………」

「……………」

空気が重い。何か企んでると思われてるのかな？
だったらいつそ本音を吐いちゃおうか。ケロちゃん言うなって怒り
そうだけど。

でも下手したら、なにそれきもいって感じでドン引かれる可能性もある。

さてどうしたものか・・・。

「ぷっ・・・」

ん、なんだ？

「くくっ・・・あはっ！あははははははは！！」

「なんだ、どうしたんだ急に」

「ふふっ、そんな理由で神と一戦交えるなんて思ったらおかしくなつてさ、ひはは！」

「いやだから一戦交える気はなかったんだって」

「ひひひひひ・・・ふうー、ふうー・・・。いやー、変な奴だねあんた。」

「失礼な。人を変人扱いするんじゃないやありません。」

「神に対してその物言いだけでも十分変さ。普通の人間じゃ神と対等に話せないよ。」

ところで公一、もう日も落ちていけるけど宿はあるの？」

ペロ・・・これはお泊りフラグ！！

俺の空間開けば寝るところはあるけど、ここはやっぱり・・・

「いやー、ないな。野宿かな？」

「それならうちにとまっていきなよ。酒もあるし、一杯付き合え!」

「いいですとも!」

キタ! やった! ! ケロ家にお泊り! ! ! これで勝つる! ! ! !

七話 神様かわいい（後書き）

ふうー、ふうーまで書いたとき、気づいたらクワツツて書いている自分がいた。

投稿前に気づかなかったらゴシカアンされていたかもしれない。

八話　ちよつと出張してきます

「変わらない世界は嫌なんだ」

「急に何言ってるの？」

諏訪子と初めて出会った時からだいたい100年位経った。

最初に諏訪子の神社で泊まった時は、朝まで飲み明かした。というより、神は暇すぎてつまらないとか何とか朝まで愚痴られた。

それからはいい友人というか飲み友達というか、良好な関係になった。

俺と会うまで、諏訪子は配下とした神々や神罰の対象、生贄とか接する機会がなかったそう。まあ、ぼっちってやつだね、そりゃ暇だろうよ。

普通に人々と交友を作ればいいだろと言ってみたが、神が人と対等に見られて信仰が得られなくなる可能性があり、死活問題なので却下となった。

そこで俺は考えるのが面倒になってきたので「なら子供でも作れば？」と言ったところ、

次の日の朝には子供が生まれていた。神すげえ。

あと、子が生まれたことによって生贄制度が廃止となった。

そもそも民衆に神の姿を見せずに神託を行う為に諏訪子が人に憑依して行い、憑依された人は神力に耐え切れず絶命するので生贄と言われている。

諏訪子の子は諏訪子の神力に適應できるので、神託を下す役を担うことで生贄がなくなっただというわけだ。やったね！

ちなみに諏訪子の神格だと純粋な神は創れないため、その子は神の力を持った人間だ。

まさか東風谷の始まりが俺の一言になるとは……。まあいずれにしろ生まれるはずだったわけだし、問題ないよね。

この頃は退屈しなかった。

諏訪子の所を中心に日本全国色々と見て回って、旅の話を肴に酒飲んで。

しかし、1000年だ。1000年経つてもたいした変化の無い全国行脚じゃ流石に飽きる。

昔のように鍛錬したり研究したりで暇つぶししてもいい。でも飽きたのは日本だけ。

世界は広いわけですよ。だからちょっと中国あたりにしばらく遊びに行こうかなと。

「そういうわけで、俺長旅に出るから。」

「いや、どういうわけか分からないから。」

「いやだから、変わらない世界は……」

「日本語でok」

「島国飽きた

世界広い

長旅でる」

「誰が三行で話せと言った。」

「でも伝わったでしょ？」

「うん、まあそうだけど・・・」

人に話を伝える時は要点を簡潔にまとめて必要なことだけ話す。

これSEにとって極めて重要なスキル。打ち合わせやレビュー時間を短くできる。

逆に相手を説き伏せる時はあんまり良くない。

要点をまとめるのは大事だけど、それは理解させるだけで納得するわけじゃないからな。

だから当然、諏訪子は納得いかないって顔してた。

「ちなみに長旅ってどれくらい？」

「俺の気の済むまで。」

「定量的に話せ。」

「じゃあ千年以内。」

「長っ！」

「長旅っていったじゃん。」

「ダメですよ、そんなに留守にしては。」

おや、東風谷の乱入か。

「えー、旅人を監禁するんですかこの神社。」

「何言ってるんですか、公一さんはうちの祀られる神様じゃないですか。」

「は？」

何言ってるんだこの風祝。

「だから、公一さんは旅人じゃなくてこの地の神様なんですから、ちゃんと腰を落着けてくださいよ。」

「ちょっと待て、俺がいつこの地の神になったんだ？」

「先々代の風祝が隠居したときですね。里で暮らし始めてから、公一さんのことを邪神を打ち倒し人々を守る現人神だと話したんですよ。そしたらいつの間にか武神と呼ばれるようになっていて、武神様の社を作ろうという話になって、うちの分社が増えていましたね。」

「なん・・・だと・・・!」

いつの間にそんなことになってんだ、俺人間やめたつもり無いんだけど。

何もしてないのに神力が増えてたのはこういうわけだったのか・・・!

「あーうー、そういうことだからここにいてくれないかな？」

いままでのように半年くらいの旅ならしてもいいからさー。」

「さすが諏訪子様！半年もの留守を許すなんて、なんと御心が広いのでしょうか！

公一さん、遠慮なくこの寛大な精神に甘えてくれて構いませんよ？」

「よし、分かった！お前らちよつとあつちでOHANASHIしようか。」

人と話をするときはニコリ笑顔が一番いい。そうOHANASHI
Iするときは、ね？

「あ、あれ、公一？なんだかちよつと怖いよ・・・？」

「こ、公一さん？目がちよつと狂気じみてますよ・・・？」

——
翌日

「それじゃ、俺行くわ。」

「「いつてらっしゃいませ。よい旅路を。」」

二人とも物分りのいい子達だ、おじさん嬉しい！

昨日、東風谷にはデコピンして地面と一体化してもらい、諏訪子には小パンくヒートエンドくヒートエンドで花火になってもらったら、

快く俺の新たな旅路を祝してくれた。いい奴等だよホント。

そして俺は走って中国へ向かった。

海？問題ない、1500kmまでならツツ！！

いや実際は問題あったんだけどね。俺が走った衝撃で海が真つ二つに割れちゃって、

そこから出来た波が近隣諸国に未曾有の被害を生んだんだってさ。

反省反省。

ちなみに俺を見送った東風谷がこれを参考に秘術を生み出したそう
だ。

後の「海が割れる日」「モーゼの奇跡」である。

そして俺は無事、中国へと辿り着いた。

なぜ中国を選んだかというと実は理由がある。

数週間前に九州を見て回った時のことだ。ちょうど北九州あたりだ

ったか。

中国から流れてきた妖怪から興味深い話を聞いた。

曰く、人間にして眠る龍あり、と。

忠義神武靈佑仁勇威顯開聖大帝などの武人を讃える二つ名は数あれど、”眠る”龍だ。

聞けば本当に眠りながらも龍の如き戦いをするという。

そいつは人間でありながら妖怪にそれを言わしめた。それがどれほどのことか。

そんな武術を聞いたことすらなかった俺は手合わせしたくて堪らなくなつた。

だから俺はいの一番に中国を訪れたというわけだ。

相手が人間である以上、早く見つけなければ老いてしまう。

しかし中国は広い。闇雲に探したところで見つかるものではない。

探し人は武闘家だ、ならば同業者に聞くのが手っ取り早い。

こうして俺の中国全土道場破りの旅が始まった。

八話 ちょっと出張してきます（後書き）

そして作者の金スモータイムも始まった。
ユニヴァアアアアアス！！！！

いや、全然この駄文に関係ない話ですけど。

九話 ババァーン!! (前書き)

タイトルに深い意味とかないからいやマジで

…おや、誰か来たようd

九話 ババァーン!!

「闘らないか」

「げえっ！佐原！」

「うわーーーー！！！！武神が出たぞーーーー！！！！」

「逃げる逃げるオーーーー！！！！」

「師範！！助けて！！殺される！！！！」

「うるさい！ワシは逃げるんじゃ、H A N A S E E！！！！」

「救命阿！！！！」

「・・・ここもか・・・。」

中国に着いた俺は眠る龍探しの為に、とりあえず手当たり次第道場をあたった。

とはいっても中国なんてはじめて来たし、どこに道場があるかなんて分からないので、

空を飛んで門下生が大量にいていかにも拳法やってます的な所を訪ねたわけだ。

そんでまあ、空から眺めて分かるようなところではなくて有名所なわけで、

訪ねると入門希望が聞かれて違うと言ったら、道場破り扱い↓即試合。

戦闘民族かお前ら。

まあ、元々聞くついでに八意式武術の優位性を示してやろうとしてたからいいけど。

そんでめばしい所を20件くらい潰したところで、俺の噂が中国全土に広がっていた。

曰く、武神、動く墓場だそうだ。

それからというものの、どこの道場でも俺が行けば阿鼻叫喚の冒頭のような状態になる。

骨の無い奴等だ。質問には素直に答えてくれるから別にいいけど。

あ、ちなみに潰した20件にはちゃんと達人とかいたよ？

消力を完全に使いこなす奴とかすごかったわ。

こっちの打撃が悉く無効化される、しかもその場で空中大回転してだ。

最初はオーガミたく壁使おうとしたけど、どうやってもぶっ飛ばせなかった。

まあ、八意式武術奥義の一つ、顔面パルマで握り倒してやったけど。

あと少林寺は半端なかったな。

「天に竹林！地に少林寺！」とか言って真・星胡蝶剣使ってきたし。

どこの未来から来たんだよ。

まあ、なんなくかわして八意式武術奥義の一つ、脛キックで蹴り倒したけど。

うん、結構面白かったなあ。潰したところは是非再興して欲しいもんだ。

でも肝心の情報はダメだね。今のところ西の方で噂を聞いたことがあるといった程度。

大雑把すぎてやばい。

西に行ったら行ったで、最近は何かないなあとか、数年前は耳にし

たとかそんなん。

そんな情報で見つかるかよ畜生。誰か一番いい情報を頼む。

「あーもー、どこにいるんだよ眠る龍つてのは。」

「ここから北に真っ直ぐ進んだところにある森と山の境界にいますわ。」

にゅっとスキマからゆかりんが出てきた。

「お、マジで！？情報提供ありがとう！」

「あ、あら？」

「ん、どしたい？」

「いえ、ちょっと反応が予想外だっただけですわ・・・。」

ああ、あっちからすると突然現れたのにリアクションなしとか予想外だよな。

でも俺、常に自分の周囲を危険な力や能力が無いか探知してるから、三日前から覗かれてるの知ってたしなあ。

「覗かれてたの知ってて驚く人はいないよ。」

「！・・・気づいていたの！？」

「うん、三日前から。」

「始めから・・・になるほど、噂に違わぬ人のようですね。」

「ああ・・・、中国で暴れすぎたか・・・。」

「違いますわ。洩矢の王国で神をも屠る人間がいる、との噂を聞きまして。」

私の能力を使った結界術を見破られるほどとは恐れ入りましたわ。」

そっちなか。

「ま、何にせよ教えてくれてありがとな、それじゃ！」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！三日も覗かれていたの知っているなら、

そこは、なんの ようだ！とかそっという何かでしょ！？」

「いや、俺急いであるから。用があるなら俺と結婚してからにしてくれ。」

「結婚！？いきなり何言ってるの？！！」

取り乱すゆかりんかわいい。俺の脳内美女フォルダに即保存した。

「よし、かわいいから用を聞いてあげよう。」

「かつ……！！~~~~ッ！！！！」

おお、紫がトランザムったぞ。初心いのう。

「……では用件をといいたいところですが、まずは自己紹介をさせて貰いますわ。」

そういや忘れてたな。

「私は八雲紫、妖怪よ。よろしくお願いしますわ。」

「俺は佐原公一、人間だ。よろしく。俺には丁寧な言葉遣いとかいらないぞ。」

「では公一、単刀直入に言うわ。私の計画に協力してほしい。」

「計画？」

まあ、アレのことだろうけど。

「ええ、それは樂園。人妖を問わないあらゆるものが集う世界を作りたいのよ。」

やっぱりか。まあ、こつちが知ってるのも変だろうし、少し茶番でもしてやろう。

「今の世界だって神も人も妖もあらゆるものが集っているぞ？」

「ええ、でも遠い未来、人に神も妖も否定され、存在できなくなる時が来る。」

「なら人に否定されないよう、恐怖を与えてやればいい。それでもダメなら否定するモノを排除してやればいいじゃないか。」

「ダメよ。淘汰し合う関係であればどこまでいっても結局は無駄。何故なら神妖は人間がいるから存在できる存在。人間は私達の存在

を否定できるけど、私達は人間の存在を否定できないのよ。」

「ならば、最後に残るは人間ってか。それで？」

「私は人と共存を目指しているのよ。」

「共存、ねえ。人の恐怖から妖が生まれるんだ、双方生きるために敵対せざる負えない関係を覆せるとでも？」

「敵対しながらの共存よ。妖怪は人を襲い、人は妖怪を退け、神は求める者を救う。バランスがとれば共存は可能よ。」

「なるほどねえ。そんで紫はバランスのとれた世界を作ろうってわけか。」

「そう、でも私だけでは力が足りない。」

「で、力の強い者を集めて世界の管理に協力させるってことかな。」

「そうよ、世界の強者がこぞって協力してくれれば数多の弱者はそれに従うからね。」

「そうだな。それで具体的にはなにをすればいいんだ？」

「必要なときに力を貸してくれればいいわ。主に武力ね。」

「そうか…、いいだろ。協力してやるよ。」

「ありがとう、それで早速だけお願いがあるの。」

「何かな？」

「どこかに定住してくれない？」

おっと、予想外のお願いきた

「なんで？」

「肝心なときにあなたが見つからなかったら困るじゃない。」

「あー、なるほど・・・。」

そりゃそうだな。でも俺、まだ旅してたいし・・・。
あつ、そうだ！

「じゃあ、スキマの中が俺の家ってことで。」

「へ？あなた何言ってるの？」

「ちよつと失礼。」

「？」

紫の能力を奪い、俺と紫で共有できるように扱う。

・・・上手くできたかな？試しにスキマを開いてみよう。

「ほいっと」

くぱあ

「！」

「お、出来た出来た。初めてでもなかなか上手く扱えるもんだな。」

「・・・あなた、一体・・・」

「俺の能力でな、お前の能力を奪って俺とお前で共有できるようにしたんだ。」

「・・・反則的な能力ね。」

「まあいいじゃん。この中に俺の家入れとくから用があつたら訪ねてくれ。」

「できるだけ長い間留守にはしないようにするから。」

「そうね、スキマの中なら私の知らないところはないし。というか私の空間ですし。それでいいわ。」

「よし決まりだな。そんじゃ改めてよろしくな紫。」

「ええ、よろしくね公一。本当、隣国まで来た甲斐があつたわ。」

ガシツと握手を交わす。ハグまで持つて行きたかったけど、ここはグツと堪える。

ジリジリ好感度を上げるのが攻略の鍵と見た！

「それじゃ、俺行くわ。」

「ええ、次に会う時を楽しみにしていますわ。」

良し、好印象残せたな。

さあて早速、眠る籠とやらと手合わせに行きますか！

十話 紅と黄（前書き）

新オリキャラ注意！

十話 紅と黄

「ここか・・・。」

森の奥地、山の麓にちんまい道場があった。
道場というより小屋といったところだが。

入り口付近になにやら人の姿があった。

「寝ている・・・こいつが例の眠る龍か？」

試しに石破天。拳を撃ってみる。

距離もかなりあるし、噂どおりなら難なく対応するだろう。

なんで俺が天。拳撃てるかって？何か気合いでやってみたらできま
した。

「石破！天。拳！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

あ、やべ、直撃した。

キャプつばみたいに盛大に吹っ飛んだ。

とりあえず助けに行こうか。アレ食らって無事なわけないし。しかし、何の対応もしなかったな。噂はガセだったってことが。

〈小屋からおよそ300m地点〉

「お、見つけた。随分とんだなー。」

そのとき俺に電流が走る――！

「zzz」

「寝てる・・・しかも無傷で・・・っ！」

有り得ない・・・アレの威力は低級妖怪程度なら蒸発ものだぞ！？
初対面に向かってそんなもんぶち込む俺の人間性はさておいて、なんだこの耐久力！

しかも何事も無かったかのように寝たままだと！？

あ、もしかすると眠る龍ってのは何しても起きないって意味なのかも。

それにこの耐久力なら黄金の鉄の塊くらいは余裕であるし、龍と呼ばれるほどかも。

こんな硬さで襲ってきたら貧弱一般妖怪は成す術もないだろうし、噂にもなるわな。

うん、納得。寝ながら戦うってのは噂に尾ひれがついたんだろう。

「さて、吹っ飛ばしたままじゃ悪いし、小屋まで運ぶとしますか。」
うつ伏せというかヤム。ヤポーズで寝ているので起こす。

もう一度俺に電流が走る——！

赤い髪にすらつと伸びた美脚。スリムで引き締まった体に豊満な胸。そしてこの顔は……！

「こいつ……、美鈴じゃん……！」

まさか中国で出あ……いや中国だから出会うのか。中国だけに。乙女座の俺はセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない。

あれ？でも美鈴が眠る龍だとすると、やっぱりおかしいな。

眠る龍は人間で美鈴は妖怪だ。近寄れば妖力がはつきり分かるくらいは出てる。

いくら噂に尾ひれがつこうとも、流石に人間と妖怪を間違えたりしないだろう。

ということとは、眠る龍ってのは別人か……？

考えてみれば、そもそも小屋の主が小屋の外で寝てるってのもおかしい話だ。

つまりあの小屋は美鈴のものではなく、他の誰かの小屋ということ。そいつが眠る龍なんだろう。紫があ場で嘘を付くとも思えないし。

考えていると、後ろからとんでもない速さで石が飛んできた。

しかもかわしたら、丁度かわした所で音速超えたらしく砕け散ると共に衝撃波が出た。

まあ、衝撃波も俺からしたら遅いわけで、普通に衝撃範囲外まで行っただけだ。

少しすると爺さんが現れた。

「ほっほ、アレをかわすとはやりおるのう。」

「あんたは・・・？」

「ワシか？ワシはそこで寝とる娘の師じゃ。」

「じゃあ、もしかしてあんたが眠る龍か？」

「人妖揃って勝手にそう呼ぶ。ワシはそう名乗ったことはないがの。」

「

「てことはあんたが眠る龍で間違いないんだな。俺は佐原公一という。」

「佐原・・・、お主が噂の武神と言われとる者かの？」

「人が勝手にそう呼んでるだけだ。俺がそう名乗ったことはない。」

「ほっほっほ、お主もか。互いに難儀なことじゃのう。」

「まったくだな。そんであんたはなんて呼べばいいんだ？」

「ワシは黄じゃ。名は捨てた。」

「ウォンか。早速だがちょっと頼みがあるんだが。」

「ふむ、こんな場所ではなんじゃし、ワシの家で聞こう。」

「そうか。それじゃ、こいつは俺が運ぶよ。」

「zzz」

美鈴まだ寝てるし。

「ほっほ、じゃあ頼もつかの。老体にその重さはちと堪えるからもう。」

「任せろー」

バリバリ音を美鈴の服でだしたかったけど自重した。外で寝てる女を全裸にするとか変態すぎるでしょう？

とりあえず美鈴を背負って黄の小屋に向かった。

なんで背負ったかって？背中で感触を楽しむ為に決まってるんだろ！
フフ、フフフフ

（小屋）

惜しみながらも美鈴を背からおろす。

「弟子の感触はどうじゃったかの。」

「最高でした。」

「ほっほ、それは重畳。自慢の弟子じゃからのう。」

「ところで、あの薄い道着は黄が選んだものか？」

「然り。目の保養じゃ。老体をいたわるのは当然じゃろう？」

「その感性は賞賛せざる負えんな。」

「ほほう、お主もなかなかわかつとるのう。」

「zzz」

こうして、美鈴の寝てる傍ら、黄としばらく歓談を楽しんだ。

あと、俺の石破の衝撃で美鈴の道着が所々裂けているので、道着を作ることになった。

まずチャイナドレスをイメージしてほしい。

そこから肩口からの布を削り、腋を空けて横乳が拝めるようになっている。

スリットは動きやすいように、腰のあたりまで入っている。

一枚で大きい布が無かったため、胸の辺りと腰から下の間を網目状に縫い合わせた。

その為、腹と背中では網目状の系でしか覆われておらず丸見えもいいところである。

「けしからん。実にけしからんな。」

「さっき他の布を雑巾にしたせいで布が足らんしのう、仕方の無いことじゃ。」

「そうだな、布が足りないなら仕方ないな。」

「うむ、仕方ない仕方ない。」

そう、布が足りないから仕方ない。別に男の目に優しくしたくてこ
うしたわけじゃない。

ここは勘違いしないでいただきたい。

これを着る美鈴……。フフ、フフフフ。

「さて、いいものもできたことじゃし、本題に入ろうかの。」

「本題？」

「お主、ワシに頼みがあると言っておったじゃろう？」

あ、忘れてた。あまりに美鈴服に夢中になりすぎてたな。

「この俺、佐原公一は君との果し合いを所望する。」

「ワシと手合わせがしたいと？」

「ああ、なんでも寝ていながらも戦うそうじゃないか。」

「ふむ、確かに寝ていても戦えるの。」

「そこで、寝ているあんたの戦いが見たいから寝たら手合わせしてくれないか？」

「構わんが、怪我をしても知らんぞ？」

「そっちこそ。ああ、あと俺に加減はいらないからな。全力を望む。」

「あいわかった。夜までここでゆっくりするといい。何にもないがのう。」

「確かに何も無いな。食料はどうした？」

「少々の野草と山菜がある。」

「なんとも寂しい飯になりそうだな。獣でも捕まえてこよう。」

「ほう、それなら熊でも捕まえてきてくれんか。」

「任せろ！」

「ほうほう、頼もしいのう。それじゃワシは鍋の用意でもしておくか。」

よし、とびきりでかいのを捕まえてこよう。

手合わせをするわけだし、腹が減ってはって言うからな。

しかし・・・

「zzz」

美鈴はいつになったら起きるんだろう。

十話 紅と黄（後書き）

フフ、フフフフフはクマ吉のイメージです。

十一話 夕飯、そして戦いへ（前書き）

突然ですが斬り姫いいよね。

いまでは作業用BGMになってたりします。

十一話 夕飯、そして戦いへ

「熊鍋うまいなあ。」

「そうじゃのう、なんといつても上物の肉じゃからのう。」

「美味しいですよー。久しぶりですよ、こんなに美味しいものは。」

今は三人で夕食を楽しんでいる。

俺の狩ってきた熊は肉が上手い種類の熊で上物らしい。独特の甘みがあつて美味しい。

ちなみにどんな熊かというと顔つきが異常に怖くて蜂蜜食べてた青熊だ。

ぶつちやけすごい弱かったから労せず狩れた。

なんたつて頭を木が倒れる程度の力で殴ったら、頭粉々に吹き飛んだからね。

それで丁度いいから血抜きして持って帰ったというわけだ。

頭吹き飛ばしたときに返り血浴びちゃったから飯の前に風呂を借りた。いい湯だった。

風呂あがりの腰布一枚のときに丁度美鈴が起きて、変態変態連呼された。

仮に変態だとしても変態という名の紳士だよと必死に弁明したが、美鈴はドン引きで、

黄が説明してくれるまでゴミをみるような目で俺を見ていた。

永琳に同じような目で見られたときはゾクゾクしたが、美鈴だとな

んかイラッときた。

そこで俺はストレス発散の為に、ぶっきらぼうに投げて空中で連撃を入れてやった。

それでも美鈴には傷一つ付かなかった。モンクタイプの癖にやたら硬い。

次は諏訪子でも大怪我する程度の力を込めてやろうと思う。

「ところで師父、公一さんと手合わせするって本当ですか？」

「うむ、そのためにわざわざこんな辺境まで足を伸ばしたらしいし
のう。」

武に生きる若者の願いに応えるのもまた先人の役目じゃて。」

「いや、俺あんたより歳とってんだけど？」

「え？公一さん、人間ですよね？」

「おうよ。」

「人間なら、どう見ても25歳前後ってところですよ？」

「そうみえる？いやー、若く見られるとうれしいもんだねえ。」

「そうじゃろそうじゃろ。ワシ位老けると若い女子が寄り付かんから
のう。」

「なにいつてんだ黄。目の前にお前に寄り付く若い娘がいるじゃないか。」

「ほっほ、そうじゃったのう。まだ300も生きていない若い女子

「がおるわな。」

「いや私、あなた達人人間から見ればすごい長生きしてますからね！？
というか何で私の話になってるんですか！」

「かわいいから。」

「かわいいからのう。」

「かつ・・・！！・・・もう何言ってるんですか、二人とも！！！！
それに理由になってませんよ！」

「かわいいものを愛するのに理由がいるか？」

「いやいらなのう。」

「反語表現！？もう、あなたたちはほんとに・・・・・・・・・・もう！
！」

真っ赤ってレベルじゃねーぞ。そろそろからかうのはやめにしよう
か。

「まあ、落ち着けよ美鈴。食事中だぞ。」

「誰のせいだと思っているんですか！」

「ワシら？」

「そうです！人をからかわないで下さい！！！」

「「気をつけますね^^」」

「（イラッ）……。はぁ、もういいです。」

「それで師父、武術家との手合わせは数年前から全て断ってたじゃないですか。

公一さんと手合わせするってことは、何か特別な事情があるんじゃないですか？」

え、そうだったの？危うく無駄足になるところだった……。

そっぴや噂も数年前に名を聞いた程度のものだったのはこういっわけか。

「ふむ、数年前に究極ともいえる原石を拾ったからのう。凡百の石には構っておれん。」

「なるほど、美鈴の教育に忙しくなったから手合わせなどしてられないってか。」

「私が……。究極……。」

予想外の賞賛にちよつと呆けてるな美鈴。

「これ美鈴。才はあれどもお主はまだまだヒヨッコじゃぞ。努々忘れるでない。」

「あつ！はい師父！！」

すばやく諫めたな。でも美鈴のニヤニヤ顔はしばらくおさまる事を知らない。

「それで、なんで俺の手合わせは受けてくれるんだ？」

「さっき言ったじゃろう？凡百の石”には”構っておれんな。」

「成程、俺の力は眼鏡にかなったということか。」

「ほっほ、そういうことじゃ。武神と呼ばれる男がどれほどのものかと思っただが、

ワシの指弾を難なくかわす程のものじゃし、手合わせをして損はなさそうじゃ。」

「ご期待にはお答えしよう。」

「でも公一さん大丈夫なんですか？」

「何が？」

「師父はこう見えて、もの凄く強いんですよ？」

「大丈夫、俺も超強い。」

「いえ、むしろ師父は相手が強いほど…」

「美鈴、そこまでにしなさい。種明かしは実戦で、じゃ。楽しみは後に取っておくもんじゃない？」

「違うない。」

「でも・・・寝てるときの師父は加減しないし危険ですよ。」

「加減なし、大いに結構。それが俺の望む道、修羅の道だ！」

「・・・はあ、分かりました。でも危なくなったら止めに入りますからね。」

「手助け、干渉、一切不要！黄は俺がやる！！」

「ほっほ、その意気やよし。楽しみじゃ。」

そして夜になった。

小屋で戦っては小屋が灰塵に帰すので、1km程離れた森の広場で闘ることにした。

黄は先に行って寝ているから後から来いと言っていた。

あと、美鈴がついてくるそうだ。手は出さないと約束したから別に構わないが。

現在、黄が出発してからおよそ一刻。頃合だろう。

広場に到着。かなり広い、柵で囲まれた場所だ。

砂山、丸太の長椅子、切り株の椅子などがあり、さながら公園といったところか。

「夜の公園で武術家二人・・・ってか。」

なるほど、これは勝負しかないな。

黄は公園の中心に立って寝ていた。

「美鈴といい黄といい、お前らは立って寝る習慣でもあるのか？」

「そんな習慣ありませんよ！師父は今回、寝込みを襲われるのを知ってるから、動き出しやすい格好で寝てるんですよ。」

「ふーん。じゃあ美鈴も小屋の前で立って寝てたのは何かに警戒してたのか？」

「あ、あれは・・・站樁中に暖かい日差しがあれで・・・つい・・・その・・・」

「つまり、居眠りだな。」

「・・・・・・はい・・・。」

站樁しながら居眠りしてどんだけ足腰鍛えてんだよ。
まったく、こんな化け物が人間の弟子ってんだからな、中国武術は底が知れない。

「さて、あっちから来ないようだし先手は貰おうか。」

石破でも撃ってみようと思ったとき、突然悪寒がした。なにか嫌な予感がする。

とりあえず石破はやめて慎重に間合いを詰めた。

黄まであと10メートル・・・。まだ仕掛けられない。

5メートル・・・

3メートル・・・

2メートル・・・

1メートル・・・

まったく隙が見えない。ここで仕掛けるのはまずい。
仕掛けたらおそろくは返り討ちにあう、そう体全体が警報を鳴らしている。

50センチ・・・

40センチ・・・

30センチ・・・

もう目の前だ、それでも嫌な予感是不変わらない。
掴みかかろうと殴りかかろうとどうしても成功するイメージが沸かない。

「・・・おもしろいつ・・・!」

こんなことはかつて無かった。

もちろん今能力で生命力を奪えばあっさり倒すことはできるだろう。人間でしかも爺さんだ。一瞬の間もなく昇天させられるはずだ。

だがそんなことをしたいわけじゃない。

あくまで武人として果し合いを望んでいる。

例え負けるとしても、俺の持つ最高の武で仕掛ける。

俺には足を止めて力を溜めることで出せる最高の威力を持った技がある。

「それじゃあ、勝負といこうじゃないか！」

嫌な予感止まらない。でもやるしかない。

「FIRST... COMES... ROCK...」

十一話 夕飯、そして戦いへ（後書き）

伏字の関係で元ネタ分らない人居るかもしれないけど問題ないね。

十二話 極みにある勝利と敗北

「ジャンケン!!」

俺は渾身の力を拳に込めた。

「グー!!!」

亜光速の拳が黄に向かって放たれる。

しかし次の瞬間、俺は地面に叩きつけられ、でかいクレーターを作っていた。

「ぐっ……。」

何が起きたのかは理解できない。だが拳は確かに黄に当たっていた。それは間違いない。

さらに俺は打撃を受けていない。それでいて叩きつけられているこの状況。

起き上がると体中が痛む。俺にダメージを与える事は人間の身体能力のみでは不可能だ。

気を練ったとしてもこれ程は有り得ない。ならば、他の力を利用しているに違いない。

それに俺にこれ程のダメージを与えられるのは俺しかないだろう。

「つまりは合気の類か……?」

これが妥当な線だろう。

それにしても亜光速の拳に合わせるとは恐れ入る。

しかも寝ながら無傷で対応してみせた。眠る龍と呼ぶに相応しい。これでは打撃の類は効かないかも知れないな。

「ならば組み技で勝負といこうか！」

じっくり間合いを詰め、慎重に掴みかかる。奥義顔面パルマの出番だ。

ガッ！

「貰った!!！」

スカッ

「なっ!!！」

掴んだはずの手が外されている。気づけば手首の関節が外れていた。外された手首に気をとられた刹那、脳に衝撃が走る。

「がっ・・・!!！」

頭を蹴られた。外傷は全く無い。どうやら脳で衝撃が発生するような蹴りらしい。

「器用なマネをするっ・・・!!！」

一旦距離をとる。脳に直接ダメージを貰えば、流石の俺でもそのままでは闘えない。

感覚が戻るまでは防戦だ。相手は近距離迎撃が主のようだし、問題

はないはず。

しかし、それは甘かった。

下がった時、嵐のような弾幕が俺を襲った。

「これは・・・砂利か!？」

そう、砂利だった。ただし音速を超える程で広範囲に絶え間なくだ。跳び下がった瞬間、空中にいる間にくらった為、衝撃波で身動きが取れない。

一発一発は大したダメージではないが、数が多すぎる。

止まない砂利、およそ半刻は過ぎただろうか。辺りの地形がすっかり変わっている。

「なかなか・・・堪えたぞ・・・!」

俺がこれ程やられたことはこの世界がはじまってまって以来、初めてのことだ。

ダメージは深刻。右腕右足は使い物にならない。あばらも数本持っていないかれ、

左手首は外れているし、全身打撲、さらに内臓の損傷もかなりのものだ。

「しかし、攻略の糸口は見えた・・・!」

亜光速の打撃に反応し、組み付く手をたやすく外す。そんな達人でも人間なのだ。

人間である以上、全方向同時攻撃には対応できない。さっきの俺のように。

俺は高速で砂利を投げつけた。もちろんかわさせて空中に浮かせるためだ。

しかしまたしても俺の予想を超えてきた。

投げられた砂利が空を切るように外され、衝撃波ですらその場でいなししている。

「どうなつてんだよ、この高性能ジジイは・・・。」

だが、策はまだある。全方向から同時に黄に当たるように投げつけてやればいい。

その衝撃で立っている地面を削れば、空中だ。身動きはとれなくなるはず。

幸い、左足はまともに動くため、それも難しいことではない。

懸念としては地上にいるうちに踏み込まれ、一方向を突破されることくらいだ。

そうなったとしても、また繰り返せばいいだけの話だが。

さあ、俺の八意式高速移動術と八意式投擲術が火を吹くぜ！

「とくと見るがいい！盟友が創りし、我が八意の奥義をッ！！」

寝てるから見れないだろうけどな！

「おおおおお！！！！」

高速で黄の周りを駆け巡り、足元の砂利を投擲していく。

もつとも両手が使えないので投擲というか蹴っ飛ばしているだけだ
が。

それでも嵐のような弾幕を形成していく。

四方八方上からも降らせるように全方位からの攻撃だ。流石に防ぎきれぬわけがない。

その時だ。黄から虹色の気の奔流が溢れ出した。瞬く間に弾幕を弾き飛ばし、猛突進してきた。

流石にこれ程の気を今くらう訳にはいかず、大きく後ろに跳んで身を引く。

そして着地、これがまずかった。大地震のような揺れが起きて体勢を崩してしまった。

「震脚か・・・まずい！」

打ち上げられ、空中での攻防が始まった。

黄が攻め、俺がかわし、俺が打ち、黄が受け流す。

六度目の攻防が終わった時、勝負は決していた。

次の黄の攻撃に対して、俺は頭部を守る体勢ではなくなっており、また崩れすぎた体勢だったため回避も反撃もできない状況だった。

「七手・・・か。」

”七手”、型の進化により生み出されたもの。

型の進化のために型の隙を突く、隙をなくす為に型は進化する。そしてまた隙を突く。

繰り返し辿り着いたその極みにある境地。

どんな型であっても七手あれば絶対の隙を作り出せるという結論に至り、七手と呼ぶ。

もちろんその場に応じた完璧な対応をしなければ、その実践は不可能。

ゆえに無形。言わねば理論であり一定の型のある技という分類で

はないとも言える。

それをまさか実戦で使う奴が存在するとは。

そして俺の頭に黄の攻撃が打ち込まれる。

俺は成す術も無く、ただただ吹っ飛ばされた。

そして、流し込まれた気が衝撃となり頭の中で暴れまわる。

「ああ・・・、負けたな・・・。」

完敗だった。かろうじて意識を保つのが精一杯といったところ。

動ける状態じゃない。追撃が来ないのが幸いか。

「それにしても・・・どうしようかなこれ。」

闘う前と比べると、この場所が同じ場所だとは思えないほどに破壊されていた。

初撃でできた半径5 k m程のクレーター。そこから発生している各方面の地割れ。

さらに衝撃によって消えた森と山。かなり離れた山ですら抉られてひどい有様だ。

当然、1 k m程しか離れていない小屋なんか影も形もなくなっている。

まあ、それでも人里離れた場所で他人に被害が無かったただけまだマシか。

「ま、後で考えるか・・・。」

とにかく休みたい。

そう思つて能力を使い、自分の家に入り寝た。

一方、その頃の美鈴

「誰か助けて・・・。」

吹き飛ばされて離れた山に深く減り込んでいた。
身動きが取れる格好ではないため、抜け出せないでいる。

「師父・・・公一さん・・・。」

むなしい声が木霊するが意味は無い。
なにせ、闘いの場から10km程離れているからだ。

一応、身動きがとれなくとも妖気を使うなりすれば周囲を破壊して
動けるようになる。

しかし場所がまずい、減り込みの度合いが深すぎた。
ここで周囲を無造作に破壊しようものなら生き埋め必至。
さようなら人生、こんにちは閻魔様である。

今、まさに奇跡的に減り込んだ際の穴が崩れないでいるだけなのだ。

だからこそ美鈴は切に願う。

誰か助けて、と。

その時だった。

「誰かいるのかね？」

「！こっ、ここです！ここにいます！！助けてください！！」

「ふむ。」

男はすぐに美鈴を見つけ、掴み、引っ張り出した。

「ありがとうございます。本当に……本当に！！」

美鈴は安堵から少し涙を流している。

「構わんよ。それよりこれを使いなさい。」

男はハンカチを渡した。美鈴はそれを受け取り涙を拭いた。

「ところで嬢さんはこんなところに埋まって何をしていたのかね？」

「実は・・・」

美鈴は簡潔に経緯を説明をした。ついでに自己紹介も済ませた。相手は吸血鬼だそうなので自身が妖怪であることも話した。

「成程、それは災難だったね。」

「ええ、でもあなたのおかげで命が助かりました。是非何かお礼をさせてください。」

「礼か。では一つ教えて欲しいことがある。」

「なんでしょう？」

「西はどっちかね。」

「はい？」

「いや、実は道に迷ってしまっていてね、西がどちらか分からないのだよ。」

命の恩人は迷子だった。

「えーと、西ならあっちの方ですね。」

「そうか、ありがとう。では」

「あっ！ちょっと待ってください！お礼ってこんなことだけで・・・」

「構わんよ、大したことはしていないからな。」

そう言って男は去っていった。

しかし、美鈴は受けた恩が返せているとは思ってなかった。

「いつの日か、この恩は必ず返しますよ・・・スカーレットさん。」

こうして遠い未来の運命が一つ定まった。

十三話 ここからが本当の地獄だ

「あー、よく寝た。」

勝負の翌日。体はほぼ全快していた。

回復力とかも半端じゃないからね、俺。

とりあえず、変わり果てた森の跡地に出た。

黄ももう起きているようだ。

「おはよう。いい朝だな。」

「ほっほ、確かにのう。日の光を遮る木々もなく実に清々しいのう。」

「だろ？俺も昨日からこの森にはリフォームが必要だと思ってたんだ。」

「ならワシらは匠といったところかの。」

「違うない。」

何気ない会話で笑いあう。つつかなんでリフォーム知ってんだよ。だが、いつまでも現実を放っておくわけにもいかない。

「・・・さて、この現状どうしようか。」

「ふむ、お主の力でやったのが主じゃし、お主がなんとかしてくれ

んかのう。」

「まあ、俺の初段の威力がおかしかったから・・・って何で寝てたのに分かるんだ？」

「記憶に無くとも闘いの記録は体に残っておるわ。」

「そりゃ、便利な体だな。武術の睡眠学習とははじめて聞いたよ。」

「ほっほ、日常が武となれば、いずれは体が勝手に学ぶようになる。」

「なるほど、学んだ体は意識は無くとも勝手に動く。」

「然り。体に刻み込んだ武を用いるのに意識など必要ない。」

「はっ、こりゃあ負けるわけだ。」

「お主が全力なら分かんがのう。」

「俺は全力だったぞ？」

「ほっほ、隠しても無駄じゃよ。お主の闘う術は武術のみではあるまい？」

「・・・なぜそう思う。」

「ワシくらいになると危険を感じれば、そこへ赴くこと自体難儀してしまうものじゃ。」

昨日、この場に進もうとした時は足がもつれ転び、仕方なく這って

進むが手が滑り、
転がり進むも倒木に行く手を阻まれ、回り込みながらも何とか辿りついたのじゃ。

恐ろしい能力を持つ邪神と相見え、命からがら逃げた時ですらこれ程では無かった。

つまり、お主の危険度はワシの命など易々と奪えるほどのものはずじゃからのう。」

「参ったね、どうも。お見通しか。」

「危険察知は護身の真髓じゃからのう。」

「確かに俺の能力を使えば倒すのは簡単だ。ただ、そもそもあんたを訪ねたのは、
武術の興味があつてのことで武術で手合わせしたかったからな、手抜きじゃないぞ。」

「ほっほ、全力でなくとも手抜きではないことくらいわかっておる。
ところでお主の能力とは一体なんじゃ？」

「ああ、俺はあらゆる力を奪い、扱う程度の能力というのを持っていてな。

例えば、死合いなら生命力を奪えばあっさり殺せるって代物だ。」

「恐ろしい能力じゃな。神をも凌駕しかねん。」

「まあ、色々と応用も利くし便利な能力さ。ところで俺も聞きたいことがあるんだが。」

「なんじゃ？」

「俺の力をすべからく受け流し、時には俺に返していたが、あんたの武術って一体なにをしてるんだ？」

「ワシの武術は激流に身を任せ同化することからはじまり、それを制することで極みとするものじゃ。」

ト。みたいなこと言ってるよこの人。

多分この世界をベースに格ゲー作ったらレバ入れ二回で選択できるよこの人。

「ちなみに美鈴も同化するところまではできとるぞ。まるで制御はできてないかの。」

「そうか、だから石破でふっ飛ばされはしても傷がなかったのか。ま、吹っ飛ばされてるわけだし、風に身を任せ同化してるってところかな。」

まだまだ誰得の龍魚レベルなんだろうな美鈴。

将来はナギツってる門番になることを期待しよう。

いや某プレイヤーみたいにナギなしでもそれはそれでいいけど。

「それはさておき、話を戻そうかの。この地をどうするかじゃ。」

「ここはもうダメだろ。生命の欠片も残っちゃいないし。」

「そうなると引越しせねばならんのじゃが、生憎金も当てもなくてのう。」

「ふーん、そりゃ大変だな。」

俺も中国に詳しくないし、当ても金もないからどうにもならんな。

「このままではワシも美鈴も行き倒れてしまふのう。」

「・・・」

「この惨状は正々堂々の勝負の結果じゃし、誰が悪いとはいわんがのう。」

「・・・」

「どこかに人の弟子をぶっ飛ばした上、手合わせを快諾してくれた者に対する恩を返し、なおかつ自らの力で起こした事の責任を取ってくれるような者はおらんもんかのう。」

「・・・分かったよ、俺が新しい住処を何とかするよ。」

「おお、引き受けてくれるのか！いやー、ありがたいのう。」

「そんで、どんなとこがいいんだ？」

「そうじゃのう。まあ、施しを受ける側じゃしあまり贅沢はいえんからのう。」

とりあえず、獣、魚、野草、果実、山菜、湧き水といった自然の恵みが豊富で、

静かな場所で、それなりに栄えておる商業が盛んな人里がおよそ五里以内にあつて、

気候は穏やかで自然災害は起こりがたく、地脈が優れている場所が

いいのう。

家はせいぜい食料庫と広い道場と温泉付きで、頑丈なでかい家程度で十分じゃな。

家具は便利なものであればなんでもいれてくれ。あと寝具は良質なものを頼むぞ。」

「マテ。ちょっとSYレならんしょそれは・・・？」

「いやならやめてもいいんじゃないぞ。美鈴の苦勞が増えるだけじゃからのう。」

「ん？どういうことだ？」

「ワシもいい歳の老体じゃからのう。基本的に家のことは弟子が全てやっておる。

ワシが家事に手を出すのはせいぜい客人が来たときくらいじゃ。」

「美鈴エ・・・でもそういうことなら・・・、しかし、ちよつとそこまでの家は・・・」

「いやならやめてもいいんじゃないぞ」

イラッときたけど、住む場所を奪ったのは俺だし、仕方ないか。

「はあ・・・、分かった。善処しよう。」

「流石はワシの見込んだ男じゃ！分かってくれると信じとつたぞ。では早急に頼む。」

あそこまで言われちゃ断われるわけないだろう、この確信犯が。

汚いなさすが達人きたない。

「それじゃあ、ワシは美鈴を探してくるから一週間後にここで落ち合うとするかの。」

「期限一週間！？あまりにも短すぎるでしょう！！？。」

「お主ほどの力の持ち主ならば問題ないじゃろうて。楽しみにしてるぞ。」

黄はそういつて去ろうとした。

「いや待てって！」

そういつて掴みかかると黄が煙のように消えた。
そしてどこからともなく声が聞こえる。

「残像じゃ」

なん・・・だと・・・

なんという高性能おじいさん。

しかし困った。要望に対する納期が短すぎる。デスマってレベルじゃねーぞ。

これは協力者を呼ばないと無理だ。
よし。あいつに頼もう。

「それで、なぜ私を呼んだのかしら？」

「いやあ、実はかくかくしかじかm。a。t。m。a。tというわけで。」

とりあえず紫を呼んで現状の説明と黄から出された一つの難題について説明した。

「ふうん、大変ね。」

「そこで協力して欲しいわけでございますよ。」

「嫌よ。私忙しいもの。」

「それじゃ紫の計画に協力する話はなかったことになりますな。」

「！・・・仕方ないわね。手伝ってあげるわよ。」

「ホントか！じゃあ、俺は家を作るからその他の条件は頼んだ！」

「ちょっと！それは頼みすぎじゃない！？」

「いやならやめてもいいんじゃないぞ」

あ、これ言う側だと気持ちいいね。

「くっ・・・分かったわよ。代わりにちゃんと私の計画に協力しな

「さよ。」

「はいはい分かった分かった。ほら、のんびり時間はないぞ？急げ。」

俺はスキマを開いて紫を投げ入れた。

紫は鬼のような形相でこっちを睨んできたけど気にしない。

さて、俺ものんびりしてられないな。

豪邸を一週間で作るんだから当たり前だが。

十四話 スキマ建設合同会社（前書き）

アホみたいに寒かったので、ちょっと温泉旅行してきました。
温泉はいい……。日々の疲れが癒される。

十四話 スキマ建設合同会社

どうも皆様。本日設立と相成りましたスキマ建設の代表を勤めさせて頂く、

佐原公一と申します。社員一同、皆様にご満足いただけるよう努力して参りますので

何卒ご贔屓のほどよろしくお願い致します。

さて、早速ですが一件仕事が入っております。ありがとうございます。

内容は、豪邸（希望条件多数有）。期限は一週間。報酬は……なし……。

皆様、スキマ建設合同会社は本業務をもって倒産とさせて頂くことが決定致しました。

短い間でしたが、沢山のご御愛顧を承り誠にありがとうございました。

まったく、報酬なしはないよな。よく考えたらさ。

俺がやったことのT S U G U N A Iつつても釣り合いがとれてないよな。

せめて報酬に美鈴と温泉で混浴とかさ。

……ハッ！そうだ温泉、混浴オンリーにすればいいんだよ！！

こうしちゃいらんねえ！！さっさと家作って最高の温泉を仕上げるんだ！！

「待つてろよ俺の温泉イベントオオオオオオ！！！」

とりあえず、設計作業に入る。

まず、食料庫。これは適当にものを詰めるスペースがあればいいだろう。

日が入り込まないようにして、ねずみ返しもつけとこ。

次、道場。これもただっ広ければいいか。

一応天井は高めにしとこう。

次、家。でかくて頑丈なら文句なしって言ってたから適当でいいか。寝室いくつかとリビング、キッチン、トイレをつければいいだろ。

外見の要望はなかったし、これらは見た目へ。ベルハウスにしてやろう。

そして温泉。これはやはり露天一択でしょう。

まず岩が必要だな。温泉イベントが檜風呂じゃ味気ないし。

後、屋根は必須。イベント雨天決行用。温泉なら酒も欲しいな。酒蔵を近くに作ろう。そうしよう。

ああそうだ、打たせ湯も追加だな。ポロリ期待値の増加が顕著だし。

みwnなwnぎwnつwnてwnきwnたwnwnwnwn

適当な設計書を作ったところで資材調達と加工に入る。
主に必要なのは石材と木材。ここで俺の奪った能力の一つが役に立った。

”バラバラに引き裂けないものなどあんまりない程度の能力”だ。

混ぜるな危険という感じのする能力だが、木々の伐採や岩の加工などに重宝した。

まあ、別に能力なくても俺の力なら普通に資材の伐採や加工はできるんだけど。

でも、使う機会の少ない能力にも光を当ててあげたいんですよ、俺は。

ちなみにこの能力、霊力やら妖力やらが格下の相手なら縁とかそういう概念的なものもバツサリいけるので、リア充キラーとして使えるんじゃないかと思ってる。

必要な資材が集まったところで建設。正直、豪邸の一つや二つくらい容易く作れる。

俺の建築技術は八意式をベースに何万年もの歳月を用いて磨いたものだからな。

つまりは一級廃人。たった一人の職人なのだよ。

こうして食料庫、道場、豪邸は完成した。わずか二日間の出来事である。

ちなみに出来たものはスキマの中に大切に保管しています。

「あとは温泉だな。」

正確に言うのなら基礎工事と移転作業も残っているが、紫が建てる場所を探すまでは作業に取り掛かれないので保留。

温泉はまず源泉を探して、そこからスキマで湯を直送するようにしようと思う。

よって、未開の地の多いこの時代に源泉のある秘境を探しをしなければならぬ。

本来それは実に困難な作業であるはずだが、八意式秘境探索術がある俺に隙はなかった。

スキマから出発すると、そこは自然豊かな秘境である。便利なスキマに感謝する。

かなり広大な大自然のようで、この中から源泉を探すとなると一苦労だ。

効率的に探索しないと時間的に無理がある。

「わからなかったら人に聞く！」

という名台詞を知っている俺は自然の権化である妖精を探し聞くことにした。

自然のことなら妖精に聞くのが一番、餅は餅屋ってね。

自然豊かな場所では妖精が多く生まれ、そのまま住み着く。だから数が多く会いやすい。

ここも例に漏れず、5分もしないうちに妖精を見つけた。

早速鼻塩塩と思ったが、なんとなく見覚えがある気がしたのでちょっと観察。

妖精は三人組。何というか冒険のパーティといった感じた。見たところ、中心の一人に周りの二人が付き従ってるといったところか。

それにしてもあの漂うVX臭といい、無駄に洗練された無駄のない無駄な技術で、

KENZENとR-18の壁を分ける立ち振る舞いは間違いなく某フリゲの王女。

何ということでしょう。スキマの先は異次元ダンジョンでした。女神様仕事しろ。

いや、別に温泉さえ手に入れば俺はどこでも構わんでいいんだけどね。

ん？ていうか、この世界なら温泉手に入るんじゃないか。

温泉に人生賭けるくらいはしてた妖精が確か装備してたはずだし。

そして俺はその妖精の店を訪ね、事情を説明した。

協力を要請したが、俺が男であつたため交渉は難航した。

協議の結果、温泉に極小のスキマで覗きポイントを作り、いつでも覗けるように

することを条件に温泉の湯の供給を約束する形となった。

ちなみに渋っていた妖精を説得するために美鈴の身体的特徴を事細かに話したのが

この交渉の最大の決め手である。

事前に相手の弱点を知ることが大事だなとひしひしと感じた。

「ま、何はともあれ温泉の確保も完了、と」

帰ってから残りの期日で温泉の設計を突き詰めこだわりつつ、家具を揃える。

六日目の朝、ようやく紫が条件に見合う場所を探してきた。

よほど探し回ったんだろう。廃人のような様子で俺の家を訪ねてスキマを開き、

「ここでいいでしょ・・・」と力ない声で一言だけ言い残しその場に倒れた。

やっぱり分業してよかった。俺だけじゃ一週間は無理だったな。ありがとう紫。

心の中ではそう思いつつも倒れた紫は無視して、現場確認に取り掛かる。

何と言っても期限は明日なのだ。紫に構ってる暇はない。許せ紫。

紫の探し当てたところは正に条件通りの場所だった。流石ゆかりん！まずは敷地確保の為に周囲にある木々や岩などの障害物を妖力ぶっぱで消し飛ばす。

確保したら基礎工事に入るわけだが、なにも現代のような工事をす

るわけじゃない。

要は、建物が安定して建っていられるようになればそれでいい。ここで俺の能力が光る。

確保した敷地に耐久力などを与えてやり、強度などの増強を行う。これで完了。

それから既に作ってある建物をスキマから出して置いていく。

それらにも能力で耐久力などを与え、頑丈なものにする。

そして、地面と建物に結合力を与えることで千年建っても大丈夫な建物が完成した。

「さあて、メインの作業にかかりますかね。」

そう、ここからが本番。温泉作成作業である。

柵で温泉作成地を囲い、広々とした浴場を作っていく。打たせ湯の用意も忘れない。

浴場が出来たら、屋根を作る。風景を楽しめるよう、それでいて風雨を防ぐよう、

絶妙な加減の屋根だ。匠の技が光る。そして酒を楽しめるよう酒蔵を設置する。

これらも耐久力などを大幅に上げて、いつまでも劣化しないようにする。

最後にスキマを通してお湯を入れる。ついでに取引条件の覗き穴もつける。

覗き穴の位置についてはリアルタイムで連絡をとり、すべて妖精さん監修で配置した。

とてつもなく細かいこだわりが多く、かなりの労力を裂くことになった。

しかしエロに賭けるその心意気には尊敬してしまふ。

そんなこんなで湯の流入量と排水量のバランスもよく、いい仕上がりの温泉となった。

「完成！」

完璧だ。非のつけようがないだろう。

作業が終了したのは7日目の早朝。やば、ギリギリじゃん。

結構能力を使ったので疲れているが、とりあえず待ち合わせ場所にスキマで移動する。

スキマから出ると、既に黄と美鈴がいた。朝早いなあいつら。

と思ったのも束の間、よく見たら二人とも立ったまま寝ていた。

立って寝る習慣無いか言ってたけど、嘘だったようだな。

今のところ、俺が寝てるとこ見たとき立ち寝率十割だし。

どうせこいつらのことだから起こせないだろうし、俺も疲れたから一眠りしよう。

そう思っただち寝してる奴等の前に俺の家直結のスキマを開いた。

そして、起きたら入って来いと油性マジックで美鈴の顔に書置きして帰って寝た。

なんで油性マジックがあるかって？昔、暇潰しに作ってみました。

昼過ぎあたりに書置きに怒った美鈴に（殴りこみ的な意味で）寝込みを襲われたが、

俺は初撃をバックステップで華麗にかわし、石破で家の外までお帰り願った。
今回は遠慮したが、いずれの日にか寝込みを襲われてみたい（性的な意味で）

その書置きが読めたってことは、黄も起きてるはずなので早速新居に案内しようと思う。

「おはよう、約束の日だな。」

「どうじゃ、頼んだ家は出来たかの？」

「おうよ！俺にかかれればチョロいもんだったね。」

「ほっほ、それはそれは。まさか本当にできるとは思ってらんかったわ。」

「俺マジ万能だから。不可能を可能にする男だから。」

俺はここぞとばかりに胸を張る。いや、一番やばい条件担当したのは紫だけだね。

「それじゃ、早速行くかい？」

「そうじゃのう。美鈴、準備はいいかの。」

「ええ、私は大丈夫ですよ。いつでも出発できます。」

「よし、そんじゃ行こうか。ここ入ってくれ。」

そう言つて俺は新居直通のスキマを開く。

「それじゃ行くでしょうかの。」

「はい。ところで公一さん、これって公一さんの能力ですか？」

「んー、俺のといえば俺のだけど、ちょっと違うかな。」

「？なにやら複雑そうですね。ちなみにこれって一体なんなんですか？」

「空間と空間の境界ってとこかな。さっきこれ使つて俺ん家に来ただろう？」

「アレはこと俺ん家の空間の境界を操つて繋げたわけ。今は新居に繋げてるよ。」

「へー、よく分からないですけど、便利なんですね。」

「うん。超便利よコレ。」

特に移動手段としては最高。改めて紫に感謝。

そついや紫放置したままだったけど大丈夫だよ、妖怪だし。

よく働いてくれたことだし、温泉で疲れをとつて貰うのがいいな。

さあ、温泉イベントが目前だ。フフ、フフフフフ。

十四話 スキマ建設合同会社（後書き）

某フリゲネタをちょっとばかし入れたけど、流石に分かる人いないかな。

面白いゲームなんで、興味があつたらVector Award 2010の投票結果の2位のやつ落としてみるといいですよ。

十五話 温泉（前書き）

混浴は男の夢、いや全人類の緋想天である。

）
グラ公
）

十五話 温泉

黄と美鈴を新居に連れて行き、とりあえず簡単な説明をした。

商業が盛んな人里はまっすぐ南へ三里ほど行ったところにあること。魚の獲れるきれいな川は北西に一里ほど行ったところにあること。

その川の周辺は様々な獣が集まっていること。

果実の実る木や山菜等は少し北に行くところある山に沢山あること。

野草は家の周辺に色々な種類があり、食用はもちろん薬にもなること。

湧き水は地下水をスキマ直送で家の横に作った貯め池に送るようにしたこと。

「大体こんなもんか。」

「よく見つけましたね。こんな場所。」

「優秀な協力者が六日間でやってくれました。」

「ほっほ、それはいい人材を知っておるのう。ワシにも紹介してくれんかのう。」

「おいおい、美鈴がいるところでお前に女を紹介するわけにもいかんだろう。」

「へー、女性の方なんですな。どんな方が、一度会ってみたいです。」

「あれ、スルーされた。」

「いじり甲斐がないのう。」

「私だっていつまでもいじられるだけの女じゃないんですよ。」

「ほう、それでどこをいじられてたんだい？ちよつとそこ詳しく教えてくれないかな。」

「美鈴は立派に育つておるからのう。」どこを”と言つより”どこも”じゃないかの。」

「なつ・・・！何を言っているんでしゅか！！いい加減にしてくださいよ！！！」

お、真つ赤になった。ついでに噛んだ。かわいい。やっぱりいじり甲斐があつていいな！。

黄を見ると目でよくやつたと伝えてきてる。いえいえそちらこそと目で返す。

いつの間にかアイコンタクトできるようになつてた。俺すげえ。

「さて、話を戻すがこの場所を探してくれた者に礼を言いたい。紹介してくれんかの。」

「ん、いいけど。ただ今はそいつここ探すので疲れてるから後でな。」

「ちよつと、二人とも私の話を聞いているんですか！！！」

「聞いてますよー。」

「聞いとるよ。」

「それなら何か言うことがあるんじゃないですか！！ねえ！！！！」

「「ごめんなさい。」」

「・・・もうやらないでくださいよ。」

「「ごめんなさい。」」

心の底から、またやるんでごめんねという気持ちで言った。黄も同じ気持ちだと思う。

「・・・分かりました。許しましょう。」

美鈴は俺らの心までは読めなかったようだな。

「ところで、温泉はどうしたんじゃ？」

「ふふふ、渾身の自信作ができてるよ。家の裏手だからここからじや見えないがな。」

「ほっほ、そりゃあ楽しみじやのう。」

「あー・・・、温泉ってなんですか？」

「あれ、美鈴温泉知らなかったの？」

「そりゃ知らないはずじゃ。そもそも温泉はワシの若い頃の修行時

代に

滝行していたら偶然見つけたものじゃからのう。」

「そうなのかー。風呂とかあるし、この国だと常識なのかと
思ってた。」

「湯を張る風呂もワシ特製じゃ。人里にはないぞ?」

「ふーん。伝え広めればいいのに。」

「嫌じゃ。面倒くさいしのう。」

「ですよー!。」

「あのう・・・、それで温泉って・・・」

「ああ、温泉な。えーと、そうだな男女一緒に入るでかい風呂
ってどこだな。」

天然の湯を使うから色々体に良い成分が含まれて健康にもいいぞ。」

「ええ!?!お風呂に男女が一緒に入るんですか!?!?」

「温泉ってのはそういうもんだ。」

「そうじゃぞ美鈴。風流を理解するのもまた武人の嗜みじゃ。お主
は最早立派な武人。
いや、達人の域に届いておるじやろう。なればこそ共に湯に浸かる
のは必然じゃ。」

「私が・・・達人・・・ふふふ、そうですね。私達人ですから、

風流の理解もありますし、温泉と一緒に浸かるのは当たり前ですね。

」

無茶苦茶な理論で押し通ったな。道理を無理でこじ開けるとはこのことか。

しかし、混浴が決まった今、過程や・・・！方法なぞ・・・！どうでもよいのだアッ！

ただ、流石に美鈴の思考回路が心配なので、いずれ頭の医者を紹介しようと思う。

とりあえず温泉を見せたところで、一旦家に入り、夕食の準備に取り掛かる。

夕食は美鈴が作るので、俺は酒蔵から酒を持ってくるだけ。後の時間は暇だったので、紫の様子を見に行くことにした。

スキマを開いて俺の家に戻ると紫が機嫌悪そうにこっちを見ている。

「おう、起きたのか。」

「ええ、おかげさまで最悪の寝覚めでしたわ。」

「まあ、そう怒るなって。放置して悪かったよ。こっちも手一杯でさ。」

「事情は分かるわ。でもせめて寝室まで運んでくれてもいいのではなくて？」

「うぐ、まあそうだけどさ。うちの居間だって寝るにはそう悪くない床だろ？」

「そうね、体が痛くなるくらい素敵な床でしたわ。」

「調子こいてすいまえんでした；；」

ここで俺の華麗なる三回転半捻りローリング土下座が火を吹く。ビシッと決まったところで一言。

「許してくださいあ；；」

ふっ……決まったな。

「……いいわ、許してあげる。次からは女の扱いというものを考えなさいよ。」

「ありがとう紫。お詫びと言ってはなんだが、一緒に夕食でもどうかな。」

俺秘蔵のいい酒もあるし、食事の後には温泉にも入れるぞ。」

「そうね、せっかくのお誘いですし受けようかしら。ところで温泉と言ったわよね？」

昔、西の方にある神殿という所に入って以来だけでも、そのことかしら？」

「うーん、神殿って感じではないけど、湯に浸かるって言う点では

同じかな。」

「ふうん、まあいいわ。あの温泉は気持ちよかったし、あなたの温泉も期待してるわ。」

「おう、期待しとけ。俺の建造物中では最高傑作だからな。」

よし、これで紫も温泉決定。計画通り

そして紫を連れて戻って黄と美鈴に紹介した。

黄に色々からかわれそうな気がしていたがそんなことはなかった。

そして夕食。というよりちよつとした宴会になった。

なぜかおつまみ中心の日本昔話盛りの料理が出てきたからだ。

作った美鈴曰く「新築祝いです」の一点張り。まあいいんだけど。

そして食べ物に比例して酒が飲まれていき、気が付けば俺以外まともなのがいない。

美鈴はなぜか俺の左腕に関節技決めようとしてるし、紫は柱に向かって話しかけてるし、

黄に至っては庭に向かって霸王。吼拳を連発している。

武器持った奴を相手にリアルシャドーでもしているのだろうか。

全く、ちよつと強い酒出ただけでごらんの有様だよ!!!

しかし、このままでは温泉イベントがなかったことになってしまうので対策を講じる。

俺の能力で奪った力の中にはヤゴコロヨイサマースZ（液状タイプ）の効力がある。

ネーミングセンスはともかく、これはどんな酔いでも一瞬にして覚ます薬だ。

もちろん超天才八意永琳の薬である。天才的なネーミングセンスはともかくとして。

この効力を三人に分け与えるとあら不思議、一瞬にして正氣に戻るというわけさ。

というわけで、早速能力を使って三人に薬の効力を与える。

与えた次の瞬間、三人は酔いが覚めたよううで正氣に戻る。凄い、さすが永琳。

ネーミングセンスはともかく半端無い薬の効き目である。

「三人共、気分はどうかな？」

「え、はい。なんかすつきりしてますけど……。あれ、私何をして？」

あなたは俺の左腕を曲がらない方向に曲げようとしていました。

「あら公一、いつの間にそんなところに移動したのかしら？」

あなたの話していた相手は目の前の柱です。

「む、どうやら暴漢は去ったようじゃの。」

あなたの相手をしていたのは軍港施設の者ではなく幻覚ですよ。

「よし、酔いは覚めたようだな。そんじゃ温泉に行きましょうか。」

ということ、遂に温泉イベントにたどり着いた。

しかし脱衣所を設けていなかった為、脱衣するところは見られたくないということ。

美鈴と紫が先に行って、俺と黄が後から入ることになった。ちょっとミスったな。

しかし混浴であることに変わりはないので良しとする。

美鈴と紫が行ってからおよそ5分。頃合だな。
テンション上がった。

「黄、そろそろ行くぞ！」

しかし返事がない。

「おい、黄！どう・・・し・・・」

声をかけながら黄を見ると大きなこぶを作り倒れていた。

「おい！黄！大丈夫か！！」

しかし反応はない。どうやら気を失っているようだ。

「一体なんだってんだよ・・・」

黄がやられるなどただ事ではない。

しかも俺に気づかれずにそれやってのけるなんて神でも厳しいはずだ。

しかし、このこぶからして誰かにやられたのは明白。

どんな手練がやったのか……。傷を見る限り鈍器か。

考えていると、不意にとてつもない衝撃が頭に走り、意識が混濁していく。

反撃も出来ないまま二撃、三撃と攻撃を受け、俺は意識を失った。

薄れ行く意識の中、聞いた言葉が一つだけ残っている。

「温泉に男？論外だろ。」

次の日以降、美鈴や紫と一緒に温泉に入ろうとすると、

「温泉は男女別でもいいそうじゃないですか。親切な妖精さんが教えてくれましたよ。」

と言われ、温泉イベントが起こせなくなっていた。

後日、殴ったり余計な事を教えたりした犯人にOHANASHIしに行った。

十五話 温泉（後書き）

男の夢

叶わぬ故……

夢と云うのだ

十六話 帰国

あれから結構な時が経った。数えてはいないが、百年は余裕で過ぎてるはず。

数回程は中国にいて色々な中国武術を見てまわり、俺の武術を教えてやったりもした。

俺の武術をものに出来る人間は少ないので、とりあえず武の心を中心に教えた。

健全な肉体にはKENZENな精神が宿ると。

その結果、どのような紳士達が生まれたのかはお察し下さい。

その後は世界中を適当にうろつした。

西欧の方で悪魔とあつた時なんかは中々面白かった。

あいつら勢力ごとに異次元作ってそれぞれの世界持つてるんだよ。

裏界だの魔界だのそれはもう色々。比較的魔界って名前付けてる奴が多かったかな。

ちなみに、紫の依頼で戦ったやつもいた。

大概ボコると自分の世界に逃げる。そうなるともう手を出せない。

一回追っかけたときに知ったんだけど、創った奴の思い通りな世界だから、

まともに戦うとか無理。スキマで逃げたから何とかなったけど、死に掛けたし。

腹いせにそいつの世界から外に戻ってすぐ、その次元ごと消滅させただけ。

そついう訳で、紫の計画は中々うまくいかない。

強い奴が勢力ごと別世界行って屈服させられないし、俺の力で無理に倒すとしたら

正直、次元消滅くらいしか手はないからな。協力させるところじゃない。

ま、上手くいかれても困るんだけどね。幻想郷でなくなっちゃうし。

紫は世界計画を諦めて結界隔離の幻想郷案を早く思いつくべき。

あと西欧といえばスカーレット家があるか探したけど、見つからなかった。

まあ、別次元に家あるかも知れないから未来を楽しみにして探索は諦めたよ。

西欧の後でアフリカ行ったときはびびった。

強力な呪力が蔓延ってる地域があって、何かもうやばい。

人外魔境ってレベルじゃなかった。俺を呪ってくる植物とか生えてたし。

近隣の村にも被害が出ててあんまりだったので、俺の能力で呪力を奪ってやった。

そしたら後に残ったのは広大な砂漠だけ。近隣の村は大喜び。

俺の名前から砂漠の名前はサハラ砂漠と呼ばれるようになった。

歴史が俺色に染められていくけど、気にしない。いいことしたはず

だし。

それからアメリカの方に行ってカナダ方面に足を伸ばし、更に北に行ったところで

白熊のような白兎のような炭鉱でお守りを探すゲームで見たことある感じの獣を発見。

一緒にズザーツしながら一通り戯れたところでかわいい物が見たくなったので南へ。

南極まで行ってからかわいい生物探索開始。目標はもちろんペンギン。

ちなみに一人で探すのもなんなので、紫を誘ってみたけど「寒い」の一言で断られた。

一秒未満で答えずにちよつとくらい考えてくれてもいいんじゃないかなと思った。

その後、無事ペンギンを発見。時間を忘れて眺めてた。心が癒される。

気が付いたら体は凍りついて動けなくなってたけど。

まあ、スキマで温泉に移動して解凍したから問題はなかった。

そして、温泉でゆっくりしながら今後のことをじっくり考えた。その結果、それなりに世界の旅も満足したので、久々に日本に戻ることにした。

諏訪子と神奈子の全盛期ガチバトル、諏訪大戦も見逃せないし。

とりあえず、考えたらもう夕方だったので翌日移動することにした。

翌日

「さて、久しぶりの日本だ。諏訪子は元気にしへぶっ！！！！」

スキマを開き諏訪子の神社に行って早々何かが顔面強襲。完全に気を抜いてた。

まあ、寝て起きたばかりの万全な俺にとってはこんなもん痛くもなんともないけど。

「いきなりなんだってんだ・・・。」

「無傷だと！？御柱が完全に入ったのに・・・。」

神奈子！？もしかして諏訪大戦つてもう・・・

「あーうー、神奈子ー、そいつはうちの神だよ。」

あ、これ確定だね。畜生諏訪大戦見逃した、死にたい。

「へえ、そうするとこいつが武神さんかい？こりゃ失礼したね。私は軍神、

八坂神奈子という。昨日の戦いでこの地を治めることになった。よろしく頼む。」

「俺は佐原公一。神になった覚えはない人間だ。．．って昨日の戦いって言ったか？」

「そう。昨日、私が諏訪子とこの地の統治を賭けて戦い、私が勝った。

もつとも、ミシャグジ信仰が厄介で私がするのは表向きでの統治だな。」

「あーうー、公一がいたら負けなかったのに。」

「ふん、負け惜しみとは土着神の頂点の名が廃るぞ？」

「一度勝ったくらいで調子に乗るなよ侵略者。祟るぞ？」

「ほう？もう一度叩きのめされたいと見えるな。」

「まぐれが二度も続くと思ってるの？」

「ちょっと待て、二人とも。落ち着け。昨日戦ったつてのは本当か？」

「そうさ。昨日の夜に戦い、私が勝った。」

「まあ、もう一押しで私の勝ちだったんだけどね。」

「うあああああ昨日の俺のばかああああああああ！！！！」

どうして今日来ようとしたの？馬鹿なの？死ぬの？

昨日来てたら見逃さなかったのに！！チクショオオオオオオオオオオオ！！

「な、なんだ？急にどうしたんだ？」

「あーうー、公一、大丈夫？」

落ち着け俺、一大イベントを見逃したのは残念だが、今は落ち着くんだ。

ほら、なんか二人が頭大丈夫？みたいな目でこっちをみてる。

キチガイ認定受けなくなったら早く落ち着くんだった俺、素数を数える暇はないぞ。

よし、いける。大丈夫アピールするんだ。普通に振舞え俺。

——この思考、実に0・1秒

「大丈夫だ、問題ない。少し取り乱してしまったな、すまん。」

「そ、そうか。落ち着いたらいいさ。」

「急に叫ぶからどこがおかしくなったかと思ったよ。」

「いや、すまん。まあそれはさておき、久々の再開だ。新顔もいるわけだし、

積もる話もあるだろうから、とりあえずは一杯どうかな？」

「いいねえ、宴会なら賛成さ。」

「あーうー、それじゃ準備するよ。」

上手く話を持っていった。さて俺も宴会の準備を手伝うとしよう。
主に酒類の準備を。

そして、夕方になり宴が開かれた。
それはもう中々に盛大な宴で、鬼でも酔い潰れそうな酒が消費されていった。

いや、実際鬼に会った事ないから酔い潰れるか知らんけど。

「そんで、鉄の輪を粉碎して私の御柱が諏訪子に直撃して倒したわけさ！」

今は諏訪大戦の話を聞いているところだ。ホント見たかったなあ。

「でも、あの時の私の鉄の輪が当たってたら倒れてたのはそっちだよ。」

「ふふん、たられば負け惜しみってね。」

「なんだとお！」

「お、なんだい？やるのかい？」

「はいはい、酒の席で喧嘩はやめようね。ところで神奈子、その自慢の御柱だけど、

なんで出会い頭に俺に投げつけたんだ？普通の人間なら死んでたぞ。」

「ああ、あれはすまなかったね。でも境内にあんなでかい妖気が急に沸いたら、

どんな神でも牽制くらいはするだろう？」

「あ、なるほど。そういやスキマは妖力使ってたな、忘れてた。

でも牽制で御柱ぶつけんのはやりすぎだと思うよ。」

「まあいいじゃないか。無傷だったんだし。しかし、加減したとはいえ私の御柱で

無傷とは一体何をしたんだい？」

「別に何もしてねえよ。完全に直撃したけど俺が凄く強かったから無傷ですんだだけ。」

「・・・なるほどね、あんたがいれば負けなかったっていう諏訪子の話は

どうやら本当のようだね。」

「ふふん、どうだ神奈子！参ったかー！！」

「なんであんたに参らなきゃならないの！？私昨日勝ったんだけど！？」

「ほう、参らないというなら真の力を見せるしかないな、公一が！」

「俺が！？勝手に俺を巻き込まないでくれる！？」

「なに言ってるの、この神社の神なら侵略者に力を見せるのは当然でしょ！」

「いや、俺人間だから。神じゃないから。」

「お前のような人間がいるか」

「ひどい！？」

精神に傷を負うような二柱からのお言葉。傷ついた分は物理的にお返しすることにした。

10ミリ秒1割の利子をつけて。

え、暴利？そんなことはありませんよ。10ミリ秒1割は非常にリーズナブル。

良心的利率でございます。

というわけで、お二方には地中深く埋まっていたいただきました。

上から覗けば、聖者は十字架に磔られましたって感じに見える。芸術だなこれは。

丁度そんなことしてる時に今代の風祝と思しき人の気配がしたので、なにかこう神社の神を襲った人とかそういう勘違いされないうちに

スキマで帰宅。

いやー、中々楽しい宴だった。

宴の余韻に浸りつつも、明日には傷薬でも持っていこうかと思えながら眠りについた。

十七話 軍神の力と升人間の力（前書き）

Gジェネの新作が目前！

今作も子安無双したり、グラハム無双したりしたい

なんかここに書くこと小説に関係ないことばかりですね。

十七話 軍神の力と升人間の力

宴会の翌日、また顔を出したところ、何故か神奈子に勝負を挑まれた。

なんでも、やられっぱなしじゃ軍神の名が廃るだそうだ。

俺は御柱でも無傷だったし、地中深くに減り込ませるというKO勝ちしてたので、

「もう勝負ついてるから」と言ったら、ムツとした表情で

「酒の席で不意打ちとか私のシマじゃノーカンだから」と言われ勝負するハメになった。

どうせやるなら、諏訪子ともう一回ガチバトルでもして欲しい。力が拮抗してる者同士の戦いって見る分にはすごく面白いから。

そして一週間後。

俺は今、凍りついた広い湖の上にいる。

周囲には結界が施されており、その外に多数の神々が姿を現している。

神奈子が俺と戦うことを伝え回ったらしく、観客としてきているようだ。

ついでに言っと、この戦いが賭けの対象になっているらしい。神様自重しろ。

まあ、俺も賭け札買ったんだけど。もちろん俺勝利で。

ちなみにお金は賭けない。賭けるのは酒や食べ物といった物だ。

俺は酒を大樽10本賭けた。賭けてもいい酒類の量の上限だそうだ。

賭け札を配り終えた時点で俺の勝ちに賭けてるのが俺と諏訪子のみ。実質、観客は神奈子の仲間みたいなものだし、あたりまえか。これで勝てば酒樽万本は固い。大穴おいしいです。

酒のためにも俺の理不尽な能力をとくにご覧にいらてやろう。

「さあ、神奈子。準備はできたか？」

「ああ、いつでもやれるよ。」

「それじゃ、はじめるとしますか。諏訪子、開始の合図を頼む。」

「はいはい。それじゃあ、私の鉄の輪が地面に落ちたら開始だよ。それっ！」

空高く鉄の輪が投げ上げられる。そして自由落下して地面にぶつかる。

それと同時に俺に御柱がぶつかった。

「悪いが先手は貰ったよ!!」

続けて入り乱れるように御柱が舞い襲い掛かる。

「まだまだ！こんなもんじゃないよ！！」

さらに流星のように御柱が降り注ぐ。

「どうだい！この前と違って加減無しの御柱は！！」

「ん、まあちよつと痛い。」

「！？な、なんだと・・・！」

御柱は結局のところ神力による物理攻撃だ。

その上、相手の内部で力が爆発するなどの特別な効果は一切ない。
能力を使い、御柱の神力を奪えば防ぐのは簡単だ。

ただ、ぶつかるまでに奪いきることの出来ない量の神力が込められていたのは
いささか予想外だったが。

流石は軍神といったところか。

たいした傷を負わずに平然としている俺を見て観客の神々は啞然としている。

神奈子に至っては戦いの最中にも関わらず、かなりの動揺が伺える。

「動揺してるとこ悪いけど、次はこっちからいかせて貰うよ。」

俺は高密度の妖力を解き放った。

ただ純粹に全方位に妖力を垂れ流す、いわゆる威嚇。

威嚇とはいえ大妖怪がこれを行えば、小妖怪程度なら消滅させることもできる。

そんな行為を俺が行う。星を滅ぼして自分の力にした俺が、だ。

「ッ!!!?」

叫び声もあげられず妖力に飲まれ吹き飛ばされていく神奈子。

結界も破れ去り、観客に被害が出そうになったところで威嚇をやめた。

「これで決着かな。」

中級程度の邪神なら軽く消し飛ぶ程の威力だしな。

諏訪子の方を見ると嬉しそうにはしゃいでいた。手持ちの賭け札を見ながら。

何か喜ぶとこ違うねえ!?

まあ、いいんだけどさ。俺も大量の酒が手に入ると思うと嬉しいし。

「余所見とは余裕だねえ！！」

吹き飛ばした神奈子がはやくも戻ってきた。
しかし、威勢のいい言葉とは裏腹にどうみてもボロボロの状態。

「もう十分だろう、負けを認めろよ。」

「ハッ！この程度で勝ったつもりかい？」

「ああ、その程度でボロボロになるような奴相手にこれ以上は手を出したくないな。」

「そうかい、ならこれでもくらって寝てろ！」

神奈子がそう言うのと雨が降ってきた。

雨はたちまち豪雨に変わり、さらに嵐となった。

その嵐は天を駆け、龍の形をとり空一面を覆った。

更にそれは凝縮されて、高密度の嵐の塊で出来た龍となり襲い掛かってきた。

” 乾を創造する程度の能力 ”

天を創り、落としてきたといったところか。

だがしかし

「その程度で俺を倒せるとでも思ったか！」

全力で嵐の龍から力を奪う。

しかし、次々と創られる天から奪っても力が補填される。

だがそれも計算の内だ。奪い続けた力と俺の力を混ぜ合わせ龍に向かって撃ち出す。

元々、神奈子の神力よりも俺の力の方が強い。

能力で力の補填をされるなら、俺の能力で神奈子の能力を奪う方法もある。

今回は補填される分と同程度に力を奪い続けることが出来たので、奪った力を利用して、力押しで倒すことにした。

能力を奪い無力化するよりも全力を力押しで破った方がすっきりした決着だろう。

そして俺の放った力の奔流が神奈子の創った龍を破り、天を突き抜けた。

「これで俺の勝ちだな。」

「・・・ああ、これ以上は戦えないよ。私の負けだ。」

「よし、それじゃあ俺の勝利を祝って宴会やるぞ！」

「おいおい、負けた私に勝利を祝えとはちょっとひどいんじゃないかい？」

「ええい、敗者がぐだぐだ言っんじゃない！酒は俺持ち、ただ酒だぞ？」

負けたばかりで気落ちするのは分かるが、落ち込む暇があったら前を向け！

今回の戦いじゃ俺の勝ちだが、今度はお前が勝つかもしれないだろう？」

「・・・っは。次か、そうだな。よし、それじゃあさっそく再戦としようか。」

「え、今やるの？」

「ああ、呑み比べといこうじゃないか。こっちなら負けないよ！」

「！ほう、そう来たか。神ごときが呑み比べで俺に勝てると思うなよ。」

「上等じゃないか、倒れるまで呑ませてやるよ！」

「それじゃ、宴会としようか。おーい諏訪子、準備頼むぞー。」

「そうなりそうだったから準備はもうしてあるよー！」

流石諏訪子。分かってらっしゃる。

こうして神奈子との戦いは終わり、神々との大規模な宴会が始まった。

ほぼ全ての料理と酒は俺と諏訪子持ちだ。まあ賭けで手に入れたものだが。

宴会は一昼夜続いた。俺と神奈子の戦いの話を肴に大いに盛り上がった。

呑み比べは俺の圧勝。酒呑みの年季の違いを見せ付けてやった。

まあ、神奈子も相当のものだったが。御神酒を酒樽100本分は飲んだし。

楽しい時間にも終わりは来るもので、酒が尽きると神々は帰っていた。

その後、準備、片付けを担当した今代の風祝はしばらく過労で寝込んだ。

十七話 軍神の力と升人間の力（後書き）

東風谷乙。

十八話 弟子が来ました

神奈子と会ってから十数年。平和な日常を享受していた。

風祝も代替りして、かなり幼い子が風祝となった。

本来、ある程度力をつけて成長したところで代替りするのだが、俺や神奈子が神社でちよいちよい大規模な宴会をしたせいか、過労で体がボロボロになり、十年ほど引退が早まって代替となった。

この件について諏訪子には神奈子共々こっぴどく怒られた。

具体的には正座させられたまま10日間ぶっ続けで説教されて、宴会は諏訪子の許可無しに開いてはいけなくなった。

それと、代替が早まったおかげで今代の風祝の指導者がいなくなったため、

戦闘関連は俺が、その他全ては神奈子が指導することになった。

原因の一端を担ったのは確かだし、仕方ないので引き受けた。

というわけで、今日も朝から元気に稽古をつけている。

「今日は打岩からはじめるぞ！」

「はい！」

「よし、それじゃあ今日の素材はこれだ！」

俺は青銅の塊を取り出す。

「堅そうですね。」

「ああ、堅い。この前の岩とは比較にならないほどな。しかし、お前に秘められた靈力で上手く身体能力強化を行えば容易いことだ。」

「頑張ります！」

「それじゃ、開始だ！昼前には終わらせないと飯が作れないぞ！」

靈力を練りこみ、体に纏わせ青銅に向かう東風谷。

ぶっちゃけこの子、天才だ。靈力の量は尋常じゃないし、扱いの覚えも早い。

しかも、問題を打破する力が異常に高い。センスがいいと言っべきか。

前回の打岩で体に靈力を纏わせることが出来ていたので、今回の打岩では

靈力がある程度練りこまないと削れない程度の青銅をチョイスしたが、

初めから練りこんで向かっているし。教えることがない。

まあ、手がかからないにこしたことはないからいいけど。

「できました！」

10分もしないうちに綺麗な球体作りやがった。

いくらなんでも早すぎるでしょう？海王も裸足で逃げ出すレベルだ。

「よし、じゃあ次は術の練習だ。まずは風起こしから。」

「分かりました！」

霊力を用いて術を使う。どんな術を使うかは個人によって異なるが、東風谷の一族は風と水に関する術に秀でている傾向がある。

よって基本的な術はそれに関するものを使うようにさせている。

ちなみに俺が教えるのは基本的な術のみ。そこからの創意工夫は個々でやることだ。

・・・っと、少し放置していたら竜巻が発生してる。

「ちょっと止めて、それは風起こしすぎだ！」

「え、軽くやったつもりだったんですけど・・・。」

軽くやって竜巻発生とか、お前は犬天狗の葉団扇でも持ってんのか。

「いいか、何も術というのは強力ならいいわけじゃない。必要な時、必要な力を

出せることが重要だ。妖怪に襲われた人がいたら、その人ごと吹き飛ばすのか？

違っただろう。術というのは場面に応じた制御が出来るということが大事なんだよ。

今ここでそれほどの風を起こしたら庭が荒れてしまうだろう？

つまり、今はそれほどの風を起こす場面じゃないんだ。」

「・・・はい。」

「なに、分かったならいいさ。次から気をつけようか。」

「・・・はい！」

それから昼頃まで風と水の術を中心に鍛錬を行った。

昼食は東風谷が神奈子に料理を教わりながら作る。

今日はお粥だ。というか今日もお粥だ。東風谷と神奈子が作るとお粥が出てくる。

俺や諏訪子が多作ることが多いから、お粥の頻度が高いわけではなく栄養的な心配はない。

ただ、東風谷と神奈子はお粥以外の料理が作れるのか心配になってくる。

この前、それとなく聞いてみたら、お粥に文句でもあるのか的なことを言われた。

いや、お粥は神掛かった美味さだから味に文句はないんだけどさ、そうじゃないだろう？

でも、反論しようにも何ともいえないプレッシャーに圧倒されて言えなかった。

まあ、俺に害があるわけじゃないし、将来の東風谷の旦那乙ってことで良しとしよう。

午後は俺と実戦形式の稽古を一回やったら、俺の出番は終わり。その後は休憩なり神奈子の指導なり色々だ。

「さて、準備は出来たか？」

「いつでもやれますよ！」

「よし、じゃあ今日は平原でやるぞ！」

「はい！」

俺はスキマを開き、平原に繋げる。

「さあ全力でこい！先手はくれてやる！」

「では、いきます！」

東風谷の真骨頂、それは祀られる二柱の力を使えるところにある。いわゆる神降ろし。完全なものではないが、それでも人の身には余るの力だ。

地が脈動し、天が割れる。

大地が俺に襲い掛かる。逃げ道は空だけ。逃げる先には吹き荒れる嵐。

更に霊気弾や水弾、カマイタチを的確に飛ばしてくる。

地上では大地に飲み込まれるし、空中では身動きが取れないところを攻撃される。

なかなかいい攻撃だ。

「よく考えられた攻撃だ！しかしこうしたらどうか！」

俺は襲い掛かる大地や霊気弾などを妖力弾で吹き飛ばした。
これなら、空で吹き荒れる嵐は関係なくなり仕掛けられる。

「そう来ると思ってました！」

吹き飛ばした先には巨大な水流が待っていた。
なるほど、地を破られても水でカウンターとは用意周到なことだ。

「いいね！だが海を割れる俺に、この程度の水が効くか！！」

俺は山が割れる程度の力を込めた手刀を振り下ろす。
当然あっさりと水は割れて俺の脇を流れていく。

「そうなることも読んでました！」

その時、突如まぶしすぎる光が俺を襲った。

「うおつまぶしっ」

「光の中に消えろ！」

目がくらんでいる間にレーザーのような霊気弾に撃ち抜かれた。

「やった！」

「やってない。」

俺は東風谷の後ろに回りこみ首に手を当てた。

まあ、一発食らったところで東風谷程度の力なら俺には効かないし、

目がくらんでいても、相手の居場所は能力の応用で力を探れば分かる。

気を抜いた相手なら、後ろをとるくらい容易い。

「！」

「最後まで気は抜かないこと。ま、今回はいい感じだったよ。俺も一発貰ったからな。」

「・・・はあ、今回も私の負けですか。」

「気を落とすことはないよ。俺、世界最強級だし。」

「・・・そうですね、私が勝ったら化け物の仲間入りですもんね。」

「ちょっと！化け物はひどくない!？」

「あ、すみません。悪気はなかったんですよ。」

ただ心に浮かんだことをそのまま言ってしまっただけで。」

「純粹ということは時には凶器となるのか・・・。」

うぐう、心が痛い。俺だって人間なんだぞ。化け物じゃないぞ。

「・・・さあ、今日はここまでだ。帰るよ。」

「はい！」

神社に戻って早々に東風谷は休憩に入った。お昼寝である。

まあ、まだ8歳の子供だ。あれだけの戦いをしたら疲れもするだろう。

その間、俺は神奈子に道徳的な指導を優先して早急に行うように頼んだ。

とにかく俺の心に傷が増える前にやって欲しいと思う。

十八話 弟子が出来ました（後書き）

さっき東方人気投票の結果確認したら幽香ちゃんが3位になってた
あまりのことに俺の目がどうかしたんじゃないかと思ったけど、そ
んなことはなかった

つまりこれは向日葵同志諸君が増えたということだね！

人気爆発だね！おめでとうゆつかちゃん！！！！
え？ 死ね？

十九話 桜の季節

東風谷が11歳になった。

戦闘関連はもうそこらの妖怪じゃ束になっても敵わない程の力をつけた。

あとは東風谷に代々伝わる秘術などの習得くらいしかやることは無いので

先代の風祝にその辺の指導を頼み、俺はお役御免というわけだ。

隠居してるのに頼むってのもどうかとは思っけど、一族の秘術は俺じゃ教えられるいし。

まあ、仕方のないことだ。

そんなわけでこれからは暇になる。

だから日本巡りでもして暇つぶしをしようかと思う。

「俺はそろそろ旅に出る。」

「「「いつてらっしゃい。」」」

「あれ、なんか随分あっさりした反応だね。」

「”旅人引き止めるべからず”、先祖代々伝わる教えです。」

「あーうー、また痛い目には遭いたくないからねー。」

「引き止めるとなにかえらい目に遭うそうじゃないか。」

「・・・まあいいや、それじゃあな。」

何か複雑な気分になったけど、出発することにした。

今の季節は春。特に目的のない旅なので、とりあえず桜でも眺めに行くことにした。

桜の名所を人里で聞いた所、割と近場に絶景といえる場所があるらしい。

色々と危険だという理由で、普通の人はずよりつかないそうだが、まずはそこで花見酒を楽しもうと思い、秘蔵の大吟醸を用意してそこへ向かった。

歩いて向かって約一日、辿り着いた場所は正に絶景。

眼前に広がる一面の桜は言葉で表せないほどの美しさだった。

俺は桜の木の下に腰をかけ、一人花見酒を楽しむことにした。

「うーん、美味しい。これほどの絶景を独り占めして飲む酒は最高だなー。」

「あら？先客かしら。」

誰か来たようだ。おかしいな、普通の人はずよりつかないって聞いてただけだ。

・・・いや、情報は間違っていないな、妖力が感じられる。

こちらに近づいてくるようなので、一応警戒しておく。

「お花見かしら？ここは危ない所だと聞かなかった？」

視認できるところまで相手が来たところで気づいた。

緑のくせつ毛、時代にまったく合っていないチェックのベストにスカート、それに日傘。

ゆうかりんじゃないか！色々危険ってこのことか！

バイオレンスな展開は避けつつ、友好的にいきたいので、花見に誘ってみる。

「危ない場所とは聞いたよ。だけど最高の花見をしたかったからここに来てみたんだ。

ところでこんな所で会ったのも何かの縁だ、一緒に呑まないか？」

「この子達に囲まれてお酒を楽しむのもいいわね。いいわ、呑みましょう。」

「よし、決まり！さあ、座って座って。」

盃をとりだし、酒を注ぐ。

「ほい。」

「ありがとう。」

「よし、それじゃあ満開の桜を祝して乾杯！」

「乾杯。」

くつと盃の酒を飲み干す。幽香はちびつと飲んでいる。

「あら、これ美味しいわね。」

「だろ？俺の造った秘蔵の酒だ。」

「あなた酒屋さん？」

「いや、酒造りが趣味なだけだよ。」

「へえ、このお酒が造れるのなら店でも開いたらどうかしら？」

「悪くはないが、生憎俺は旅が好きでね。店主がちよくちよく行方をくります店なんて

あつてもしょうがないだろ？」

「そうね、店があつても開いてないんじゃない意味がないわね。」

しばらくこんな感じで雑談をしながら花見を楽しんだ。

「ところであなたは何ていうの？」

「？」

「名前よ、名前。」

「ああ、これは失礼。名乗ってなかったな。俺は佐原公一だ。」

「・・・もしかしてあなた、向ここの神社のある方から来たのかしら？」

「ん、そっちの方から来たけど？よく分かったね。」

俺が答えると幽香はクスクスと笑い出した。俺なんかおかしいことでも言っただか？

「ふふ、分かるわよ。ここは人間はよりつかない場所。それも数十年も昔からね。」

遠い地からやってくる旅人だってよりつかない、そういう危険のある場所よ。

そんなところに来る人は自殺志願者か腕に覚えのある者のどちらか。あなたは自殺志願者には見えない。そして名乗った名前は佐原公一。

「

口が大きく三日月型に裂けるようにニヤリと笑い、言った。

「——あなた、武神でしょう？」

殺気の乗った一言に酔いが吹っ飛ぶ。

「私は風見幽香、花の妖怪よ。宴も酺を過ぎたところ、酔い覚ましに少し遊びましょ？」

やる気だ。しかしここで戦ったら折角の桜に被害がでる。後で紫呼んでもう一度花見をする予定だからそれはまずい。ならば説得だ。

「ここで俺等が遊んだら桜に被害が出る。折角咲いた花を散らすのはどうかと思うぞ。」

「・・・それもそうね。遊ぶのはまたの機会にしてあげるわ。」

説得成功！

いや、正直言つと能力で戦う気力奪つてやる気無くさせてました。戦いそのものを止めさせるといふ想いを実現させるのは、クアンタ。システムだけじゃないのだよ。

「俺としては今後も争いたくはないんだけどな。」

「あら、神が妖怪相手にそんな消極的な態度でいいのかしら？」

「俺、人間だし。人間は妖怪相手には基本逃げ腰なんですう。」

「へえ、あなた人間だったの。匂いは人間のものとは思えないけど。」

「まあ、そこらへんの人里の奴等とはちょっと生活環境が違つし。」

「そうではなくて、どんな環境にいる人間でも人間の匂いというのがあるのよ。」

あなたからはそういう匂いがしてこないわ。」

「俺人外だつてこと？またまたご冗談を。」

「冗談じゃないわよ。あなたから人間の匂いはしない。それに妖怪

の匂いもしない。

となれば神か、それ以外でしょう。」

あれー？俺、人間やめてないはずんだけどな。石仮面とか持っていないし。

「それじゃあ、俺はちょっと変な人間ってことで。」

「ふふ、まあなんでもいいわ。次に会う機会があれば相手をしてもらうわよ。」

「性的な意味でなら是非お相手願いたいんですが。」

「・・・やっぱりでここに還しておこうかしら。」

「ごめんなさい。」

マッハ土下座の封印がとけられた！

「・・・まあいいわ、それじゃあね。」

そういつて幽香は去っていった。

土下座時にスカートの中身が見えないものか虎視眈々と狙ってみたが、

覗くことは叶わなかった。さすが幽香、ガードが固い。

……念のため言っておくが、俺は変態じゃないよ？

ゆうかりんがあまりにも美しすぎてそうせざるを得なかったただけだ。

男としての定め、いや人のS a G aと言ってもいい。

あえて言わせて貰おう、俺は紳士であると！

俺の行為の正当化をしたところで、とりあえず後片付けをする。
ゴミはきちんと持ち帰るのが花見のマナーだからね。

きれいに片付けたところで、紫のところに向かう。
まだ忙しくしてるらしいけど、一緒に花見するくらいの余裕はある
だろ。

十九話 桜の季節（後書き）

仕事帰りにGジエネワールド買おうとしたら売り切れてた。
しかも3店舗も。

この鬱憤、エクバで解禁されたばかりの埼玉で晴らしてくれる！

うん、まあ小説とは何の関係もない話ですよ。

二十話 \オニだー！／（前書き）

ロマサガ風RPG作ってたけどエターなつた。
まだ製作時間12時間しかかけてなかったらいいや。

二十話 \オニだー！／

紫を探して早四日。

探してとはいっても、スキマの中で待機してるだけなんだけどね。このスキマの中に居れば、どこでスキマを開かれても認識できる。紫の能力による全てのスキマはこの空間に繋がっているからだ。

だから紫に会うには紫がスキマを使うまで待つてればいい。

紫の家を訪ねたほうが早いって？ いや俺、紫の家知らないし。

しかし、四日経っても紫がスキマを開く気配がない。

あいつのものぐさっぷりは半端じゃない。少しでも移動があるとすぐスキマを使う。

この前、家に招待した時なんかは玄関から居間までの徒歩8歩を「歩くのが面倒」

と言ってスキマで移動してたくらいだ。

その紫が四日間もスキマを開かないなんて異変と言ってもいいだろう。

なにかあったのだろうか。無事ならいいんだけど。

更に一週間後、その異変も幕を降ろした。

実に11日ぶりにスキマが開いたのだ。

俺は紫が無事か確かめるために、すぐに開いたところへ移動した。

「紫！大丈夫か！」

「あら、公一。そんなに慌ててどうしたの？」

「どうしたのって・・・、何かあったんじゃないのか？」

「え？何かつて？」

「ここのところスキマ使わなかったろ？ものぐさなお前がスキマを使わないなんて何かあったんじゃないかと思ってさ。」

「ものぐさとは失礼ね。私はただ能力の有効利用をしているだけよ。」

「あ、ああ、すまん。つい本音が出てしまった。」

「本当に失礼ね。あなたも男なら女の子にはもう少し気を使うべきよ。」

「女の子ってとs・・・いやなんでもない。」

「・・・一度あなたの本音とやらを全て聞きだす必要があるそうね。」

この後一時間程、紫から殺意の籠った妖術を絶え間なくプレゼントされた。

対応に困る術の組み合わせばかりだったので、全ての術の力を能力で奪った。

正直かなり疲れた。もう紫は怒らせないようにしよう。

「・・・そろそろ落ち着いてくれたか？」

「・・・まあいいわ。今回はこれくらいで許してあげる。」

「そうか、ありがとう。」

「次は無いわよ？」

「肝に銘じておくよ。ところで、なぜ最近スキマを使わなかったんだ？」

「それは鬼と宴会をしたからよ。」

「宴会？」

「ええ、鬼のお酒が思ったより強くて、飲んだ後にそのまま倒れてしまっただけ。」

「長い間寝込んだらしくて、起きた時には鬼から死んだかと思ったと言われたわ。」

「そりゃあ大変だったな。」

「ええ、大変だったわ。でも鬼との友好関係を築けたし、収穫としては十分よ。」

「それじゃ次は俺との親睦を深めるってのはどうだ？花見には絶好の場所があつてな。」

「桜の風景を楽しみながら一杯やって日頃の疲れを癒すってのもいいもんだよ？」

「お、いいねえ！宴会なら私も混ぜてもらおうか！」

紫の体から声がする。

そして服からなにやら米粒くらいの生き物が出てきた。

「！あ、あなたいつの間に・・・！？」

「んー、紫が着替えてる時にかな？」

「・・・なぜ私についてきたのかしら？」

「なんか面白いことでもあるかなーと思ってさ。ま、暇つぶしだね。」

「暇つぶしで人の服に潜り込むとは、なかなかいい趣味をしますわね？」

「はは、鬼を値踏みするようになんか何日も覗き見るような奴ほどじゃないさ。」

「・・・」

「・・・」

「おい、ちょっと待て。誰だよそいつは。」

「あ、ごめんなさい。あなたのことを忘れていたわ。この子は鬼よ。」

「私は伊吹萃香。人も妖も恐れる鬼さ！」

萃香だったのか！小さすぎて分からなかった。

「そうか、俺は佐原公一だ。よろしくな。」

「へえ、あんたが佐原か。噂とは随分印象が違っね。」

「噂？」

「ああ、圧倒的な力で片っ端から神を搦じ伏せてくってね、昔流行った噂話さ。」

「きつと阿修羅すら凌駕するような出で立ちだと思ってたんだけどね！。」

「おいおい、俺はそんな戦闘狂じゃないぞ。確かに邪神の類は見境無く消したけどさ。」

「ていうかお前阿修羅とかよく知ってたな。この国じゃ、まだ知られてないはずだぞ？」

「鬼が鬼神を知らないわけないでしょ？」

「あ、そりゃそうか。」

「それで花見はいつやるんだい？」

「紫がよければ明日にでも。」

「私、忙しいんだけど……。」

「なにー、酒より優先することがあるだー！」

「あるわよ、鬼じゃあるまいし。それに宴会はやったばかりじゃない。」

「分かってない！紫は全然分かってない！！宴はやれるだけやるものさ！」

「まあまあ、紫だって用事があるんだし、無理強いは良くないよ。紫、手伝えることがあるなら手伝うよ？さつさと用事が済ませて花見をしよう。」

「今回の用事はあまりすぐに済むとも思えないのよ。ある妖怪に用があるのだけれど、居場所がはつきりしてないから。手伝ってもらっても春の内に見つけるのは厳しいわ。」

「そうか、それじゃあ今年の花見は厳しそうだな……。ちなみにその妖怪って？」

「風見幽香という花の妖怪よ。放浪しているらしいけど、ものすごく強いそうよ。」

「相手がなんであろうとも癪に障ったのなら倒してのけるという噂があるわ。」

「かなり好戦的なようだから、偶然何らかの形で敵対することにならないように、こちらから早いうちに引き入れにいかうと思うのよ。」

「幽香？幽香ならこの前会ったぞ。」

「！本当！？どこにいたの？」

「花見予定地。どうやらあの場所は幽香の縄張りの一つみたいだから、

花見しながら待ってれば来るかもしれないな。」

「・・・わかったわ。花見をしましょう。闇雲に探すよりはよさそうだし。」

「よし！決まりッ！40秒で支度しな！！」

「「短っ！」」

こうして花見は決まったが、紫は鬼との宴会で乱れた身だしなみを整えるために、
萃香は自分の体を一纏めに戻すために一旦帰って、花見は明日やることになった。

場所は教えておいたので、昼に各自集合となった。

——
翌日

「あら、また会ったわね。」

一番乗りしてみたら幽香がいた。

挨拶代わりとでもいわんばかりに極太レーザーぶっ放してくるのはやめて欲しい。

「待て、落ち着け。とりあえず攻撃をやめてくれ。」

「なぜかしら？」

「むしろこっちが聞きたいよ。なんで俺が攻撃されてるんだよ。」

「次に会ったら相手をしてもらうと前に言っただけだよ。」

「前に性的な意味でなると言っただけだよ。」

「私はやりたいようにやるのよ。あなたの意見の入る余地はないわ。」

「ひどい理不尽を見た。」

「それじゃあそういうことだから。」

言い終わると今度は無数のレーザーを放ってきた。

しかしレーザーは俺に届くことなく後方から飛んできた炎弾によってかき消された。

そして正に鬼のような剣幕で萃香が現れた。

「誰かしら、私の楽しみを邪魔してくれる奴は。」

「宴の酒係に手を出すな！私に酒を飲ませない気か！！」

「酒の心配かよ！」

この酔いどれ子鬼、どんだけ酒が飲みたいんだ。

「まあ、落ち着けよ。花見の前に喧嘩つてのはよくないな。幽香、また花見に付き合ってくれないか。この前の美味しい酒もあるぞ。」

と言いつつ、二人の戦う気力を奪っていく。

奪ってて分かったことだけど、こいつらの戦う気力高すぎ。

前に世界征服するとか言ってた魔王がいたけど、そいつの全軍勢含めても、

こいつらより戦う気力は少なかったよ。

絶対こいつら戦うと元気になるタイプだよ、間違いない。

かなり奪ったからもう争う気は起きないと思うけど、結構疲れた。

「・・・そうね、お酒に免じて付き合っただけね。」

「そんなに美味しい酒があるなら喧嘩してる場合じゃないね！さあ早く酒を出せ！！」

「ちょっと待てよ、紫がまだ・・・」

「あら、私ならさつきからここに居ますわ。」

空を見上げると紫が居た。

「・・・いつから見えた。」

「そうね、あなたが現れて、そちらの妖怪に攻撃されたところからかしら？」

「最初からじゃねーか！見てないで止めるの手伝えよ。」

「嫌よ、面倒臭い。それに手伝わなくても止まったんだからいいじゃない。」

「そうだな、こいつはものぐさに定評のある奴だった。手伝わけないよな。」

「・・・はあ、まあいいや。面子も揃ったし始めますか。」

「その前に、その妖怪を紹介してはくれないのかしら？」

「ああ、そういや初対面なんだったな。こいつは花の妖怪、風見幽香だ。」

「！へえ、あなたが・・・。私は八雲紫といいますわ。よろしくね風見さん？」

「こいつが紫の探してた奴かー。私は伊吹萃香、鬼だよ！」

「・・・あなた達、強そうね。後でお相手願えるかしら？」

「はいはい、そこまで。そっから先は後にしてくれ。まずは乾杯といこうや。」

俺は三人に盃を渡し、秘蔵の酒を注いだ。

「それじゃあ、春を祝して！乾杯！！」

こうして人、妖、鬼の危ない奴等揃い踏みの花見が始まった。

勢いで言っちゃったけど、春を祝してってなんだよ……。

二十一話 酒は飲んでも飲まれるなという名言を知らないのかよ（前書き）

最近、寒かったり暖かったりで体調がマッハ

二十一話 酒は飲んでも飲まれるなという名言を知らないのかよ

花を見ながら美味しい酒を呑み、雑談を楽しむ。

間違いないそういつ時間を過ごしていたはずだ。

「どうしてこうなった……。」

紫は桜に向かって土下座ポーズで気絶、幽香はゴミの上で寝ていて、萃香は泥沼に埋もれるように気絶、その上には綺麗な虹が浮かんでいる。

俺の目の前に広がる光景は惨劇と呼ぶのがふさわしいんじゃないだろうか。

少し振り返ってみよう。

まず、最初だ。俺の音頭で乾杯をして、まずは一杯みんなで酒を飲んだ。

三人揃って美味しいといってくれて、造った俺としては嬉しかった。それからしばらく他愛ない世間話で盛り上がった。

なんせ、人と鬼とスキマと放浪する花妖怪だ。それぞれのよくある話は

それぞれにとって新鮮な話だからな、聞いてて飽きない。

このあたりは平和に飲んでいたはずだ。

それから、まず紫が酔い潰れたんだったな。廁に行くと言ってスキマ開いて、

下半身だけ入れてすっきりしたとか言い出したから、相当ヤバイと思った。

それで俺が「もういい…！もう…休めっ…！」って言ったら、紫は桜の木に向かって

「乙女の廁を覗き見るなんてとんだ変態ね！」とか言い出した。なんかもう突っ込む気も失せたので、桜に説教してて貰おうとそのまま放置した結果、

今現在、何故か桜の根元に頭を打ち付けて気絶している。

何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をしていたのかわからなかった。

紫の頭がどうにかなっていたことだけは確かだと思う。

その後、あれは今から36000…いや、1400秒前だったか、まあいい。

ちびちびと幽香が酒を飲んでいるところに萃香が話しかけていった。

「おやおやそんなにちびちび飲んで、あんた酒に弱いのかい？」

「あなたのような下品な飲み方が好きじゃないだけよ。」

「分かってないねえ、酒はこうして一気に飲むのが美味しいのさ！」

無い胸を張って言い切る萃香に幽香はあきれた顔しながら言った。

「品のない種族の味覚は私には分からないわ。」

これに怒ったのか、萃香は顔を真っ赤にして

「なんだとお！鬼を馬鹿にしたなあ…！」

と言いながら幽香に飛び掛った。

流石にこれは止めようと思って俺が間に割って入り、萃香の頭を抑えて止めた。

「まあまあ、酒の席で暴力はいかんよ。」

「くっ・・・！このー！！」

萃香は俺を除けようと腕をぐるぐる回して攻撃しようとしてくる。しかし、リーチの差で俺に届くことは無い。

この動き・・・め。か師匠！まさかこんなところでこれをお目にかかれるとは。

懐かしい記憶から少し物思いにふけっている間に萃香が俺の下に潜り込み、

後ろをとって俺の両腕を交差させるようにして掴んでいた。

「私の道を阻むなッ！！」

直後、宙に浮く俺の体。腕を交差するように掴まれているため、受身を取ることも出来ずに地面に叩きつけられた。

「がッ！！」

ジャパニーズオーシャンサイクロンスープレックスホールドだ！？まさかの大技。こんなところで食らうハメになるとは思わなかった。酔いと技の衝撃で吐き気がしてきたが、叩きつけられたときの衝撃のおかげで

真後ろに居て臨戦態勢をとっていた幽香のスカートが少し捲れて中が見れたので、

我が生涯に一片の悔いもなかった。本当にありがとうございました。

まあそれはさておき、この場で殴り愛宇宙にならないように何とか止めようとして、

殴り合いの代わりに飲み比べでもしたらどうだと提案したら萃香は快諾して、

幽香は少し渋った。しかし萃香が「負けるのが怖いのかい？」と挑発したら、

幽香は怒りを露にしてすぐに承諾した。

最初は盃一杯づつ飲んでいた。

しばらくすると、盃がでかい椀に変わっていた。

もうしばらくすると、酒樽ごと飲んでいた。

そして幽香が倒れた。さすがの幽香も飲み比べで鬼には勝てない。放っておくのもなんなので、スキマからテントを取り出して寝かせようとした。

移動させるために幽香を持ち上げようとすると、突然目の前が真っ暗になった。

どうやら、寝相が悪いらしく殴られたようだ。ありがとございませす！

・・・ハッ！違う！俺はMじゃない！！本当だ！！！！

しかし、ひどい威力だ。心なしか顔がへこんでいる気がする。

「前がみえねエ」

なんとなく、これは言わなければならない気がした。様式美という言葉か。

テントに幽香を運んで戻ると萃香が絡んできた。

「おらーしゃんとのんれるかー！」

呂律も回らないほど酔っているようだ。なんだかんだで幽香は結構善戦したんだな。

しかし、この幼女かわいい。呂律が回らなくなつてその輝きは一層増している。

ただ、あまりの酒臭さがそれを全てぶち壊しているが。

まるで上等な料理にハチミツをぶちまけるがごとき所業。

ちよつと酒臭いマッスルガールの感じ程度で自重していただきたいものだな。

まあ、酔っ払いをスルーするのとよりうざくなるのは常識なので、ここは常識に囚われて適当に相手をすることにした。

「おらーのめー」

「はいはい、ありがたくいただきますよー。」

ぐいつと飲み干す。鬼の持ってきた酒も糞正宗の味がする。

「おおーいいのみつぷりらねえ。」

「お前の盃も空いてるじゃねーか。ほれ。」

俺はスピリタスを注ぐ。こんだけ酔つてりやもう味なんかかわかないだろうし。

鬼だしアルコール中毒とか起こして死んだりしないだろうからきつ

と大丈夫。

「んぐんぐんぐんぐ・・・ぶはっ！」

「おおーいい飲みっぷりだ。尊敬しちゃうなー。」

「ふふふーそうらろー、鬼はすごいんだぞー！」

「ほい、すごい鬼にはもう一杯！」

また萃香の盃にスピリタスを注いでいく。

一応言っておくが萃香の盃は5升くらいは入る大きさだ。

すでに酔っ払って、尚もこの量のスピリタスを一気飲みしたわけだ。スコッチをジョッキで一気飲みする人が霞んで見える。マジすげえ。本当に尊敬に値する。見習う気は欠片もないが。

「んぐんぐんぐんぐんぐ・・・ぶはあ！！！」

「おー、いった！二杯目いった！流石鬼！俺には出来ないことをやってのける！！！」

そこにシビれる憧れない。俺は至って冷静です。

「さあ、もう一杯飲むかい？・・・どうした？」

なにやら萃香がプルプル震えだした。

「ウボアー」

「おい馬鹿やめろ！！！」

萃香はマールライオンも裸足で逃げ出すような勢いで大地に酒を返していった。

萃香から流れ出る酒は滝となり、大地を削りそこに滝つぼが出来る。滝つぼはその範囲を広め、徐々に大きな池となる。

そして酒が流れ続けることおよそ半刻。土と酒の織り成すハーモニーがそこにあつた。

泥沼の誕生である。俺は萃香を助ける気がなく……助けることが出来なかった。

「悪いな萃香、吐瀉物の中に踏み入ることのできなかった俺を許してくれ。」

中心部で徐々に沈み行く萃香。安らかに眠れ……。

「ああ、虹がキレイダナー」

萃香の激流によって作り出された虹を見ながら、起きた惨劇の記憶を洗い流した。

このあたりで日の出が近づいてきたので、俺はテントで寝ようとした。

しかし幽香を寝かしておいたテントが見当たらなかった。

代わりに幽香は何か繊維の切れ端や金属片の散らばる場所で寝ていた。

何を言っているのか（ry

素数を数えて落ち着いたところで、幽香の周りに散らばるゴミを見ると、

俺のテントに使っていた素材の欠片だった。

つまりは寝相の悪い幽香が寝ながら破壊してしまったという可能性が高いだろう。

それにしたってこんな粉微塵にぶっ壊さなくてもいいと思うが、本能なんだろう。

無意識のうちに破壊して蹂躪する。本能レベルの行動は意識が無くとも行われるものだ。

全国各地を放浪しているらしいが、寝床を一々ぶっ壊してりや定住できないわけだ。

俺の寝床も無くなったので、家に帰ろうかと思ったものの、この状態の三人を

放置して帰るのは流石に悪いと思い、誰か起きるまで待つことにした。

しばらくの間、時が流れるのを忘れ、ただただボーっとしていた。現実逃避ともいう。

そして起きた現実を忘れ去った頃に冒頭の発言に繋がったわけだ。

「ほんと、どうしてこうなった……。」

今後は宴会にあまり酒を持ってこないようにしようと思つた。

二十二話 宴の後（前書き）

マンションの更新料が先月の給料の半分奪っていきやがった。
廃スペPC作成の夢はまた先延ばしか・・・。

二十二話 宴の後

花見の後、意識を取り戻した三人は起きたときの自分の状態が恥ずかしかったのか、

誰一人として言葉を発さず赤面し、気まずい雰囲気の流れていた。まあ仕方の無いことだろう。強大な力を持つ人外だ、面子つてもんがあるわな。

そいつが今、音を立てて崩壊しようとしてるわけだ。

ここで優しい俺はフォローする。

決して後片付けの邪魔だからさっさと動けよとか思っていない。

作戦1：現状をなんでもないかのように振る舞う

「なに黙り込んでんだよ？朝の挨拶はおはようдар、今もう昼だけどな！

ほれ、飯作つてあるからとつと食っちゃおう！」

「「「・・・・・・」」」

作戦失敗。次の作戦に移る。

作戦2：よくあることだと思ひ込ませる

「なんだ、酔っ払ってやつちまった事でも気にしてんのか？

なあにこの程度、知り合いの神だつてよくやることだ！気にすんなよ！」

「……」

作戦失敗。面倒事な事に繋がる可能性はあるが、次の作戦に移る。

作戦3：挑発して怒らせて現状を一旦忘れてもらう

「おい、どうした三人共！飯だっていつてるだろー。」

ああ、歳を重ねて耳が遠くなったご老人達にはちよつと聞こえなかったかな。

聞！こ！え！ま！す！か！！ご！は！ん！で！す！よ！お！ば！あ！さ！ん！！」

「……（イラッ）」

ちよつと反応したようだけど作戦失敗。もうめんどくせ

作戦4：大魔法肉体言語

「キ。ン流奥義！」

なぜキ。ン流奥義を俺が使えるのかというとなんかやってみたら出来たからだ。

これでボコボコにすることによって一時的な記憶障害を引き起こし、黒歴史を封印する。

加減を間違つと最悪殺してしまう諸刃の剣なので、素人にはおすめできない。

「デヤア！ホアイ！ホアイ！ホアイ！ホアイ！デヤア！ホアイ！ホアイ！デヤア！」

「『ヴォー』」

三人ともきつちり気絶させた。

八意式診察術で調べたところ、ちゃんと記憶障害も起こしている。その後とりあえずはスキマを開いて俺の家のもふもふルームに落としておいた。

もふもふルームとは部屋一杯にもふもふ素材を敷き詰めた部屋で、俺にとっては最高の癒し空間だったりする。

それから一人で花見の後始末。萃香の作った泥沼以外の片付けはすぐに終わった。

泥沼については炎の妖術で汚物は消毒しつつ水分を飛ばし、臭いものには蓋理論より大量の土をスキマで運び、泥沼の上に被せて、泥沼をなかったことにした。

一仕事終えて家に帰ると三人ともすでに起きていた。というかもふもふルームで気持ちよさそうにゴロゴロしていた。

「おう、起きたか。気分はどうだ？」

「最高ですわ。」

「最高ね。」

「最高だよー。」

「よし、じゃあ茶でも出すから、まずそこから出ようか。」

「嫌。」

即答だった。もふもふがそんなに好きかああ！

いや、俺も大好きで気付いたら2、3日もふってたりするから気持ち分かるけど。

「おいおい、家主が持て成そうって言うてんだ。受けるのが礼儀つてもんだろ？」

「仕方ないわね・・・。」

紫は渋々といった表情で起き上がりのたくさと部屋を出た。
残り二人はまだゴロゴロしている。

「そういえば、うちの居間に優曇華の花が咲いてるんだけどなあ・・・」

「居間はどこ？早く案内しなさい！」

幽香が跳ね起き、目を血走らせて俺に詰め寄ってきた。

俺は丁重に居間へ案内した。一応、花を持っていかないように注意はしておいた。

最後の一人はまだゴロゴロしている。

「茶菓子に合う珍しい酒もあるんだけどなー。」

「酒と聞いちゃ黙ってられないねえ！」

萃香は起き上がり、酒を飲みたそうにこちらを見ている。
とりあえず居間に連れて行った。

「さて、飲み物持ってくるけど何か要望は？」

「私はお茶で。」

「私はなんでも構わないわよ。あ、お花は使っちゃダメよ。」

「さっき言ってた酒！」

「わかった。じゃあちよつと待っててくれ。」

紫には少しの苦味と深みのあるお茶とすっきりした甘さの水羊羹を、
幽香には香りが強めですっきりした味わいの紅茶と甘みの強いモン
ブランケーキを、
萃香には酸味が強いフルーツ餡蜜とそれに合うオリジナルカクテル
を用意した。

ちなみに俺の分はポップコーンとコーラだ。念のため言うけど俺、
太ってないからね。

体型的にはおからとバナナを食べつつ炭酸抜きコーラがぶ飲みする
人に近いからね。

居間に戻り、席について待っている三人の前にそれぞれ飲み物と甘
味を並べた。

三人は並べられた飲み物と甘味を不思議そうな顔で眺めている。

「この黒いものは何かしら？」

紫が水羊羹を指差して質問してきた。

そつえば、これまで紫にお茶を出すことはあったけど、羊羹を出したことは無かった。

見たこともない黒い物体を出されたら、どうしていいかわからないよな。

他二人の不思議そうな顔も同じ理由だろう。

「そいつは水羊羹という食べ物だ。そのお茶によく合う様に作ったから食べてみな。

あとそちらのお二人さんも、飲み物も食べ物も毒とかじゃないから安心してくれ。」

「食べ方が分からないわ。」

「その棒を使って食べるんだ。その食べ物はモンブランケーキって言うてな、

その棒、フォークって言うんだが、ケーキをこうして切ってから刺して食べるんだ。」

「私にも教えてくれないかしら？」

「紫のもその棒で切ってから刺して食べてくれ。」

「この酒甘つたるいなー。」

「その食い物・・・餡蜜というんだが、その棒で適当に掬って食べてみる。」

酒の甘さが丁度よく感じて何倍も美味しく飲めるはずだ。」

食べ方を一通り教えると、三人とも最初の一口は恐る恐る口に運んでいたが、
一口食べると美味しいと言って恍惚とした表情をした後、黙々と飲み食いしだした。
いい表情を見た俺はヘヴン状態になりつつ、脳内美女フォルダに完全保存した。

「「「ご馳走様。」」」

「はい、お粗末様。」

三人とも満足気だなによりだ。食べ終えた食器を片付け、居間に戻り一息つく。

「あなた、料理店構えてみたかどうかしら？」

唐突に幽香から開業を進められた。

「前にも言っただけど、俺よくいなくなるから店は無理だつて。」

「屋台にしたらいいのではなくて？あなたスキマが使えるんだし、旅先に店を移動させるくらいわけは無いはずよ。」

紫が続ける。そんなに店を持たせたいのか。

「いやー、俺の出すもんは基本趣味だから商売するほどのものでもないよ。」

「何言ってるんだい！あんな美味しい酒と料理が出せるんだ、繁盛す

るに決まってるさ！

鬼の私が保証する、もつと自信持っていぞ！」

萃香も勧めてくる。うんまあ、俺の億年越えの料理スキルや酒造りのスキルなんかは

この時代のもの比べたら遙か高みにあるのは事実だけどさ。あくまで趣味だから。

それに今の時代に商売しても特にメリットがないのもマイナスポイントだ。

「あー・・・、まあ考えとくよ。」

曖昧に返事しておく。正確にいうなら曖昧返事関西Verだ、つまりは分かるな？

「さて、これからどうするかな。」

「じゃあ、さっきのもふも」

「却下、つーかお前忙しいんだろ？」

「えー、ちよつとくらいいいじゃない。それに予想外に早く目標と接触できたから

予定が空いちゃってそんなに忙しくはないのよ。」

「でも、後の予定はあるんだろ？善は急げだよ紫。」

「・・・まあ、そうね。計画を進めるとするわ。それじゃあまたね。」

「おう、またな。」

紫はスキマを開いて帰っていった。

「で、お前らはどうするんだ？」

「私も山に帰ろうと思ってたけど、紫が行っちゃったんだよねー。」

あ、ここスキマの中なの忘れてた。

「それじゃ帰れないよな、場所教えてくれれば俺がスキマ開いて連れてくけど。」

「お、本当かい？それじゃあ頼むよ。」

「私もついていっていいかしら？」

「幽香も一緒にいくのか？なんでまた？」

「鬼は強い種族だと聞いてるからね、さぞ強いのが沢山いるんじゃないかな。」

なにこの俺より強い奴に会いに行く的な考え。

いや、闘争本能の赴くままに中国まで行った俺が言えることじゃないけどさ。

「なんだい、殴りこみかい？それなら大歓迎さ！」

さすがは鬼、戦うと元気になる種族だけある。殴りこみ大歓迎って

どんだけだよ。

まあ別にげっぷが出るほど闘い合ってくれて構わない、俺に墨が及ばん限りな。

行くついでにちょっと鬼の山に滞在させてもらおうかな。

どうせやることも無いし、鬼の生活を体験するのもまた一興。

「萃香、連れてくついでに俺をしばらく山に住ませてくれよ。」

「公一なら大歓迎さ！みんな酒好きだからね、美味しい酒を手土産に持っていけば、

反対する奴なんか一人もいないだろうな！」

「よし、決まり！早速行くとしよう。萃香、場所を教えてくれ。」

「ああ、鬼の山は花見た山から——（中略）——ってとこだね。」

萃香から説明を受けて大雑把な位置は分かったのでスキマで移動した。

どうやら鬼の山の麓あたりに出れたようだ。

登山というのもいいものなので、そこからは徒歩で行くことにした。

「ああ、そうだ。公一、一つお願いがあるんだけど。」

「ん、なんだ？」

「私等鬼でも酒造りをしていてねえ、その責任者がいるんだけど、そいつに酒造りの指導してもらえないかなあ？」

酒造りの同志か。お安い御用だ。

「ああ、そのくらいならいいよ。任しとけ！」

「ありがとうな！着いたら改めて紹介するけど、白田雅影っていう奴だ。」

萃香は宙に指を滑らせて字を書いてみせる。

字は違うけど、読みはあのお方と同じか・・・、もしかして。

「なあ、そいつ夢とか持ってたりするのか？」

「？変なことを聞くね。確か酒の千年帝国をどうのこうの言ってたけど。」

はいアウトー！シェフの鬼Verですネ、分かります。

「・・・うん、夢があるのは結構なことだ。俺もちゃんと指導してやろう。」

将来的に萃香とかが上半身だけムキムキになったりゴシカアンとかしないためにも。

薬物ダメ絶対！の決意を胸に秘めて鬼の住処へと歩を進めていった。

二十三話 鬼の住む山（前書き）

地震のせいでTVが倒れたPCに直撃してPCが死んだ。
適当にパーツ買って組み立てたけど、出費が痛い。
そしてなにより魅魔QのIDは帰ってこない。ぐぬぬ・・・

二十三話 鬼の住む山

山の中腹まで登ると降りてきた一人の鬼と出逢った。

「よっ！おでかけかい？」

「おう、萃香！帰ったか！・・・ん？そいつらはなんだ？」

「こいつらは客さ。昨日、私と花見をしていたんだ。」

「へえ、お前花見してたのか。俺も呼んでくれりゃよかったのに。」

「こいつらの他に紫もいたぞ？」

「げっ・・・あいつもいたのかよ。呼ばれなくて正解だったな・・・」

おう、その兄ちゃん。あの女が居たってことは、あんた大変だったろ？」

「あー、まあ大変だったけど。おたくは何かされたのかい？」

「酔っ払ったあの女に男衆は筆舌に尽くしがたい苦勞をかけられたと言っておこうか。」

俺は今からちよいと用事があってな、詳しく聞きたきゃ萃香に聞いてくれ。じゃあな！」

一体何をしたんだよ紫・・・。

それから萃香に聞こうとしてみたところ、酔っ払ってふらふら歩い

ていた萃香が

急に足を止め、真剣な表情で「聞く覚悟はあるのか。」とカリスマをたっぷり含めて

言ってきたのでやめておいた。世の中には知らない方がいいこともある。

それからまたしばらく登り、山頂の辺りの平地に着いた。

「着いたよ、ここが私達の住処さ！」

見渡すと20数名の鬼がいた。住居らしきものは一切無い。

「・・・なあ萃香、建物が見当たらないんだが俺の眼がどうかしているのかな？」

「建物なんて喧嘩することになるから邪魔なだけさ。」

「それじゃ、寢床はどうしてるんだよ。」

「?、ここだけど？」

「えっ」

「えっ」

なにか変な事言った?的な表情でこちらを見てくる萃香。

あれか、野ざらしで寝るのがデフォなのか鬼は。ワイルドな種族だな。

でもこちとら人間なわけで、屋内で寝るくらいの最低限の文化水準

は保ちたい。

という訳で、本日はここで一旦帰るとしよう。

「萃香、とりあえず俺は……」

「萃香！もう帰ってきたのかい？」

帰ると言おうとしたところで金髪一本角の鬼遮られた。

「おー勇儀、ただいま。」

勇儀だった。服装が原作と違うし、盃も持っていないから分からなかったぜ。

と思いながらガン見していたら、勇儀もこっちを見てきた。

「なあ、こいつらはなんだい？」

「トチ狂ってお友達にでもなりに来たのかい？アハッ」

なんとなく将来的に視力を失いそうな金髪の鬼が会話に混じってきた。

初対面でこんなことを思うのはどうかと思うがこの女、きがくるっとなる。

それを完全にスルーして萃香は勇儀に答える。

「そいつらは昨日一緒に花見をした奴等でね。そっちが殴りこみ……」

「ほう、殴りこみ！鬼を相手に勇敢な奴等だな！」

ハッハッハと声を上げて嬉しそうに笑う勇儀。

それはいいんだが話は最後まで聞けよ。俺の紹介がまだされてないぞ。

「おーい、みんな！殴りこみ二名様のご来場だー！！」

「ちょっ！？おまつ、何言って…」

「殴りこみ！？」

「鬼に喧嘩を売りに来る奴がまだいたのか！」

「腕になるぜえ！」

「久々に面白くなりそうだー！！」

「ヒヤッハー！！喧嘩だー！！！！」

「おい！酒の用意をしろ！！喧嘩だぞー！！！！」

「やめてよね。本気で喧嘩したら、お前等が鬼にかなうはずないだろ。」

「その髭野郎は俺にやらせろオ！」

凄い勢いで鬼達が集まってきた。

そのほとんどが戦いたくてうずうずしているといった感じが見て取れる。

俺は殴りこみに来たんじゃないのに小太りの鬼に指名されたようだ。そういえば昨日から髭剃ってなかったから少し伸びてるな！。

数億年前はそんなに伸びなかったのに、俺も歳をとったもんだ。

・・・そんなこと考えてる場合じゃないな。とりあえず言うだけ言ってみるか。

「あー、盛り上がってるところ悪いんだが俺は戦いに来たんじゃないぞ。」

「なんだって！？おい勇儀！どういうことだ？」

「私は萃香からそう聞いたんだけど・・・」

「なに？萃香、お前鬼でありながら嘘を吐いたのか？」

「わ、私が嘘なんかつくか！確かに殴りこみとは言ったけど・・・」

「確かに言っただんだ。でもその男は戦いに来たんじゃないそうだが？」

「いや、だから殴りこみっていうのは・・・」

「嘘に言い訳を重ねるか。見苦しいぞ萃香。」

「鬼としての誇りはどうした！」

「それでも鬼か！」

何故か萃香が責められる方向になってきてる。

最後まで話を聞かなかった勇儀の早とちりだろうに。

なんか誤解で話進めて批判や罵声を浴びせてるのを見るとムカついてくるな。

ちゃんと人の話を聞くということができんのか鬼は。

・ 萃香は責められて涙目になり、縮こまってしまった。ここは俺が・

「おい、お前等、ちょっと聞いてくれ。」

「お前は黙ってる!」

「鬼の問題に口を挟むな!」

「そうだそうだ!」

「雑魚は引っ込んでろ!!」

ぶちっ

ほう、わざわざ誤解を解いてやろうとした俺に対して引っ込んでるときたか。

しかも俺を雑魚呼ばわりとは。堪忍袋の緒が切れた!許さんぞ、鬼共ッ!

「なあ幽香。」

「なにかしら?」

「数人程獲物貰っていいか?」

「そうねえ、あなたが後で相手をしてくれるなら構わないわよ?」

「うーん、少しだけならいいけど。」

「それで構わないわ。」

「それじゃ交渉成立な。ありがとう幽香。」

「どういたしまして。」

幽香との交渉を済ませ、俺は妖力を放ち威嚇した。

俺から放たれた強大な妖力に鬼達は一斉にこちらを見た。

「聞け鬼共。俺は殴りあいに来たんじゃない、ド突き合うのは好きじゃないからな。」

ド突くのが好き……一方的にな。だから俺はここに来たのさ。」

「貴様……それはどういう意味だ……！」

一人の鬼が明らかに怒った顔で聞いてくる。

「なんだ、伝わらなかったか？鬼は強いと聞いたが頭の方は随分弱いようだな。」

俺がお前等雑魚共に一方的に殴られる痛みと怖さを教えてやるって言ってるんだよッ！」

「上等じゃねえか、久々にキレちまったよ……。」

デカくて説明不要な鬼が出てきた。さっき雑魚呼ばわりしてくれた奴だ。

「俺が相手をしてやる。他の奴等は手エ出すなよ。」

デカ鬼は周りに睨みを効かせ言い放った。

「ちよつと待て！俺だ、俺が先にその髭野郎とやらせろと言った！！
喧嘩は早いもの勝ちの決まりだろ！！？」

小太り鬼がデカ鬼に抗議する。

「ああ、そうだな。だからお前が戦えるなら先に戦うといい。」

「？、何言つてんだ？戦えるに決まってるだろ。」

小太りがデカ物にさういうとデカ物は小太りの頭を手で抑え、言った。

「今なら戦えるだろうなア。だが戦うまでにその体が無事かどうかはわからんだろう？」

「・・・・俺の戦いの邪魔をする奴は許さん！」

デカはデブの頭を抑えた腕に力を込め始めた。

「！、それが男衆大将のすることかあ！！」

グシャア！！

ひどい音を立てて無残にもデブはデカの手によりジャガってしまった

た。

「さあ・・・、準備運動も終わったところで始めようか。」

「そうだな。そろそろ俺も準備運動がてら、お前を殴りたかったところだ。」

「よくもほざいたなア！坊や、遺言があるのなら俺が殺す前にさっさとするんだな！」

いくぞおお！神の世界への！引導を渡してくれる！！」

俺を怒らせた鬼への制裁が始まった。

二十三話 鬼の住む山（後書き）

全然小説と関係ない話だけど、停電の影響で電車がヤバイ
今日の夜勤、職場につけるのか心配すぎる

東電、交通関係の電力はちゃんと確保するとか器用な事は出来ない
ものかねえ

二十四話 ワンサイドゲーム（前書き）

今回はあまりに理不尽な話なので、
やばいと感じたらすぐにスルーしてください

二十四話 ワンサイドゲーム

「なんだあ・・・！？押すも引くもできない！！」

デカ鬼は今、身動きを取れないでいる。

さっき話しているうちに俺の独自空間を作る程度の能力でデカ鬼のいる空間を、

俺以外の生物は身動きがとれなくなるという法則付きの空間に作り変えたからだ。

独自空間を作る程度の能力・・・

この能力で空間を作る際、現実の空間と差異があればあるほど作り難く壊れやすい。

作る際に必要なものは妖力で、作成に最低限必要な妖力の余りが耐久力となる。

この耐久力を超える力を持つ生物であれば作成した空間の破壊が可能であり、

空間に対する力そのものを封じる法則付きの空間作成はできない。

つまり身動きはとれなくとも、空間耐久力よりもデカ鬼の力が強ければ、

空間を破壊し自由になることが可能なわけだ。

民○書房刊

『亜細亜能力大系』より

ちなみに今回作成に使用した妖力は現在デカ鬼の持つ力の約20倍うち8割は作成に必要な妖力である為、耐久力はデカ鬼の4倍程度。

デカ鬼は自らの力を4倍以上にする手段がなければ詰みというわけだ。

ま、仮に手段があつたとしても俺の能力で力奪うからどのみち詰みなんだけどね。

「さて、鬼よ。覚悟はいいか？」

「これはお前の仕業か！？卑怯だぞ！正々堂々勝負しろ！！」

「んん？能力を使うのが卑怯とは笑わせるな。」

「くつ……。しかし身動きの取れん相手に攻撃するなど、卑怯とは思わんのか！！」

「お前の力が俺より強けりや身動きは取れるはずなんだがなあ？ま、恨むんなら自分の非力を恨めよ。」

「ま、待て！」

俺はスキマから趣味で作ったM500Cruiser型の豆散弾銃を取り出した。

これは妖力を込めることで炒り豆を撃ち出せる対鬼用決戦兵器である。

いつの日かエクストリーム節分を提案しようとしていたのがこんなところで役に立った。

デカ鬼に向かって撃つ。

大量の炒り豆が突き刺さる。

デカ鬼が絶叫する。

さらに撃ち込む。

さらにデカ鬼が絶叫する。

デカ鬼が気を失うまで撃ち続ける。

気を失ったデカ鬼の回復力を高め、癒す。

気付け薬の効力を与え、起こす。

また撃ち続け、繰り返す。

どうみても拷問。周りの鬼は恐怖に染まっている。

幽香は超いい笑顔でニコニコしながらこっちを見ている。間違いくドス。

半刻程続けると飽きてきたので、デカ鬼に向かって一言釘を刺す。

「次に俺を怒らせたら死ぬと思え。」

デカ鬼は首を千切れんばかりに縦に振った。

まあ、こいつはこれで許してやろう。

デカ鬼の回復力をとてつもなく高め、傷跡一つ残らないくらい回復させてやった。

その後俺は他の鬼達の方を向き、言った。

「さて、残りの俺に対して黙ってるとか色々言った奴等、前に出る。」

三名の鬼が前に出る。鬼は嘘をつかない、それは言葉だけでなく行

動でもだ。

それを誇りとしているからこそ、今の俺を前にして正直に前に出れたのだろう。

それは尊敬にすら値する。それはさておき、この鬼達にはとつておきの罰を与える。

罰も無しでは絶対に許さない。許すとか許さないではない、絶対に許さないのである。

「お前等がすまないと心の底から思っているのなら俺に対する非礼については
土下座をするという条件で許してやろう。」

「ほ、本当か!？」

「する、すぐにする!」

「ただし、こいつの上でな・・・!」

俺は高温に熱した鉄板を出した。つまりは焼き土下座である。
ついでに炒り豆を鉄板の上に敷いた、対鬼用焼き土下座だ。
それを見て鬼達が恐怖に顔を染める。

「どうした？本当にすまないという気持ちで胸がいつぱいなら出来るはずだ・・・!」

例えばそれが肉を焦がし、骨を焼く鉄板の上でもっ・・・!」

狂気の沙汰ほど面白いつ・・・!

いや、まあぶっちゃけノリで作った焼き土下座装置がお蔵入りしてたから

せっかくだし使ってみようかってとこなんだけどね。

俺が直々にお仕置きするよりかはかなりマシだし。

ちなみに幽香はこれを見ると何か紙のようなものにせっせとメモっていた。

あいつ絶対これ作るよ。賭けてもいい。

それはさておき鬼達は戸惑っている。

「なにをしている？やるのか、それともやらないのか？」

「・・・どうするよ？」

「どうするって言っても・・・」

「やらないと殺られそうだぞ・・・？」

「しかしだな・・・」

「あと10かぞえる間だけ待ってやらア。返答無しなら俺が直に制裁する！」

「ま、待ってくれ！少し時間を・・・」

「10・・・9・・・」

「こ、心の準備がまだ・・・」

「8・・・」

「ど、どうするよお前等！」

「フ・・・ヒヤア　がまんできねえ　ぜ・・・」

「「「やります！」「」」

ギリギリセーフといったところだ。まあいい。

「それじゃあやってもらおうかい。」

鬼達は鉄板に向かう。

熱せられた鉄板を前に少し躊躇っていたが、意を決し、遂に土下座を始めた。

「ぐううっ！！！」

「あああああ！！！」

「ぐおおおお！！！」

絶叫が響き渡る。しかしおかしい、どう見ても三人の鬼は焼けていない。

煙の一つも上がっていないのだ。

それから数十秒、土下座は終了した。

起き上がる鬼達を見ると焼き後は少しも見当たらない。どうなっているのか不思議に思っていると、他の鬼達から声があがった。

「よく耐えたなお前等！」

「あれほどの豆を相手に頑張ったな！」

え、豆メインなの？熱い鉄板の上でとかそういうのじゃなくて？俺がポカーンとしてると幽香が話しかけてきた。

「鬼は熱に耐性があるようだし、熱した鉄板程度じゃぬるくらいだと思っわよ？」

ナ、ナンダッテー！！

鬼にそんな設定があつたとは知らなかった。

まあ、炒り豆のおかげで苦しんだようだしよしとするか。

「鬼よ、よく聞け！今回はこれで許してやろう。．．．ただし！」

鬼は緊張した面持ちで続く言葉を待っている。

俺は一際声を大にして言い放った。

「幼女をよつてたかつて泣かすような真似は二度とするな！！次は滅ぼすぞ！！！」

それを聞いた鬼達は皆、何を言っているのかわからず、頭がどうにかなりそうだった

とでも言いたげな表情でこちらを見ていた。

「返事は！」

hair!!!

全員ビシッとしていい返事を返した。これで前と後ろにサーがつい

たのなら完璧だったな。

さて、俺の制裁はここまでにして、まずは原因となった誤解を解いておこうか。

「それじゃあ、萃香が言おうとしていた本当の事を話してやろう。

萃香の話の途中でそっちの鬼が話を遮ったから、俺も殴りこみに数えられたが、

元々俺は萃香をここに送るついでに鬼の見学と美味しい酒造りを教える為に来たんだ。

ただ、ちよつとムカついたからド突きに來たとか挑発したが、アレは嘘だ。すまん。

それで殴りこみっていうのは幽香の話だ。こいつは純粹に戦いを求めてここに来た。

だから、萃香は嘘を言ってない。その鬼の早とちりだったってわけさ。」

「な、なんだってー!!」

「そ・・・そうだったのか・・・。」

「へーそーなのかー」

「ごめんな萃香!」

鬼達はざわざわしながらも説明に納得してくれたようだ。

萃香を見ると下を向き、ぷるぷると震えている。まだ泣いてんのか？俺は萃香の頭をなでながら言った。

「萃香・・・、いつまでそうしてるんだ。もう誤解は解けたぞ?」

「・・・それが・・・だ。」

「？、なんだって？」

「誰が幼女だ！！！」

グシャア！！

萃香が叫ぶと同時に右腕が真っ直ぐに俺を突き、ジャガった時並みのひどい音を立てた。

ちなみに萃香の身長は俺の腹くらいである。肩の高さは大体俺の股程度だ。

そして俺は意識を失った。

ざんねん！！

わたしの むすこは これで おわってしまった！！

二十五話 ガッシボ力ときたら後はどうなるか分かるな？

「ここは・・・どこだ？」

気付くと見慣れない風景が目の前に広がっていた。

目に悪い赤を基調とした空間で鍾乳洞のようなものがある洞窟のようだ。

なにやら大きくて立派な建物があり、そこに半透明の何かが列を作っている。

俺、確か鬼の山に居たはずんだけどな・・・。

まあ、よく分からないのでとりあえず建物に向かってみることにする。

あれだけ立派な建物だ、話の通じる程度の知能を持った生物くらいいるだろう。

半透明の物体の後ろに並んで待つ。

最後尾に着いたら半透明の奴から最後尾プラカードを渡された。

どうやら一番後ろの奴に次々と渡していくらしい。

なるほど、どうやらここはコミケ会場のようだな。

「違います。というかなんですかコミケ会場って。」

「コミケ会場というのは、熱き魂を持った歴戦の兵共が集まる戦場だ。」

「そうですか。ここは最高裁判所ですよ。」

「そっすか。俺、裁判所に用はないんで帰りますね。出口はどちらですか？」

「裁判所の出口はこの入り口以外にはありませんよ。」

「いや、そうではなくて。」

「地獄の出口のことならば今はありませんよ。」

「出口がないだと・・・？いや待て、今地獄って言った？」

「はい、ここは地獄です。申し遅れましたが私はこの地獄の管理責任者、閻魔王です。」

閻魔王、確か十王とかいうのの一人でなんか凄い偉い人だったはず。見た目は萃香に負けず劣らずの幼女だけど、人は見た目によらないって言うしな。

「へーそーなのかー。なんで俺地獄に居るんだろう？」

「貴方が死んだからです。」

「え、俺死んだの？」

「はい。貴方は不意にち。こを殴られて急な痛みによるショックで死亡しています。」

ち。こを殴られた程度で死んでしまつとは情けないですね。」

「あー、思い出してきた。確か不意打ち食らってあまりにも衝撃的な痛さだったから
気を失ったんだっただけ。しかしまさか死んじゃうとは思わなかった。」

「まあ、死んだといっても仮死状態ですけどね。」

「仮死状態？」

「はい。貴方の体はち。こを除けば無事ですし、ち。こ以外は生命力が溢れています。
ち。こに走った衝撃で、魂が死んだと解釈して体から抜けてしまっているのです。」

「ふーん、じゃあ俺が体に戻れば生き返ったりするの？」

「はい、その通りです。ただしち。この痛みも戻ってきますよ。」

「うーん、痛いのは嫌だけど死んでるのはもっと嫌だしなー。
・・・ところでさっきからち。こち。こ言ってるけど恥ずかしくないの？」

「？、生殖器を俗称で呼ぶのは恥ずかしいことなのでしょうか。」

「一般的な女の子は恥ずかしいと思うことだと思っただけ。
それに、そこは恥部とか呼んだりするしさ。」

「ふむ、しかし人体の一部を恥ずべき場所として差別するのは好ましくありません。
閻魔王たるもの全てに対して平等でなければいけませんから。」

「さいですか。まあ別にいいけど。それじゃ俺はこれで。」

スキマを開いて帰るとしy……あれ？開かないな。

「ああ、貴方の能力はここでは使えませんよ。」

「何で？」

「ここは死した魂の集う地獄、裁きを受け然るべき処遇が与えられる場所です。

死した魂に力があつては、裁きから逃れる者も出てくるでしょう。それをさせないために地獄には魂の一切の力を封じる術を施してあります。」

「そいつはまた厄介な術すな。それで俺はどうやって帰ればいいんだ？」

「私の力で現世への出口を作成して帰します。ただ、帰す前に少しお話があります。」

「話？」

「はい。本来であれば三途の死神、もしくは裁判担当の閻魔が仮死認定を行い、現世へ帰すという段取りになっているのですが、どういうことか分かりませんが貴方を魂として認識できる者がいないのです。なので私が手続きを行います。」

「認識できないとは？」

「そのままの意味です。貴方は私以外のここにいる者たちからすると、

地獄の一住人としてしか見られてません。つまり生きている者として見られています。」

「うーん、よく分からん。それで何か問題でもあるのか？」

「はつきり言つて大問題です。地獄に住む者が魂と生者の区別がないということは本来ありえないことなのです。私達はそういう生物として生まれたもののなので。

簡単に言うなら貴方という存在はこの世界の法則から外れているのですよ。」

まあ元々この世界の住人じゃないし、違つてもおかしくはないのかな。

前にも幽香から人外だつて言われたりしたし。

「世界の法則外の者を裁くことは私達では出来ません。あくまで私達の役割は

この世界の輪廻転生を正しく平等に行うことですから。貴方は範疇の外です。

業務範囲外の仕事を増やさないで下さい。手続き料請求しますよ？」

「すみませんでした。お金とかないんで勘弁してくだしあ……」

俺は完璧な土下座を決めた。額を地面に音速で擦りつけたせいか、額が焦げた。

「・・・まあ一度目ですから許してあげましょう。もう死なないで下さいよ？」

わざわざ私が出なければならなくて面倒なのですから。」

「Yes！ M a · a m！」

「よろしい、では話は終わりです。この紙に手を乗せてください。」

「？、なんすかこの紙は？」

「これは肉体に魂を降ろす為の書類でけいやくしょといえます。人間界では勇者が悪魔の魂を自らの肉体に憑依させる時などに使われますね。」

今回はこれで貴方を貴方の肉体に憑依させることになります。」

「へえ、なんだか友情を破壊しそうな紙ですね。」

俺は紙に手を乗せた。すると、なんだか吸い込まれそうな感覚に襲われた。

「はい、もう離してくれて結構です。」

後は私が出口を作ると自動的に貴方の肉体に戻りますので。」

「そうですか。いや、お世話になりました。」

「私はこれから出口を作りますので、その間にこれを頭からかぶってください。」

「この液体はなんですか？」

「ア。ンアルファです。」

「えっ」

「ですからア。ンアルファです。」

ア。ンアルファを頭からかぶれと？何言っただこいつ……。
気でも触れたか？

「失礼な。私は気など触れていませんよ。真面目な話です。
そのア。ンアルファで魂と肉体を接着します。」

「ええ！？ア。ンアルファってそんなもんまでくつつくの！？」

「ええ、万能に限りなく近い超多用途接着剤ですから。他にもセ。
ダイン等が

ありますけど、私はア。ンアルファの方が好きですね。」

まさか接着剤にそんな使用用途があったとは……。
でも接着剤を頭からかぶるのは嫌だなあ。

「嫌でも何でもやって下さい。くつつかないと魂がポロポロ抜けて
しまいます。」

そしたらまた私の仕事が増えるじゃないですか。金取りますよ？」

「すみません。かぶらせていただきます。」

地獄の沙汰も金次第。俺に金はないので選択肢はもうこれしかない

のだ。

バケツに入ったア。ンアルファを持ち上げ、頭上からぶちまけた。

べちゃあ！

ねつとりと俺にア。ンアルファがついた。気持ち悪っ！

こういうねちよい液体まみれになるのはかわいい女の子がやるべき
だろ常考

筋骨隆々の男がねちよい液体まみれとか誰得だよ！

「では乾いてしまっ前にお帰り願いましう。開けゴマ！！」

閻魔王がそう言つと空間が割れて俺はそこに引きずり込まれた。

「開けゴマはねえだろー！！！！」

術のセンスに苦言を呈しながら俺は現世へと戻っていった。

二十五話 ガッシボカときたら後はどうなるか分かるな？（後書き）

やっと食料とか飲み物が普通に買えるようになってきた。

大した被害の無い地域での買占め勢マジウザい。

計画停電も出社前とか帰宅後とかだとムカつく。

でも仕事半ドンになると超嬉しい。昼にもっとやってくれ。

そしたら暇潰しにこの小説書いたりできるし。

二十六話 安易な約束はしないほうが身のためだ

「うーん・・・マ○ダム・・・。」

「お、起きたかい？」

俺が現世に戻ると、萃香が目の前にいた。

「いやー、死んだかと思ったよ。」

「ん、死んでたけど？」

「え？」

「死んでたけど、ちょっと生き返らせてもらった。」

「へえ・・・そりゃあ・・・。。。。おめでとうございます?。」

「ありがとうございます?。」

「・・・。」

「・・・。」

萃香の何と言っていいかわからずに言ってしまったおめでとうに対して、

おめでとうと言われたから何となくありがとうございますと返してしまったせいで、

なんだかわけの分らない状況になってしまい言葉が詰まる。

丁度その時、股間から激痛が走り、また気を失いそうになったが永琳特製のヤゴコロイタイノトンデケーβの効力で痛覚を麻痺させて事なきを得た。

ネーミングセンスはともかく効果は絶大で、永琳の天才っぷりに感謝した。

「よお兄弟！起きたのかい！」

そこにボッコボコにしてやったデカ鬼が気さくに話しかけてきた。
あるえー？俺がトラウマになるくらいはボコしてやったはずなんだけどなー。

あもりにもボコしすぎて頭のネジが2、3個はずれちまったのか？

「俺はお前の兄でも弟でもないんだが？」

「はっはっは！一度拳を交えたら皆兄弟だ！！」

「いや、拳交えてないし。俺が豆で一方的にボコっただけだし。」

「こまけえことはいいんだよ！」

「つーかあんだだけボロクソにしてくれた相手に兄弟とかなんなの？マゾなの？死ぬの？」

普通、我が魂魄百万回生まれ変わっても恨み晴らす的な感じじゃないの？」

「公一、そいつはそういう後腐れは起こせないから。」

萃香が話に混ざってきた。しかし起こせないとは一体どういうことだろう。

「そいつは2秒で切り返す程度の能力つてのを持っていてね、使いこなせないらしくて

嫌な事があると本人の意思とは関係なく能力が発動して切り返しちゃうんだよ。

だから恨みたくても勝手に区切りがついちゃって恨めないのさ。」

なんだその翼を授かりそうな能力は。

「そういうわけだよ兄弟！さあ喧嘩も終わったんだ、宴会といこうじゃないか！」

「なんで宴会なんだよ。」

「およ？公一は喧嘩の後に宴会をしないのかい？」

「いや、普通はしないだろ。喧嘩と宴会になんの関係があるんだよ。」

と、言いつつも神奈子と戦った後は宴会したんだよな。

まあアレは神奈子がしょんぼりしそうだったから景気づけの意味でやったんだが。

「まあまあ、こまけえことばかり気にするなよ兄弟！」

「そうそう、楽しけりゃ何でもいいのさ！」

「しかしだな……。」

やっぱり渋る。こいつらはともかく他の鬼が俺をどう思ってるか考えるとなあ。

びびらせちゃったし、俺が宴会に混じってたら空気が重くなりそうなんだよなあ。

「あ、そうだ。公一はしばらくここに住むんでしょ？なら歓迎会が必要だよな！」

「おお、そうなのか！なら宴会しかないな兄弟！」

「そんなに宴会がしたいのか！アンタたちは！！」

「もちろん！」

二人揃って即答だった。鬼ってのはみんなこういうもんなのかな。

「・・・歓迎してくれるっていうのを断るほど無粋な真似をするわけにもいかんし。

いいよ、その誘い乗った。存分に楽しませてもらおうか。」

「よしきた！肉男、怪我人共に伝えてきな！私は他の奴等と準備してくる！」

「任せろ！」

デカ鬼は肉男という名前らしい。肉男って・・・まあご愁傷様。しかし、それよりも・・・

「怪我人？」

「ああ、公一が死んだ後に幽香が暴れてねえ。男衆は皆やられたよ。情けないねえ。」

「いや、あの強さは反則だろ？仕方なかったんだよ。」

「あー、そっぴや幽香は殴りこみの為に來たんだもんな。」

・・・あ、すっげえ嫌な事思ひ出した。確か俺、少し相手するとか約束したんだった。
病み上がりというか死に上がりに幽香戦とかマジで嫌なんだけど。

「あら、起きたのね。」

噂をすれば幽・・・

「あれ？俺の眼がおかしくなつたのかな？幽香が五人に見える。」

「五人いるわよ？」

「は？」

「私と分身が四人でちゃんと五人いるわよ？」

あー、そっぴや分身とかするんだつたな幽香は。しかも分身も本物なんだよね。

「なんで分身したの？」

「妖力と魔力でポポポーンって。」

「いや、そうではなくて。」

「ここに居ると戦いに事欠かなさそうだったから。」

「全くわけが分かりません。日本語をお願いします。」

「私は四季折々の花達を見回るために、本来全国を歩き回っているの。」

でも、しばらくはここに居たくなった。だから分身達に見回ってもらうのよ。」

ああ、常駐幽香と巡回幽香に分かれたわけね。

「なるほど、でも分身四人って多くない？」

「そんなこと無いわよ。四人分身しても三人くらいは行方不明になるもの。」

「行方不明？」

「ええ。分身して別行動を取っているといつも忽然と消える奴がいるのよ。」

私と合流できるのは四人に一人くらいね。」

「ふーん。この島も広いし、どこかでうろついてるんじゃないの？」

「そうじゃないわ。分身は私自身。分身がどこでどうしているかは伝わるのよ。」

消えた分身からは何も伝わってこなくなるの。」

「んー、じゃあ強い奴に喧嘩売って殺されたとか？」

「それも無いわね。死んだことも私に伝わるもの。」

「そうになると分からんねえ。ま、世の中不思議なことなんざ沢山あるしなー。」

「そうね、それに四人分身しておけば大体一人は消えないから問題は無いわ。」

消えてしまうつてのはどういふことかちよつと興味が湧いた。
また今度、暇なときにでも調べてみるでしょう。

「ところで、もう動けるのよね？」

「いや動けないです。特に戦うとかは無理です。」

「ふーん、そう。」

ブォン！

「おわっ！」

幽香がいきなり傘を振り下ろしてきた。

十分反応できる速さだったので避けたものの、いきなり攻撃とかマジ勘弁。

後ろにあった岩なんか粉 砕されて粉になつてる。

「あら。動けるじゃない。嘘は良くないわよ？」

「オーケー分かった、謝る、俺が悪かった。だからちょっと落ち着こうか。」

「私は落ち着いているわよ？」

落ち着いて次々と急所狙って傘ぶん回すのはやめてええええ！！とか思いつつも、避けられない速さではないので普通にかわし続ける。

宴会前だし萃香が止めてくれると信じて。

「勇儀ー、ちょっとその肉とってくれる？」

「ほいよ、焼きすぎるなよー。」

「分かってるって！あ、そのお酒は全部持ってきといて。」

「あいよー。」

普通に宴会の準備してやがる。

あ、頑張れよーみたいな目でこっち見た。止めるよ畜生。

「余所見とは随分余裕ね？」

一層速度を上げて攻撃してくる幽香。

でも股間以外は万全の俺にとっては大したことのない速さなので、正直余裕はある。

ただ、幽香にはアレがある。アレぶっ放されたらこの辺一帯無事ですむかどうか…

宴会前だし、できればこの場所を荒らしたくないからなあ。

「ちゃんと後で付き合うから、今は止めにしないか？」

「嫌。こんなに楽しいのに我慢してられないわ！」

うーん、確かに我慢できなさそうだな。戦う気力を奪っても次々と湧いてきて

全然萎えさせることができない。この前とは桁違いだ。

「んじゃ少し相手するって約束だし、せめてルールを決めよう。」

「ルール？」

「ああ。……そうだな、これからここで宴会やるからそれまで戦おうか。

あと、この場が荒れちゃ宴会できなくなるから荒らしたら負けな。」

「……まあ百歩譲ってこの場所は荒らさないようにしてあげてもいいけど、

宴会までじゃ物足りないわ。どうしても宴会までに終わらせたいのなら、

その時間までに私を倒すことね。」

うん、上々だな。これで場が荒れることはなくなっただろう。

この心配さえなくなれば後はどうとでもなる。

「分かった。じゃあルールはここを荒らしたら負け、もしくは倒れたら負けでいいな？」

「いいわよ。さあ存分に楽しみましょう?」

「お前が楽しむ暇があるか分からんけどな!」

二十六話 安易な約束はしないほうが身のためだ（後書き）

ファイナル分身！ファイナル幽香！！

……一人くらい持ち帰ってもいいよね？

え？ 死ね？幽香ちゃん！

二十七話 VS 幽香 くそして宴会へく

「だおオツ！」

俺は早々に飛び掛った。掛け声は核兵器（ ）のもののだが、俺は紳士なので
女の子を殴りつけるような真似はしない。あくまで紳士的な技で攻める。

今こそ紳士の必殺技ソ。リエフィンガーが火を吹くぜ！

うおおおおゆうかあああうおおおお！！

と、心の中でスピーディなくま吉的な叫びをすると突然幽香の姿が消えた。

…そういえば透明になってストーキングとかするんだったな幽香は。

まあ、姿が見えなくても力を探れば大体の場所は分かるけんだけだね。

ただ姿が見えない以上、元々攻撃するつもりは微塵もなかった色んな箇所を

うっかり事故って触っちゃうかもしれないな。フフ、フフフフ。

力を探してみると、どうやら幽香は俺の真後ろにいるようだ。

それにもの凄い力を込めて攻撃の準備をしているっぽい。

つか力込めすぎ。軍神の神奈子だってこんな超密度の力込めたりしないよ？

多分これ、そこいらの神くらいなら瓦割りの要領で複数体消滅させ

られるレベル。

紫クラスの大妖怪だって無防備で食らったらおそらくは消滅するだろう。

でも凄いのは何も力だけじゃない。

これほどの力でありながらも、かなり高度に隠されているのだ。

俺は能力で力を探ることが出来ているが、能力に頼らなければ発見できないと思う。

現にこんな馬鹿でかい力でも周りにいる鬼達は気付いた様子もない。おそらく八意式隠蔽術より優れている。正に天才的、神業と言ってもいいだろう。

是非ともものぞく・・・技術的探求心を満たすためにやり方を教えて欲しいものだ。

戦闘が終わったら教わろう、そうしよう。

さて、これ程の力で攻撃されたら俺でも結構なダメージを食らってしまう。

もちろんかわしてしまえばそれでいいのだが、万が一かわせなかったら事だ。

なので攻撃される前にその力を奪う時間が欲しい。よって一旦距離をとる。

消えた幽香を探すフリをしながらおよそ100メートル程は離れた。

幽香は驚異的な力を込めてこちらに向かってくる。どうやら攻撃準備は整ったようだ。

だがもう遅い。幽香がどれほど速くとも世界最速の俺より速いってことは無いし、

急に動かれても100メートルもあれば、詰められるまでに反応して下がるはず。

俺が全力で下がれば追いつけないだろうからゆっくり力を奪えるというわけだ。

幽香は姿を消している余裕なのか、実にゆっくりとこちらに向かっている。

気付かれているとも知らずにのんきなものだ。

俺は力を奪い始めた。すると幽香は力が失われるのに気付कि慌ててこちらに詰め寄る。

うん、結構速い。だが予測の範囲内だ。俺は下がりながら力を奪う。すると幽香は自身の居場所がばれているのに気付いたのか、姿を現し速度を上げた。

姿を消すのに使った妖力も速さの足しに使っているのだろう。

それでも俺には追いつかない。まあ当然だ、こっちは惑星一つ分の速力があるからな。

かなりの力を奪い、俺にとっては脅威にならない程度になったところで迎撃に出た。

「なっ！」

急に俺から距離を詰めたのが予想外だったようで、幽香は驚きの声を上げた。

しかし、その驚きとは裏腹に即時迎撃しようと殴りかかってきた。特に武術を学んだような動きではないのに、無意識にカウンターとは一体どれほどの実践経験を詰んできたのか。まったく恐れ入る。

俺も幽香の打撃に合わせてカウンターを入れる。

紳士として女の子を殴るわけにはいかない。最初はそう思っていた。

しかし今はここにいる一人の戦士に対して、それは侮辱であると思
っている。

数え切れない闘争の果てに強大な力を持ったのであろう幽香に敬意
を払うからこそ、
殴るべきなのだ。

俺は迷うことなく幽香の顎を打ち抜いた。
ほどなくして幽香はそこに崩れ落ちる。

妖怪といえども人型。脳震盪では倒れざるを得ない。

「俺の、勝ちだ。」

幽香に聞こえるはずは無い。が、勝者として言うべきことだと思っ
た。

勝利を誇ることに。それが敗者に対する礼儀だと、この時はそう考え
たからだ。

幽香の容体を軽く診察したところ、脳震盪を起こしているのみで、
他には特に問題はなかったので、スキマを開き、テントとベットを
取り出し寝かせる。

安静にしていれば宴会中には起きるはず。ここで寝かせておけば起
き次第参加できる。

幽香もしばらくここにいてつもりのようだから、鬼達と少しは仲良
くなつていたほうが

何かと都合がいいだろう。そのためには宴会はもってこいだ。

丁度、幽香を寝かせたところで萃香がやってきた。

「お、喧嘩は終わったようだね。」

「ああ、今しがた終わったところだ。」

「・・・へえ、無傷で幽香を倒すとはやっぱりやるねえ。」

「そりゃどーも。ところで、こっちに來たってことは・・・」

「ああ、準備が出来たよ。後は主賓が来るだけさ!」

「そっか、じゃあ行くとしようかな。」

「それじゃ一名様ごあんなーい!」

「ああそっだ、幽香もしばらくここにいろって言ってたけど?」

「うん? そうなのかい? まあいいんじゃないの。」

「そっか。いいならいいや。」

「ああー、そうか幽香の歓迎会もやらなきゃだよね! これは明日も宴会だね!」

「俺の歓迎会と一緒にやるっていう選択肢は?」

「ない。宴会のネタを減らすなんて有り得ない。」

「ですよー。」

まあ、こうなるであろことは予想してた。

こいつら超がつくほど宴会好きなのは既に確認済みだからな。

花見から数えて三連続宴会確定か。まあ楽しければいいか。

萃香に連れられて広場に出ると鬼とミイラが半々くらいで居た。

・・・いや、良く見るとミイラは包帯ぐるぐる巻きの男鬼だった。

幽香ちよつとやりすぎじゃね？まあ俺に被害は無かったからいいけどさ。

「はい！みんなちゅーもーく！今日の主役のとーうじょーう！..」

「はいどうも、今日の主役です！さっきはびびらせちゃってごめんね！

今日からしばらくここを拠点にしようと思っんでよろしく！..」

ざわ・・・

ざわ・・・

鬼達がざわつき始める。

明るめに振舞ってみたけど、やっぱり空気がアレですな。

「はい！ざわつくのやめ！！ここでこれから一緒に暮らす公一から我等鬼にとって重大な発表がありますッ！！..」

「えっ！？」

萃香が急に無茶振りしてきた。なんだよ重大な発表って。

「ボソボソ（美味しい酒出して）」

「！、ボソボソ（あ、そういうことね）」

萃香の振りは酒に目の無い鬼に対する最強の切り札のパスだった。素晴らしいパスだすばらしい。

スキマから酒を取り出して高らかに言い放つ。

「俺の造ったこの酒はお前等の造る酒の10000倍美味いぞ！！
沢山あるから好きなだけ飲みな！！」

オオーツと大きな歓声が上がリ空気が一変する。現金な種族だな鬼
つて。

盛り上がったところですかさず萃香が開始の音頭をとる。

「それじゃあ乾杯！！」

乾杯！と一斉に盃を掲げ、皆一気に盃を空ける。

この辺は流石鬼といったところだ。
それと同時に俺に鬼達が群がった。

「10000倍美味しい酒をくれ！」

「俺が先だ！」

「いや私よ！！」

「早く早く！」

「はいはい、慌てんなよ。・・・ほれ。」

俺はスキマから酒樽を20個ほど取り出した。
鬼達は酒樽から一心不乱に酒を注ぎ飲み始めた。

「うめえっ！うめえっ！！」

「これは・・・たまらんっ！！」

「うますぎるっ・・・！！」

「ああ、なんか美味すぎて涙が・・・。」

「びゃあ　？あ　？　？あうまひい　？いい　？」

全員一致でお気に召したようだ。よかったよかった。
萃香も満足気にその様子を眺めながら話しかけてきた。

「ふふ、みんなも気に入ったようだね。」

「当たり前だ。俺が造った酒がまずいわけあるか。」

「言うねえ。」

「そりや言うさ。俺はお前等が生まれる遙か昔から酒造りしてんだ。」

「熟練の技ってやつかい？」

「その通り。」

「それじゃあ折角だから後継者も作らないとねえ。」

「白田って奴に教えりゃいいんだろ？」

「お、ちゃんと覚えてたか！えらいぞっ！」

「頭撫でようとするな。お前の身長じゃ無理だ。」

「ふふふ、ところがどっこい私は巨大化できるのです！」

ドカーン！

「ちょ、おま、酒樽吹っ飛んだじゃねーかー！」

ゾクッ・・・

寒気がするほどの殺気があたりを包んだ。

鬼達が揃って萃香に殺気をぶつけているようだ。

そこで勇儀が口を開いた。

「萃香・・・覚悟はいいね・・・？」

底冷えするような声が木霊した。

それから萃香は他の鬼達にボッコボコにされた。

一度幼女を泣かせるなどが警告したけど、この時ばかりは萃香を庇う余地はなかった。

どうボコされたかはあえて言わないが、酒の怨みは恐ろしいとだけ言っておこう。

二十七話 VS 幽香 ーそして宴会へー（後書き）

ある日の同人仲間とのメッセ

お題：東方界限の絵師さんで好きなのは誰？とりあえず一人挙げられ
俺「うなだれさんとか？」

友人S「ちよぼさんなんかモイイネ！」

変態S「寅乃檻の人とか是乃さんとかタムヒさんとか」

友人S「一人挙げれていつてんだろダラズ」

俺「何人も挙げたらキリがないwww」

友人K「ボンバーグレイプさんもいいよね」

仲間はみんな病人だった。

二十八話 私の酒は強力です（前書き）

四月は仕事がクソ忙しいので、あんまり更新できないと思います。
ま、だからなんだって話ですが。所詮駄文だし。

二十八話 私のお酒は強力です

「楽しそうなことをしているわね。」

萃香がグロテスクな表現が含まれている状態になった頃に幽香が起きてきた。

「お、随分早いお目覚めだな。」

「まあね。ところでこれは何をやっているのかしら？」

「宴会。もうお開きのようだが。」

「へえ、随分素敵なお宴会もあったものね。」

「斬新だろ？」

「ええ。私もお呼ばれたかったわ。」

「大丈夫だ、明日も宴会だから。」

「それはそれは。それじゃ準備もきちんとしておかないと。」

「ま、明日の宴会は普通の宴会だけだな。」

「ふうん。つまらないわね。」

「まあそう言うなって。明日の宴会はお前の歓迎会なんだから。」

「え？私の？」

「そう、お前の。」

「・・・・・・・・」

幽香は何故か急に俯いて黙りこくってしまった。

一体なんだろうか、何か思案しているような表情だが。

「どうした？」

「なんでもないわよ。」

なんでもないと言いつつも何かありそうな顔をしている。
というか、どうしようかといった表情が現れてきている。

「まさか、歓迎会すっぱかすとか考えちゃったりしてる？」

「そんなことはしないわよ。」

「そっか、それじゃ明日は主役だから今日のところはゆっくり休んどけよ。」

鬼の宴会だ、普通とは言ってもおそろく尋常じゃない酒が出てくるぞ。」

「・・・・・・・・」

返答なしに、まあ参加しないわけじゃないようだからいいけど。
しかし何を考えているんだろう。歓迎会があるってだけで考え込む

とかよく分からんな。

・・・あ、今度は何か困ったような表情になってきたぞ。

ますますわけが分からない。まったく、妖怪の考えることは分からんね。

なんにしても主賓が早々に酔い潰れたりしたら困るし、ゆっくり休んで貰わないとな。

ただ休んで貰うにしても、女の子に野ざらしで寝るなんていったら紳士の名折れ。

とりあえずスキマから非常にもふっこいベットとコテージを取り出しておく。

「寝るならここでどうぞ。寝具の他に水やちよつとした食べ物くらいは置いてあるし、

奥の部屋で温かいお湯がでるようにしてあるから、体を洗いたければ使うといい。

ベットは寝心地のいいものを選んであるから快適な睡眠は保証するよ。

あと何か困ったことでもあったら言ってくれ、できるだけ対応しよう。」

破格の待遇、幽香くらいの美女であれば紳士として当然の対応である。

え、紳士は見た目で差別しないって？H A H A H A、そんなわけないだろう？

俺のジェントリックパウワー（紳士力）は美女によってもたらされる。

そして授かった力を他所にバラ撒かず本人に還元する、それが俺の紳士道だ。

「・・・困ったことがあれば対応してくれるのよね？」

お、早速ですか。

「ああ、何でも気軽に言ってくれ。」

「そう。それじゃ、一つ教えて欲しいのだけねど。」

「なにかな」

「・・・歓迎会って、何をしたらいいのかしら？」

「へ？」

「だ、だから歓迎会の主役って何をしたらいいのかって聞いているのよ！」

幽香は顔を赤くして聞いてきた。

「何って・・・普通に歓迎されてればいいんじゃないの？」

「普通じゃ分からないわよ！・・・私はその、か、歓迎とか、されたこと・・・」

幽香の語尾がずんずん弱くなっていく。ついでに顔は真っ赤。

要約すると、初めての歓迎会でどうしていいか分からないということらしい。

どうしたらいいかわからない無知を恥じているのかもしれないな。
別に妖怪なんだから歓迎されたことなくても普通だと思っただけ。
ま、歓迎会と言ってもただの宴会。楽しく吞んでくれればそれでいいだけだ。

「別に何かしなきゃならないわけじゃないよ。ただの宴会だと思っ
てくれればいい。」

主役は何かと絡まれる事が多いと思うけど、あとは普通の宴会と変わらんよ。」

「そ、そうなの？」

「ああ。ま、楽しく吞もうや。」

「ええ。分かったわ。」

ホツとした表情になる幽香。

しかしこんなことを心配していたとか、可愛い奴だな。

いや、幽香の存在そのものが可愛いんですけど、輪をかけて可愛いって意味で。

「それじゃ、今日のところはゆっくり休んでくれ。」

「そうするわ。」

そう言うとお幽香はコテージに入っていった。

今の時間から休み始めれば結構な時間休めるし、流石に体調の不備はでないだろう。

幽香には普通の宴会と変わらないと言ったが、あれは嘘だ。

鬼の宴会がワールドスタンダードに採用されたら、世界は酒で滅び

る。

それくらい酒を呑む宴会となるだろう。

さっき俺が出した酒の時間あたりの消費量を見ればそんなことくらいはわかる。

でも幽香は結構酒に強いようだし、体調が万全なら問題ないはずだ。

それはさておき、ボコボコにされた萃香が放置されてまずい感じになっている。

他の鬼達は吹っ飛んだ酒樽の欠片に残った酒を集めて少しでも呑もうとしている。

どちらも放っておくわけにもいかなそうだ。

「さてと、そろそろ後始末といきますかね。」

まずは萃香の手当てだ。ぱっと見、萃香というか血の塊に見える。

とりあえず八意式診察術で怪我の具合をチェックする。

「うわぁ・・・」

これはひどい。この一言に尽きる。

体中穴だらけ、無傷の内臓一つもなし、何ボキンしてるか数えられない骨。

これでも生きてるんだから、鬼の生命力には驚かされる。

しかも徐々に回復しているあたり、最早化け物としか表現できない。

とりあえず大量の回復力を分け与えて放っておく。

怪我は酷いが元々の生命力や回復力から考えると手術する必要もないだろう。

「さてと、次は他の奴等だな。」

鬼達は酒樽の破片に残った酒をかき集め、舐めるように飲んでいる。何というかみみっちい。天下の鬼がこれじゃあなあ……。とりあえずみつともないので止める。

「お前等、そんなに酒が飲みたいならこっちへ来いよ。」

俺はスキマから酒を取り出す。

そろそろ貯蔵量が心配になってきたが仕方ないだろう。

「おお、まだあったのか!？」

「きた!美味しい酒きた!!これで勝つる!!」

「ウンまああーいつ!!」

はやい!もう飲んでるのか!間違いなく音の壁を超えた行動速度。酒に釣られすぎだろ。こいつらの釣られっぷりは尋常じゃない。そんな餌では釣られクマーどころかスキマーくらいの釣られっぷり。

まあ、簡単に釣れるから釣る側としては嬉しい限りですが。

ぶっちゃけると小一時間もすれば眠る効果のある睡眠薬を盛った。

これで、あと一時間もあれば今日の宴会はお開きというわけだ。

その前に言うべき事は言っておこう。

「はい、みんな飲んでるとこ悪いがちょっと聞いてくれ。明日のことについてだ。」

「明日？」

「なにかするのか？」

「いいから酒よこすみません続けてください。」

少々酒に溺れ過ぎている鬼を睨みつけて黙らせて続ける。

「俺と一緒に来た妖怪、幽香っていうんだけど、しばらくここにしていることになった。」

「おお、そうか！じゃあ歓迎会しないとな！」

「明日も宴会だー！！」

流石鬼。話が早い。というか宴会しか頭にないんだろうなこいつらは。

「ま、そういうことだからよろしく頼むよ。」

「任せとけ！最高の歓迎をしてやる！」

「それじゃ私等は明日朝にでも食料とってくるよ！」

「あー、酒はお前に頼んでいいか？」

「そうだ、どうせ飲むならお前の酒がいい！」

「ああ、酒は俺が出そう。」

「やった！」

「これで安心！」

「明日も美味しい酒が飲めるぞー！！」

うん、まあどうせ俺が酒を出すことになるとは思ってた。
酒の貯蔵量が宴会でマツハだけど仕方ない。必要経費だ。

「あと、もう一つ。」

「まだ何かあるのか？」

「白田って奴いるか？」

「俺だけ。」

ひょろい鬼が出てきた。

よかった、あの某究極料理を作る方には似てない。

「お前が酒造りの責任者か？」

「そうだけど、どうかしたか？」

「なに、美味しい酒の造り方を教えてやろうと思ってな。」

「うーん、それはありがたいんだけど、その造り方って量は多く造れるのか？」

「設備次第だな。あと人手も要る、ここの人数でもそれなりに造

れるだろう。」

「うーん、俺等の飲む量ってさ、かなり多いんだよね。今日の宴会で分かっただろ？
だからそれなりの量程度じゃ足りなくなるんだよね。」

「ふーん。じゃあ、お前等はどうかやって大量の酒造ってるんだ？」

「俺たちは酒虫っていうのを飼っていてね、水を酒に変える珍しい虫なんだけど、
種類によつては一滴の水を酒樽一個の酒に変えることだってできるんだ。」

「ほう、それは興味深いな。種類によつてつてことは何種類かいるのかそれは。」

「今のところ9種類いるね。味や量の違いがあるからそれぞれで管理してる。」

ふむ。ということは要するに酒虫の品種改良をしてやればいいわけだな。

なかなか面白そうじゃないか。暇潰しにはもってこいの研究になりそうだ。

しかし暇潰しに品種改良の研究とか明らかに永琳の影響だよなあ。
学生やってた頃だったら、考えるのマンドクセで終わってただろう。
俺も随分変わっちまったようだ。ウン億年経ってりや当たり前か。

「よし、俺が美味しい酒を大量に造り出す酒虫を造ってやるよ。」

「本当か！？」

「ああ、種類があるってことは何らかの条件で味や量の違いが出てるって事だ。

つまりその条件さえ満たしてやれば味も量も自在に操れるわけだからな。

最も時間はかなりかかるだろうけど、まあ任せとけ！」

「そうか！じゃあ早速管理してる酒虫のところに案内するよ。」

「いや、明日の宴会終わってから頼むわ。今はまず後片付けだ。酒樽や料理が散らばってるじゃないか。明日の歓迎会、こんな状態でやるつもりか？」

「あ、ああ、そうだな。まずは目先の宴会が大事だよな。」

「そうそう、さあお前等、片付け始めんぞー。」

「『『『『えー』』』』」

なんか明らかに不満気な声が上がった。

俺の酒がまだ飲み足りないようだ。

「片付けしないなら、この酒はボツシュートします。」

言いながら俺の酒をスキマ送りにする。

鬼達はまるで親の仇でも見るかの様な目つきでこちらを見ている。そんなに酒が飲みたいのか！アンタ達は！！

まあ、そんなに飲みたいなら餌に使えばいいんだけどね。

「片付け終わったら酒を出してあげよう。」

「お前等ア！ボサつとしてねえでさっさと動け！！」

「お前も口を動かしてる暇があんならそのゴミでも片付けとけ！」

「こっちは酒樽の破片集め終わったよ！！！」

「散らかった料理はここに集めとけ！私が捨ててくる！」

何ということでしょう。あんなに散らかっていた宴会会場が鬼達の手によって

ゴミ一つ無い綺麗な綺麗な広場へと生まれ変わりました。

その後、約束通り鬼達には酒を振舞い、せっかくなので俺も酒を飲んだのだと思う。

翌朝起きたら酒を振舞ったところで記憶が途切れていたからきつと飲んだんだろう。

酒は呑んでも呑まれまいと思っていただけ、俺もまだまだだな。

二十八話 私のお酒は強力です（後書き）

なんか話があんまり進まないの、次とか適当にキンクリするかもしれん

まあ、ロマサガとかでもn年後とか使われるし、いいよね！

ノ＊カイジアニメ二期放映開始！

見てやるうじやねえか・・・！寛容な精神で・・・！！＊ノ

二十九話 ちょっとクリームゾンッー！（前書き）

少しでも時間は消し飛ぶッ！

いや、サブタイ考えるの面倒だったのですが何か？

二十九話　ちょっとクリムゾンッ！

鬼の山に来て早三ヶ月。季節は夏となり、鬼にも大分馴染んできた。驚くべきことに幽香も実によく馴染んでいる。

鬼の山に来て二日目、幽香の歓迎会は特にトラブルも起きずに終わった。

その次の日以降、手合わせだのなんだの言っては毎日鬼と幽香は喧嘩している。

それが鬼には嬉しいことだったらしく、えらく気に入られているようだ。

ここの鬼の強さを順位付けるとすると大体

勇儀、萃香等戦闘に長けた鬼>>>その他女鬼>>>(越えられない壁)>>>男鬼

といった具合だ。

総じて女鬼が強く男鬼が弱い。

女鬼には夜叉の力が少なからず見られるが男鬼には全然見られない。同じ夜叉の子でありながら酷い理不尽を見た気分である。

まあ、それでも鬼としての力はあるので男鬼も十分強いわけだが。

ちなみに幽香は勇儀や萃香に並ぶ程の力を持っている。

それが毎日喧嘩三昧だから山への被害は半端無い。特に建造物。

俺が幽香の為にいくら綺麗に家を建てても幽香はまた吹き飛ばす。

幾度となく破壊されては建て直してやったが、最近はおう面倒臭く

なってきたので、
建てた家が壊れないように俺特製の結界を張っている。

俺特製の結界というのは俺の能力による結界であり、まず破られることはない。

具体的に言つと、家を中心とした広範囲のある程度以上の破壊力を奪っている。

秒間当たりに奪える量は例え核が直撃しても家が壊れるようなことはないほど。

当然喧嘩の余波ごときでこれが破られることなどないというわけだ。これを常時維持しているので結構疲れる。でもこの能力の使い方は便利だと思うので、

今のうちに制御慣れしておいて、あまり疲れずに使えるようにしてきたい。

ま、何事も慣れですな。

とにかくこんな感じで幽香は鬼とうまくやっていけている。

俺の方かというと、喧嘩自慢共の相手はしていないがうまくやっている。

最初の頃こそ血の気の多い鬼が喧嘩を売ってきたので、適当に相手してやってたが

今となつては俺に喧嘩を売ろうとする馬鹿もいなくなった。

こいつらの親であるハリティー、日本では鬼子母神と呼ばれているらしいが、

ちよつと仏界に行つて「お前の子が俺に喧嘩売ってるんだけど、殺つていいの？」

と言つたらそれはもう、ものすごい勢いで鬼の山へ降り立ち、命を

粗末にするなどが

色々と言教して、俺に喧嘩を売ることだけは止めると念押しして帰っていったからだ。

この時ばかりは仏界とコネ持ってたよかったと思った。

ちなみに仏界とコネを持った経緯は詳しく話すと長くなるので簡単に言うと、

紫の依頼で仏界に乗り込む↓OHANASHI↓紫の邪魔はしないと約束させる

といった感じで、仏界の奴等は俺に頭が上がらないというわけだ。

仏界は現世と大差ない法則の世界だったので簡単に事を済ませることができた。

さて、それからというものの大体酒虫の研究して酒盛りして一日終わりといった具合だ。

研究は白田を筆頭とした酒虫管理担当の鬼と一緒にサクサク進めている。

最近は酒虫の分析も終わりつつあって、日がな一日研究ばかりというわけじゃないが。

例えば交配待ちの時間なんかは暇なので、幽香に分身の仕方を習っていたりする。

分身の仕方を詳しく聞こうとしても幽香は「こう、ポポポーンって」の一点張りで、

正直よく分からず難航している。分身するのはセンスが必要なもんなのかね。

一応、姿形だけは同じ分身を出せるところまではできた。

ただ、中身は知識、思考から内包する力まですっかすかだ。

大体分身するとわけの分からない行動をした拳句、転んで消えたり

する。

例えば今分身すると

.

'

; ; ,

: : ; ,

(: : ; , .

(; : : ,

(。 ; : ; .

(。 D ; : .

(。 D ; ;

(。 D 、 ;

(。 D : ;

(。 D) <

オオオオオオ!!

ひょおおおお!! カカロットオオオオオオ

あっ、木にぶつかった。

(. . ω 、)

(. . ω 、 :

(. . ω . ;

(. . ω ; : .

(. . ; ; ,

(: : ; , .

: : ; ,

; ; ,

・・・・といった具合である。分身を使えるようになるのはまだまだ先になりそうだ。

まあ、時間は腐るほどあるので急ぐ必要もない。

さて、今日は交配した酒虫が成虫になる日だったな。

酒虫はある程度成長すると、水を酒に変える体液を出すようになる。出すようになるまでは幼虫、出したら成虫と俺が決めた。文句あるか。

で、一度体液が出ると一生体液の成分は変わらない。

ちなみに体液に影響するのは親と育った環境だ。

水を酒に変える比率に関しては親の依存度が高く、味に関しては環境の依存度が高い。

今回成虫となる酒虫は、これまでの研究の集大成ともいえる一匹であり、

過去最高クラスの量と辛めの酒としては最高クラスの質を持つ酒虫となるはずだ。

その事を鬼達に伝えたら、二日程前から全裸待機する鬼がちらほら出始めた。変態か。

まあ、俺も結構楽しみにしていたことなので、昨日なんかはなかなか寝付けなかった。

こればかりは歳を重ねてもどうにもならんね。少年の心は永久に不滅です。

早速、成虫になるのを見ようと酒虫管理所へ行くと萃香と勇儀がいた。

この二人は酒造りに関わることがほとんどないため、ここに居るのはかなり珍しい。

「ここに来るなんて珍しいじゃないか。」

「お、公一、いいところに来たね。」

「丁度よかった。今、白田が呼びに行くって言ってたところだよ。」

「白田が？…ってことはもう成虫になったのか。」

「らしいね、それで早速なんだけどさ…」

「ああ、呑みたいってんだろ。ちょっと待ってけ。」

「いや、そうじゃなくてね。」

「へ？」

早く呑みたくて来たんじゃないのか？

というかこいつ等の場合はそれ以外に理由が見当たらないんだが。

「実は三日前に萃香が面白い奴等を見つけてねえ。」

「面白い奴等？」

「ああ、天狗って言ってね、速くて強い奴等なんだよ。」

「天狗……ああ、あのUがAになると色々とまずい種族な。」

「……？ゆーがえー？？」

「いや、気にしないでいい。こっちの話だ。」

「……？それでそいつ等のところに勇儀と殴りこみに行こうかと思
つてさ。」

「そうか。それでなんでここにいるんだ？」

「いや、今日美味しい酒ができるって言うてたじゃないか。折角だから旅立つ前に
私等の瓢箪もその酒が出るようにしてもらおうかなー、と思ってね。」

なるほど、瓢箪をランクアップさせてから旅に出ようってわけか。
こいつ等は鬼だから、面白い奴等が居たなんて思い浮かべた時には、
実際に出発しちまって、もう既に戦い出している的な感じだと思っ
ていたけど、
ちゃんと出発前に装備を整える周到さも備えているんだなあ。認識
を新たにした。

「分かったよ、任せとけ。で、お前等の瓢箪はどれだ？」

「私のはこれだけど、勇儀のは……」

「実は昨日壊しちまってねえ。すまないけど新しく作ってくれないかい？」

「ん、構わんよ。どんなのにする？」

「そうだねえ、酒の湧く盃ってのはつくれるかい？」

「まあ作れるな。ただ瓢箪と違って別途水筒でも持たなきゃならんぞ？」

「ああ、構わないよ。」

「そつか。大きさはどうする？」

「このくらいで。」

そう言つて勇儀は両腕を大きく広げて体を動かし大きさを表した。萃香の持つた盃も相当でかつたけど、そのサイズはないわ。そのサイズで作つたらお前の体積の3倍位の盃が出来上がるだろ。

「却下。常識を考えろ。」

「えー。」

「えーじゃありません。大体、旅にでるのにそんなデカ物どうするつもりだよ。」

「背負う。」

「ほほう、それじゃあお前さんは森や山の木々に背負ったデカ物をぶつけて傷つけたり壊すことなく旅ができるというんだな？」

「うつ……。」

「できないだろ？少しは考えてから物を言えよ。」

ぐぬぬ……と言った表情で勇儀がこつちを見る。

勇儀はかなり思慮に欠けてるから本当に少しくらい考えて行動して欲しい。

この前なんか急に幽香の家を殴りだしたから何事かと思つたら、「随分頑丈な家だから殴っても壊れないのかなー」と思つて。」だそうだ。

そりゃ俺特製結界張つてあるから壊れないけど、突然人ん家殴るつてどうよ？

思慮に欠けるというよりは狂気の沙汰つて感じた。考え付いたら即行動、それが勇儀のいいところであり悪いところでもある。

今回の旅についても萃香が行かないなら即日出発、天狗ボツコだつたんだろうな。

なんだかんだで酒がらみじゃなければ萃香は割としっかりしてる方だ。

鬼からするとやや不誠実な部分があるとかで変わっているという評価だが、

何でもかんでも馬鹿正直に対応したんじゃこの世の中は厳しいからな。

変わっているくらいで丁度いいんだろう。実際、ここ仕切ってるのは萃香だし。

ま、なんにせよ二人揃えばなかなかいいコンビだってことだな。

・・・話が随分脱線した気がする。勇儀の盃の話だったよな。

「ま、適当な大きさで作ってやるから少し待ってる。」

「うつ・・・、まあ仕方ないか。」

「ん、よろしい。あと萃香は瓢箪貸してくれ。」

「ほいよ。」

「・・・なんだこりゃ。ひび入って今にも割れそうじゃないか。」

「ありゃ、ホントだ。」

「お前のも新しく作ろうか？」

「そうだね、悪いけどお願いするよ。」

「お前は瓢箪でいいのか？」

「ああ、私のはそれと同じ形の瓢箪にしてくれるかな。」

「了解。そうじゃ小一時間くらいで出来るから待ってる。」

「はいよ。」

こうして俺は瓢箪と盃の作成に取り掛かった。

ちなみに使い方の荒い鬼のものなので普通の作り方で作るわけじゃない。

まあ、普通に作って耐久力を与えてやってもいいが、そうはしない。普通じゃない作り方のほうが作っていて楽しいからだ。

さて、普通じゃない作り方だが端的に言うところと圧縮して作る方法だ。これじゃ何を言っているのかわからないと思うので簡単に説明すると、

資材を沢山集める↓握撃↓形を整える↓完成！といったところだ。大量の資材を圧縮するので耐久力の面では桁違いに高いものが出る。

なにより花。になった気分で物づくりができるのでわりと楽しいのが利点だ。

ただこの方法だと資材の消費が激しいので、建築とかには使えない。もしこの方法で家を建てたなら、山の一つや二つくらいは消えることになる。

瓢箪などの小物作成だから使える技術である。

なんて説明してる間に盃と瓢箪が完成した。

あとは新しい酒虫から体液を採取して加工するだけだ。

まあ、それが一番面倒な工程なんだが。

実は酒虫は特殊調理食材である。特殊調理食材って指定したのは俺だけ。

特殊調理食材の基準がなんなのかはし。ぶーじゃないのでよく分からないけど、

なんか特殊で難しいのをそう呼ぶことにしている。

ここで酒虫の体液の採取および加工法をだらだら述べても誰得なので、

俺の感覚で説明すると、こうサンサンとしてやったー！ってなつて、ザァーっとしてやだー！ってなつてからそおい！！ってしたら完了だ。

「こうして完成した盃と瓢箪がこちらになります。」

「お、早かったね。」

「いやあ、助かる。ありがとうな！」

「どういたしまして。」

こうして完成した盃と瓢箪を持って二人は天狗のところへ上機嫌で出発した。

あれ？これだと伊吹箏の製作者、俺になるんじゃない？

またしても歴史に介入してしまったけど、いいのかな。

まあ、大したことじゃないしいいだろう。うん、そういうことにしよう。

とか何とか考えていたら次第に面倒臭くなってきたので、俺は考えるのをやめた。

二十九話 ちょっとクリムゾンッ！！（後書き）

いやー、久しぶりに我が家に帰りつきました。

帰りつけた喜びと疲れによる異常なテンションで書いた結果がこれだよー！！

4月はマジ忙しすぎる。ブラック会社ってレベルじゃ（ry

ついでに言つと明日休みが取れたんですけど、明日の更新はありません。

なぜならV8が俺を呼んでいるからです。今作は銀ネ目指して頑張ろう。

三十話 山を去る（前書き）

死月終わっ たんですか！

もう会社に連泊しなくていいんですか！

n . | , n

ゝ (^ ω ^) ノ

やった——！

三十話 山を去る

萃香と勇儀が天狗のところに殴りこみ早一年。

現在、鬼の山は元鬼の山となりつつある。

存外天狗が強かったため鬼が気に入って天狗の所へ入り浸るようになり、

遂には山にいたほとんどの鬼が天狗の所へ移り住んでしまったからだ。

今、鬼の山にいる鬼は白田と酒虫研究担当の鬼が二人の計三人。

酒虫の研究自体は既に終わっていて、今やっているのは交配作業のみ。

俺が研究をはじめてから丁度100種目の新しい成虫が今できたところだ。

区切りもいいので、この辺で終わりにしようかと考えている。

「という訳で今を持って酒虫の交配は全て終わりだ。お疲れさん。」

「お疲れ。それじゃ俺達は天狗の所に行くけど、お前はどつする？」

「どういう訳かは聞いてこない。こまけえことは気にしないのが白田である。」

「俺は旅にでも出るよ。酒虫の管理はお前に任せるわ。」

「そうか。ま、酒虫の管理なら任せとけ。」

交配して出来た新種の酒虫は野生の酒虫と違い繊細な飼育が求められる。

種類毎に繊細で様々な飼育方法が必要な酒虫をこの大雑把な性格の鬼に管理を任せる。

常識的に考えるなら狂気の沙汰である。しかし、白田には能力がある。

”過去の行動を再現する程度の能力”

これが白田の能力だ。

具体的に言っていると自分が過去にした行動と同じ動作を完璧にこなすことが出来る。

自分限定のム。ディー・ブ。ースといったところか。

既に一通りの飼育をさせているので、後は能力で管理できるというわけだ。

正にルーチンワークの鬼である。種族が鬼だけに。

ま、酒虫は白田に任せておいて欲しくなったら天狗の所に行けばいいし問題ない。

他二人の鬼も白田と共に天狗の所へ行くだろう。

さて、残りの一人はどうするのか。

「幽香はどうする?。」

「そうね、せっかく壊れない家があるしここに住むわ。」

鬼が去っていく中、鬼目当てで来ていたはずの幽香はここを離れなかった。

どうやら家を気に入ってくれたらしく、定住するつもりのようなのだ。家を建てた甲斐があったというものの、実に建築家冥利に尽きる。そういえばこの山の南側の麓ってゆるい傾斜のすり鉢状の草原になってたな。

何年後になるかは知らんが、絶景に期待して少しだけ手伝いでもしておこうか。

「そうか。一人で住んでも退屈だろうから花でも育てたらどうだ？」

「住むといっても年中ここに居るつもりないわよ。ここを拠点にするだけ。」

「・・・まあ、私の居場所としては少し殺風景だし、花を育てるのは構わないけれど。」

「育てるなら多少は手伝おうか？」

「必要ないわ。私には能力があるもの。」

「”花を操る程度の能力”か。」

「そうよ。私が操れば、どんな花だって綺麗に咲き誇ることが出来るわ。」

「ふーん。でも種がなければ咲かせられないだろ？」

「まあそうね。ま、二、三日旅にでも出て集めれば問題ないわ。」

「二、三日ねえ・・・。それじゃあ近場しか回れないでしょ。」

「そうよ。何か問題でもあるのかしら。」

「いや、折角これだけ広い土地があるんだから、そこら辺の花で満足せずに

珍しい花で埋め尽くしたりとか独特にしてみたらどうかなと思ってさ。

そうすりゃここがお前の縄張りだつてのが分かりやすくて丁度いいじゃん。」

「・・・ふむ、一理あるわね。」

「だろ？そこで、だ。俺はこの国には無い珍しい種をいくつも持つてる。

優曇華の様な貴重な種は渡せないが、それ程貴重でないのはくれてやってもいい。」

「・・・見返りは何が欲しいの？」

「話が早くて助かるな。何、簡単なことだ。渡した種をきちんと育ててくれればいい。

いつの日か、お前の育てた花達の咲き誇る姿を見ながら一杯やろう。」

「・・・それだけ？」

「ああ、それだけだ。絶景を眺めて呑む酒は美味いからな。期待してるぞ。」

「ふふっ、結局酒をおいしく呑む為なのね。まあいいわ。その条件、

のみましよう。」

「それじゃあ早速種を渡そう。」

俺はスキマから向日葵の種を大量に取り出して幽香に渡し、育て方の説明をした。

南の麓が場所的にはいいことなどのアドバイスも入念にしておいた。

「それじゃ、早速種を植えてくるわね。」

「おう、気をつけてなー。」

幽香は向日葵の種を俺の勧めたところへ植えに向かった。

計 画 通 り

これで将来、あの草原は太陽の畑となってくれるはずだ。

「おい、公一。」

「おろ、なんだお前等、まだ居たのか。」

白田達が話しかけてきた。てっきりもう天狗のそこへ向かったのかと思ってたよ。

「まだ居たのかは酷いな。わざわざ挨拶しようとは話が終わるまで待ってたのに。」

「挨拶？」

「ああ、お前にや世話になったからな。礼を言っておきたい。ありがとうな。」

「どういたしまして。まあ、俺もいい暇潰しになったよ。」

「そうか、そいつは良かった。それじゃあな。」

「ああ、また縁があつたらどこかでな。」

「おう、またな。」

そう言つて白田他二名の鬼達は意気揚々と天狗の所へ向かつて出発した。

俺もそのうち行つてみようと思う。

次に会う時も白田は常識的な奴で居てくれたらいいなあ。

俺の知り合い、ほとんど常識を投げ捨ててる奴等だから常識人は貴重なんだよね。

長く生きてると常識的な事つてあんまり興味も湧かなくなつては来るんだけど、

やつぱり非常識つてのは常識があるから存在するわけさ。

白田みたいに平々凡々とした奴がいるから変人達が面白く見えるわけよ。

まあ鬼つて時点で全然平凡じゃないんだけど、その点はとりあえず触れないでくだしあ。

変人達つてのが一体誰のことかは言わないでおこうか。聞かれそう
で怖いし。

「壁に耳あり障子にメアリーってか。」

「そして隙間にゆかりーん、ですわ。」

「うおっ、急に出てくるなよ。」

びっくりした。ホントびっくりした。大事なこともないけど二回言いました。

このタイミングだから俺の心を読んで制裁しに来たのかと思った。でも、そういう雰囲気ではなさそうだ。

「それで？ 今日は何の用だ？」

「実は大陸の方で滅亡をもたらす妖怪が生まれるという噂があります。」

「単なる噂だろ。」

「単なる噂で済むならそれで構わないわ。一応、今日生まれるという説が

有力だと聞いたから念のためあなたに伝えておこうと思っただけよ。」

「ふむ。そんな大それた妖怪が生まれるんなら、それ相応の星規模の妖力が

感じられるはずなんだけどねえ。今のところ何にも感じないぞ。」

「そう。それならいいわ。でも一応警戒はしておいて。」

「へいへい。つつても警戒するに値しないけどな。妖力つてのは突然湧くこと自体
早々起こらないもんなんだよ。基本的には細かな力が集まって密度が高まるもんだ。

それに恐怖やらなんやらの思念とかが集まって形を成して妖力になるのが普通だ。

突然湧くケースなんてのは穢れとかの発生源を取り込んだ変異体とかじゃないと、

まず有り得ない。一応そういう例も過去にあるけど、まだ世界が不安定だった時の話だ。

今の力場が安定した世界でそんなことが起こるなんてことが――」

「分かった、分かったからやめて頂戴。長々と言われなくても、あなたの能力と

その感知精度の高さも知っているから。あなたがそう言うのなら信用するわ。」

ちよつとばかり警戒に値しない理由を説明したところで
あからさまに嫌な表情をしながら話を止められた。

以前、俺の能力について詳しく教えて欲しいと言っていたので、1
08時間耐久講座で

じっくりたつぷり教えた時のことがトラウマにでもなっていたんだ
ろうか。

「ん、分かればよろしい。まあ、この俺に感知されずにそんな力を
蓄えるなんて・・・

・・・おや？」

「どうしたの？」

「いや、なんか……あれ？」

何か俺の乙女座センサー（力感知）が反応しているんだけど……しかもこれ中国が発生源か……？てことは紫の話はマジ話だったのか？

中国で発生して身にまとう妖力が日本の奥地まで届くってどんな力だよ……

まずいよなあ……確かに地球滅亡クラスはありそうだもんなあ……

やばいわこれ、俺の全力出せるかもしれないなあ。

「ふふ、ふふふふ。こいつは面白くなりそうだ。」

「ちょっと、なんなのよ。ちゃんと説明しなさい。」

「悪いな紫。お前の言ったこと本当だったわ。」

「えっ」

「滅亡をもたらす妖怪とやらが生まれた。」

「な、なんですって……！」

「敵に遅れを取るわけにはいかん、行くぞ！」

「待ちなさい！まずは協力者を集みましょう。」

「私は我慢弱い。」

「待ちなさいったら！ たった一人でどうするつもりなの！？」

「斬り合うも一興！」

「斬り合う！？ そんなの策ですらないじゃない！ あなたは分かっているの！？」

この戦いはこの世界の――」

「皆まで言うな、先刻承知だ。」

そりゃ、この一戦が世界の命運を分かつことくらいは分かる。それ程の力だ。

だから俺が全力で戦う。正直、有象無象の協力者が居たんじゃむしろ邪魔。

呼ぶよりも戦火が広がりそうなところに居る奴等を退避させておくべきだ。

最もこれ程の妖力なわけだから近場において逃げれる奴ならとつくに逃げてるだろうし、

逃げることもできない程度の奴等はこの強大な妖力にあてられて消滅しているだろう。

あとは現地で境界操って戦場の空間を隔離してやれば問題ないだろう。

みwwwなwwwぎwwwつwwwてwwwきwwwたwwwwww
ww

「……………本当に一人で大丈夫なの？」

「ならば宣誓しよう。私、佐原公一は一人で滅亡をもたらす妖怪を退治することを。」

「……でもせめて結界や力場を展開する補助役くらいはいた方が――」

「男の誓いに訂正はない。」

「……はあ、分かったわよ。あなたの力を信じて、この件はあなたに任せるわ。」

どの道、あなたより強い知り合いなんて居ないしね。」

一歩も退かない俺の態度に早くも紫が折れた。

某ガンデレ上級大尉の台詞はこつも容易く交渉してくる相手の心をへし折るものか。

なんていうかこつ、交渉とかそういうレベルじゃねーぞって感じが相手に伝わって、

すごい勢いで、「うん、これ無理」みたいな感情を湧かせるんだろ
うな。

誰だってそーなる、俺だってそーなる。

「任せときな。さて、それじゃあ早速いつてきます。」

「ええ、頼んだわよ。」

こつして俺は中国へと旅立った。

三十話 山を去る（後書き）

急展開

もうちょいあーだこーだしてこの展開に持つてくつもりだったけど
いいや

三十一話 中国再訪（前書き）

明日から西日本に旅行に行きます。
ああ、連休って素晴らしい！

三十一話 中国再訪

「ここら辺だな。」

俺はスキマを使って中国へと渡った。

滅びをもたらす妖怪とやらは力を辿るにこの辺りに居るはずだ。

近くに来てみて分かったが、こいつは本当に別格の力を持つてる。

今、俺の居る地点に紫が居たとしたら、おそらくは気絶しているだろう。

指向性を持たせてない自然に体から溢れ出ている妖力でこれ程とはな。

多分、力の総量だと俺と同じか少し多いくらいはありそうだ。

まあ、力の量が勝敗を分かť絶対条件ではないし、そもそも俺の能力で力奪えるし。

さて、それはさておき2、3 km 程の周囲の状況を確認次第、空間隔離を開始しよう。

まあ、確認せずとも発生から2、3分経ってるし誰も居ないと思うが。

「この辺に居るのは……例の妖怪……ん？もう一人いるな。」

ていうかもう一人は近づいてきてるな。

なんでわざわざこんなところに来るかねえ。自殺志願者か？

紫の十数倍程の力を持つてるようだけど、その程度でここに来るとは。

ま、とりあえず追い返すとしますか。巻き込んだじゃうのも悪いし。

「おーい、その奴ー。ちょっと止まれー。死ぬぞー。」

「ほっほ、既に死んでおるのに死ぬぞと言われてものう。」

「おや？なんか見覚えがある爺さんだな。なんかこつ、高性能な感じの。」

「あれ？お前、黄か？」

「いかにも。久しぶりじゃのう。」

「確かに久しぶりだな。何百年ぶりだろうか。」

「ほっほ、何百年かのう。随分前に時間の感覚がなくなつての。」

「そりやもう歳だからボケてんだよ。ところでお前、人間だったよな？」

「うむ。人間じゃったぞ。今は神霊じゃがの。」

「え、お前神格化したの？」

「ふむ。話せば長くなるんじやが、とある村の邪神と刺し違えて死んでから、ふと気付いたらその村の祠に祭られて神霊になつたとたわ。」

「話短つ。全然長くねえよ、それで長いんならこの世の文章ほとんど長いよ。」

「そうかのう。美鈴じゃったらこのくらいの文章を読めば寝てしま
うかのう。」

「そりや美鈴が文に耐性がないだけであって、それを長文の基準に
するのは良くない。」

「つか美鈴ごんだけ文章耐性ないんだよ。手紙とか読みきれないレ
ベルだぞ。」

「ほっほ、武術家は拳で語るものじゃからのう。言葉は不要じゃ。」

「いや、かつこよく言ってみても日常生活に支障をきたすレベルだ
からね。」

「お前も師匠なら、そういう常識的なことは武術以外のことでも教え
てやれよ。」

「ときにお主も今生まれた妖怪が目当てで来たのかのう?」

「露骨に話題を変えてきた・・・いやらしい・・・ま、その通り
だが黄もか?」

「左様。伝説の妖怪^{とん}?貪が生まれたとあらば退治するほかあるまい。
」

「とん?生まれたばかりの妖怪なのに何か知っているのか?」

「うむ。とんというのは何でも食らう伝説の妖怪じゃ。」

「なにそのマッドモンスター。」

「伝説によれば自分以外の全てを食らい、尚も止まぬ食欲で遂には

自分を食べてしまい
全てを無に返す滅びの妖怪という話じゃ。」

「おいおい、それどこ情報よ。」

「神情報じゃ。」

「神情報!？」

「うむ。今の神界は便利でう。詳しい説明は省くが神雲という神々の持つ情報を相互に接続したものがあつての、それを介してすぐに情報が得られるんじゃよ。」

慣れてしまえば、これがない生活など考えられなくなるほどのもんじゃ。」

神は言っている、ネットなしとかマジありえねえしwwwと。いやいやいや、近代化しすぎだろ。一体神界で何があつたんだよ。

・・・そうじゃなくて、今は情報の真偽が問題なんだよな。

世界の始まりから居る俺が、そんな妖怪見たことも聞いたこともないのに

語り継がれて伝説につて、どう考えてもおかしい。ガセかな？

最もガセだろうがなんだろうが危険な妖怪が生まれたことに変わりはないし、

世界を滅ぼそうとするようなら退治するだけの話だが。

「ま、神情報つてのは分かったけど、お前の力でどうにかなる程の妖怪じゃないぞ。」

「ほっほ、戦いとは力が強い者が勝つというわけじゃないんじゃないかよ。」

「そりゃそうだが、お前の力じゃ今ここに居るだけでもしんどいはずだろ？」

「戦いが始まればその場に留まることだって難しいはずだ。それでどう戦うんだよ。」

「ワシは死んだ後に能力を得ての、それが奴に通じればあるいは勝てるかもしれん。」

「能力？」

「うむ。」 同化する程度の能力” といったの、どんなものとも同化できるんじゃないか。」

「へえ、そりゃまた随分な能力だな。」

「そうじゃろう？これでまずとんと同化してワシはとんとなり、しかる後に無と同化することとんを消し去るわけじゃ。」

「死ぬ気か。」

「ほっほ、もうワシは死んどるよ。」

「それにその策、大穴が開いてるぜ。」

「ふむ。穴とな？」

「ああ、まずとんと同化できるかだ。お前が能力を使う前にやられる可能性は高い。」

更にとんにお前の能力が効くかも怪しい。とんが妨害能力を持つてるかもしれないし、

何より、大概の干渉系の能力は力量差が激しいと無効化される場合が多いからな。

そして仮に同化できたとしてもとんの行動権がお前に渡るかどうかもかなり怪しい。

憑依、同化、支配、侵食等の能力は力量差が激しいと大体術者が逆に取り込まれる。

お前の能力の質次第といえはそれまでだが、少なくともお前とんの力量差じゃ、

過去に存在したそれ系のあらゆる能力よりも飛びぬけて優れていない限り無理だな。」

「なるほどのう。しかし、それでもやってみなければわからんぞ？」

「そりゃそうさ。だが旧友が消滅するのを見過ごすほど俺は冷たい人間じゃない。」

「見過ごさないというならどうするというんじゃ？」

「俺がとんを殺る。それだけのことだ。」

「ほっほ、大きくでたのう。しかしお主の力でやれるものか？」

「やれるさ。全力ならな。」

「ふむ。お主の力は底が見えんからのう。任せるのもやぶさかでは

ないが……。」

「まあ、ここは俺の力を信じて退いてくれないか。」

「むう……。しかしじゃな、ワシもこの地の神霊としての――」

「面倒だからはっきり言おうか、お前がここに居ると俺が全力を出せない。」

「ほっほ、ワシが邪魔と来たか。」

「ああ、その通りだ。なんならここから力づくでつまみ出そうか？」

「……ふむ。本気で言っておるようじゃの。」

「ああ、本気だ。とんは俺一人で殺る。誰にも邪魔はさせない。」

「……仕方ないのう。じゃが黙って退いては神霊の名が廃る。」

「ほっ、じゃあ俺に挑んでみるか？」

「ほっほ、これからとんと戦う者を無意味に消耗させたりはせんよ。」

「ならどうする気だ？」

「簡単な話じゃ。ワシの力をお主に託す。これならワシも神霊としての面目が保つ。」

「成る程ねえ。とんと直接戦わんでも、力を託して間接的に参戦し

たことにすると。

それにお前の能力は俺が使うのならとんにも通じるかもしれないしな。」

「お主も有利になるし、ワシも面目が保てる。いい落とし処じゃろ？」

「本当は助力なしでやりたかったんだが、ここは旧友の顔を立ててやろうか。」

「ほっほ、恩に着るぞ。」

「ああ、何かの形で返してくれよ。それじゃ力を奪うぞ？」

「うむ。やってくれい。」

俺は黄の能力とある程度の神力を奪った。

能力はともかく、神力は大した量じゃないが、まあ多いにこしたことはないか。

「よし、お前の力、確かに俺が預かった。」

「ほっほ、それじゃあ頼んだぞ。」

「ああ、任せとけ。」

俺に力を預け、黄は去っていった。

黄の力が10km程離れたところで周辺の確認をすると、今度こそ俺とん以外は

居ないようだったので、境界を操り、空間を隔離した。

すると、とんは周囲の異変に気付いたのか、咆哮をあげてこちらに向かってきた。

「さあて、戦闘開始といきますかね。」

三十二話 決戦（前書き）

博多、広島、名古屋の飯は最高に美味しい！

また暇が出来たら旅行しようとか心に誓いました。

まあ、この小説にはやっぱり関係ないんですけど。

三十二話 決戦

グロオオオオオ！！！！

けたたましい咆哮と共にとんは襲い掛かってきた。
姿は龍に近い形で体長は5m程といったところだ。

「また龍タイプかよ、やたら強いのは龍タイプばっかだな！」

無駄口を叩いている内に相手の攻撃間合いに入ってしまった。
突進の勢いをそのままに大口を開けての噛み付き。

「そんな大振りじゃ当たらんよ！」

俺は悠々と回避した。が、問題はその後に起きた。

とんが口を閉じると同時にガオンという音がして空間が歪んだのだ。
・・・いや、訂正しよう。

「空間を食った・・・。」

ただでさえ升じみた力を持つてるのに、億。やヴ。ニラみたいな升
能力持ちやがって。

きたいな流石伝説の妖怪汚い。・・・え？お前はどんなだった？
俺はいいの、修行とかもしたし。ノーカウント・・・！ノーカウ
ントっ・・・！

と、また余計なことを考えてしまった。集中、集中。

しばらくは相手の戦力を図りつつ様子見。これは狩りの基本だ。デカ物相手に戦力を図らず特攻すれば3死するのがオチだからな。相手の可能な行動を調べてから攻める。これは真剣勝負なんだ、ガン待ちで何が悪い。

そして様子見すると同時に相手から溢れた妖力は奪い取っていく。直接奪うにはまだリスクが高い。とんが俺より力を持っているからだ。

能力が完全にはつきりしない今、俺の能力干渉が逆に仇となる可能性がある。

もし、空間を食べる程度 of 能力なら問題ない。俺の能力を純粹に力で返されなければ干渉できるし、俺のは質が高い能力だから今の力量差程度なら余裕だ。

だが、あらゆるものを食う程度 of 能力とかなら俺の能力を食われ、がめおべら確定。

そんなリスクの高い行動はそれ以外に打つ手がなくなってからやることだ

戦闘開始約1分、とんの攻撃は噛み付き、尾撃、体当たり、口から砲撃といったところ。

噛み付きは隙が大きいが空間が削られる、尾撃は全方位攻撃で体勢も崩れない。

体当たり、砲撃は初動が分かりやすいが衝撃範囲が大きく近づくのは困難。

反応速度は俺が上だが、その他の能力はとんが上のような。

噛み付きが一番厄介。もしずっと噛み付きをされたら空間が減り続けてしまう。

一応、空間の補填は効くがそれより相手の噛み付き速度の方が速い。いずれ詰むことになるだろう。

”ぶつかる爆音が起こる程度の能力”を与えた石ころをぶつけたところ、
なんの音もしなかったことから、能力無効化系の能力持ちであると思われる。
吸収系ではない。石をぶつけた後、とんが木にぶつかっても爆音が鳴らなかったからだ。

「さて、なかなかどうして分が悪いな。」

空間を削る能力だけだったなら、この隔離空間に置き去りにする手もあつたが、

無効化系能力じゃ、境界操作が無効化されて終わりだ。
無効化系である以上、直接的な相手の攻撃を能力で防ぐのはできない。

力を奪おうにも無効化されてしまうからな。

となると体当たりか砲撃に合わせるくらいか。

出鼻のタイミングに完璧にあわせ、直撃は避けつつ衝撃の威力を奪えるだけ奪って

突っ込み、とんが反応する前に攻撃して離脱がベストかな。

距離とって砲撃合戦だと、ダメージになりそうな砲撃はかわされるだろうし。

近接での反応速度の差につけこむ他なさそうだ。

ゴアアアアアア！！！

「ふっ！」

砲撃に合わせて一気に踏み込む。

余波でも吸収しきれず、だんだんと傷がついていくが気にする程度じゃない。

「せいっ！！」

ズドッ！

右腕に集めた最大限の破壊力の塊をぶつけて離脱。

「はは、なんてタフネスだよ。」

地球を粉に出来る程の破壊力を込めたはずの一撃で出来たことは、とんの体勢を少し崩し、体表を薄皮一枚程度削ることだった。

「参ったね・・・単発じゃ意味がなさそうだ。」

ただでさえ妖力が次々に生みだされているんだ。

単発のダメージ<成長なのは明らか。ダメージを蓄積させるとしたら、

俺の攻撃力じゃ絶え間なく攻撃するくらいはしないとまず無理っぽい。

「しかし、どうやってやろうか。」

俺よりデカくて速くて硬くて強い相手に絶え間なく攻撃とか無理ゲー！。

ごり押しとか俺の耐久力じゃ無理がありすぎるし、本当にどうしょ

うか。

うーん、近距離にスキマ大量に開いて包囲攻撃とかか？

いや、逆にスキマに衝撃押し込まれたら俺がやばいよな。

スキマって意外と開いたり閉じたりするのにタイムラグがあるし。

戦闘向きの能力関係も相手に当たって無効化されちゃ使えないしな
！。

空間作用系の能力も触れたそばから順次無効化されたら意味はない
し。

・・・ん、いや、そうだ。いいこと思いついた。

「試してみるとするか。」

俺は黄から奪った同化する程度の能力で周囲の空間と同化した。

同化しようとすると同時に同化できた。解除も同じくラグなしだ。

「んー、なんか妙な気分だけど、問題なさそうだ。」

簡単に作戦をまとめると、俺が空間になることで体積超うp。

とんとの接触面は普通の空間に戻るがほんの一部なので気にしない。
とんからの攻撃に合わせて攻撃範囲の空間から能力解除することで
俺ノーダメ。

能力のONOFFだけならとんどのどの攻撃よりも余裕で早くできる。
常時とんを包囲している形は崩れないので、全方位から破壊力の塊
を形成して攻撃。

全方位同時連続攻撃を避けるのは不可能↓とん常時被弾、というわ
けだ。

どうです？汚いでしょ。

「でも武とは汚きものつて郭。皇がいつてたし。」

別にいいでしょう。相手化け物だし、きっと超許されるはず。

早速攻撃開始。なんていうかフ。ンネルとかドラグ。ンってこんな気分なのかな。

一方的にとんでもない威力の攻撃を重ねていく。

グロオオオオオオオオオオ！！！！！！

とんは暴れ回るが反応速度は俺の方が上なので、俺に攻撃は当たらない。

一方的に殴られる痛みと怖さを教えてやっている状況だ。

二日程経つただろうか。止むことのない攻撃によりとんはもうボロボロになっている。

まあ、ここまで攻撃に耐えられるタフネスは規格外すぎるが、もう一押しだ。

「とんッ！引導を渡すッ！！」

攻撃を続けつつ、最大級の斬撃の用意をする。

「切り捨て！ごめええええんッ！！」

スパッ

全方位同時斬撃によりとんを17分割した。

「勝ったな、私は帰還する。」

倒したことだし、空間の隔離を元に戻し帰るとする。
が、その時異変が生じた。

17分割したとんの体が光り始めたのだ。

「なんだ・・・？」

次の瞬間、銀色に光る糸がとんの体を包み繭を作り出した。
その姿、正にタ○ンシリーズ。

とか思っていたら、糸が触手のように伸び辺りを飲み込みはじめた。

俺はすぐに繭の周囲を空間隔離して離脱した。

しかし、隔離はすぐに無効化され、糸がとてつもない勢いで辺りを
飲み込んでいく。

「まじかよ・・・。ここからが本番ってことが。」

とりあえず力の塊で攻撃してみるも全て飲み込まれてしまう。
能力は効かない、攻撃は吸収される。あ、これ詰んだわ。

「打つ手なしか・・・!」

こりゃダメだ。終わってたわ。

と思ったその時、世界が停止した。

時間が停止するなんてチャチなもんじゃない。世界がそのまま停止した。

「どるーん、待ったー？」

「あんたか・・・。」

某タックルデレのような気の抜けた台詞と共に世界の主が現れた。

三十二話 決戦（後書き）

意外ッ！それは世界の主！！

升級の相手を更なる升級の力でねじ伏せる的な展開ってなんていうかこう、少年誌のバトル漫画の強いのが出てさらに強いのが出てもっと強いのが出てっていうエンドレス展開に通じるものがあると思うんですよね。

まあ俺の駄文はエンドレスにしないんですが。

三十三話 俺ってそついやアライトだったね

「いやー、間に合ってよかったわ。」

「そついやお前、俺の滅びそうな予感が伝わるんだったな。」

「そつそつ、それで今駆けつけたわけなんよ。」

「遅くね？俺確かとんと戦い始めた辺りでヤバイと思ったはずだけど。」

「いや、それには事情があつてな。」

「ほう、それじゃあ聞かせてもらおうか。その事情とやらを。」

前はデスレーベルの為に急いで帰ったこの男の事だ。

どうせ岩男X6をバスター禁止のX縛りでやって遅れたとかそんなんだろう。

「実は、岩男Xシリーズをオワタ式で攻略しててちよつとな・・・。

」

惜しい。

どちらにせよどうしようもない理由で二日も放置してくれたのは変わりないが。

「そつか、それで何か言うことはあるか？」

「ごめんなさい。」

「よし、許す。」

「え、まじで？」

「ああ、俺も前にこの星滅ぼしちゃってるからな。これで貸し借り無しだ。」

「そついやそうだったね。」

「忘れてたんかい。」

「い、いや忘れてないよ、うん。どうして忘れたって証拠だよ。」

「落ち着け。・・・で、こいつはどうするんだ？」

「あ、ああ。とんは消すよ。ちょっと強くしすぎちゃったし。」

「ちよつとどころじゃねーぞ。俺が居なけりや相当やばかったし。」

「いやー、バランス調整ってあんまり得意じゃないんよ。」

「絶望した！世界を創った奴がバランス調整へたくそで絶望した！」

「いやいやお前、バランス調整って結構むずいんだよ？むしろ得意な奴が珍しい。」

「成程、それで災厄と絶望の心折設計で出来た世界ができあがるんですね。」

「ほほう、なかなか心に傷を負うようなこと言ってくれるじゃないの。」

「言われないようなバランス調整を心がけることだな。」

「ぐぬぬ……。何か言い返したいけど言い返せない……。」

「言い返さなくて結構。さっさとこいつ消さないか。」

「あー、ちょっと待つとれ。」

そう言つて世界の主は棒のような物を出してとんに突き刺した。しばらくすると、とんは蒸発するように消えていった。

「なにそれ、すげえ。」

「これは削除用アイテムだ。管理状態の世界の物は何でも消せる優れもの。」

「管理状態？」

「そうだな。お前に分かるように言つたらデバッグモードといったところか。」

「あ、だから世界止まってんのか。」

「そうそう。」

「で、なんで俺は止まってないわけ？」

「お前はイレギュラーだから。あくまで別世界の者なんだよ、お前は。」

「あー、成程。お前には俺の管理権限がないってことか。」

「そういうこと。そんじゃワシ忙しいからもう行くわ。」

「またオワタ式チャレンジか？」

「いや、お前の元居た世界の主とド力ポ。ガチ勝負だ。じゃあな。」

「え、ちよつとまて・・・」

待てと言う前に世界の主は帰っていった。

ド力ポ。二人とか・・・やるなら四人でやれよ・・・
じゃなくて俺の元の世界の主とやるって言ってたよな。

いつの日か、そいつに会えれば元の世界に戻ったりもできるのか・・・？

まあいい、次会った時にでも聞こう。

と考えていたら、突然目の前に雷が落ちてきた。

「あつぶねえ。・・・おや？」

雷によって焼かれた地面が文字の形をしている。

「なになに・・・『世界を管理状態から通常状態に戻したら何故か知らんけど、

お前の居る場所の時間軸ずれちゃった。多分数百年くらい進んじや

ってるわ。

メンゴツゴ、ゴメソ！AA略。』・・・なんじゃこりゃ。」

えーと、何でか知らんけど俺がタイムワープしたってことかい？

あいつ次会ったらしばく。絶対しばく。半分死ぬまで殴る蹴る等の暴行を加える。

大体なんだよメンゴツゴって。しかもAA略とかそんなAAねーから！

・・・ふう、ちょっと落ち着くでしょう。

えーと、何故か知らんけど数百年ほど飛んだってことなんだよな。数百年つても随分アバウトだけど、今何時代辺りになっているんだろうか・・・。

そもそも俺の知ってる歴史とはちよいちズレがあつたんだよな。まあ、俺のいた世界とは別世界なんだからそれは仕方ないことだろうが。

「そこで何をしておる！」

おや、なにやら高性能な感じの誰か来たようだ。

「その場所はワシの友が眠っておる場所・・・・・・・・！？」

「ういーっす。久しぶり、になるのかな。」

「お、お主、生きておったのか・・・？」

「おうよ。俺がそう簡単にくたばるわけないだろ？」

「ほっほ、そうかそうか、生きておったか。よし、今日は宴じゃ！
来い！」

「お？ちよ、待てって！お前瞬間移動使えたのかよ！？速いって！
！」

「つか、なんか神格が随分上がってるな黄。なんだか見違えたよう
だ。」

「まあ、この高性能おじいちゃんのことだし、数百年あれば当たり前
なのかもな。」

「近くの空き地——かなり綺麗に整備された場所で中心に墓標があ
る。」

「ここは？」

「ワシの墓じゃ。」

「おま、墓地で酒盛りとかないわー。」

「ほっほ、ワシ神霊じゃし。ワシにとっては家じゃ。」

「でも気分的になんかこう・・・ねえ？」

「ほれ、供物の酒があるぞ。神力でキンキンに冷やしておる。」

「お、悪いねえ。まあタダ酒が飲めるなら別にいいかー。」

「ほっほ、現金じゃのう。・・・それじゃ乾杯といこうかの。」

「おう、乾杯！」

こうして上等な酒を呑みつつ、色々と話をした。

俺がいなくなっってからしばらくの間、紫がこの地にちよくちよく現れたこと。

とん退治の一助をしたことにより黄の神格が上がり、力が増えたこと。

俺がいなくなっしてからどのくらい時が経ったか覚えていないボケ爺黄が西方に出向いたとき、美鈴を見かけて相変わらず可愛かったこと。

俺ととんの戦いのこと。俺が数百年いなくなった理由など。

そんなこんなで夜が明け、酒も尽きた。

「さて、それじゃ俺、そろそろ行くわ。」

「なんじゃ、もう行くのか。」

「ああ、今の日本がどうなっているか気になるしな。」

「ほっほ、そうか。ではまたのう。」

「ああ、またな。・・・そうだ。」

「なんじゃ？」

「お前に能力返しとくわ。」

すっかり忘れそうになっていたが、能力を奪いっぱなしだったので、俺は黄から奪った同化する程度の能力を返した。

「ほっほ、そんなもの返さんでもいいのにのう。」

「本来あるべき能力者のところに収めた方が良さそうだろう?」

「そういつもんかの?」

「そういうことにしとけ。お前もあつて損はないだろう?」

「まあそうじゃの。」

「だろ? そんじゃ返したから。じゃあな。」

「元気での。」

そして俺はスキマを開き、日本に向かった。

三十四話 幻想郷プロジェクト、始動

スキマを通って日本へ渡ると、奈良時代辺りの文明が栄えていた。おそらく平城京だろうと思える都が見えるし。

「んー、そこそこの時代が進んだようだな。」

とりあえず知り合いに挨拶周りでもしに行こうかと思ったが後回しにする。

この時代の一大イベントを思い出したからだ。

「そっぴゃ竹取物語の時期だよな。」

折角だし、輝夜に会いに行ってみよう。もこたんもいるかもしれない。

それに輝夜月帰還イベントが起これば、久しぶりに永琳に会えるだろうし。

「善は急げだ、早速行ってみよう。」

俺は都に向かって走り出した。

しかし、気付くと地面が裂けて俺は穴に落ちていった。

「救命阿！」

「何言ってるのよ。」

「いや、地割れに飲まれたらこれしかないなと思って。」

「いきなり意味の分からないことを言う辺り、変わらないわね。」

「人間、根本的なところはあんまり変わらないもんよ。」

「ふふっ、まあいいわ。おかえりなさい。」

「おう、ただいま。」

地面が裂けたのはスキマでした。

俺がスキマを使ったのに気付いて、わざわざ出向いてくれたらしいもののぐさに定評のある紫にしては珍しいこともあるもんだ。

こうして俺にとっては3日ぶりだが紫にとっては数百年ぶりの再会となった。

「それで？この数百年、一体何をしていたの？」

「実はかくかくしかじかということがありましてな。」

「かくかくしかじかって何よ。ちゃんと日本語で話さない。」

「えー、この省略会話通用しないんですか。ちょっと空気読んでくださいよ。」

「なんとなく分かる範囲なら、ノッてあげてもいいけれど数百年のことよ？」

「なんとなくで流してあげる気にはならないわね。」

「しょうがないなあ、じゃあ話すけど信じろよ？」

「ええ、あなたが真実を話してくれるのなら、ね。」

「俺がお前と別れて2日間滅びをもたらす妖怪と戦って、その後、時間跳躍して

昨日になつて、現地の知り合いと酒盛りしてから日本へ渡り今に至るというわけ。

まあ、お前は俺と別れてから数百年のことを詳しく聞き出したいんだろうけど、

俺はお前と別れてから3日しか経ってないんだよね。」

これを聞いて紫はポカンとした表情でアホ面を晒した。
アホ面もまたかわいいものですな。脳内に永久保存や。

「・・・本当？」

「本当だ。」

「・・・嘘は言っていないようね。」

「おうよ。天地神明に誓って嘘なんか言っていないぞ。」

「そう。いいわ信じてあげる。」

「そうか。それじゃ、俺は行くぞ。」

「行くってどこへ？」

「都。」

「何をしに？」

「観光？」

だよね、多分。

輝夜ともたんとついでに阿礼もいるはずだからその辺を見に行くわけだけど、

これ、観光に分類していいよね？俺的には訪問っていうか観光って感覚だし。

「いや、疑問系で返されても困るのだけど。」

「こまけえことはいいんだよ！じゃあな！」

「ちょっと待ちなさい、話があるのよ。」

「話？」

「ええ、私の計画についての話よ。」

「ふむ、まあ聞こうか。」

「実は方向性を変えようと思っているの。」

「どういう風に？」

「今までは協力者を増やして世界そのものの仕組みを変えようと思っていた。

でも、それには時間が足りなすぎる。私の概算では達成まで約64億年かかるわ。」

「ふむふむ。それで？」

「そこで、小規模の隔離世界を作ろうと思うのよ。」

「具体的にはどうするんだ？」

「場所はもうおおよそ決めているわ。そこに行きだけ理性的で強力な人妖を集める。

そして人の住む里を中心に私に協力してくれる妖怪達の縄張りを作り上げ、里を囲む。

そうすることで、内部の人里と外部の人里との交流を制限し、文明の進みを遅らせる。

然るべき時が来たら私の能力でその場所を隔離し、理想の世界を作るというわけよ。」

「ふーむ。話は分かったけど、それじゃあ人妖のバランスがとれんだろう？」

人里が妖怪に襲われて滅んで終わりにならないか？」

「その為の人の戦力確保はもちろん、妖怪もあまり人里を襲わないように呼び寄せる

各勢力に協力してもらうわ。私も出来る限りのことはするつもりよ。」

「

「それとお前の能力燃費悪いだろ、広範囲の隔離は厳しくないか？」

「そこは修行してなんとかするつもりよ。最悪の場合でも協力があれば問題ないわ。」

「協力ねえ。お前の能力は珍しいから、手伝える奴もそういないと

思っけど？」

「何言ってるのよ。あなたに協力してもらっに決まってるじゃない。」

「え、俺？」

「そうよ、あなたは私の能力を共有して使えるでしょう？なら適任じゃない。」

それに私の計画に協力してくれるって約束があるわよね。」

「協力する・・・！協力するが・・・、約束した時、いつまで協力するのか、

その期限までは指定していない。そのことをどうか紫も思い出していただきたい。」

つまり・・・俺がその気になれば協力を打ち切るのも可能だ・・・ということ・・・！」

「手伝ってくれないの・・・？」

紫は涙目になって俺の本能に訴えかけてきた。

こんなかわいい表情で言われて断れる男がいるだろうか。否、断じて否！断れるのならそれはもう男ではない！！

「是非手伝わせてください！！」

「そう、じゃあもしもの時はお願いするわね。」

「悔しい！演技だと分かっているのに引っかかってしまう！」

「涙は女の武器ですわ。」

「ぬふう……。」

ぐうの音も出ない。

まあ、元々手伝う気はあったからいいんだけど。

「んで、今のところは手伝うことはないんだよね？」

「うーん、出来ることなら協力してくれる有力な人妖を探して欲しいんだけど、

まあ居たら声をかけてくれるだけでいいわ。私も色々とアテがあるし。」

「把握。まあうまくやれそうな奴等がいたら声をかけとくよ。」

阿礼とか輝夜とか永琳とかな。もこたんは不死化してからだな。

「ええ、お願いするわね。それじゃ観光、楽しんできてね。」

「言われなくても楽しむよ、じゃあな。」

遂に幻想郷を作り始めた紫。世界規模の幻想郷になったらどうしようとか

割とガチで心配していたものだが、これで一安心だ。

安心して紫と別れ、都へ向かう。

スキマで都に侵入するのはいささか衆目を引きかねないので近くの

草原に出た。

「あわわわわ、ひ、人が湧いて出た……。」

おっと、誰もいないかと思ったら一人いたよ。失敗失敗。

「ちょっと失礼。」

俺は目にも止まらぬ早さでキ。ン流奥義を放った。

当然のように相手は倒れた。もちろん殺してなどいない、気絶させただけだ。

加減の匠であるこの俺にかかれば、このくらい朝飯前である。

八意式診察術で調べたところ、しっかり記憶障害を起こしていたと思う。

思うというのは、脳の状態からするなら記憶がなくなっているはずなのだが、

なにやら随分脳が活発に動いていて、通常の間人とは挙動が違っているからだ。

脳の挙動が違えば記憶に関しても忘れている保証はない。

とはいえ、非日常的な場面に出会い、気絶。

こんな状況で起きたことが現実だと思う人間はあまりいない。

目を覚ましたら普通の人なら夢で片付けるだろうし、問題ないだろう。

さて、俺が気絶させておいて野ざらしにしていくのは紳士にあるまじき行為なので、

気絶させた相手を抱きかかえ都に向かうとする。

こいつも運がいい。もし男だったら野ざらしにされていたわけだからな。

三十四話 幻想郷プロジェクト、始動（後書き）

竹取物語の時代がいつだったか忘れつつ、多分奈良くらいか思ってた書いた。

ぐぐってみたら大体そこらへんっぽかったので助かった。

時代の確認くらい書く前にしろよ俺とか思いつつも、歴史がちょっと違ってると的な設定を盛り込んでいたので、最悪矛盾が起きてもゴリ押しできるご都合設定最高！

・・・次からは多少調べてから書こう。違う時代の人とか出しちゃいそうだし。

三十五話 イメージと現実は違うもの

都に着いて間もなく、俺は兵隊に包囲されていた。

「貴様！そのお方に何をした！！」

どうやら、俺の気絶させた相手は何か偉い人物だったらしい。しかし、気絶したのを抱きかかえてるだけで包囲されるとか、俺、そんなに危ない人に見えるのかな。

「何もしてねえよ、道端で倒れていたから運んできただけだ。」

「嘘をつけ！文武両道、質実剛健で知られるその方が何の理由もなく道端で

倒れることなどありえん！それに加え貴様の面妖な出で立ち、信用できん！」

むう。確かに気絶させたのは俺だし、服装が現代のものである俺は、さぞ不審者に見えるのだろう。服装くらい変えときゃ良かった。

しかし、ここで一悶着起こすのはあまりよろしくないよな。都出禁とかなったら嫌じゃん。

ここは一つ能力を使うとしようか。

「おいおい、どんな人でも突然倒れるなんて良くあることだろ？それに俺の格好のどこが変なんだよ。」

「む、それは……。いや、酷い言いがかりだったな。そのお方は我等にとって重要な人物なのだ。過剰に反応してすまない。」

「……まあいいさ。ところでこいつの家はどっちだ？運んでやらないな。」

「それならば、我々が引き受けよう。」

「いやいいよ。あんた等は都の警備があるだろ？こいつは俺に任せとけ。」

「そうか。いや、すまないな。」

「なあに、いいってことよ。」

それから家の場所を聞いて、穩便に引き下がっていただいた。

さて、どんな能力でこんな結果を導いたのか、種明かしをすると境界を操る程度の能力で奴等の常識と非常識の境界及び信用する基準の境界を操った。

今の奴等にとつては人が道端で倒れるのは常識になり、俺の格好も常識的に映り、

さらに見知らぬ人物に対する信用基準が著しく低い。

まあ、なかなか難しい能力の使い方なので、持続時間はせいぜい小一時間程度だが、

今はそれで十分。ちなみにこの使い方はものすごい力量差のある弱者にしか通用しない。

兵隊共が雑魚ばっかで良かった。

それから歩くこと約20分。

「ここか。」

目的地はものすごいでかい屋敷だった。

俺の家も酒蔵とかそういう生産設備含めれば相当でかいけど、この屋敷ほどじゃない。

規格外といえる規模の屋敷だろう。どんだけすごい名家なんだろうか。

「ごめんください。」

「お待ちしております。どうぞお入り下さい。」

「え、待ってたって?」

「先程、警備部隊の方から連絡を受けまして。阿礼様を助けていただき誠にありがとうございます。」

「ああ、あいつらが・・・って今阿礼って言った?」

「はい。そのお方は当家当主、稗田阿礼様でございます。」

なんと!こいつ阿礼だったのか!

これはまたセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられないな。

しかしなんかこう人物像が俺の中のイメージと違うな。

俺のイメージだと稗田家っていうと虚弱体質なイメージがあるんだよね。

この阿礼はさながらアスリートみたいな感じで身長も160cmはあると思う。

この時代で女が160cmもあつたら巨人の類ですよ。何食つて生きてきたんだ。

まあ紫とか勇儀とか幽香はもっとでかいし胸もでかいけど、奴等は人間じゃないし。

いやー、しかし阿礼がアスリート型とは驚いたわ。世の中何が起るかわからんね。

「・・・？あの、どうされました？」

おっと、名前聞いただけで驚いてたら変な人とみられちゃうな。

「いや、なんでもない。それで、どこに運べばいい？」

「いえ、阿礼様は私どもが運びますので、どうぞあちらの客間の方でごゆるりとおくつろぎ下さい。御用がありましたらお呼びいただければすぐにお伺いしますのです。」

「そうか。なにやら丁重にもてなして貰つてスマンね。」

「いえいえ、阿礼様を助けていただいた礼、少しでも返せればと。」

「そんな大したことしたわけじゃなんだけどな。」

そもそも阿礼気絶させたの俺だし。

「でもまあ、折角の厚意だし、甘えさせてもらつよ。」

そして客間へ通されてから約一時間。

「失礼します。」

「ん、なにか用？」

「今しがた阿求様がお目覚めになりました、貴方様をお呼びしておりますので、ご足労願えますでしょうか？」

「そうか、それじゃあ案内頼むよ。」

「それでは参りましょう。こちらです。」

徒歩約4分。実に長い廊下を歩き、辿り着いた部屋は金色の光を放っていた。

「すごい部屋ですね。」

「ええ、阿求様の鍛錬で部屋が壊れないよう、鉱石で部屋を作っております。鉱石の中でも最も高価なものを使用しておりますので、おそらくは国で一番の頑強な部屋だと思いますよ。」

「いやいや、そうじゃないだろ。黄金の部屋とかどんだけだよ。」

ていうか金って硬いんだっけ？割とやわらかい金属だったと思うんだけど・・・。

まあ、いいか。俺の家じゃないし、俺には関係ない。

「阿礼様、お客様をお連れ致しました。」

「そうですか、ご苦労様です。では下がって結構ですよ。」

「それでは失礼致します。」

そう言つて、案内してくれた人は戻っていった。

こちらとしては阿礼と二人きりで話がしたかったので都合がいい。

阿礼ということは俺がスキマから出たことを忘れていないはずだからな。

夢とも思ってくれていればいいが、絶対の記憶を持つ阿礼がそう思うとは考えられん。

話つてのはそのことだろうが、とりあえずは聞くとしようか。

「失礼する。」

「どうぞ。」

やたら重い金の引き戸を空けて中に入るとそこは鈍く輝く、目に優しい空間だった。

「豪華な部屋だな。」

「広いでしょう？この部屋は鍛錬場もかねていますので。」

そういうことじゃないんだがなあ。この屋敷の人間は常識がずれて
いるのか？

・・・まあいい。」

「それで、話があると聞いたんだけど？」

「ええ、気絶した私をここまで運んで下さったそうで。ありがとうございます。
」

俺が気絶させたことは覚えていないようだな。

まあ、”一度見た物を忘れない程度の能力”をもってしても見るこ
との出来ない速さで気絶させりゃ覚えられんよな。キ○ン流奥義最
高。

「礼には及ばん。それで話つてのはそれだけか？」

「いえ、実はお話したいことがもう一つありまして。」

「何かな？」

「単刀直入に申します。貴方は人間ですか？」

「人間ですが。」

「突然湧いて出てくる人間など聞いたことはありませんよ？」

「そういう人間もいるんです。一つ賢くなつたね！」

「ちなみにそのような力を持つ人の姿をした妖怪がいるとは聞き及んでいます。」

「そりゃ奇遇だね。妖怪もそんな力を持っているのか。」

「・・・貴方ではないと？」

「あんたの知ってる妖怪は人を助けるのか？」

「以前、気絶した木こりの男を助けるフリをして都に潜入した妖怪がいましたね。」

「あら・・・。ホントに奇遇だね・・・。」

どうしよう、まさか人間である証明をするのが難しい日が来るなんて・・・。

ああ、免許証で簡単に身分証明が出来た世界が懐かしい。

「それで、他に何か妖怪ではないという根拠はありますか？」

根拠って言われてもなあ・・・。
俺の身分を証明するようなのはこの世界には・・・一応、あるな。

「阿礼、お前神代のことについて詳しいんだよね？」

「ええ、よくご存知で。私の書き物の関係上、知るべき知識ですから。」

「じゃあ諏訪王国についても詳しいはずだよな？」

「もちろん。守矢の前身となる祟り神の治める地、ですよね。」

「その通りだ。その国で武神と呼ばれる現人神がいたことは知っているか？」

「当然です。佐原公一という名の武神で、どんな神よりも強いとされています。」

「正解。さて、その佐原公一が長寿の人間であることは知っているか？」

「本人曰く、人間だと言っていたそうですね。守矢の風祝の伝承です。」

「さすが、詳しいねえ。どうやってそれを調べてんだ？」

「全国行脚をしている際、現地に訪問し、風祝とお話させていただきました。」

「そうか、あの一族もまだ元気にやっているか。」

「おや？貴方も守矢の方と面識があるのですか。」

「そりゃあるよ。俺が佐原公一だもの。」

「・・・は？」

阿礼は何言っただこいつ的な顔でこっちを見てきた。

「まあ、突然言われても信用できんよな。だが守矢の奴が俺を佐原だと言えば信用できると思わないか？」

「それはそうですが。守矢の地はここから遠いのですぐに確認は取れませんよ。」

「俺にかかればすぐだ。」

「へっ？ わあっ！！」

俺は阿礼をスキマに落として守矢神社へと向かった。

三十六話 先生、顔面セーフって着地も含みますか？

「へぶっ！」

スキマから見事な顔面着地を披露してくれた阿礼。

その微笑ましい光景を見て笑いを堪えつつ、神力と妖力を少し開放した。

「公ーかい？」

「おうよ、久しぶりだな。」

俺の力を感知して出迎えてくれた諏訪子。

数百年経っているはずだが、未だに幼女のままである。安心安心。

「久しぶりなんてもんじゃないよ。何百年ぶりだと思ってるの？」

「さあ？俺にとっては一年半程度だけど。」

「はあ？」

「まあちよつとした事情があつてね。詳しいことはいずれ話すよ。」

「そう。それじゃ積もる話もあるし、久しぶりの再会を祝して宴会といこうか！」

「それもいいんだがちよつとその前に東風谷のを呼んでくれない？」

「ん、いいけど。なんで？」

「ちょっと用があつてな。そこに倒れてる奴に面識あるのつて東風谷だけなんだろう？お前も神奈子も人前には出ないだろうしな。」

「んー・・・、ああ！そいつは前にわざわざ私等の話を聞きに来た奴だね。随分熱心に聞いていったけど、また話でも聞きに來たの？」

「いや、今日は別件だ。・・・まあ説明すんのも面倒だしとりあえず呼んでくれ。」

「へーい。」

気の抜けた返事をして諏訪子は東風谷を呼びに行った。
するとんでもない速さで東風谷が出てきた。

「お待ちせしました！貴方様が武神様でいらっしゃいますでございましょうか！？」

「落ち着け。日本語がおかしいぞ。」

「はっ！！申し訳ありません！武神様にお会いできると聞いて興奮してしまいました！」

「なんで俺に会うので興奮するんだよ。」

「だって諏訪子様や神奈子様をも凌駕する神様ですよ！当然じゃないですか！」

「意味が分からんがいいから落ち着け。」

「痛たたた……。」

あ、阿礼が起き上がった。鼻血がすごい。

「あ！武神様のお連れ様ですか！ですよね！？」

「え、ええ。以前お会いした阿」

「あー！！お怪我をなされてるじゃないですか！！でも任せてください！そんな傷、守矢の秘術にかければ一瞬です！！」

「いえ、お気になさらず」

「ほあー……。痛い痛い……。」

ダメだ、東風谷は完全に暴走している。阿礼の話を聞いちゃいない。しかも秘術が痛い痛いのとんでけーとかないわー。

「刻まれし血肉を離れ地を駆け天に満ち――」

とか思ってたら一気に厨二詠唱発動しちゃった！なんだこれ。痛いの飛ばすどころか東風谷がすごく痛くなっちゃってるんですけど。

どうなってんの守矢の秘術。一族揃って黒歴史を紡ぐの？封印しな

いの？

「——その身に刻むがいい！ニー。ルンとんでけー！！」

最終的にVPと混ざっちゃった！！

「うぐうぐー！」

「おい阿礼！大丈夫か！」

詠唱が終えると阿礼がエク。デスみたいなこと言いながら黒いもやを出し始めた。

「心配要りませんよ。痛みが黒いもやとなって体から出ているんです。」

なんだ、そうなのか。

「痛みだけ抜き出すとは器用なことするねー。」

「ふふふ、この術はそれだけじゃないですよ。もやを全て出し切ると、次はもやが固まり百倍に膨れ上がります。そして、痛みの原因を生み出した相手の心にその痛みを叩き込みます！常人なら二、三発殴られた分を返すだけで廃人になりますよ。」

「怖っ！！何いい笑顔でとんでもないこと言っちゃってんの！？」

「諏訪子様が協力してくだされば更に百倍でお徳ですよ！」

「そんなセールストークみたいなノリで凶化の提案しないでくれる！？」

「まあまあ、それだけじゃないんですよ。実はこの術、心を壊しても殺しはしないのです！それにより傷をつけてくれた脆弱で下劣で下等な糞虫の家族が壊れたゴミ屑を抱えることになり、ゆくゆくは家庭の崩壊、一族の滅亡に繋がるんですよ！」

「口も悪くなってきたー！一旦落ち着け、な！」

「私は落ち着いていますよ！武神様のお連れの方に傷をつけた愚鈍で野蛮な知能の足りない下等生物に対して厳正なる裁きの鉄槌を下すのです！」

ゴアアアアア！！！！

「うおお、こっちきたー！！！！！！！！」

黒いもやが俺に襲い掛かってくる。

説明によると痛みの原因を作った者につて話だから、そりゃ俺に来ますよねー。

つーかなんて術作りやがったんだ東風谷の一族は。まるで狂気の沙汰……！！

危ないので呪力を奪おうとしたがとんとの戦いの疲れが癒えていない為、中々能力を上手く使えず、そんなにデカイ呪力でもないのだ

がほんの少しずつしか奪い取れない。

「やば・・・、このままじゃ能力が暴走しちまう・・・!」

そろそろ限界が近い。ここは一旦逃げるとしよう。

「スキマ退避ッ!」

隙間空間に逃げ込み隙間を閉じる。

黒いもやは隙間までは追って来れないようだ。よかった。

しかし、諏訪子や神奈子は東風谷にどんな教育をしてきたんだろうか。

このまま放置しておいたら、その内東風谷の一族から魔王とか生まれるかもしれないし、一度OHANASHIとかないとな
まあ、それは明日以降にするとして予想以上に疲れてるし休むとしよう。

「さてと、寝るか。」

翌日

「ひょおおおお!! 生神様だ! 生神様だああああ!!!!!!」

「これどういう状況？」

寝て起きて守矢神社に移動して、追尾してきた黒いもやから呪力を根こそぎ奪って住居の方に行くと、阿礼が諏訪子と神奈子に軟体生物の様に絡んで狂喜乱舞していた。

なんだろう。昨日、顔面着地した時にでも頭のネジが数本抜けちゃったんだろうか。

「あ、武神様。」

「おう、東風谷。」

昨日とは打って変わって落ち着いた様子だ。
というかなんかしょんぼりした雰囲気を感じられる。

「昨日は術を武神様に向けてしまい申し訳ございません。」

「ああ、いいいいいよ。気にしてないから。」

なんだ、昨日のこと気にしていたのか。

まあ、術の性質のせいであって東風谷が故意に俺を狙ったわけじゃない。

うん、東風谷は許す。でもその術の存在は許さない、絶対にだ。

「昨日の術なんだが、一度発動すると制御が効かなくなると見たが？」

「はい、その通りです。ご迷惑をおかけしました。」

「まあ、あの程度の迷惑なら別になんともないからいいって。ただし、その術はよくないな。いいか、お前の先祖にも教えたことだが、術というのは強力であればいいわけじゃない。必要な時、必要な力を出せることが重要だ。要するに場面に応じた制御が出来ることが大事なんだよ。制御が効かなくなる術なんてのはもつての外だ。その術は以降禁忌とし、封印しろ。」

「分かりました。武神様がそうおっしゃるのなら、本日これより封印します。」

「よろしい。……で、この状況を説明してくれないか？」

「はあ……。えーと、何から話しましょうか……。」

東風谷は昨日俺がスキマでいなくなったところから話し始めた。俺がいなくなっただけで、残された阿礼を招き、夕食としたらしい。その時、まだ阿礼と面識のない神奈子、諏訪子が自己紹介をしたのが事の始まり。

二人揃って神だと名乗り、そんな訳ないと阿礼が一笑に付した。怒った二柱がなんやかんやと色々言っても、阿礼にうまく受け流されてしまう。

そして阿礼が「神だというなら証拠を見せてください。」と言い出した。

すると諏訪子が「奇跡を見せてやろうじゃないか！」と言って、縁側に出た。

落ちている小石を拾い、何の変哲もない石だと阿礼に確認させると、諏訪子は神力を込め

湖に向かって投げた。すると湖に着弾した小石が大爆発を起こした。そして諏訪子は無い胸を張り、「どうだい？これが神の力さ！」と阿礼に言った。

すると阿礼は「本物・・・本物の神様・・・。」とつぶやき少しの間呆けてしまった。

その後、突然テンションが振り切れて、今もなお興奮が収まらないというわけだ。

俺がいなくなってから数時間、もう丑三つ時も過ぎたというのに、にぎやかなことで。

神に会うつてのはそんなにテンション上がることなんかねえ。

と思ったけど、そういえば俺も諏訪子に初めて会った時のテンションはやばかったな。

まあ、二柱はもう阿礼を引き剥がすの諦めてる様子だし、好きにさせよう。

「状況は分かった。ありがとな。」

「いえいえ、お安い御用ですよ。」

「ところでお前、もう随分な時間だけど寝ないの？」

「客人を寢床に案内しないと、と思って起きていたらこんな時間になっちゃいました。」

もうこの際なので、「ご案内するまで起きていようかと。」

「そつか。まあ無理はするなよ。」

「はい。」

一方その頃、都では阿礼失踪事件として警備隊の面々が夜通し探索作業をしていた。

三十七話 再包囲（前書き）

特大（ゝ・ω・ゝ）クッションをプライズで取った。

夏にはきつと営業神QB先生のクッションも増えるだろう。

この小説にはなんら関係はありません。

三十七話 再包囲

守矢神社へ移動して1日。

当初の目的である阿礼の信用の獲得は達成した。というか達成しすぎた。

俺が武神であることを知って、無礼を侘びたいと焚火の上で土下座をしようとして、

俺がそんな焼き土下座（上級）はやらんでもいいと必死で止めたので何とかなかった。

危うく阿礼が女史からこんがり肉にジョブチェンジするところだった。

それから夜通しのハイテンションで疲れた様子の阿礼を寝かせ、守矢の二柱とのお話。

主に教育についての話。東風谷が自身の祀る神への信仰が行き過ぎてちよつとというかなかなりヤバイ領域に入っていたからな。

信心深さが暴走すると、どのような悲劇を招くかということを体で覚えていただいた。

いや体というよりは心か。あの術の呪力をそのままお二方にぶつけてやったんだし。

ぶつけた後、話しかけたら二人とも「あー」と気の抜けた返事しかしなくなった。

まあ結構上級の神だし、ほつといいてもその内治るだろう。

そして問題の東風谷はもう手遅れっぽいので放置。次の代はまともになりますように。

まあなんか知らんけどすごい尊敬されているし、あの術の封印は守ってくれるだろう。

あと一応、汚い言葉遣いは表に出さないよう忠告はした。

それから阿礼が起きたところで都へ戻った。

最初宴会やるとか諏訪子が言ってたけど、二柱はまだ廃神状態なのでキャンセル。

その内再訪して宴会しようと思う。

というわけでスキマで近くの草原へ移動して都へ帰ったところ

「阿礼様！無事でしたか！」

「怪しい奴め！！阿礼様を離せ！この包囲から逃げられはせんぞ！」

まただよ（笑）

また包囲された挙句、今度は誘拐犯みたいな扱いまで追加されたよ。まあ、実際守矢神社まで攫って行ったのは事実なんですけど。

しかし今回は前回包囲された時と違い、阿礼が味方としているのだ。俺が誘拐犯じゃない的な事を言うように差し向けてやれば問題ないはず。

あまり武神だとかそういうので目立つと、きっと帝やら貴族やら権力者が絡んできて面倒臭くなる可能性が高いので、武神うんぬんは出さずに事を上手く運んで貰える様に仕向けないとな。

「あー、阿r」

「無礼ですよ！この方はかの有名なb」

「ザ・ワールド!!!」

危ねえ・・・超危ねえ・・・いきなり面倒臭くなるところだったよ。

咄嗟に阿礼と包囲してる警備の方々の時間止めてよかった。

正確に言うとな人の時間止めてるんじゃないかって空間の時間を止めてるんだけどね。

独自空間を作る程度の能力で、時の止まった空間を急ピッチで作ったんだ。

ほぼ最低限の力で作ったから壊れやすいけど、ただの人間ごときが破れるほどじゃない。

ちなみにこの能力で作る空間の法則ではこれが一番得意だったりする。

いつの日か鉄壁のガードを誇る永琳の覗きミッションを達成するべく、鍛えた結果だ。

そんなことはさておき、阿礼の口を塞いで阿礼のところだけ空間解除。

「んん!・・・~~~~ッ!?!?」

「はい、ちょっと落ち着け。」

何をするんですか!といわんばかりにバタバタする阿礼。

一通りもがいて落ち着いたようなので、口を開放してやった。

「何するんですか!」

「いやー、ちょっと武神とか言いふらされると目立つちゃいそうだな。」

「それが何かまずいんですか？」

「うん。面倒事の匂いがする、っていうか面倒事の匂いしかない。」

「面倒事とは？」

「まず帝とか貴族とかそういうお偉いさん方が手駒に加えようとして、長寿の秘密教えるとか言ってきたりはありそうだな。」

「成程、確かにそれはありそうですね。ところで今武神って言っちゃってますけどいいんですか？警備の方々にも聞こえてると思いますけど。」

「いや聞こえてないよ。あいつ等の時間、止まってるから。」

「え？」

「よく見てみるよ。停止してるだろ？」

パツと見た程度じゃ、そりゃ時間停止なんて分からんよな。

ただその場で微動だにせず立つてる状態なだけなんだから。

だからこそこういう町中でも使えるわけだが。

町人には包囲してる警備隊の背中しか見えてないから何か起きてると思われる事も無い。

阿礼が確認しようと警備の人に触ろうとするが空気にぶつかる。
時間停止してりや気体も壁だからな。

「すごい・・・、神様はこんなこともできるんですね。」

「俺は人間で、この力は神とか関係ないんですが。」

「そうなんですか。でも普通の人間はこんなこと出来ませんよ?」

「普通じゃない人間ならできることさ。さて、とりあえずこの場を
上手く切り抜ける策を練ろうか。」

「適当にごまかす程度なら簡単ですけど。」

「さつき「無礼ですよ!この方はかの有名なb」まで言ったところで
時間止めたから、それに続く言葉で頼むよ。」

「任せてください!」

「そうか。じゃ、元の位置に戻ってくれ。警備の奴等の時間戻すか
ら、お前が動いていたら変に思われるだろ。」

「はい!」

それから阿礼が取材で都を離れただのなんだの言って誤魔化して警
備隊を帰らせた。

ちなみに俺は有名な無頼の賭博師ということになったらしい。

なんでも10数年前にふらりと都を訪れて、数人の貴族を破滅に追いやったとんでもない博打打ちが居たそうで、その後そいつは大陸に渡るとか言って行方をくらましそうだ。

今はいなくて、かつ有名な人間で都合のいいので名を使ったというわけだそうだ。

何か天才的な賭博師の偽者って無意味な死は御免だったけど、最終的には血を抜かれて死んでしまうあの人を連想させるな。

これフラグじゃないよね？俺、大丈夫だよな？

一抹の不安を抱きつつも、阿礼宅へ再度お邪魔する。

それからしばらく話をした。互いに聞きたい事が山ほどあったので、驚くほど時間がかかったがそれはどうでもいい。

阿礼には主に俺についての話と俺の知っている歴史の話をしてやった。

俺の能力について話すと「それ卑怯ですね。」って言われた。うん、俺もそう思う。

それで阿礼からはこの時代についての話を聞いた。

輝夜とかもいる時代だそうで、輝夜は竹やりのかぐや姫と呼ばれ有名な人だそうだ。

俺の記憶が正しければ竹取物語といえはなよ竹のかぐや姫だった気がするが、この世界のかぐや姫は天下無双の竹やり使いとして全国へその名を轟かせているらしい。

ちなみに美貌については見るもの全てを虜にするほどらしく、この点は守られているようで安心した。もし物理的にも精神的にも破壊力ばつ牛ンの姫だったら俺絶対泣いてたわ。

あと阿礼に幻想郷へのスカウトをしておいた。

かなり渋っていた様だが、やる事やりつくした後、余生を過ごしてくれるだけでもいいと言うと承諾してくれた。
後で閻魔王通して、転生対象にするように閻魔に口を利いておくとうしよう。

さて阿礼のスカウトは完了、時代の把握もできたし、早速輝夜に会いに行くとうしようか。

三十七話 再包囲（後書き）

最近糞暑かったり雨降ったりで体調崩しやすい。
気をつけねば・・・

三十八話 ＊おおつと＊

＊いしのなかにいる＊

これが俺の現在の状況である。とりあえずこうなった訳を話そう。

俺は輝夜に会うためにまず竹取の翁の屋敷を訪ねた。

が、ダメっ・・・！門前払いっ・・・！

そこで仕方なく人気の無い路地でスキマを開き、庭へ侵入。

すると槍術の訓練をしているような音が聞こえたのでそちらへ移動した。

音の発生源には一心不乱に竹やりを振る（胸は無い）絶世の美女がいた。

これは間違いなく輝夜、そう思い声をかけようとしたら

ドドドンッ！

神速三段突きを放たれ、俺は後ろにあったデカイ岩に減り込んでしまった。

「ああ、ごめんなさい。不用意に私の間合いに入るから・・・。」

なんかグラップラーみたいなこと言い出したよ。

流石は天下にその名を轟かせる武人。竹やりのかぐや姫の名は伊達じゃない。

「普通の人間だったら死んでたよ。まったく、物騒な技をお持ちのようで。」

「あら、そんなこと無いわよ？急所は外したわ。」

「知ってるか？急所に当たらなくても岩に減り込む程の衝撃なら人は死ぬんだ。」

「あははは！まさか、女子供じゃあるまいし。」

「え？本気で言っておられますか？」

「本気で言っておられますよ。」

「なんてこと・・・永琳、教育は失敗したようだな・・・。」

「あら、なぜ貴方がその名前を知っているの？」

「永琳がこの星にいた頃の友人だからね。」

「え？もしかして貴方、地上の生き残り？」

「そうなるな。唯一の生き残り、佐原公一だ。よろしくな。」

「あー、貴方が佐原なのね。私は輝夜、蓬萊山輝夜よ。よろしくね。」

「その様子だと俺のこと知ってるようだな。」

「月では有名人よ貴方。神速の土下座、諦めない変態なんて呼ばれ

てるわ。」

「なにそのありがたくない二つ名。どうしてこうなった……。」

「後にも先にも永琳の着替えやお風呂を覗こうなんて命を捨てるような真似を一度や二度では飽き足らず、幾度と無く仕掛けたのは貴方だけだからね。しかもその度に永琳が殺るより前に土下座で事を済ませるなんて、今の月の民では速さが足りなくてとても真似できることじゃないわ。つまり貴方は誰にも出来ない偉業を成したということで有名なのよ。行為の善し悪しは別としてね。」

「いや、違うんですよ。あれはそのほら、俺、永琳と同居してたからさ。不慮の事故っていうか、決して故意に覗こうとしたわけじゃなくて、不幸にも偶々何度も覗き行為に相当する事が起きてしまったんだ。俺は悪くねえ！」

「あら、そうなの？でも貴方、覗こうとしていた時、興奮して変態じみた表情をしていたわよ？」

「な、なぜそんなことまで……！？」

「貴方の覗き映像は月での隠密行動の講習でよく使われているのよ。変態的な面はともかく、その技術は天才的だったからね。」

映像だと……！？バ力なっ……！監視カメラの類は全て調査済みだったんだ。

防犯商品取扱店からの永琳宅の購入歴は全て抑えていたからな。それでも映像が残っているなら、それは作られたでっち上げ映像のはずっ……！

「輝夜、よく聞いてくれ。それは俺の品位を貶めたい誰かの陰謀なんだ。その映像はおそらく作り上げられたもので現実のものではないんだよ。」

「あら、そうなの永琳？」

永琳・・・？何を言ってるんだこいつは。

「違いますよ姫様。あれは正真正銘本当の映像です。」

何も無いところから突然声がした。

この声はまさしく・・・！

「永、琳・・・！？」

「ええ、そうよ。久しぶりね、公。」

「ど、どこにいるんだ！？」

力は近くからは感じられない。しかし声はすぐ側から聞こえる。

「月にいるわよ？」

「月？・・・そうか、通信機だな！」

「半分正解。ステルス撮影通信機、名づけて『ギャラクティカ隠密忍者君3号』よ！」

デーン！

ステルス通信撮影機が効果音を出すと共に姿を現した。効果音とかなんだこの無駄機能。

しかしこの天才薬師、相変わらずのネーミングセンスである。

「さて話を戻すけど、公一、貴方の覗き映像は本物なのよ。」

「くっ……。しかし、防犯カメラn」

「防犯カメラには確かに映っていないわ。貴方下調べもきちんとしていたようだしね。」

下調べしていたことまでばれていたか。流石は天才。

「でもね、カメラは防犯用のものだけじゃないのよ？」

「そんなことは知っているよ。でも防犯用以外のカメラは倉庫にしまってたはずだ。」

「そうね。買ったものは確かに倉庫にしまっていたわね。」

「なら……。！」

「買ったものは、と言ったわよ？」

「……。もしかして

「自作……。？」

「正解。このギャラクティカ隠密忍者君3号はその時のカメラを幾度と無く改良を重ねて出来たものなのよ。そして貴方を撮影した初代カメラはこの『コズミック隠密忍者君マグナム』よ！」

デーン！

また効果音がしてホログラムみたいなものが浮かび上がり、カメラっぽいものが出た。

「貴方の覗きを悉く防げたのはこれに自動追尾装置をつけて常時貴方の様子を見れるようにしておいたからなのよ。」

「畜生、それプライバシーの侵害だぞ！お詫びに俺にもプライバシー侵害させる！」

主にお風呂とか脱衣所とかのプライバシーをな！

「あら、貴方もうとつくにしてるじゃない。ねえ姫様？」

「そうね、私の修行をこつそり覗いたりとか。」

「むむむ、しかしその件は三段突き食らったんだしおあいこに・・・」

「それに私の屋敷に勝手に入ってきてるわよね？」

「不法侵入も上乘せね。」

「ぐぬぬ・・・、参りました・・・。」

「ん、よろしい。」

フフン、と勝ち誇った表情をする輝夜。

多分、永琳も月でドヤアって感じの顔してると思う。

「さて姫様、そろそろ明日のことについてお話してもよろしいでしょうか？」

「構わないわよ。」

「明日なんかするのか？」

「私、明日月の使者が来て月に連れて行かれるのよ。」

「姫様は帰りたくないそうなので、私が地上に残る策を立てたというわけよ。」

「ふーん。それで今からその話をしようってことか。」

時期的にギリギリだったんだな。一日遅けりゃ輝夜に会えないところだった。

危うくいつかの諏訪大戦見逃しみたいなチョンボをするところだったよ。

「それで作戦を端的に申し上げますと、正面突破をします。」

「へえ、永琳がそんな直接的な作戦を選ぶなんて以外ね。」

「直接使者団を潰したほうが逃げた後の時間稼ぎになりますからね。隠れるように逃げることも出来ますけど、それでは月に通信を送られてしまいますから。」

「成程、後の展開を有利にするためのね。」

「それと、折角なので公一にも協力してもらおうかと。」

「へ？ 俺？」

「ええ、貴方がいればより楽に事を運べそうだし、お願いできるわよね？」

月の武装が昔程度のものなら別にいいんだけど、進化してるだろうしなあ。

ぶっちゃけちょっと危ない気がするし、気が進まないなあ……。もし反物質砲みたいな升武器持ってたりしたら、俺でも防ぎきれないだろうし。

永琳の頼みだが、ここは安全第一で・・・

「すまんが今回は協力でk」

「返事はいか yesしか受け付けないわ。」

どっかの守護者みたいなこと言い出した。

「・・・拒否権は？」

「ないわよ。」

「・・・もし拒否したら？」

「丁度、新種の薬物の実験をしたいところだったのよ。」

「協力させていただきます。」

「ありがとう、助かるわ。さて、具体的な作戦の話をしましょう。」

こうして俺は月人の争いに巻き込まれることになった。

永琳の作戦を聞いて今日のところは解散。

明日夜、永琳と共に来る使者団を真っ向から叩き潰すため、今日は帰ってゆっくり休むことにした。

三十九話 月の使者（前書き）

はいもう六月ですね。

うちの会社、六月暇すぎなんで有給とって旅行にでも行こうかと思
ってます。

なので更新速度が下がるかもしれないけど、まあいいでしょ。駄文
だし。

三十九話 月の使者

今は決戦前。俺は帝の派遣した有象無象の兵にまぎれていた。

輝夜は兵達の大將として、陣の中心で馬を駆り竹やりを構えている。
・・・なんか違うね？連れ去られそうな姫が兵を率いる武將ポジシヨンで。

おかしいですよ輝夜さん！

確かにそこらへんの兵士よりもよっぽど輝夜のが強いけどさ。

これ後世に伝わる竹取物語どうなっちゃうんだろう。

まあ俺の知ったこっちゃないし、別にいいか。

さてちょいとばかり作戦を確認しておこうか。

まず敵戦力。使者団はまず白兵戦部隊と後衛の重機部隊に分かれている。

白兵戦部隊は武装した月人の部隊で重機部隊はMSみたいなロボットの部隊だ。

対してこちらの戦力は永琳、輝夜、俺。残りの兵は使い物にならない。

ファーストコンタクトでこっちの兵が攻撃すれば兵達は反撃を受けて消滅確定。

帝の命に順じて死ぬ名誉の為に人生最後の攻撃をさせてやってもいいだろう。

兵士達もそういう覚悟でここにいるわけだからな。助ける気はない。

で、兵士消滅後の動きについてだ。

永琳、輝夜は前衛の白兵戦部隊を相手にする。俺はその援護だ。そして多少数を減らせたところで俺が後衛の重機部隊を壊滅させに行く。

どちらかの部隊を潰し次第、もう一方のほうへ援護しにいくという流れだ。

ちなみに当初の永琳と輝夜でやるつもりだった頃の作戦では、輝夜が白兵戦を捌き、永琳が有人重機のパイロットを狙撃して、月人を全滅させたら無人重機はほっというて逃げる予定だったそうだ。

永琳に許可された武器では重機破壊に必要な力がどうしても足りなかった為、そのような策を立てたらしい。

俺が加わったことにより、重機破壊も可能となったので俺が壊すというわけだ。

ちなみに重機は月人が地上にいた頃より数段強化されている。竜と俺が起こした惨劇の調査結果から縮小傾向にあった軍備強化予算が縮小されなくなったからだ。

攻撃面では数倍程度、防御面では数百倍は伸びているそうだ。まあ所詮、俺の敵ではないだろうが一応用心はしておく。

つと、確認している間に使者団のご到着だ。

「蓬莱山輝夜様、お迎えに上がりました。」

そう言いながら数人の使者と永琳が地上に降り立つ。それに対し、帝の兵士長らしき人物が言った。

「月の者よ。かぐや姫は帰さぬ。これは帝の意思であり、これに反

する者全てが我等の殲滅対象となる。無意味な血を流したくなくばそのまま月へ帰還せよ！」

しかし月の使者はそれに取り合わず、輝夜に光を放った。輝夜は光に包まれ浮き上がり、使者団の方へ飛んでいく。

「聞く耳持たぬか……。全軍、突撃ッー！！」

兵達は兵士長らしき男の怒号で一斉に使者団へと襲い掛かる。同時に使者団の白兵戦部隊が地上に降り立ち銃を構える。

そこからは一瞬だった。一瞬で白兵戦部隊の正面方向全てが消滅した。

白兵戦部隊標準装備の銃はサテ。イトキャノン並の威力だから当然だ。

ちなみに俺はスキマで退避していたのでなんら問題は無い。

「フン……。愚かで穢れた地上の民め。我等に齒向かうからこうなる。」

白兵戦部隊長らしき人物が吐き捨てるようにそういった。

そして輝夜を包む光が消え、永琳と使者達の下へ。

永琳が輝夜を迎えるように確保して合流。これで準備は整った。

さあ、戦争の始まりだ。

まずは俺が白兵戦部隊の力を奪う。

使者団の全ての者は対能力障害障壁機能を持った携帯結界を持って

いるそうだ。

とはいえ俺クラスの能力を完全に防ぐのは不可能。徐々に体の力が抜けている。

その隙を突いて永琳と輝夜が動き出す。

「輝夜！」

「分かってるわ永琳！」

「蓬莱山、ドッキングモード！」

なんじゃそりゃ。この非常時に何してんだこいつ等は。何か永琳の背中に輝夜がくつつく形で乗った。すると、急に周囲の敵がなぎ倒されていった。

「永琳の反逆だ！抑えろ！！」

「姫様もだ！油断するな！！」

敵は永琳達を囲むが次々と倒されていく。倒されつつも死ななかった奴は俺の能力で残りわずかとなった生命力を奪い、死んでいただく。

1 / 3 程の敵を倒し、包囲を突破して永琳達と合流。

「手を出して！」

輝夜がそう言うので手を差し出す。

そして輝夜は俺の手を掴んだ。すると世界が止まった。

「これは・・・？」

「永遠の世界へようこそ。」

永遠？そうか、輝夜の能力か。

「ここまでは順調よ。これからが本番だけだね。」

「重機部隊か。」

「ええ、もう包囲は突破したし、残りの白兵戦部隊は私を姫様で殺るわ。」

「ところで永遠の世界にいられるんなら白兵戦で俺手伝う必要あったかな。」

永遠の世界で弓でも撃っておいて解除すれば、白兵戦部隊の面々には突然矢が現れたと感じるさせるわけだし、反応させずに全滅させるのも容易いもんだと思うけど。

「もちろん必要よ。姫様の能力は姫様自身だけにならほぼ無限に連続使用できるけど、他のもの、特に生物に対しては消耗が激しくて種族しだいでは数秒に一度はインターバルをはさむ必要が出るわ。」

「そうそう、特に人間なんて触れてないと永遠の効果を与えられないのよね。」

ああ、それでくっついて動いてたのか。

「だからその隙を出来るだけ援護で埋めて貰いたかったのよ。」

「相手の動きを鈍らせてくれたおかげでかなり楽になったわ。」

「そうか。役に立っただんなら良かったよ。」

「それで貴方にやってもらう重機部隊なんだけど、厄介な相手がいるわ。」

「厄介な相手？」

「ええ、二億五千年前から演習を続けてきた武門の家柄出身の者よ。昨日、急遽彼の独立私兵部隊が今回のことに加わることとなって重機隊と一緒にいるわ。」

「おお、御大将みたいな経歴だな。二億五千ってあたりのスケールの違いはあるけど。」

「彼の重機は他とは比較にならない性能だから気をつけて。」

「気をつけるのはいいけど、どれがそのつか分からないとどうしようもないんだが？」

「彼の重機だけは他とかなり違う形をしているから見れば分かるわ。」

「そうか、分かった。とりあえずそいつには気を配るようにしておくよ。」

「永琳、そろそろ能力の限界よ。」

「そう、それじゃ戦闘再開としましょう。」

「おう、折角だから楽しんでくるよ。」

そして輝夜能力が解け、状況再開。

永琳は弓を構え、輝夜は竹やりを構える。銃器VS弓と竹やり、シニールな光景だ。

「……あれ？永琳の弓どつかで見た事があるような……。なんかこう悠久の時の流れが生んだ奇跡の弓的な感じが出てるし、矢は矢でなんか時を感じさせる上にただ前へ前へ突き進むような気配があるし、それはなんとなくだけど絶対なる真理な気がする。もうちょっとで思い出せそうんだけど、なんか出てこない。アム……アムなんとかだったような……。」

まあいいか、気にしてる場合じゃないしな。とつとと重機全滅させてこないと。

状況は再開してるわけだし。

さあ首イ洗って待つてろよ重機部隊共。

こんなこともあるのかと作っておいたグウレイトな対デカ物用兵器が火を吹くぜ！

四十話 ドッグファイト？（前書き）

今回は分かる人ですら多分わけがわからないよ。
なのでわけがわからなくなったら読み飛ばすのをオススメします。

四十話 ドッグファイト？

スキマで上空へ移動。後衛の重機部隊は上空で待機していた。どうやら既に出撃準備は終わっているらしく、もう動き始めている。まあ、白兵戦部隊がこうもやられていたらそりゃ動くわな。

とりあえず戦力確認をと思ったら、何かがこちらに近づいてきた。つていうかこれは・・・

「タ。ンXトップ!？」

「反逆者二人の他のもう一人の敵というのはお前か？」

「はいと言ったら？」

「こうするに決まってるだろオ！」

腕部、脚部と思われるパーツに囲まれ、ビームを撃たれた。あれ絶対タ。ンXだよ。どっからどう見てもお髭のお兄さんだよ。

とりあえずビームをかわし距離をとる。

程なくして重機部隊が集まってきた。三十体はいるか。タ。ンX以外はUFOだな。

つてことは永琳が注意しろって言ってたのはタ。ンXで決まりか。さて敵戦力はこれで全部かな？

「お前等、これだけしかないのか？」

「ここに居るのは有人機だけだ。すでに下降し始めた無人機はこの倍はいる。最も貴様のような穢れた地上人ごとき一機ですら過剰だな。」

「そうかい。わざわざ戦力を教えてくれるなんて親切だな。」

「なあに、冥土の土産という奴さ。さあ、覚悟はいいか？」

「おう、覚悟はできてるよ。お前等を皆殺しにする覚悟はな！！」

俺はスキマを開きとっておきの兵器を三つ取り出した。

それと同時に分身を二体出してスキマの中へ移動。取り出した兵器は言わばラジコン。

それをスキマの中から俺と分身で操作して戦うというわけだ。

そのラジコンは1スティック4ボタン1通信ボタンで出来たコントローラで動かす。

いわゆるアーケードスティックコントローラとってくれればいい。動かすのはバ。ターガ。ダム、ス。ノオ、グ。イグ。イテッド（橙）を模したものだ。

俺がバ。ター、分身がス。ノオ、グ。を動かす。

何を隠そう俺は炒飯職人だからな、あの頃の操作感覚でボコボコにしていってやるよ！

とか思ってた動かし始めたら、いきなりグ。が真つ二つにされた。なにやってんだよ俺の分身。畜生、なんだか空にデコ男が見える気がするぜ……。

「それで本気だったのでありますかア？」

御大将（仮）が御大将の台詞をほざきやがる。調子に乗りやがってだがここはス。ノオに任せて俺は下降している無人機を落とさないと。

重機は俺の担当だからな。それに永琳達には重機を破壊するだけの力がないし。

スキマで一氣に中空あたりまで移動して、下降しているUFO群を発見。

とりあえずガンランチャーを撃つてみるがバリアのようなもので防がれた。

「さすがに昔の数百倍の防御力というの伊達じゃないな。」

そんなことを言っている内にも無人機は下降を続けている。

攻撃されようとも予め設定された行動だけを忠実に行うあたりが無人機だな。

さてと、そろそろこちらにも本気で攻めるとしよう。

俺は能力を使い、UFO群の動力を奪い始めた。

能力障害障壁が邪魔な上に動力生成でもしてる様で少しずつしか減らせない。

さっさと落としたいのでバ。ターでミサイルを撒いてバリアを張らせて更に動力を削る。

かなり動力を奪い、ミサイルの爆風が敵機に届く程度になったところで殲滅開始。

この時点で低空まで来てしまい、そろそろ相手も攻撃しそうなので

まとめて葬り去る。

ガンランチャーを前に、ライフルを後に連結。射撃準備良し！

「大盛炒飯一丁お待ち！！」

ドバン！！

ろくなバリアも張れなくなったUFO群の大半を一瞬で破壊した。

「数だけはいぜ！！」

数体は残ったので、精密な狙撃で終わらせよう。

ライフルを前にガンランチャーを後に連結。照射開始！

「グウレイト！！」

ジュツ

残ったUFOは全てグウレイトによって焼き消した。

これで無事に無人機は全て破壊完了だ。

「ああ、バ。ター無双超気持ちいい〜〜ッ！！」

正にヘヴン状態。この調子で有人機も壊しつくしてやろう。

スキマで上空まで戻ると激しい銃撃戦が行われていた。
敵勢力の残りはタ○ンXとUFO8機。

こちらのス○ノオはそれ程の損傷は見られない。
この分身、やりおる。グ○使った方の分身は即時撃破されたのにな
まあ俺の分身術も1年位しか修行してないし、不安定なのは仕方な
い。

一応敵機の情報欲しいので分身と記憶をリンクする。

・・・成程、タ○ンXが飛びぬけて強いようだ。

基本武装はタ○ンXそのものだが火力、機動力、耐久力は桁外れに
高い。

更にとてつもなく高い再生能力と動力生成機能まで持つてるようだ。
一方、UFOは大したことはない。無人機と性能的に差はなさそう
だ。

一応こちらが被弾すればタダではすまない火力を持つてはいるが、
当たらなければどうということはない。

それにこいつ等のバリアはス○ノオのピザと揚げ玉なら貫通するよ
うだ。

ここはUFO共を分身に任せて、タ○ンXとタイマン張るのがベス
トかな？

っていうか、このタ○ンXは俺が壊さないと気がすまない。

俺のグ○イグ○イテッド（橙）を壊しやがって・・・！絶対に許さ
ん！！

という訳で分断作戦開始。

ス○ノオにトランザムしてもらって一気にUFOとタ○ンXの間に

入ってもらっ。

そして俺がミサイルを撒き散らしつつ、ライフルで牽制してタ。ンXに距離をとらせる。

それからスキマを使って一気にタ。ンXへ詰め寄り分断完了。

後はス。ノオが頑張ってくれている間にこいつをボッコボコにする。

とりあえず挨拶代わりに一発大盛炒飯を撃ってみたがバリアに阻まれ届かない。

そこから相手のビームやバズーカでの反撃をかわし、今度はグウレイトを撃ち込む。

しかしこれもバリアに阻まれてしまい、本体は無傷。

「うーん、どうしたものか……。」

俺の能力で奪える動力量より相手の生成する動力量が多く、バリアの出力を減らせない。

バリアが十分な状態で張られていれば、バ。ターの火力じゃ攻撃が届かない。

これじゃ手詰まりだ。仕方ないからバ。ター引っ込めて俺が直でやるか。

そう思った時、名案が浮かんだ。

「試してみる価値はあるな。」

まずライフルを撃って相手のバリアを誘発。

「今だ!!」

それと同時にバリアの耐久力を奪い、更に同時に大盛炒飯接射！
いくら動力が生成されてもバリアの耐久力補充の間を突けば破れる

はず！

ドバンツ！！

作戦成功、見事にタ。ンXを大破させてやった。
しかし次の瞬間

「ふはははは！この程度、傷ではない！！」

みるみるうちにタ。ンXが機体の損傷を自己修復していく。

「チツ、あれだけ壊しても直っちゃうのか。・・・おや？」

力を探ると自己修復中のタ。ンXに異変が起きていた。
動力が生成されていない。恐らく動力生成機能を破壊したんだろう。

「これは千載一遇のチャンスっ・・・！」

今、再生能力を奪ってしまえば動力生成機能の復帰が出来なくなる。
タ。ンXの全ての基である動力を絶てれば勝ったも同然。
いけっ・・・！

「なんだあ・・・！機能不全に落ちたのか！？」

渾身の力で再生能力を奪いつくし、更に残りの動力を奪っていく。
今のタ。ンXは最早鉄屑同然だ。あとはやりたい放題といったところだ。

「さて遺言の一つくらいは聞いてやるぞ?」

「くそっ! 何故動かんタ。ンX!!」

「それが遺言か? 締まらないな。まあいい。さあ、覚悟はいいか?」

「ええい! マエリベリー・ベル!! 援護しろ!!」

「(色んな意味で危ない名前を出すのは) もうやめろーッ!!」

後方から敵の援護射撃が飛んで来るがもう遅い。

俺はライフルズンダからの大盛炒飯接射をしてやった。

「オ・ノーレエエエエエ!!!!」

タ。ンXは盛大に爆発して粉々になった。汚ねえ花火である。

名も知らぬ御大将(仮)よ、安らかに眠れ。

その後、残存勢力をグウレイトで掃討して重機部隊は全滅させた。

地上に戻ると、永琳と輝夜が白兵戦部隊を全滅させてのんびりお茶を飲んでいた。

俺も一息つくこうと思い、お茶を一杯貰ったら天にも昇るような気持ちになった。

いや冗談抜きで昇天するところだったよ、ホントに。福寿草のお茶

つてお前等。

今後、永琳の出す飲み物はちゃんと調べてから飲もうと心に誓った。

四十話 ドッグファイト？（後書き）

はい、というわけでね、グウレイト分が足りなくなったのでやっちゃいました。

まあ次の話はこんなVS的かつグウレイトなことにはしないと思います。

流石の俺も二話連続は自重っ・・・！

四十一話 月の頭脳と姫様と

月の使者達を全滅させてから結構な時が流れた。

「ふふ、本当にいいのかしら？」

「ああ、もう決めたからな。」

「姫様に手を出すということがどういふことか理解しているのよね？」

「ああ、もちろんだ。」

「どうなってしまうても責任はとってくれるのよね？」

「責任はとる。」

「出してしまえば、もう後には引けないわよ？」

「退かぬ！俺に逃走はないのだ！」

「覚悟はいいか輝夜ッ！ドロッシュウウウー！！！」

「じゃあ私もドロッシュー。」

「私も出させてもらっわ。」

「かかったな！まだドローツ―は残してある！」

「あら、奇遇ね。私も念のため残してあったのよ。」

「うーん、困ったわね。仕方ない、ドローフォーを出しましょう。色は――」

「色を言う必要は無い。この機を待っていた！くらえッ！ドローフォーオオオオオ！！」

「あら、これはまた奇遇ね。私もドローフォー持っているのよ。」

「なにイ！」

「では私も最後のドローフォーを出すのでしょうか。」

「そ、そんなバカなあああああ！！！！！！」

結局仕掛けた俺が26枚のカードを引かされてしまった。

そう、今俺はUNOをしている。俺の家でだ。

永琳と輝夜は身を隠すいい場所が見つかるまで、俺の家を仮住まいにしている。

一つの家に複数人が住むとなると、当然家事の役割分担が発生する。我が家の役割分担の決め手、それがUNOである。今は食事当番を決めているところだ。

基本的に飯、掃除、洗濯の当番をUNOで決める。俺の勝率は2割程度だ。

なぜか洗濯の時だけ全勝で他は全敗。何か仕組まれている気がする。

っていうか、絶対仕組まれてると思う。俺、洗濯の時は負けにいつてるのに勝つし。

紳士アイテムを合法的に手に収めるチャンスなのに悉く潰されている。

そもそもハウスルールがよくない。もうちょっと考えるべきだった。

ちなみに家のハウスルールは四つ。

- ・数字や記号が一致するカードは一度に捨てられる。
- ・数字以外のカードではあがってはいけない。
- ・最後に複数枚出す場合はU N Oの宣言は必要ない。
- ・出せるカードがある時は必ず一枚以上出す。もし出せる状況で出さずに他者から指摘された場合、出せるカードを全て場に捨てる。

うん、この最後のルールがいらなかった。

本当はこれカード溜め込み戦略に対する対抗ルールだったはずだが、これによってカードを強制的に捨てられ、勝たされてしまう。

まあ、もう長いことこのルールでやってるから今更変えることはない。

それよりも仕組まれているなにかを見破ることだ。恐らくはイカサマ。

でなければこうも都合よく俺の勝敗を左右することは出来ない。

・・・ま、今日も見破れなかったけどな。

永琳と輝夜の手札は残り4枚。俺はドロー系なしで29枚。どうせ奴等は四色の同じ数字のカードだ。負け確さ。

「ワイルド、色は緑だ。」

「はい、あがり。」

輝夜が四枚四色で同時出し。

「あら姫様、奇遇ですね。私もです。」

永琳も同じく四枚四色で同時出し。

ほらね。分かってんだよそんなことは。

「それじゃ、ご飯の支度よろしくね。」

「へいへい。」

今日もまた俺が飯当番だ。

今夜のメニューは石焼ビビンバ、君に決めた！

「いつもながら公一のご飯はおいしいわね。」

「そうだろ？品種改良を重ねに重ねた俺オリジナルの米だからな。」

「料理の話よ。まあお米もおいしいけど。」

「この天才である私が料理の手ほどきをした者ですからね。」

「そんなワシが育てたみたいなこと言ってどや顔されても……。」

「でも事実でしょう？。」

「まあそうなんですけどね。」

「へえー。じゃあ私にも教えてよ永琳。」

「構いませんよ。」

夕食時のこの何気ない会話から輝夜は料理の道を歩み始めた。それから約五年。

「まだよ……。まだ何が足りない。」

輝夜は立派なビビンバ職人になっていた。その味は永琳をも凌駕する。

だがまだまだ上を目指すつもりらしく、頑固一徹のこだわりようだ。ちなみにビビンバ以外は壊滅的、教えることも天才である永琳が匙を投げたほどだ。

「恐らくはご飯、水か炊き方を良くすればきっと究極のビビンバが……。」

今日もまたなんかぶつぶつとつぶやいている。

ここ最近の輝夜は究極のビビンバがどうこう言ってキッチンを占拠していた。

はつきりいつて異常といえるレベルである。

永琳が精神安定剤をこっそり飲み物に混ぜて処方し始めているほどだ。

「でも地上の機材じゃ……。天然水を探せばあるいは……。」

「おい輝夜、たまには息抜きでもしたらどうだ？」

「完成までもう一息なのよ。息抜きにかける時間がもったいないわ。」

「時間なんざいくらでもあるだろう？お前、蓬萊人なんだから。」

「そう、無限の時間があるのは確か。けれども大事な今は今なのよ。今だけ頑張るっ……！今を頑張った者にのみ……明日が来るのよっ……！」

なんて正しいことを言いやがるっ……！

班長クラスの器はあるな、これが月の姫の貫禄か。

「そうか、仕方ない。なら一刻も早く完成させるとしようか。永琳も心配してるしな。」

俺にできることがあるなら何でも相談してくれ、できるだけ協力するから。」

「そう、ありがとう。じゃあ早速けどちょっと相談があるのよ。」

「なにかな。」

「今、究極のビビンバに足りない点は恐らくご飯だと思っているわ。」

「ご飯？米の品種改良しろってことか？」

「違うわ。お米は完璧よ。問題は水か炊飯方法だと思うのよ。」

「うーん、水は米と最高の相性の天然水を引っ張ってるし、炊飯器

は永琳の手を加えてもらったからこれ以上は望めないと思うな。」

「そう……。それじゃ手詰まりね。どうしようかしら……。」

「あ、そっぴや竹炭を入れると水は美味しくなるし、ご飯も美味しく炊けるって聞いたことがあるな。」

「！ 試してみる価値はあるわね。竹炭は持つてる？」

「いや、ないな。まあそこらへんの竹林から調達すれば——」

「ダメよ、竹炭も大切な材料となりえるかも知れない。最高のものを探すわよ！」

思い立ったが吉日と言わんばかりにキッチンを飛び出す輝夜。
そして竹林探索準備を済ませて待機している永琳。
この天才いつの間に準備してたんだ。

「昨日の夜かしらね、恐らくこうなると思ったから準備しておいたのよ。」

「何という未来予測。でも心を読むな、なんかこわい。」

「あらごめんなさい。私は読心術も天才すぎて、つい自然と心を読んでしまうのよ。」

もう永琳は種族さとりでいいんじゃないかと思う今日この頃。
そんなこんなで最高の竹を求めて最高の竹林探しが始まった。

四十一話 月の頭脳と姫様と（後書き）

先日、この駄文に書いてあるUNOルールで仲間とUNOやったら
リバースとスキップでハメくらった。
連携プレー恐るべし。

四十二話 行き着く先（前書き）

6月末の有給申請したら却下された、ちくせう。
せつかく立てた旅行計画が台無しでござる。

というわけでこの小説の更新速度は6月もあまり変わらなそうです。

四十二話 行き着く先

最高の竹炭の為に竹林を巡り続けて約100年。

もう世界中余すところなく巡りに巡ったと思う。

輝夜もよく飽きないもんだよ、実質100年間竹の研究をしてるだけなのにな。

研究が趣味の永琳だってもう飽きたみたいな顔を70年前辺りからしてるのに。

俺なんか用事がある事に竹林巡りから抜けたりしてたのに90年前には飽きてたよ。

一体何が輝夜をここまで動かしているのか、その原動力を解明して次世代エネルギーとして活用できれば一つか二つくらいの文明でも起こせそうな気がする。

それはさておき100年間、色々あった。

まず閻魔との交渉。

前に地獄に行った時、能力が遮られるというのを知ったので、それを逆手にとり、

能力の遮られる場所を探したら割りとすんなり見つかった。

それから閻魔王に会いに行つて交渉。交渉の鍵となる物も持っていた。

最初は閻魔王もそんな不平等な真似を許可することはできないとか言っていたが、

切り札を出した途端、態度が一変して快くこちらの要望を飲んでくれた。

これで、阿礼が死んだ時に担当する閻魔が転生を進めてくれる手筈

となった。

まあ色々条件が付くし、そもそも阿礼が転生の術を使用した場合に限るわけだが、

そこは生前の阿礼に転生の術を行うようにさりげなく勧めて、あれやこれやの詭弁を並べ立てて、その場のノリで一回やらせておいたので問題ない。

今頃は閻魔の下で事務仕事でもやっているだろう。

ちなみに閻魔王に使った切り札というのは金である。彼岸の商店街で色々金になりそうなものを卸し、彼岸の金を大量に手に入れて持っていたのだ。

以前閻魔王に会った時、金に執着している感じがちらほらと見受けられたので持っていたわけだが、こうかはばつぐんだった。地獄の沙汰も金次第ということだ。

それから人里の補助。

幻想郷予定地の人里の状況が悪くなると大抵は紫が俺を呼びに来る。まあ、計画の中心部が早々に消えちゃ困るわな。

基本、里の戦力を超える妖怪が里を襲うような時は紫が何とかしているようだが、

土地が痩せてしまい飢饉が起きたりとか、そういう時は俺の仕事になる。

具体的には作物に生命力を与えたり、行商を装って安い価格で物を提供したりだ。

もちろん里にだってそれなり備えはあるが、あまり減らせたくはない。

なんとかやっていってる貧しい村じゃ人は去っていつちゃうからな。飢饉とかはほんの一例だが、実際のところ衰退をもたらすほぼ全ての対処をしている。

これは意外と面倒な仕事なので、その内適当な神様でも呼ぶとしよう。

あと魔界。

また新たな魔界が増えた。まあ増えること自体別にどうということはない。

そもそも魔界なんて既に沢山あるし、今更一個増えても別について感じだ。

ただ、今回増えた魔界は場所がよろしくない。

この世界との繋がり境界が、よりにもよって幻想郷予定地の人里のすぐ近くだった。

しかも世界の繋ぎ目がその一つだけしかない。一つしかないということは魔界の住人がこちらに干渉する時は必ず人里付近に出てくるということだ。

もし攻撃的な干渉を行うことがあれば、人里は間違いなく被害を受ける。

俺が動向を監視してても、その時になって間に合うという保証はない。

なので、境界をずらすなり潰すなりの対処するのが安全策だ。

ただ、それを無断で行うと魔界と全面戦争をする羽目になるので、話し合いに向かった。

で、行ってみたところやや見覚えのある魔界。

瘴気は濃いけど、世界の法則は現世と同じようなのでスキマで魔界の主を探索。

すると立派なアホ毛を生やした見覚えのある人を発見。どうみても神綺です。本当にありがとうございました。

神綺なら放っておいても大丈夫だろう。東方の歴史通りに進んでく

れば。

ということで、話し合いをする必要も無くなったので軽く挨拶して帰還。

本当はちゃんと自己紹介とかして交流を持ちたいところだったけど、瘴気があまりにも濃くて、長居する気にはなれなかったから仕方ない。

最後にもこたん。

前述した人里への協力の後、竹林探索に合流しようと戻っている時に発見。

輝夜達との距離はおよそ13km。進行方向からしてこのままでは邂逅してしまう。

今は時期じゃない。できれば幻想郷が出来てから迷いの竹林で会って欲しい。

というわけで、会わないように行動開始。要は進行方向を変えるだけだ。

で、どちらの進行方向を変えるかというと輝夜サイドだ。

もこたんに話したい気持ちは勿論ある。しかしまったく知らない奴がそっちじゃないよ

なんて言って素直に進む道を変える奴なんかどこぞの王宮の戦士くらいのもんだからな。

それで輝夜達と急いで合流して、風水的にそっちは良くないとかなんとか色々言って、

うまく進行方向を変えることに成功した。

目立った出来事はこの位かな。

まあ、竹林探索と人里補助が100年の9割9分9厘9毛くらいいいってるからな。

そして今、俺は探し求めた竹林の中に居る。

ここは幻想郷予定地の中の竹林。つまり『迷いの竹林』だ。白くてもふもふした生物がそこら中にある。かわええ。

「・・・これよ！これが探し求めた竹よ！！」

「やりましたね姫様！」

兎達と共に小躍りして跳ね回る輝夜。トリップ中のご様子である。恐らくは脳内物質が色々と駆け巡っているんだろう。

兎に向かつて「遂に見つけたわよあははは」とか言ってるし。そして兎は兎で「うんうん、よかったねー」とか返してるし。

・・・あれ？兎って日本語話せるんだっけ？

「ちよつと待て、そのの兎。お前妖獣だろ。」

「ありゃ、ばれちゃった？」

「そりや言葉を話せる獣なんて妖獣に決まってるんだろ。」

「そーだよねー。まあばれるよね。」

ポフンと煙を立てて兎が人型になった。

人型になった兎はどっからどう見てもう詐欺だった。

「私は因幡てゐ。幸運の白兔だよ。」

「お前、稲羽でワニを手玉に取った兔だよな。」

「さあ、どうだったかねえ。それよりお兄さん、人参持ってるでしょ？匂いがする。」

「うーん、今人参は持っていないけど。」

「あ、もしかして朝食のサラダ作ったときに切った人参の切れ端でも服についたのかな？」

「持っていないよ。今朝食べた人参の破片が服についちゃってるかも知れないけどな。」

「あー、そうなの。残念。」

「もしかして人参目当てでわざわざ来たのか？」

「そうだよ。私の竹林に珍しく人間が来たと思ったら、人参の匂いがしたからねー。」

「ところでお兄さん達は何しにここへ？そこのお嬢さんは竹がどうか言ってるけど。」

「最高の竹探し。この竹林はそこのお姫様によって世界一の竹林認定をされました。」

「おめでとう。誇っていいぞ。」

「素性の知らない人達にそんな認定されてもねえ。」

「ですよー。」

「それで竹探しって言ってたけど、ここの竹が欲しいの？」

「まあそうなるな。最高の竹炭を作るために何本か貰うことになるかな。」

「ふーん。でも私の竹林の竹をタダで渡すわけにはいかないなあ。」

「ふむ、そういう話はあっちの方々と話してくれ。俺は別にいらないし。」

「そう、それじゃあの二人が欲しいって言ってるんだね。」

そう言っただけは輝夜達の方へ交渉を持ちかけに行った。
なにやら話が長くなりそうだったので、俺はスキマからコテージを出して休憩した。

そして約一時間後。

「というわけで、お兄さんには人參一年分を用意してもらおうね！」

「いや、どういうわけだよ。」

「私の天才的な交渉の結果よ。異論は認めないわ。」

「まあ、貴方が交渉の席に加わらなかったのが運の尽きよ。」

何故か知らんが俺は人參を払うハメになった。人の財産を勝手に使うとかひどい。

交渉の結果をまとめると、こちらが手にするのは竹林の居住権および竹の使用権。

てゐ側は人參一年分と兎達へ知恵を分けるといったところで折り合いがついたそうだ。

隠れ家にするには丁度いい立地、輝夜の武術練習で使う竹やりや料理の為の竹炭の調達が容易に出来ることから、輝夜達はここに住むことにしたそうだ。

既に家の設計図が完成しているあたり、やっぱり永琳は超天才である。

とりあえず俺は人參の調達のために竹林から離れた。

そして翌日。

人參を持って竹林を訪ねると、そこには立派な屋敷が建っていた。

輝夜にこれどうしたんだと尋ねると、永琳が一晚でやってくれたと言っていた。

リアルジ。バン二である。

こうして永遠亭が完成した。

四十三話 夏の花と飲み物と

「おいこれ見てみるよ。」

「なにこれ・・・、『竹取物語』？」

「おう、ちょっと読んでみるよ。」

「ん、・・・・・・・・これは。」

「どうだ、面白いだろ？」

「面白いだろってこれ、私の話じゃない！」

「そうだよ。よかったな、歴史に名が残ったぞ。」

「良くないわよ。私はか弱い乙女だつていうのに、これ天下無双の竹やり姫とか書いてあるじゃない！私の槍術はただの護身術なのにっ・・・・！」

「おいおい、一騎当千の竹やり使いが何言ってるんだ？か弱いとかないわｗｗｗ」

「私が強いんじゃないの、地上人が弱すぎるだけよ。」

「へーへー、さいですか。」

「あ、なによその言い方！」

「あ、ごめんなさい調子乗りました謝るんで竹やり持たないでくだ

「問答無用！」

[illegible]

今日も元氣一杯の輝夜にオーヴァドライブからの連続神速三段突きを放たれた。

すっごく痛い。多分これ鬼神の一撃よりも威力あると思う。

突きには定評のある輝夜だ。月の姫だけに。

[illegible]

うん、いや最近暑かったから涼しくなるようにしてみたただよほんとだよ。

さて竹取物語があるということから察しがつくと思うが大分時が流れた。

今はおよそ西暦900年手前、平安の世である。

この頃になると妖怪退治を生業にする陰陽師というのがわんさか増えてる。

おかげで多数の妖怪の住まう幻想郷予定地にもわんさかと腕自慢が来てくれて、

その中にある辺境の地の人里は未だかつて無いほど賑わっている。その為、俺や紫が出張る機会も減り、里の力だけでも安定した営み

を送ることが出来るようになってきた。いい傾向だ、このまま順調に独力で里を維持して欲しいものだ。

永遠亭が出来てから俺は大体永遠亭にいる。

俺の能力で手に入れた数々の能力について永琳が研究したいと言ったからだ。

俺も用途のよく分からん能力とか色々調べておきたかったので二つ返事で承諾。

俺の持っている能力計53万個中、現在研究を終えた能力は763個。

研究しても大して使えそうのない能力ばかりで正直そろそろ飽きてきた。

なので、またのんびりと旅でもしようかと考えている。

「それでとりあえずはここを去ろうかと思うんだ。」

「いいんじゃない？ 姫様はどう思います？」

「ん、旅がしたいなら仕方ないでしょ。たまにはお土産でも持ってきたさいよね。」

「あ、人参補充してから行ってね。今ちょうど兎総出で新しい畑の開拓中だから人参作ってなくてね、お兄さんの持つてくる人参が頼りなんだよ。」

「分かった。人参は後で補充しとく。冷凍でいいよな？」

「冷凍がいいね。保存が利くし。」

永遠亭には急速冷凍室がある。全て竹と木と石で作られているのに

一体どうすればそんな部屋が出来るのか、その謎は永琳のみぞ知る。

翌日、人参を用意して俺は永遠亭を去った。

「さて、どこに行こうかな。」

行き先は特に決めていない。よってこれから決める。

迷った時の究極奥義、鉛筆転がしでな！

六面には行き先として守矢、幽香、鬼天狗、都、妹紅、寺と書いてある。

難易度的には寺がハード、妹紅がルナティックといったところだ。寺はどこにあるか知らない命蓮寺探しだから全国寺巡りになるし、妹紅に至っては世界のどこかを移動する一人の少女を探すこととなるからだ。

妹紅探しなんてまるで狂気の沙汰っ……！だが、狂気に沙汰ほど面白いつ……！

「さあ行け鉛筆！俺は既に覚悟ができているぞおおおおおー！」

コロコロコロコロ……。

出た面は幽香、行き先は幽香の居所である元鬼の山に決定した。
なんか無駄にテンションあげたのが恥ずかしくなってくる出目である。

「まあいいや。久しぶりに幽香の所にいつてみよ。」

元鬼の山――。

すっかり寂れてしまい、今はもう植物が生えるのみとなった山である。

俺の建てた幽香の家もなくなっており、幽香もここには住んでいない。

この低い山の麓に広がるすり鉢状の草原を見下ろすと絶景が広がっている。

太陽の畑だ。幽香はきっとそこに住んでいるだろう。

昔した約束の通り、花を見ながら一杯やらせてもらいに行こう。
山を下り、草原へと向かう。

パウッ！

「おっと、なかなか手荒い歓迎じゃないか。」

「そう？ 挨拶程度のものだったはずだけど。」

「そうか、ここらへんでは光線で挨拶を交わす風習があるのか。」

「そうよ。ただ私が挨拶しても大抵は挨拶を返してくれないけどね。」

「まあそうだろうな。」

「まったく、挨拶も返せないなんて最近の若いのはなってないわよね。」

「消し炭になった後に挨拶を返せる奴は若くなくてもいないと思うけどな。」

「消し炭になるのが悪いのよ。」

「さいですか。まあなんだ、久しぶりだな、幽香。」

「ええ、何百年ぶりかしらね。」

「さあ、俺とお前じゃ数百年位時間のずれがあるからなんとも。」

「時間のずれ？」

「ああ、まあ後で話すよ。ところで幽香、あの約束覚えているか？」

「この花達の種を貰ったときの約束のこと？」

「ああ、覚えてるなら話は早い。約束通り一杯やらせてもらっぞ。」

「いいわよ。さっきの話も気になるし、ゆっくり吞みましょう。」

暴力的な再開を果たし、とりあえず吞むことが決定。
軽くつまみの用意をして、酒を家から持ってきた。

「この氷水に入ってるのはなに？」

「ビールだ。」

「びーる？」

「ああ、夏だからな。夏の酒はやっぱり凍ったジョッキでビールに限る！」

「へえ、聞いたことのないお酒ね。じょっきというのはこの食器のことかしら？」

「まあこまけえことはいいんだよ！さ、乾杯だ！」

カチンッ！

景気のいい音を立てて乾杯をして一気に飲み干す。

「くうくうッ！これだよこれ！キンッキンに冷えたビールを喉で味わう！

犯罪的だ！美味すぎるっ！！最高オーーーーー！！どうだ幽香、美味いだろ！」

そう言つて幽香の方を見るとチビチビコクコクと飲んでいた。

「おいおいおい、そうじゃねえよ。大酒呑みの幽香様ともあるうものが、

知らない酒にびびっちゃってるんですか？もつとグイツと！一気に！な！」

「む。言つてくれるわね。」

そこから一気にゴクゴクとジョッキを飲み干す幽香。

「ぷはっ。おいしいわねびーる。」

「だろ？さあジャンジャン飲つてくれ！酒はまだまだあるからな！」

俺のビールは0度付近でも成分の鎮静化をさせず、上品な味と香りを保つたまま、

冷やして喉越し爽快な感覚を味わうことが出来る特別製のビールだ。これを作るのにどれだけの歳月をかけ試行錯誤を繰り返したのか。

そして今日、その労苦を旧友との再会という最高の場面で報いることが出来た。

正に至福の時である。幽香も気に入ってくれて何よりだ。

こうして飲んだくれの中年のように昼間からビールを飲み、久々の再会での積もる話で

盛り上がり、気付けば翌日の朝まで飲み明かしていた。

四十三話 夏の花と飲み物と（後書き）

諸君、私はビールが好きだ。

諸君、私はビールが大好きだ。

喉越しが好きだ

味わいが好きだ

香りが好きだ

（ry

というわけでビール飲みながら書いた今回のお話。

宅飲みでもエ。スに凍らせたジョッキは美味すぎるぜよ

冷えたジョッキでキ。ンも捨てがたいけどな！

喉越し重視派なんですよ、俺は。

四十四話 前途多難

「おはよう。」

「あら起きたのね。今日もいい天気よ。」

「そうだな、満天の星空だ。」

「星空だと認識できているのね。てっきり目がおかしくなってるのかと思っただわ。」

「へ？なんで？」

「おはようって言ってたし、今の時間が分かってないのかなと。」

「朝の挨拶はおはようだろう？」

「今、夜よ？」

「俺が起きた時間が朝だ。」

「……………」

「おいやめろ。可哀相な人を見るような目でこっちを見るな。」

幽香の蔑む様な視線であれば大歓迎だが、哀れむような視線はちょっと勘弁。

ええ、そうですよ。俺もうMでもいいかなとか思いはじめてますよ。

ただし相手が幽香に限る

さて、現在は夜。飲み明かして寝て起きたら一日が終わっていた。一日の時間は消し飛ぶッ！結果だけだ、夜になったという結果だけ残るッ！

この世界に来る前、大学時代ではよくあったキンクリ現象である。懐かしい。

ちなみに昨夜はおたのしみでしたよ。話の盛り上がり的な意味で。性的な意味だったら最高だったけど、それは無理でしたね。それが俺クオリティ。

ここ数百年間、幽香はこの太陽の畑に住んでいたそうだ。

俺のあげた向日葵の種から少しずつ育てて、現在の花畑に至るまで頑張ったらしい。

能力使えばよかったのと言ったら、それじゃ面白くないでしょ？と返された。

育てる過程を楽しむのも園芸の醍醐味の一つである。

その過程で花畑に害をなす者を蹴散らし続けた結果、近隣の生物がいなくなったそうだ。

元鬼の山の異常な寂れっぷりの原因が解き明かされた瞬間である。

そんな凶暴さを持つ幽香であるが一つだけその凶暴さが鳴りを潜めた成長点があった。

無意識の破壊行動の制御、つまり寝相で家を壊すということがなくなつた。

なんでも花に囲まれた場所にさえいれば壊さずに寝てられるそう。何者に対しても厳しい幽香だが花に対してだけは優しい幽香らしくもある。

できれば花以外、主に俺に対しても優しくなってくれるように切に

願う。

ま、とにかくなんだかんだあったものの元気に暮らしていたそうだ。

「さてと、それじゃそろそろ行くでしょうかね。」

「あら、もう帰るの?」

「んー、帰るわけではないけどな。今、旅してるところだから。」

「ふうん、旅ねえ。何の旅かしら?」

「これから決めるところさ。ほいっと。」

俺は先日使った例の鉛筆を取り出し転がした。

コロコロコロコロ・・・

「ルナティック出ちゃった・・・。」

鉛筆の出目は妹紅。脅威の難易度を誇る全国巡りの旅、下手したら全世界巡りの旅になるであろう最狂の出目である。

「まあ出たもんはしょうがない。気長に行こうかな。」

「だから、何の旅なのよ。」

「んーと、会ったことのない旅をする不死人を探すアテのない旅かな。」

「へえ、不死人。聞いたこともないわね。」

「でも居ることは確かなんだよ。どこに居るかは知らないけどな。」

「そう、長い旅になりそうね。」

「で、なんでお前は旅の準備をしてるんだよ。」

「ついていこうかなと思って。」

「いや、なんでやねん。」

「ここ数百年、ここ以外の花の見回りは分身にやらせてたからね。そろそろ私が行こうと思っていたところなのよ。そこにあなたが来て、全国を巡るって言うから丁度いいなと思ってね。」

「つまり花巡りをしつつ、スキマで家に帰れて宿代わりになる俺についていこうと。」

「よく分かってるじゃない。花丸をあげましょうか？」

「いらねーよ。まあついて来るのは構わないけど、本当に果てしない旅になるぞ？」

「別にいいわよ。飽きたらここに帰るもの。」

「そっすか。それじゃー自由にべつぞ。」

という訳で、幽香が仲間に加わった。幽香連れて人里とか入れるんだろうか。

陰陽師的な職業の方がけっこう居る世の中だからちよつと不安。

まあ、幽香には最高クラスの隠蔽術があるからそれでなんとかなるか。

「それじゃ出発するぞ。」

「いいわよ。分身もここに置いたし、準備は出来たわ。」

「よし、それじゃとりあえず西の方にでも行くか。」

「分かったわ。行きましょう。」

どっちに行こうか考えたとき、そうだ、京都へ行こう的なことが頭に浮かんだので
まずは西へ行くことにした。アテもないし、直感に任せるのが一番だろう。

・・・思ってから二日ほど経った現在。

「ぶるあああああああああ！……！」

「うおあつ！こつちくんな！！」

「面白いわね・・・ッ！」

「幽香も戦おうとしてんな！逃げるぞ！！」

「貴様の死に場所はここだあああ！！」

「ちよっ、それはやめアツー！！」

ちよっとくらいいつもスキマで逃げることに成功。

幽香もスキマにねじ込んで無事に逃げさせた。

邪魔しやがってみたいな目で見られても、あいつとやらせるのはちよっと危ないし。

どう見ても奴の今日の状態は紳士的には見えなかったしな。我ながらいい判断だった。

さて、ご存知の方もいるかと思うがさっきの奴は若m・・・バル。トスである。

西の方へ進んでたら道に迷って深い森に入ってしまった、襲い来る雑魚妖怪共を

悉く叩き潰してうろつろと森の中を彷徨っていたら、突然奴が俺達の前に現れて

「貴様等、こんなところで長々と何をしている？」とか言って襲い掛かってきたのだ。

むしろそれはこっちの台詞である。なんで奴がこんなところに居るんだよ。

おとなしく英雄でもストーリーキングしてろっての。

まあ無事逃げたからいいけど、あの森にはもう行かない。
いつかきつとどこかの英雄が倒してくれると信じて。

しかし本当に怖かった。迫力がものを言うバ。の世界だったら俺は死んでいた。

あの恐怖に比べたら、隣で超睨んでる幽香とか大して怖くない。

「あらそう。恐怖を感じないのなら教えてあげないとね。」

「え、あれ？俺声に出してた？」

「出してなくとも分かるわよ。」

ぐしゃ

「いっつつつつつたあああああああ！！！！！」

不意打ちの金的、意識が一瞬とんだ。

「さあ、まだまだこれからよ？私の楽しみを奪った罪は償ってもらわないと。」

「ちょ、まて謝るから！」

ぺきん

「あがあああああああ！！！！」

前歯を掴み捻る、痛みだけは超一級。

ベシンッ

「~~~~~ッ！！！！」

鞭打、皮膚を対象とした痛みの特化した打撃。もう言葉も出ない。

それから小一時間、幽香によっていとも容易く行われるえげつない行為を耐え切り、

開放された時、俺は思った。絶対に幽香を怒らせてはいけないと。奴は生粋のドS。苦痛を与えることに関する最高のエキスパートだ。それを敵に回すだなんてとんでもない！暴挙、正に暴挙である。

そもそもなんでこんなことになったのか。

元を辿れば、俺の直感で西に行ったのが始まりだった。

そこから度重なる不運の結果、こうなってしまったわけだ。旅立ち早々こんなことになるとは先が思いやられる。

ちなみにこの日以降、俺は己の直感に頼ることはなくなった。

四十五話 本鮪の赤身は美味い

御手洗で手を洗い、二礼二拍一礼。参拝の作法である。

今、俺は神社にいる。名のある神社でもなく、参拝客もまるでいない。旅の最初からどうにも不運に見舞われてしまったので、旅の祈願をしにきたのだ。この寂れ具合で効果があるかどうかは知らんけど、まあ気休めにはなるし。

ちなみに守矢神社には祈願をしに行かない。鉛筆ダイスの候補地だし。

それに神社と言ってもあいつ等から何か御利益があるというイメージが湧かない。

むしろ俺に対しては誤利益でも授けてくれそんな予感すらする。

「さて、祈願も済ませたところで行くとしますか。」

「ええ、行きましょう。」

幽香は祈願をせずに待っていた。まあ、妖怪が神に祈るってのも変な話だしな。

そして出発しようとした時、楽しげな音を鳴らしながら何かが空から降りてきた。

「うひゃひゃひゃ・・・わしは記念。人じゃ。」

出たがり仙人だった。何でこんなところに居るんだよ。

「佐原公一は今、全体を通して100回目の貧乏神神社の参拝をしたのじゃ！」

なん・・・だと・・・。俺の参拝したのは貧乏神の祀られる神社だったのか。

っていうか貧乏神なんか祀るなよ。なんでこの神社つくられたんだ。

「記念にわしから貧乏神を憑かせてやろう！」

「いえ、結構です。余計なことしないで下さい。」

「仲良くするのじゃぞ！うひゃひゃひゃ・・・！」

「いや人の話を聞けよ、いらないうて！」

結局人の話を聞かずに記念。人は空へと消えていった。そしてそれと入れ替わるように人を破滅へと導く恐怖の神が出現した。

「キングボ。びゅー！！！」

貧乏神っていかいきなりキング様出現なんですけど。

謎の超展開にまるで思考が追いつかない。どういつことなの・・・。

「ねえ、あのデカイのは神なの？」

「ん、ああ一応神だよ。最凶にして最悪のな……。」

「へえ、面白いわね。神だというのに神力が感じられないし、それで最強とは。」

「え、いや多分だけど最凶の意味をまちg」

「あいつと闘るわ。ちよつと待ってなさい。」

「いや、ちよ——。」

いやいや、よく考えろ。また邪魔したら究極的な加虐をされるハメになるかもしれない。

それにあのヒヤシンスでも栽培してた方が建設的なポンコツではなく幽香が闘うんだ。

うまくキング様を撃退してもらえば、幽香は満足するし俺も助かるしで一石二鳥。

ここは任せるのが最良の選択だろう。うん、ナイス判断。

「うん、まあ止めないよ。満足いくまでやってきてくれ。」

「ええ、楽しんでくるわ。」

幽香は心底楽しそうな黒い笑みを浮かべて飛んでいった。

しかし、永遠亭でのんびりしていたうちに随分力オスな世界に変わったもんだ。

いや、よく考えればその前から割りと色んな要素の混じった力オスな世界だったか。

恐竜いる時代に塩漬け君らしき人がいたり、少林寺がネオ中国的な何かだったり。

まあ、それでも先日の野生の穴子ほど力オスではなかったよな。

塩漬け君、少林寺、タ。ン。Xとかは時代なり場所なりはあつてたけど、穴子はおかしい。

色々混じった世界であるのは確かなんだけど、混じり方に違和感が出たっていうか、

何とも言えない感じ。今回の仙人や貧乏神もなにかおかしい気がする。

場所的には日本だからいいんだけど、仙人がマイナスイベント起こすとかないでしょ。

それに貧乏神が祀られて、拳句、いきなりキング様光臨とかもおかしい。

さらにキング様、何かちっちゃいし。せいぜい身長3メートルくらいか？これも変。

もしかすると新手の異変かもな。世界が混じっちゃったりとかそういう感じの。

妹紅探して全国巡るんだし、ついでに調査してみようか。

そんなことを考えているうちに幽香がキング様をボコボコにしていた。

「貴方つまらないわ。もう消えなさい。」

そう言って極太レーザーでキング様を神社ごと焼き払った。

幽香の完勝である。

「全然弱かったじゃない。どこが最強なのよ。」

「いや、最も凶々しいって意味の最凶だからね。」

「あら、そうだったの？確かに負の力は溢れ出ていたわね。」

「だろ？災いをもたらす最悪の神だからな。」

「ま、いいわ。行きましょう。」

「おう。」

結局、旅の祈願は無駄になったわけだが、まあいいだろう。

無駄足踏むのも旅では良くあること。いちいち気にしてなんかいられない。

次の行き先は北。直感ではなく棒倒しによる決定だ。運任せである。ここまで不連続きだったので、流石に今度はおかしいことにはならないだろう。

もしこれで何か不幸な事態に見舞われたら厄神様でも探して厄を払って貰おうかな。

北国――。

厳しい環境にもめげず、自然と戦い生きている人々の住む場所。

文化水準は低めではあるが狩猟技術はとび抜けて高い。

妖怪相手に陰陽術に頼らず抗戦するところもあるほど戦闘に長けている。

いくつかの村で何日か滞在させて貰い、一緒に熊を狩って熊鍋を食したりした。

熊鍋とか随分久しぶりだったな。多分黄と美鈴と一緒に食べて以来だ。

ちなみに妹紅情報は有力なものは得られなかった。

数年前に見かけた程度の情報が限度では特に手がかりになりえない。

そこから更に北へと進み、津軽海峡まで行った。

妹紅には津軽海峡を渡る手段がないはずだから、北海道に行ってるわけがないので、

北の探索はここで終了。およそ三ヶ月に渡る北の旅だった。

今、次にどこに行こうか考えながら鮪尽くしの夕食を食べている。

なぜ鮪があるのかというと幽香が沖の鮪の魚影を見て興味を持ったらしく、

飛んでいって捕まえて来たからだ。200kgクラスの大物である。すげえ。

それで俺がありがたく調理させていただき、おいしく食べているところだ。

「おいしいわね。とろけるような食感がなんともいえないわ。」

「美味しいよな。俺の大好物なんだ。」

「へえ、そうなの。どおりでこんな珍しい魚を淡々と調理できたわけね。」

「調理したの自体はまだ2、3回くらいしかしたことないけどな。」

「ふうん。それだけであれほど慣れた手つきで調理できるのね。」

「まあ、長年料理してた経験の賜物かな。」

「・・・やっぱり料理店でも出したらいんじゃない？」

「いや、前にも言ったけど俺の料理はあくまで趣味程度のものだからね。

それに店構えたら自由時間が減るし、俺やりたいこと色々あるからさ。」

「いいじゃない趣味程度でもこれだけ美味しいんだし。それに貴方が分身出来るでしょ？」

「いやー、分身難しくてね。まだ変な分身がでることがほとんどなんだよ。」

「そう。貴方が店を構えるなら、ちゃんとしたやり方教えましょうか？」

「え、前教えてもらったのってちゃんとしてなかったの？」

「あんな感覚だけの方法でちゃんとした分身が出来るわけじゃないじゃない。」

「うぐぐ、そんな方法で修行した俺の苦勞は一体・・・。」

「まあ、その苦勞も無駄ではないわよ。分身を出すという点では同

じだし。」

「しかしちゃんとした方法でやってれば今頃は……。」

「ええ、ちゃんとした分身が出来ていたでしょうね。で、どうするの？」

むう……。ちゃんとした分身術を教えてもらえるってのは捨てがたい。

それに店の方は分身に任せておけば、俺にデメリットがないようにも見える。

しかし俺の料理をこの時代に出しちゃうと、文化水準の差のせいで他店を潰しかねない。

あるいは俺の料理からなにかを見出し、一気に文化が伸びるかもしれない。

いずれにしても、料理文化に何らかの影響を及ぼしそうなのはちょっと心配だ。

そしてあーだこーだ悩んでいるうちにふと名案が浮かんだ。

「いいだろう。店を構えるとするよ。分身の術が完成したらな。」

「そう、じゃあすぐに修行を始めるとしましょう。」

「ああ頼むよ。それと店だけど、客は限定するからな。」

「限定？」

「そ。俺の知り合いかその紹介を受けた奴だけ相手に店を開くことにする。」

「なぜそんな面倒なことをするのかしら？」

「沢山客が入ったら面倒だから。お前は利用できるんだ、文句はないだろ？」

「ん、まあ私が利用できるなら文句はないわ。」

「よし、それじゃ分身の術の方を頼むよ。」

「任せなさい。まず――。」

こうして俺は分身の術をマスターして移動屋台の料理店を開くことになった。

まあ色々危惧したことについては、紹介制にしたから問題ないだろう。

どうせほとんど妖怪相手に商売することになると思うしな。

ちなみに幽香は俺の店の利用は永久無料となった。

分身の術の最後の詰めところで、無料にしないと教えないとか言い出したからだ。

まあ、別に幽香一人無料にしたところでそんなに負担増となるわけでもないの、

特に交渉することなく受け入れた。

それにしても詰めのところ、更なる条件を持ちかけるとか鬼畜の交渉術である。

しほれるだけしほるといふことか。幽香の博才の片鱗を覗いた気分になった。

四十六話 醤油ラーメンが好きです。でも塩ラーメンの方が（ry（前書き）

このサイト、Nコードっていうのがこの作品識別用のユニークなコードになってるんだってね。英字二つに数字四つとか結構な数を想定しているようで。

まあ、そのNコードなんですけど俺のこの駄文、N 1 2 3 4 Qらしいんですよ。

なんかこの1 2 3 4って並び、すごいこつ適当さが感じますよね。何にも考えずに数字四桁って言われて決める時みたいな。

ま、やっぱりだからなんだって話なんですけど。

四十六話 醤油ラーメンが好きです。でも塩ラーメンの方が（ry

「ビールと角煮と豚肉のおろしポン酢がけを頂戴。」

「私はほっけの塩焼きと辛めの日本酒をお願いするわね。」

「はいはい。少々お待ち下さいよっと。」

豚肉とほっけを焼きつつ、作り置きしてある角煮と酒を出す。

「へいお待ち。残りはちよっと待ってな。」

豚肉を焼いておろしを乗せポン酢をかける。シンプルでかつ美味しい一品。

ほっけは塩焼きで十分美味い。骨は抜いて客に出すというのが当店の心遣いだ。

常連の客にもすっかりなじみのメニューとなっており、実に好評である。

・・・まあ、常連っていうのは紫と幽香だけなんだけどね。

というより開店してから約一ヶ月、紫と幽香以外の客が来たことはない。

それに幽香と一緒に旅してるから来るというより居るといったほうが正しい。

つまり、ここ一ヶ月での来客は紫のみというわけだ。今日もこの二人だけである。

俺としては面倒がないから実に楽で助かる。余裕があるから分身も使っていない。

・・・おっと、ほっけも豚肉もいい感じに焼けてきたな。

「はいおまつとさん。豚肉のおろしポン酢がけとほっけ塩焼きだ。」

「もぐもぐごくごくあら、早いわねもぐもぐ」

「いつもより三倍は早いわね。」

「調理器具を新調したからな。それと幽香、食べながら話すな。」

角煮を頬張ってはビールを飲みと幽香は忙しく食事を進めている。
かわいい。

でも食べながら話すのはマナー違反だよな。

「もぐもぐいいじゃないごくごく誰かむぐ困るもぐ訳でもないんだし。」

「困りはしないけど、同席者にとっちゃいい気はしないよ。なあ紫？」

「ま、そうですわね。人前でそんなに行儀が悪いなんて歳を重ねた殿方みたい。」

「む、言ってくれるわね。けぶつ。」

「おいおい、流石にげっぷはまずいだろ。女を捨てたか？」

「捨ててないわよ。仕方ないじゃない、このお酒を呑むと出ちゃうのよ。」

まあ確かに炭酸強めなんですけどね、そのビール。

「下品ねえ。その位我慢しなさいよ、みっともない。」

「うるさいわね。公ー！ビールもう一杯、あと枝豆も！」

「へいへい。」

「あ、私もお酒をもう一杯、それと冷奴を一ついただけるかしら。」

「あいよ。ちょっと待ってな。」

すでに調理していた品と酒を持って来る。

「へいお待ち。しかし紫、今の季節なら冷奴より湯豆腐の方が良かったんじゃないか？」

「いいのよ、冷奴で。熱燗と冷奴の組み合わせが好きなのよ私は。」

「好みなら仕方ないな。ところでお二人さん、今日のメインは何にする？」

「任せるわ。適当に作って頂戴。」

「私はいいわ。今日は飲みに来ただけだもの。」

「分かった。じゃあ幽香、ちょっと待っててくれ。」

早速メインの調理に取り掛かる。今日はラーメンにしよう。

俺の店は別に居酒屋というわけではない。料理店であり、酒はおまけだ。

幽香も紫も夕食の時間にはまず酒とつまみを要求してくるから出しているだけ。

メインはあくまで夕食である。まあ、今日の紫は飲みに来ただけらしいが。

ちなみにこの時作る夕食が俺の夕食にもなる。わざわざ別のものを作るのも手間だからな。

それに比べ同じものを作るなら一人分も二人分も大して手間は変わらない。

今日はお任せということで俺の趣味全開の夕食が作れる。

という訳で、今日は前から仕込んでいた海鮮スープを使ったラーメんに決定！

ホタテの貝柱と蟹、海老から取った出汁をベースに野菜の甘みを加えたスープ。

そこにあっさりとした塩味を加え、スープが良く絡むコシのある細麵を使用。

途中でバターも加えられるように別皿に用意する。これで完成。

これが俺の最も好きなラーメンである。今日はおかずにじゃがバターも用意した。

ごきげんな夕食である。

「お待ちどう！さて、俺も飯にするから今日はこれで店仕舞いだ。」

「そ。それじゃまた来るわ。」

そういつて紫はスキマを開く。

「あつ、おい、お勘定！」

「ツケでお願いしますわ。」

「ちょっと」

待て、と言つ前に紫はスキマでさつさと歸つて行つた。

「くそ。またかよ……。」

「いいじゃない、別に。」

「よかねえよ。あいつ俺の店で飲み食いしてまだ一度も代金払つたことねえぞ。」

「お金なんてあつてもなくてもいいじゃない。」

「んなことねえよ。確かに俺は金がなくても大抵のものは手に入るけどさ。」

「それにお金が欲しければ、適当に人を襲えばいいでしょ？」

「いや、そんな強盗じゃないんだから。」

「強盗つてなに？強者が弱者から物を奪うのは当たり前のことよね。」

「いやいや、なんだその原始理論は。人の物とつたら罪だからね。」

「罪？弱いということが罪なんじゃないの？」

やばい、幽香は本気で言っている。その表情がそう物語っている。

駄目だこいつ・・・早くなんとかしないと・・・。

「ほら、そんなことより早く食べないと麺がのびちゃうわよ?」

「おっと、いけね。今日の飯はラーメンだったな。よし、食おうか。」

ズルズルズルズル・・・

「美味いつ!」

フーフー・・・パクツ・・・モグモグ・・・

「ん、なんだか深みのある味ね。」

ズゾゾゾツゴクゴクゴク・・・

フーフーフー・・・パクツ・・・むぐむぐ・・・

カラアン

「ふいー、美味かったあー。」

「早いわね。」

「まあ早いっちゃ早いかな。お前は遅すぎだろ。」

「仕方ないじゃない。これ熱いのよ。」

「猫舌だねえ。ま、いいや。ごゆっくりどうぞ。」

「ええ、そうさせてもらっわ。」

「さてと、俺は残りのじゃがバターを食うとしようか。」

ハムツ　ハフハフ、ハフツ！！

「・・・ちよつと。」

「ん、なに？」

「食べ方がキモい。」

「うん、知ってる。」

「ならどうにかしなさい。」

「まあ、あと一口だから勘弁してくれ。」

「・・・次からは直しなさいよ。」

「りょくかい。」

一度やれば悔いはない。できれば炊きたてホカホカご飯でやりたかったけど。

とりあえず、幽香が食事が続けている間に店の後片付けと明日の仕込みに入る。

それからこれまでの情報のまとめと明日の進路の確認。

実はこの一ヶ月で妹紅探しが驚くほど進んでいるのだ。

三週間前に立ち寄った村で、二ヶ月ほど前に目撃したとの情報を入

手。

それから一週間後立ち寄った村で、しばらく滞在した後に一ヶ月前に村を出たという情報があり、俺も二、三日その村に滞在して周辺の探索。

結果、人の通らないような山道に争いの後が不自然に多く、木々に焼け跡が見つかった。

恐らくは山道を縄張りとする妖怪達と妹紅が争った跡だろう。

そこから先は人の進んだ気配、野営の跡などをつぶさに探り出して追っている。

そして今、俺達が休んでいる場所は、二、三日以内に人が使った形跡がある山小屋。

来た道を除けば下山する道と更に登る道しかない。

二択である。この二択を当てればそろそろ妹紅に追いつくだろう。

しかし、今日周囲を見た限りでは、どちらも特に手がかりは見つからなかった。

というわけで、明日は分身を使うことにする。

分身が登山ルート、俺が下山ルートだ。なぜなら下る方が楽だからそれに妹紅が高いところが好きな煙かもう一方のやつじゃなかったら下山ルートだ。

わざわざアテのない旅で面倒な道を選ぶこともないだろうしな。

ま、どちらにせよ明日には追いつけるだろう。実に楽しみだ。

四十七話 弱みを握っていればスカウトは容易い

料理店店主の朝は遅い。昨夜既に仕込みは終わっている。幽香の寝相による破壊行動を避けながらゆったりと二度寝を続けている。

貧弱一般妖怪ではかわしきれない幽香の攻撃もほんの僅かな動作でかわしてしまう。

何気ない朝の一事でも店主の技が光る。

そして昨晚泊まった山小屋が完全に木片に変わった頃に起床。

ここに花があれば山小屋は無事で済んだだろうが、花はなかったので仕方ない。

現実是非情である。

朝食を済ませ、我等妹紅探索隊は旅路へと戻る。今日見つければいいが。

昨日予定していた通り登山ルートは分身に任せ、下山ルートは俺と幽香が担当する。

サクサクと探索を進めていく中、高山植物などが開花しており、幽香の機嫌がいい。

この調子ならもこたんを発見して平和的に接触できそうだ。

ちなみに機嫌が悪い日はヤバイ。生物見かけたら問答無用で虐殺なんて日もあった。

犠牲になったちっちゃい山村には謹んでご冥福をお祈りいたします。

数時間後、遂に目標である四人目の蓬莱人、もこたんを分身が発見。どうやらもこたんは高いところが好きだったようだ。煙属性が馬鹿

属性がついてる予感。

発見したのでペイントボ。ルといきたいところだが、別に狩りとするわけでもないし、
そもそも人にそんなもんぶつけたら喧嘩売ってると思われてしまうのでやめておく。

スキマを開き分身のところへ。

おっ、本当にいた。もこたんだ。白髪でサスペンダー付きのもんぺ姿である。

「いたいた、何十年かかるかと思っていたが予想外に早く済んだ。」

「あの娘が貴方の言ってた不死人？」

「そうだよ、蓬莱の薬つてのを飲んだ——」

ジュワッ

いきなり幽香が妹紅に向かって極太レーザーをぶっ放した。
どうみても直撃しており、跡形も残っていない。

「なぜ殺たし。」

「本当に死なないのか試そうと思って。」

「いやいや、だからっていきなり攻撃とか失礼だろ。」

「いいじゃない、減るものでもないんだし。ねえ、そう思うでしょ

「？」

「いいや、思わないね。どこで私が不死なのを知ったのか知らないけどな、死ななくても痛いものは痛いんだよ、分かったか妖怪。」

もう生き返ったのか、流石もこたん。まあ薬作った永琳がすごいんだけど。

「って、あれ？なんで服も再生してるの？」

「この服はある術で出来ていて着てる人に合わせて形を作るんだ。」

「ってことは、再生した体に合わせて服が形づくられたってわけか。」

「そう。」

「畜生！焼け死んで全裸復活だと思ってた俺の期待をどうしてくれる！！」

「いやどうするも何もそっちこそいきなり殺してくれたのはどう落とし前つける気よ？」

「知るか！そんなこと幽香に言え！！そんなことより全裸を要求する！」

「うわぁ・・・これまで色んな組み合わせを見たけど、変態と妖怪の組は初めてよ。」

「変態じゃないよ、仮に変態だとしても変態と言つ名の」

ジュワッ

ゴウッ

「あら奇遇、やっぱり変態は焼き払うに限るわね。」

「妖怪と同じってのは嫌だけど、その一点は同意するね。」

「いてて・・・せめて台詞は最後まで言わせ」

ジュワッ

ゴウッ

「またまた奇遇ね。ところでこの変態を処理したら私と遊んでみない？」

「殺した落とし前は自分の命で払うてことか？いい心がけだな。」

クスクスクス

あ、幽香が笑った。それもドス黒く。

これはもこたん何回死ぬか分からんね。でもその前に俺が殺されそうだから逃げよ。

二人に燃やし尽くさせる前にスキマで離脱。適当に様子見して落ち着いたら戻ろう。

「私の命が欲しいだなんて、随分欲張りなのね。」

「そうか？殺した対価は殺されることで釣り合うと思っけど？」

「そうね。ただし対等な者同士なら、の話だけだね。」

「一理あるな。妖怪風情の命じゃ人間の命の価値には届かないか。」

「面白いわね貴方。そろそろ遊びましょうか？」

「ああ、いつでも構わないよ。」

「そう。それじゃいくわよ！」

先手は幽香。一気に間合いをつめて殴りかかった。

対する妹紅は炎を纏い、やられるにしても燃やすつもりで迎撃しようとしている。

さながらセルフバ。ニングといったところか。

俺もその術欲しいな、主に龍対策としてアイテムカウンターする為に。

さて戦況だが、圧倒的に幽香が優位だ。やはり格が違う。

妹紅もそれなりの実戦経験もあるようで、そこらの妖怪より断然強い。

しかし大妖怪である幽香から見ればまだまだひよっこもいいとこだ。どう見ても幽香は手を抜いている。遊ぶと言った言葉通り、ただ遊

んでいるだけだ。

対する妹紅はもう数えるのも面倒な程死んでいる。ほんの一撃も幽香には届かない。

頼みの綱の身に纏う炎も、幽香の攻撃により起こる風圧で飛ばされ続けて役に立たない。

お互い手の届く間合いで戦っているのにこの差。流石は幽香としか言いようがない。

これほど戦力に差があるのに幽香が楽しそうにしているのはなぜだろうか。

ふとそう思い、しばらく考えたら答えが出た。

幽香は妹紅が生き返るたびに嬉しそうな（黒い）笑みを零す。

つまり、壊れないおもちゃを見つけたのが嬉しいんだろ。

生き返る毎に攻め方を変えながら攻めてくるという成長を見せる妹紅。

どこまでも遊べて強くなる相手というのは幽香にとってこの上なく嬉しいに違いない。

三度の飯より戦うのが大好きだからな幽香は。

俺としても妹紅が強くなるっていう点は嬉しい。

幻想郷にスカウトするにしてもあの地は強者がうようよしてるからな。

それに永遠亭の面子は今の妹紅じゃ相手になるところの話じゃないし。

ここで俺がかつこよく加勢して幽香を止めてキヤーサハラサーンっていう展開もいいけど、なんかそれやろうとすると間違いなく失敗する未来が見えるからやめておく。

およそ二日ほど経っただろうか。

幽香が唐突に飽きたと言って俺を呼んだので、スキマで回収。眠いと言っていたので寝室に案内したら即寝た。野比さんもびっくりの速さだった。

それから俺がもこたんのスカウトに入る。

ものつすごい敵意の眼差しで見られているが、俺にはもこたんを落とす秘策がある。

「いやあ、俺の連れとよく遊んでくれた。礼を言っよ。」

「礼を言うぐらいなら大人しく退治されてくれないかな。もう疲れてるんでね。」

「疲れてるんなら俺の家で休んでいくか？」

「誰が妖怪の世話になるか。」

「誰が妖怪だ。」

「お前が。」

「いやいや、俺は人間だよ。」

「なに言ってるの。お前のような人間がいるか。」

「いるんだよね。お前のような蓬萊人がいるようにな。」

「蓬萊人・・・、不死であることどこかそこまで知ってるとはな。どこで聞いた？」

「さあね。ところでお前さん、放浪の旅をしているんだろ？」

「それがどうかした？」

「いやなに、ちょっと住んでもらいたい場所があるんだよ。」

「興味ないね。」

そっけなく返されたが妹紅相手ならこれ以上ない切り札がある。

「”かぐや姫”」

「！ お前っ・・・！？」

「探してるんだろ？」

「なぜその事を知っているっ・・・！！」

「なぜでしょう。それでその探し人の居場所だが、俺知ってるんだよね。」

「今すぐ教える。さもなくば焼き尽くすぞ・・・！」

「教えてやってもいいけど、条件がある。」

「条件だと・・・？」

「ああ、とある山奥の人里がその周辺に住んで貰いたい。」

「輝夜を殺した後なら住んでやってもいい。」

「その輝夜が住んでいるのもその人里の近くなんだよ。」

「！　なら今から住んでやる。場所を教えろ！」

「まあ待てよ。それ以外にもう一つ条件がある。」

「なんだ、早く言えよ。」

「人間の味方であること。これは厳守してもらいたい。」

「はあ？　なんだそりゃ。妖怪退治でもしろってのか？」

「まあ人を襲ってたりしてるのを見たらいい。どうだ、条件を飲むか？」

「そんなんでいいなら。しかし・・・」

「なにか？」

「なんでそんなことを、と思ったけどどうでもいい。輝夜が殺せるなら。」

「俺は居場所は教えるがお前が殺せる保証はないぞ？」

「そんな保証はいらないよ。さあ場所を教えろ。」

「それじゃ現地へごあんなーい。」

スキマで一気に迷いの竹林前まで移動。

人里の場所と竹林内に輝夜が居ることを伝えて妹紅と別れた。

輝夜の居場所は妹紅に対しては最高のカードだ。

おかげでびつくりするほどすんなり交渉が成立した。

どうせなら全裸見せてとかそういうのも条件に・・・いやなんでもないよ。

俺は変態じゃないよ。いやマジで。

四十八話 四人目の蓬萊人の弱点（前書き）

いつもは飯とか食いつつ、某動画サイトで適当に動画見ながらこの駄文書いてたりしてて、大体一話に小一時間くらいかけてるんですが、今回試しに駄文書くのに集中してみたら15分弱で出来ました。恐らく早くなつた分だけ誤字とかありそうですけど、あったら脳内補完でお願いします。

探して直すって面倒だし。

四十八話 四人目の蓬萊人の弱点

「うーっす。」

「帰れ。」

「そんな邪険に扱わなくてもいいじゃないですか。」

「別に邪険に扱ってなんかないよ。さ、とつとと失せろ。」

「まあそう言わずにさ、ほら手土産にパフェ作ってきたから。」

「・・・ふん、まあいいか。ほら上がれよ。」

「お邪魔しまーす。」

今、俺は妹紅の家に来ている。

スカウトした後、なんとかして敵対状態を緩和しようとあれやこれやと手を尽くし、

攻撃されては帰らされ、門前払いで帰らされと幾度となく繰り返してきた。

そして先日、遂に妹紅の弱点を発見したのだ。それが甘味である。

あれはプリンを手土産に尋ねた日の事だ。

当然のごとく攻撃されて門前払いされるかと思いきや、その日は攻撃が来なかった。

不審に思い、妹紅の家を覗くと満身創痍といった具合で妹紅が倒れていた。

もちろん蓬萊の薬の効果があるため、どこかに傷があるということ

ではないのだが、

疲労が溜まり、体力の底の底まで使い果たしたという風体だった。せつかなので俺は体力回復のための栄養抜群料理を作り、妹紅に振舞おうとした。

しかし、敵対してまるで信用のない俺が作った物を妹紅が素直に食べるわけはなく、

その日は作った料理と手土産のプリンを置いて大人しく帰った。

翌日、妹紅の家を訪ねるとぶっきらぼうにはあるがありがとうと礼を言われた。

どうやら料理を食べてくれたらしい。すっかり元気になったようである。

そして手土産に持っていたシュークリームを渡すと素直に受け取ってくれた。

これはちよつとは信頼してくれるようになったかなと考えていると、妹紅が、

これはなんなんだろうと言わんばかりの表情でシュークリームを見つめていた。

まあ、当たり前前の反応である。この時代にそんなものがあるのがおかしい。

俺はとりあえずそれが食べ物で、おいしいものだから食べてみると勧めてみた。

すると妹紅はあっさり食してくれた。昨日の料理が築いた信用がここで効をなした。

もきゅもきゅと食べて飲み込む妹紅の表情は正にヘヴン状態。ほぼイキかけましたと言ってもおかしくはない表情である。

ここで俺は確信した。妹紅はスイーツ大好き子であると。

それからというものの妹紅の家を訪ねるときはスイーツ持参で行っている。

スイーツをちらつかせればとりあえず家に上げてくれるのだ。

完全な弱点である。この弱点を突いて徐々に交流を築いて、ゆくゆく末は結婚・・・
じゃなくてちゃんとした交友関係を持つというのがスイーツ（笑）作戦である。

さて、ここまでで一つ疑問に思った方がいると思う。プリン関係なくね？と。

いやいや、実はプリンはちゃんと食べられていたのだ。
きっとそれが俺の料理に対する信用の要となったのではないかと思う。

まあ実際のところはどうか知らんけど。

ま、何はともあれ今は順調に交友関係を深めているところってわけだ。

「ところで妹紅、竹林探索は進んでいるか？」

「ほあー・・・」

「おい妹紅。」

「はあー・・・」

「おい、妹紅さん？」

「・・・」

ダメだ。まるで反応が返ってこない。ヘヴン状態になってしまっているようだ。

「おかわり、あるぞ?」

「おかわりっ!? 本当か!?!? あつ。 . . . い、いや折角持ってきたのなら貰うのが礼儀だよな。仕方ない、食べてあげる。うん、仕方ないな。」

かわいい。すごくかわいい。大事なことなので強調して二回言いました。

「はい、おかわり。で、俺の話聞いてた?」

「え、話?」

「あ、やっぱり聞いてなかったのか。」

「い、いや、聞いてたよ? アレだろその、あの話だろ? いやーあれはアレだったなあ。」

「いや、それ何の話だよ。俺が聞いたのは竹林探索進んでるかって話だよ。」

「え、あ、そうそう。その話だよ。聞いてたよ、ちゃんと。」

「 . . . まあいいや。で、どうよ? 」

「うん。正直言うと全然だね。あの竹林なんかおかしいんだよ。」

「おかしい? 」

「うん。この前ぶつ倒れるまで歩いたんだけど、気付いたら私の家に戻ってたんだ。真っ直ぐ進んでたはずなのにいつの間にか戻っているなんておかしいよ。」

「ああ、そりゃ迷いの竹林だからな。俺は普通に進めるけど。」

基本的に迷いの竹林というのは普通に進むことはできない。

大津波で流されて出来た竹林だそうで、地面がかなり水分を含んだものとなっている。

そこから蒸発した水分より深い霧が生み出され、高い竹も相まって周囲の確認は困難。

さらに地面が僅かながら様々な方向に斜めになっている上、足がとられやすい。

そして生えている竹も斜めに生えていたりするため、方向感覚を失いやすい。

と、ここまでが自然と出来た天然の迷い効果だ。

これだけでも普通の人間は竹林を真っ直ぐ進むなんてことはまず不可能。

これに加え、永琳やてゐの手によってとことん迷わされる様に策が張られている。

永琳は主に術式、てゐは主に罠関係だ。とにかく永遠亭に寄せないようになっている。

これらを突破するにはいくつか条件が必要になる。

まず一つは力。永琳の術を破れるだけのなんらかの力が必要である。次に空を飛ぶこと。てゐによって竹が斜めにされて何箇所かで壁が出来ている。

どう進んでも結局のところ竹壁を越えなければ、永遠亭には辿り着けないづくりだ。

そして最後に運。竹林のいたるところにいる兎に見つからないだけの運が必要だ。

兎が見知らぬ人を発見するとてゐに報告が行き、さらに永琳の耳に入る。

そして、てゐが兎に指示を出して発見した人を帰らせようとする。それでも帰ろうとしない場合、永琳からの射撃が飛んでくる。こいつを何とかして近づくのは基本的に不可能と言っている。

なんせあの超天才が近づかせないための最高の射撃を撃ってくるんだ。俺でも無理ゲー。

とまあ、空間系の能力を持たない妹紅はこれをクリアしなければならぬわけだ。

話からすると、多分自然に出来た迷い効果すらクリアできていない様子。

前途多難といったところだろうが時間はたっぷりあるんだしゆっくりしていつて欲しい。

「普通に進めるってどうやって？」

「ん、今の妹紅に言っても意味はないかな。」

「どういう意味だよ、それは。」

「力不足ってことさ。あの竹林は色々と厄介なことになっているから、ちよつと強い程度の力じゃ到底普通に進めないよ。特に精神力が強くなきゃな。」

「む、それでもそこの妖怪より強いし、精神力なら自信はあるんだけどな。」

「まだまだだね。そもそもあの竹林内で普通にしていられないだろう？」

「確かに普通ではないかな。一応真っ直ぐ進んでるつもりでも戻ってきちゃうし。」

「その段階ってことは、まだまだってことなんだよ。」

「段階？」

「あー、まあいずれ分かるさ。ところで早く竹林進みたいと思う？」

「思うに決まってるだろ。輝夜がいるんだから。」

「んじゃ、竹林に住んでみな。」

「竹林に？なんで？」

「竹林に住めば竹林の持つ力に慣れるからな。竹林進みたいならそれが手っ取り早い。」

「成程。ところでお前に案内してもらったのはダメなのか？」

「それはダメ。」

「なぜ？」

「なんとなく。」

「なんとなくかよ。まあいいさ、これ以上手を借りなくても輝夜は殺してみせる。」

「おう、頑張れ。」

「応援してくれるのか。お前、輝夜と知り合いじゃないの？」

「知り合いだけど、あいつも不死だから殺しても死なないのは知ってるし。」

「知人は死なないから別に殺されてもいいってか。お前も大概変な奴だなあ。」

「うん、自覚はあるよ。」

「そうか。それじゃとりあえずパフェ食べてもいいかな。」

「自由どうぞ。」

パフェを頬張るとまたヘヴン状態になる妹紅。

輝夜を殺すと言っている時の表情との落差が激しくてかわいい。

これがギャップ萌えてやつか・・・。

え？違う？こまけえことはいいいんだよ、妹紅かわいいんだから！

四十九話 犯人はヤ。

妹紅のところにちよくちよく通う生活を続けてしばらく経った。

どのくらい経ったかは覚えてない。俺くらいの歳になるとどうにも数えるのが面倒でね。

ま、爺臭い言い分はさておき結構な時が流れ、妹紅とは普通の友人関係まで漕ぎつけた。

そこでそろそろ鉛筆ダイスで次の旅に出ようといったところだ。次の旅は一人旅になる。

妹紅のところに通うようになった頃から幽香とは別行動をしているからだ。

ちなみに、料理店の方は俺の分身二人が経営中である。

一人は店主として活動、もう一人は食材調達係として活動している。店は基本的には幽香の旅について周り、紫が人材をスカウトする際に一席設ける時には、

そっちの方へ出張する形をとっている。

収支で言うと言つ赤、というか代金を一度も貰ったことがない。

いずれ紫には利子をつけてきっちり払わせて分かせよう。

金は命より重いということを。

「さてさて、とりあえずは旅先を決めるとしますか。」

鉛筆ダイスを取り出しダイナミックに転がす。

というかダイナミックに転がっていく。鉛筆が崖から転落してしまった。

「げっ、やばい……！」

などと言葉とは裏腹に軽い気持ちでぼざきつつも、鉛筆を追いかける。

崖から飛び降りるなんて俺にとっては朝飯前である。

昔、強くなるかなーとか思ってた崖から飛び降りたりしてたしな。範馬リスペクトだ。

無事に崖下へ着地を決める。多分10点。

そして鉛筆も無事に発見。

「すげえ……………」

落下して地面に落ちる鉛筆。それが縦に立って静止するという奇跡。今、正にその奇跡が起きてしまった。

「すげえけど、どうしよう。」

鉛筆ダイスの行き先を書いているのは側面。これじゃ行き先が決まらない。

振りなおしか……？ いや……

「これは鉛筆ダイスの行き先以外のことをしろってことだろ。」

そういえばやろうとしてた事が一つあった。旅のついでにやろうとしていた例の件だ。

例の件、つまり野生の穴子とかいるのって異変じゃね？調査である。ネーミングは気にしてはいけない。いい感じの名前が浮かばなかったんだ。

それに多分、昔受けた永琳の八意式天才教育が影響してる可能性が高い。

とにかく元々俺に備わっているセンスが壊滅的だったわけじゃないと明言しておこう。

とりあえずネーミングは置いておいて本格的に調査に乗り出すとしよう。

「本腰入れて調査といきますかね。」

まず、どう調査するかだな。

俺の仮説ではこの世界に異世界のものが混じってきているというものだ。

この世界には異世界というのは多数存在する。魔界とかそういうのも異世界の一つだ。

それらが混じってくるのがおかしいかと言われればそうでもない。

両世界の関連が深い場合、境界が曖昧になって混じったりすることはある。

この場合は融合する形で混ざったりすることがある。月や少林寺の件はこのタイプだ。

また、片方の世界から意図的に干渉しようとした場合も混じる。

この場合は個々の状態のまま、その世界に入り込むという形になる。俺が魔界とかに入っていたりするのはこのタイプに当たる。

で、今俺がおかしいと思っているのはこの二つに合わない混じり方についてだ。

穴子の件で言えば、こちらの世界に入り込むタイプに見えるが意図的に来る理由がない。

キング様の件で言えば、元と違うという点から融合する形に見えるが、日本だからとかそんな薄いつながりで混じるってことはそうそうない。

これらから考えると恐らくは何者かの力によって世界が混ぜられていると考えられる。

これを起点に調査するとなると、犯人はかなり絞れるな。

世界に干渉できるだけの力と能力を持っていて、貧乏神クラスの個体に対して干渉できる能力を持った者が犯人の可能性ありだ。

そんな力と能力、両方を持ち合わせた者なんてそうそういない。

そんな超実力者の力は大体把握している。

だから犯人が次に事を起こした時を見逃さず、世界の歪みを創る際の力を感知できれば、その力の質から犯人特定に至れるだろう。

というわけで、しばらくは力感知に集中して網を張ってみたいと思う。

全世界に感知網を張ると、他のことはろくすっぽ出来なくなるけどいいだろう。

別に何か用事があるわけでもないし。

たまには日がな一日感知網張ってのんびりしてるのもいとをかし。

「さーで、まぬけな犯人さんが引つかかればいいんだけど。」

まるつきり引つかからない。

「まだかなー。早く釣れないかなー、犯人。」

今の季節が秋なので、さつさと一仕事終わらせて秋の風物詩を楽しみたい。

秋といえば紅葉を眺めながら一杯やることができる。月見酒もありだ。

更に秋刀魚に脂がのって美味しい季節だ。他にも沢山秋の珍味がある。極上の料理に美味しい酒を用意して、自然の美しさに浸りながら一杯それが俺の個人的な秋の醍醐味である。

この片片付けて、鉛筆ダイスで守矢か鬼のところがあれば丁度いい。秋を楽しむ大宴会が開けそうだ、などと楽しげな考えばかり浮かんでくる。

二週間経過――

がつ……ダメつ……！引つかからないっ……！

「そろそろ暇だなー。」

スキマの中には誰も尋ねてきませんよ？

紫も何か忙しそうで、頻繁にスキマで移動してるようだし。

ああ、分身と入れ替わりたい。あの面倒な料理店の店主やってた方がマシだ。

二週間も誰とも話してすらいない。

感知網に力使ってるせいで、スキマ開くとか全然できないし。

っていうか普通の人間程度の力しかでないし。能力に力回せるほど余裕がない。

こんなことなら料理店、臨時休業して分身解除しちゃえば良かった。分身分の力があれば、多少はスキマ使って自由に動けただろうに。まあ、今更なんですけどね。今の俺じゃあ分身戻す力もない。

感知網放棄すれば勿論戻せるけど、感知網は張る時に力大幅に使うから疲れる。

あのとんでもないトラウマ級の疲労をもう一度つてのはかなり嫌だし。

かといって感知網の質を下げた力あまり使わないようにしてしまつては、

いざ世界の歪みを感知したとき、正確にその力を把握できるかどうか怪しい。

今回、喧嘩売ってから間違えましたじゃ済まないような実力者が黒幕の可能性が高いので

感知網の正確さには十分余裕を持っておきたい。

となれば仕方ない、今は一人孤独に我慢しよう。

一ヶ月経過――

「・・・」

三ヶ月経過――

「しにてエ・・・」

この期間で全然成果が上がらない。俺の仮説が間違っていたのだろうか。

なんだろう、このまるで無意味な無限に続く作業をしている感覚はデスク。スでドラム缶押してるのとどっちが有意義か比べたくなってくる。

もう三ヶ月頑張ってみてダメなら思い過ぎだったことにして調査打ち切ろう。

そうしないと主に俺の精神がマッハ。

そして更に二ヶ月の月日が流れた。

「遂に——遂に見つけたぞ!!」

調査開始五ヶ月、遂にその苦労が実を結び、世界の歪みを捉えた。

「まさか、あいつが犯人とはなあ。」

歪めた力の質から犯人の特定は簡単にできた。

あまりに予想外の犯人だったため、力の質を捉え違えたかと疑ったが間違いない。

一体どんな事情があつてこんなことをしているのかは見当もつかない。

だが、こちらとしてはあまりカオスが過ぎる世界になるのは見過ごせない。

だから仕方ない。この一件に関しては敵対したとしてもな。

「世界の歪みを、破壊する！」

その為に今回の黒幕はきっちり倒す。

古くからの友人であり、協力関係が続けてきた八雲紫を。

五十話 可能性の獣（前書き）

あーあーあー あああーああーああー あああーああーああー
何のことか分からないって？

サブタイがこれならアレしかないかなって思つての前書きです。
壮大な感じの音楽が脳内に流れた方、ここから出て（ry

五十話 可能性の獣

歪みを観測後、感知網を解除して現場へ向かう。

感知網の解除もまた能力によって行うわけでかなり疲れる。

しかし、張る時に比べれば大したことはなく体力の三割も使っていないだろう。

だから休憩を挟まずにそのまま現場へ直行できる。

スキマで歪みの観測地点に行くとすぐ近くで紫による大規模な結界が張られており、

その結果の外、歪みの目の前あたりに何故か幽香がいた。

「おう幽香。こんなところでなにやってんだ？」

じー

何か超見られてる。

「おーい、どうした？何か言えよ。」

「あ。」

あ？”あ”ってなんだよ。

何か言えとは言ったけど、そういう何でもいいから言葉を出せって意味じゃねえよ。

・・・っていうかなんか変だな。こんな感じの幽香なんて未だかつて見たことないぞ。

何か急に不思議分というかアホの子成分が増えたというか、何かあったのかな？

「何か変だぞ、お前。何かあったのか？」

「・・・誰？」

「え？」

あれ？もしかして人違いだったりするの？

・・・いや、力の質は確かに幽香のものだな。

だとするとやっぱり幽香本人だし、なんだろうこれは。もしかして
新手のボケかな？

だとしたら斬新過ぎてまるでついていけないんだけど。

「あーっ！！！！」

「うおっ、なんだ？」

急に大声だしたりして、びっくりするじゃないか。

「よく見たらここは懐かしの世界じゃない。」

「はあ？」

なに言ってるんだ？

「どれくらいぶりかしら。」

「何の話だよ。」

「こっちの話？」

「いや、そうではなく。」

「じゃあなんなのよ。」

「それはこっちの台詞だ。」

なんなんだよ。何か調子狂うなあ。これ本当に幽香か？
別人がなんかの能力で力の質まで幽香とそっくりになってるとかじやないよな？

「こっちに来たのも久しぶりだし、遊んじゃおっかなろ。」

「久しぶりって何の話なんだよ。」

「あ、あなた第一号ね。」

「人の話を――」

トトトトトトトトトトトト

「聞きなさい！」

「あら？よくかわせたわね。」

「よくかわせたわねじゃねーよ！なにいきなり攻撃してきてるわけ？」

しかも洒落にならん威力で。いつもの挨拶程度とかとは桁外れの弾幕だ。

着弾点にでっかいクレーターできてるんですけど。どこにそんな力隠しもってたんだよ、幽香は。

「遊ぼうかな、と思って。」

「あーもー、後で遊んでやるから今はちょっと話を聞けよ。」

「嫌。だって遊ぶ時間も限られてるもの。」

「はあ？別に時間なんていくらでもあるだろ？」

「えー、おゆはんまでには帰らないとエリーが怒りそうだし・・・。」

「

エリー？エリーって言ったか今。

エリーってのはアレだよな。あの鎌持った夢幻館のあいつ。

もしかして今回の歪みで夢幻世界あたりが混じって来たってこと？
ってことはさっき言ってた久しぶりってのはこっちの世界が久しぶりってことか？

それならこの幽香は過去にこの世界にいたことがある幽香で、今現在この世界にいる幽香とは別物なのかな。ああもう、わけがわからないよ。もう考えるのをやめたい。

あれだ、この世界と夢幻世界がある平行世界的な何かの幽香ってことでもいいかな。

とにかく今相手にしてたら面倒だったのは確かなことだ。

早いところお帰り願おう。

「怒られるのが心配なら今帰ったらどうだ？」

「それじゃつまらないわよ。折角のチャンスなのに。」

「チャンス？」

「そうよ。沢山の人間が居る気配がするし、いっぱい殺せそう。」

「殺してどうするんだよ。別に何か得するわけでもないんだろ？」

「殺して殺して殺しつくすと楽しいじゃない。」

あ、ダメだこれ。穩便に帰っていただこうと思っただけど無理だわ。どうやら頭が正常に狂っておられる様子。妖怪の鑑的な発言だよこれ。

多分、今この世界にいる妖怪の中で最も妖怪らしい妖怪だよ。

「それじゃご自由にどうぞ。ただ俺は忙しいから他所でやってくれないよ。」

「えー、貴方で遊びたいんだけど。」

「大勢殺したいんだろ？俺に構ってたらおゆはんの時間までに殺せなくなるぞ。」

「うーん、貴方強そうだし面白そうだけど、確かに今は沢山殺せるチャンスだもんね。」

「そうそう、チャンスは逃すなよ。俺の相手なら縁があればまたいつかやれるさ。」

「そうね。それじゃ、いつかまた会ったらやりましょう。」

「ああ、いつかな。」

こうして幽香(?)と別れた。

まあ色んなところが壊滅しそうだけど知ったこっちゃない。

あんな化け物相手にしてたら紫にOHANASHIするまで体力が持つかわからん。

どうせ夕方には帰るらしいし、この夢幻世界との歪みを残しとけばそれでいいだろう。

もちろん帰ってくれた後でこの歪みは破壊するけど。

さてと、今回の用件を果たしに行くとしよう。

随分広域の大仰な結界が張られている様だが俺には関係ない。

「まずはこのふざけた結界をぶち殺す!!」

右手に能力を集中して結界に触れる。

結果、触れた部分の力という力を奪い取り、結界に穴が開いた。

能力を効率的に使おうとすると奪う力の種類や範囲がその都度違うのがネックだった。

制限するほど制御面の負担がでかくて、能力をフルに生かせなくなるからな。

そこに目をつけてからなんとかしようと思っただけの結果、行き着い

たのがこれだ。

一定範囲かつ奪う力の種類を選ばないことで強力で効率的な能力の使用が可能になった。

ちなみに発想の原点は幻。殺し。なんとなく厨二的な要素が欲しかったんだ。

結界の中に進むと案の定、紫がいた。

「あら、公一。何か用かしら？」

「おいおい、何の用かは言わなくても分かるだろう？」

これだけの結界張って、隠れながら世界を歪めたんだ。

そこに結界破つての侵入者と来れば大概は見当がつくもんだろう。

「？、いきなり尋ねて来られたのに何の用かなんて分からないわよ。」

「ほほう、あくまで白を切るつもりか。」

「白を切るも何も話が全然見えないんだけど。」

「あー、分かった分かった。そこまでとぼけるってんなら俺にも考えがある。」

「だからとぼけるって——」

「破ッ！」

俺は一気に距離をつめて殴りかかった。

しかし、紫は間一髪のところスキマを開き回避した。

「いきなりなにをするのよ。」

「なにつて・・・教育的指導とか？悪い子にはお仕置きが必要だもんな。」

「は？なぜそれを私が受けるのよ。」

「そりやお前、世界を歪めて混ぜ合わせようとした罰に決まってるだろ。」

「世界を歪める？私が？」

「おう、往生際は潔くないとみっともないぞ。」

「そんなことしてないわよ。」

「ハッ！証拠がすぐそこにあるってのに白を切るとは笑えてくるな。」

「そんなこと言われてもしてないものはしてないわ。それに私は隔離結界の修行で忙しかったからそんなことをしてる暇なんかないわよ。」

「隔離結界？」

「そうよ、前に言ったでしょ。然るべき時が来たら能力で彼の地を隔離するから、その時まで何とかなでできるように修行するって。」

「ちなみに隔離結界って今張ってあるこれだよな。」

「そうよ。空間の境界をいじって広範囲の隔離を実現しているのよ。」

空間の境界をいじる結界とその不安定、力量不足を補うための修行。この二つの符号が意味するのは一つ。謎はとけてすべた！

「分かったぞ！犯人は八雲紫、お前で間違いはないが故意のものではないな。」

「犯人って、違うつて言ってるでしょ。」

「いや、違わない。証拠として世界の歪みがお前の力で発生しているからな。お前が犯人なのは確定だ。しかしそれは修行による不安定な空間の境界いじりで偶然できたものなんだよ。」

空間をいじる、安定して行えるなら別に構わない。

しかし不安定な空間の境界が出来てしまうと、そこに可能性空間が発生することがある。

可能性空間は簡単に言くと存在し得る可能性のある世界が無数に存在する空間だ。

例えば、今のこの現世、魔界などは全てこの可能性空間の一つの世界にあたる。

もちろん平行世界だって含まれている。

よって、その可能性空間が発生すれば、この世界と別世界の出入り口となり得るわけだ。

この知識は永琳による比較物理学の講義をありがたく睡眠学習して得た知識である。

気持ちよく睡眠学習した後、永琳に24時間程の説教を食らったのは今ではいい思い出だ。

いや、正直難しい話は眠くなるから仕方なかったんですよ。俺は悪くねえ！

「・・・本当に？」

「本当だ。なんなら歪み見に行くか？お前の力の名残が残ってるぞ。」

「・・・見なくてもいいわよ。本当にそうだとしたら悪かったわ。ごめんなさい。」

「ん、よく謝りました。でも謝ってすむなら・・・ねえ？」

「え、いやでも私、ワザとやったわけじゃないし。・・・許してくれない？」

「罪は罪、罰は罰。そこはきちんとしないとね。さあ覚悟はいいか？」

「よくない。」

「ボツシユートになります。」

「ちょっとまつ——」

聞く耳もたん。早速紫を俺の独自空間にボツシユートした。

今回は罰として擬似デスク。ス空間でドラム缶を押して貰うことに決定。

しにてエと思ったら出てこられるように設定したから反省して出てくることだろう。

「さてと、残りは後始末だな。」

予想外なことに体力をほとんど使わなかったし、余裕があるから当初の予定を変更して幽香（？）には即刻帰って貰おうか。

クレーター大国日本になるのもあんまり喜ばしくはないしな。

五十話 可能性の獣（後書き）

次回、八雲紫の日入日記！

とか誰得すぎると思ったので書きません。

そもそもこの駄文誰得よって言われたら土下寝するしかないんですけど。

五十一話 ルーンシューズは甘え（前書き）

ついでに言うならPSP版も甘え
なんで弱体化してしまったん・・・

何の話かって？

本文見て思い出せる人だけにだけは分かる話かな。

五十一話 ルーンシューズは甘え

「うわぁ・・・これはひどい。」

俺は今、もう一人幽香の後を追っている。

スキマで行くのもいいんだけど、スキマから出た瞬間に偶々あの超威力弾幕の射線上に出てしまい直撃とかいうケースも考えられるので普通に後を追うことにした。

それにしても幽香が通った後はひどい。見事なクレーターが道を作っている。

この分だと死者も相当の数だろう。閻魔や死神は今日からデスマ確定だな。

なんて考えている間に現在進行形でクレーターが増えている場所に到着。

「・・・おや、なんか争ってるみたいだな。」

あの圧倒的な力に多少なりとも対抗できる力を持つ者がいるとは。紫クラスの力はあるかもしれないし、後でスカウトしてみるか。

「・・・って、アレは幽香じゃないか。」

よく見ると幽香が幽香と戦っていた。

幽香ならまあ、多少の抵抗は十分可能な力があるわな。

とはいえ、あっちの幽香はこっちの幽香の比じゃないほど力があるし、加勢しよう。

「はいストロップ。ちょっと止めて。」

「なによ、邪魔しないでくれる?」

「いや、ちょっと話があつてさ。」

「話?」

「ああ、単刀直入に言う。すぐに帰ってくれ。」

「嫌よ。」

だろうな。ここは一つ匠の話術をお見せしようじゃないか。

「いや、でもエリーが帰って来いって言ってたんだが。」

「エリーが?」

「ああ、とにかく急いで帰ってきて欲しいそうだ。」

「ふーん。でも私、今大事なところだから帰れないわね。」

「でも向こうもなんか緊急事態みたいだったし、早く帰らないとやばいんじゃない?」

「私は今それどころじゃないの。貴方、エリーにそう伝えておいてよ。」

「俺が？無理無理、だってエリーがこっち来てすぐに俺に伝言預けて帰っていたもの。」「こうしている間にも夢幻館がー」とか言ってます。俺はそんなところ場所も知らないし。」

「んー・・・ま、大丈夫でしょ。くるみとかもいるし。」

「おいおい、館の主が従者を見捨てるのか？」

「見捨てるんじゃないわよ。信頼して任せたのよ。」

「そうか。」

うん、ダメだった。嘘を並べてみたものの意味はなかったね。匠（笑）

「なら、力ずくでお帰り願おうか。」

「あら、私と遊ぶっていうの？さっきは断ったくせに。」

「さっきは用事があったからな。でも次に会ったらやるって約束だろ？」

「そうだったわね。それじゃ時間がもったいないし、始めましょうか。」

「・・・ちよつと待ちなさいよ。」

おや、こっちの世界の幽香が話に割り込んできた。

「なに？一つになる決心がついたの？」

「そうじゃないわよ。なに私を無視して勝手に話を進めているのかしら？」

「いいじゃない、どうせ貴方は私になるんだから。少し先延ばしになっただけでしょ。」

「気に入らないわね、その言い方。私が貴方に負けるとでも言うの？」

「ええ、そうよ。力の差くらい分からなかったのかしら？」

「力の差・・・、貴方、さっきまで私が本気でやっていたとも思っの？」

「やってないわね、三割弱といったところでしょう？そんなことくらい分かるわよ、貴方は私なんだから。その上で力の差があることが分からなかったのと聞いたのよ。」

「！、ふ、ふん、それじゃあ、貴方はそれよりも力があると言いたいわけ？」

「ええ、あるわよ？」

そういうとあっちの世界の幽香は妖力と莫大な魔力を開放した。辺りには濃密な魔力と妖力が混じりあって広がり、重くのしかかる。幽香はその重さに耐え切れなくなってしまう、膝をついてしまった。

「どうかしら？これで力の差、分かってくれた？」

「くっ・・・！」

こつちの世界の幽香は反論できずに睨むことしかできない。

一方、それ程膨大な力を放出して飄々としているあつちの世界幽香。

これは油断できない。

「さて、そろそろ始めましょうか。」

「いいよ、いつでもかかってこいよ。」

そう言うと同時に魔力弾が飛んできた。

大した弾速でもなかったので難なくかわして下がる。

外れた魔力弾が地面に着弾すると、やはりでかいクレーターが出来た。

弾速に対して威力は桁外れである。気を付けないとな。

とりあえず、しばらくは退きながら戦うとしよう。

まずは歪みの発生位置までおびき寄せるが先だ。

あそこからじゃないと帰って貰えないからな。

「さあて、トラップでも仕掛けるとしますか。」

スキマに八意式隠蔽術をかけて沢山開いておく。出口は勿論歪みの発生地点だ。

一つでも引つかかってくれればおびき寄せる手間が省ける。

「ほらほら、逃げてばかりじゃつまらないわよ！」

「分かつてるよ！ほら、存分に楽しみな！！」

分身を三体出して幽香に向かわせる。

一人は陽動、一人は攻撃、そしてもう一人がスキマ方向への誘導役だ。

「あら、貴方も分身できるんだ。」

と言いながら、幽香は陽動役に目もくれず攻撃役の分身を潰した。

そこから、一気に陽動役と誘導役も消し飛ばされた。その間、わずかに0.2秒。

想像以上にやりおるのう。

「ああ、幽香直伝の分身さ。しかし、簡単に潰してくれるね！」

「こんな手抜き分身じゃ何体いたところで案山子と一緒によ。」

おや、手抜きまでばれちゃったか。

まあ、ぶっちゃけおびき寄せついでの間稼ぎでスキマに入れられればラッキーくらいのつもりで出した分身だから力はあるけど、あんまり込めてない。

とはいえそれでも中級妖怪よりは力は込めてあるし、戦闘技能や知識は俺と同様の三人だからもうちょいうまくいくかと思ったんだけどな。

これは認識を新たにせざるをえんね。相手は圧倒的に強いどころか

最強の部類だと。

となれば、消極的に動くのはやめだ。逃げながらの戦いは不利だからな。

積極的に攻めて倒して歪みに投げ込んで敗走して貰おう。

加減を間違えて死なれてたとしても、もう知らん。俺とこの世界の安全が第一だ。

「それじゃあ俺が直々に攻撃してやるよ！」

妖術で炎を纏い、飛び上がる。

「スピキュール!!」

超高熱になった炎を纏ったまま地面に向けてそのまま急降下する。

「うおおおお!! あっちiiiiiiii!!」

ドゴオオオオオン!!!

すさまじい衝撃と爆炎が周囲に広がる。

「まだまだいくぜえ!!」

「スピキュール!!」

二発目。

「寒くねえか、幽香ア!!」

ドゴオオオオオオン!!!

「スピキュール!!」

三発目。

「この俺様は強えだろうが!!」

ドゴオオオオオオン!!!

「スピキュール!!」

四発目。

「骨まであつためてやるよお!!」

ドゴオオオオオオン!!!

辺りは焦土と化している。いくらなんでもこれで無事ってことは――

「けほっ……、もー、あつついわねえ……。」

あった。ちょいちょい焦げ付いているが大した傷は負ってないように見える。

「おいおいマジかよ……。」

一応、今は凶悪な部類の術なんだけどな。
特に初見なんて成す術もなく死んでしまい、トラウマを植えつけられるくらいの。

「でも、今のは中々面白かったわよ？さあ続きといきましょう。」

殺気歓喜憎悪興奮憤怒快感、様々な感情の入り混じる狂った笑顔でこちらを見ている。

これはちよつと本気で相手をしないといけないかもしれない。

五十二話 決着（前書き）

さっき五十一話のサブタイミスったことに気付いた。

前書きとサブタイ書いてた時は、亡び。風使う予定だったんだけど、本文書いてる途中でスピキュ。ルにしたくなって変えた結果がこれだよ！！

まあ、直すのめんどいんで修正は無しの方向です。

五十二話 決着

狂ったように襲い掛かってくる幽香。

超高速弾幕を仕掛けてきているが、かわせないほどじゃない。俺はかわしながら距離を詰めつつ牽制の弾幕を放つ。

牽制が功をなしているのか、幽香は大技を放ってこない。

「ふふふふふ、面白いわぁ！ねえ、貴方は何ていうの？」

「ああ？なんだって！？」

互いに弾幕を避けながらの会話。

話に気をとられて被弾、などという間抜けなことはしない。

「名前よ、名前。まだ聞いていなかったもの。」

「佐原だよ、佐原公一だ！」

「そう、それじゃあ佐原公一。そろそろお仕舞いにしましょう。」

「なんだぁ！降参か！？」

「違うわよ。本気を出してあげよう、ってことよ。」

そう言っていると幽香は分身した。

「私の分身は貴方の使う分身とは違うわよ！」

確かに違う。分身と本体がいるが、それでいて力は一つ。力を共有する分身だ。

言ってみればどちらも本体であり分身である分身術、その究極形だ。俺が教わった分身術も本体であり分身ではある。しかしそれは力を分けた分身と本体に分かれ、どちらかがやられると、残った方にまとまるという形のものだ。それでは力の運用リスクがでかい。例えば俺の力を1000として分身に20分けた場合、本体が80の力しかなくなる上、分身がやられると20の力がロスとなり、記憶等が俺に集まるだけ。

対してこの幽香の分身ならいつでも分身の力配分が可能なので、同時に攻めない限りは常にどちらの幽香も1000の力がある状態というわけだ。そしてその1000でも危ういようなら1000の力で対応しつつ0の分身を逃がして、頃合を見計らって対応していた側の力を無くせばロスはなくなる。

即ち、戦力は分散はさせずに自分を分散させることが出来る。究極的にはどこにでも自分がいるという状況を作り出せる驚異的な分身術だ。

しかしそのような状況を幽香は作らない。

たった一人だけ分身を作り、前後に並ぶ形をとった。

なんだ・・・？

何をしようというんだ・・・？

狙いは分らないが牽制の手は緩めない。

「貴方、もう少し真面目にやらないと死んじゃうわよ？」

「殺せるもんなら殺してみな！」

幽香からも相変わらずの弾幕が飛んでくるだけ。

言葉とは裏腹に特に変化はない。分身も何もしてこないし。

せいぜい変わったことといえば、俺の牽制弾がかわされるのではなく防がれたり相殺させられたりするようになったくらいだ。そう、丁度後ろ側の幽香を防ぐような形で。

「！、しまった！そういうことか！！」

「あら、もうばれちゃった？」

幽香の狙いは大技だった。

俺の牽制を捌く前衛と大技の準備をする後衛に分かれるために分身したのだ。

力の隠蔽術が高度すぎて気付かなかったが、よくよく探ると膨大な力が集中している

相当まずい力だ。直撃なら俺でも消される可能性があるほどに。

幸い、既にかなり距離を詰めているので、一気に寄れば発動前に潰せるかもしれない。

しかし、それはつまり至近距離での直撃というリスクを背負うことになる。

すなわち死。あまりに高いリスクだ。

流石にそれはまずいのでリスク軽減の為に策を打つ。

まず、俺の能力による結界を俺に張る。これで撃たれても多少は力を奪える。

それと紫の結界を破った時と同じように右手に能力を集中する。

これを前方にかざして突っ込めばかなりの力を奪えるだろう。

そしてそれらをしなから幽香の力を直接奪う。寄るまでの時間は短いから奪える力も少なく、大した効果は期待できないが、やらないよりは随分マシだろう。

さて、準備も覚悟も出来たところで突っ込むとしようか。

「これで決着だ！幽香ああああああ！！！！」

「貴方の負けで終わりよ！！」

幽香へ音を置き去りにする速さで突っ込む。

そして後衛の幽香から放たれる暴虐な光の波。

俺が幽香に届く前にその光は俺を飲み込み、その射線上を破壊し尽した。

「ふう・・・、なんとかなったな。」

俺の体は焦げつき、焼き切れて穴が開いてしまったりしているが、なんとか立っている。

一方、幽香は意識を失いその場に倒れ、見た目こそ無傷に見えるものの生命力や妖力等が雀の涙ほどしか残っていない。幽香の攻撃を突き進み、右手で一氣にあらゆる力を奪ったからだ。

「さてと、後始末をしようか。」

俺はスキマを開き、幽香を担いで歪みの前に移動した。

「ここから出ていけえー！！！！」

そして幽香をそのままドーン！して歪みの中へ帰って頂いた。その後歪みの境界を安定させて塞ぎ、一件落着と相成った。

「さて、事も片付いたところでどうしようかな。」

とりあえずは永遠亭にでも行って傷を治そうかとも思ったが、こっちの世界の幽香をガン無視していたことに気が付いたので、様子を見に行くことにした。俺より先にあっちの世界の幽香と戦ってたわけだし、どこかしら怪我でもしてるかもしれないからな。

「おい、幽香あー！」

「・・・あら、無事だったのね。」

何事もなかったかのような佇まいで幽香はそこにいた。
俺が来るまでにあの化け物と戦ってた割には随分元気いっぱいである。

「はっは、このコゲだらけの体が無事に見えるとはな。目でもやられたのか？」

「失礼ね、私の目はおかしくなかってないわよ。」

「そうか……。それじゃ今度いい医者を紹介してやるよ。」

「だから、おかしくないって言ってるでしょ！」

「おっと、あぶなっ！」

怒りながら傘を振り回してくる幽香。
本当に元気いっぱいといった様子である。これなら特に心配ないだろう。

「……それで、あいつはどうしたの？」

「ああ、倒したよ。」

「ふうん。倒した、ね。やっぱり甘いわね、貴方。」

「甘い？」

「殺してないんですよ？」

「？、そうだけど、なんで分かったんだ？」

「あいつは私の分身だもの。」

「は？」

あの幽香がこの幽香の分身？ そんなバカな。

幽香の分身なら俺を知らないはずはないし、何より力がでかすぎる。

「アレは前に言った私の消えた分身、その集合体といったところかしらね。」

消えた分身……。そういえば何故か分身が行方不明になるって言うたな。

しかしそれでもおかしいものはおかしい。

「それなら、なんであいつは俺を知らなかったんだ？」

「あの分身のベースが貴方と会う前の分身だからよ。そこに他の分身から力だけ無理やり奪ったところでしょう。分身の記憶を受け継がないなんて簡単にできるわ。」

「そうだとすると、あの力は大きすぎると思うけど。」

「アレは分身が独自に鍛えた力ね。」

「じゃあ、あいつは本当にお前の分身なのか・・・？」

「ええ、私はあいつの記憶を受け取れたもの。分身でない限りそんなことできないわ。」

ということとは、あの幽香はこの世界に存在する夢幻世界の幽香ってことか。

「ははっ、そりゃ災難だな・・・。」

「？、何が？」

「いや、こつちの話だ。気にするな。」

この世界の夢幻世界ということはいずれ霊夢達が相手をするということ。

今回、俺が大幅にその力を奪ったとはいえ、きっとまた力をつけるだろう。

なんせあれほどの力を独自に鍛えて身に付けたそうだからな。

いつの日か来るべき時の霊夢達にとってはこの上ない災難だろう。

「ところで」

「なに？」

「貴方の店と分身、木っ端微塵になっただけだ。」

・・・どうやら俺にも災難が降り注いでいたようだ。

「営業再開はいつ？」

「・・・近日中に出来るよう善処します。」

「いつ？」

「え、だから近日中・・・」

「いつ？」

「・・・明日？」

「・・・・・・いつ？」

「・・・今日中に営業再開させていただきます。」

「そう、よかったわ。」

幽香はにっこりと微笑み、上機嫌に傘をくるくる回し始めた。

この重圧、折れざるを得ない。

恐ろしい交渉術を誇る幽香であった。

五十三話 安心と信頼の永遠亭

今、俺は永遠亭に入院している。現在入院十日目だ。

しかし夢幻世界の幽香との戦いによる傷は既に癒えている。

では何故未だに入院しているのか。

事の起こりは十日前、永遠亭に傷を治療してもらったために訪れた時だ。

永琳の診察を受けて全治三日で入院が必要だと診断され、薬を貰い即時入院となった。

そして病室に案内されて安静にしていた時、輝夜が俺の部屋を訪れた。

何の用だと問うと、「お土産は？」とニコニコしながら言うてくる。そつえば、前に永遠亭を去る時、お土産持って来いとか言うてたのを思い出しつつ、

重症の怪我人に対して第一声がお土産は？はねーだろ、と心の中で叫んだ。

そして角が立たないようにやんわりとお土産がないことを伝えようと思ったが、

相手は世間知らずのお姫様だし、その辺の草でも出せば意外と満足してくれるかもと

期待して、スキマを開き、その辺の草と小石を少々拾い集め差し出してみた。

すると輝夜は「草ってお前・・・石ってお前・・・」とものすごいガツカリしていた。

そこで俺が「実はその草は伝説の薬草と呼ばれる地上では大変貴重な草で、その石は

オリハルコンと呼ばれる大変貴重な鉱物なんだ。」と伝えると死んだ太子のような目は
一転して輝き出し、「永琳に見せてくる！」と元気よく部屋を飛び出していった。

その一分後、輝夜はストーブみたいにカンカンに怒って襲い掛かってきた。

蓬莱の薬の効力さえ奪わないように気をつければ輝夜相手なら殺しても問題ないので、

その点だけ注意して全力で迎撃すれば余裕と思い、迎撃に入ろうとした。

しかし、能力を使おうと思ったら、まるで力が使えない。

一体どうしている間に輝夜にボッコボコにされた。

ただでさえボロボロの状態だというのに一切の手抜きなしの全力攻撃だった。

そして俺はR - 15で表現するには厳しい状態になり、全治三ヶ月が宣告された。

俺でなければ即死だったな・・・。

後日判明した事だが、最初に渡された薬に一時的に能力を封印する効果があつたらしい。

何故そんな薬を処方したのか永琳に小一時間問い詰めたと思ったので、聞いてみたら、

「なんとなく貴方と姫様が喧嘩しそうな気がしたから。」という回答を頂いた。

この天才、未来予測まで神懸かってやがった。パネエ。

そしてその未来が見えていたなら俺に不利になるようにしないで欲しかった。

どうせ輝夜が傷ついたところですぐ治るんだし。こちとら蓬莱人じやねーんだっつの。

まあなんやかんやで傷を治しに行っ たつもりが大怪我を負い、今に至るというわけだ。

「で、そろそろ退院しようと思うんだけど。」

「なに言ってるのよ、貴方まだろくに歩くことすらできないでしょ？」

なに言ってるんだこいつはという表情で永琳は退院希望を却下した。しかし俺はこの入院中に、傷を癒し退院する画期的な方法を発見していた。

「確かに今は歩けもしないけど。まあ見てろよ。」

俺は分身を一体出した。

それも持てる力を限界まで渡した過去最高の分身だ。

この分身は基本的に魂の情報をもとにして構成されるので、怪我している俺が分身しても分身体の方は特に怪我のない状態で出来上がる。

「永琳、ちょっとナイフかなんか持ってない？」

「うーん、猛毒を塗った鏃なら持ってるけど……。」

怖っ！なんでそんなもん持ってたんだよ。

まあ、今はそれのほうが都合がいいけど。

「じゃ、ちょっと借りるよ。」

「いいけど、何をするの？」

「カリッ・・・これは青酸ペロ・・・。」

「！！、何してるのよ！早く解毒を・・・！」

「よし、佐原、逝つきまーす！」

グサッ！

さはらは もうどくのやじりを ひだりむねに ついた。

…ドクドクと ちが わきでてくる…！

ああ！！ なんて おろかなのだ。

じぶんの いのちを じぶんで たってしまうとは…！

…わたしなきあとの げんそうきょうは いつも へいわでしょう…。

ざんねん！ さはらの ぼうけんは ここで おわってしまった！

「ちょっと！！！？本当に何をしてるの？！てゐ…！至急手術の準備を…！」

「ん、いや別にそれは死なせといってくれて構わんよ。」

「なに言ってるのよ！早くしないと手遅れに・・・って、あら？」

自殺した俺の体は霧状になって消えていく。

ぶっちゃけると魂ごと分身と合体して残った体が消えただけである。分身も本体である幽香式分身の仕様だ。

こうする事で一瞬で健康な肉体に戻ることが出来るというわけだ。まあ健康とはいっても、死んだ方の体のダメージ分の力は回復していないし、

それ以外に多少残った力はロスするけど、些細なことである。体の各機能が正常に動くということのほうが重要だ。

「便利でしょ？この術。」

「そうならそうと先に言いなさいよ。」

「まあちよつとしたサプライズみたいな演出じゃん？」

「そういう無駄な演出はいらないわよ。」

と言いながら、腹パンしてくる永琳。

「うん、分かった。分かったから腹パン連打するのやめて、痛い。」

「あらそう。それじゃ顔面パルマにする？」

「やめてくださいしんでしまいます」

「じゃあ今後こういうタチの悪い演出はしないように。」

「Yes!ma・am!!」

最敬礼をしながらの即答だった。

永琳の顔面パルマは本当に怖い。およそ生物の耐えられる技ではない。

何がヤバイって顔面の急所を全てピンポイントで霊圧で潰す点がヤバイ。

俺がやるときはそんなことはしない。加減の効くヤツだ。

けど永琳はヤバイ。そんなの気にしない。急所突きまくり。

とにかく俺はそんなヤバさを最もよく知っているので最速最敬礼一択。

これで入院中に命の危機に晒されたのは二回目だ。病院が危険とはこれ如何に。

ま、そんな危険な病院も本日を持って退院できるわけだし、どうでもいいか。

今後、入院せざるを得ないような怪我はしないように注意しよう。

――数日後

「そろそろ頃合かな。」

退院後、自宅でゆっくりと休み、ある程度力も回復したので旅を再開しようと思う。

早速、例の鉛筆を取り出し俺の行き先を決めようと思う。

「次はどこになるかな。」

今度は平地で軽く鉛筆を転がす。

またダイナミックに転がってミラクルな着地をされても困るからだ。

コロコロコロ・・・。

「おつ、今度はあいつらのところか。」

出た目は鬼天狗。目的地は妖怪の山だ。

鬼に会うのも随分久しぶりだ。元気にやっているだろうか。天狗がどんな奴等かも気になるし、なかなか楽しみである。

「さて、行ってみますか。」

場所は知ってるので、すぐに着けるだろう。

土産は酒でいいかな。鬼はもちろん天狗も酒豪だつて聞くし。

そして準備をしてスキマから妖怪の山の麓辺りに出た。

すると一本の矢が俺を目掛けて飛んできた。

「あつぶねーな。何だよ、一体。」

矢を見ると何やら紙が結ばれている。

どうやら何か書かれているようだ。

「何々・・・、」入院費の支払いはお早めに。八意永琳。
「・・・。」

金、取るのかよ・・・。

五十四話 妖怪の山

妖怪の山――

鬼を頂点として様々な妖怪が集い棲みついている場所。

強い種族や強い個体も多く存在し、人が踏み入れるような場所ではない。

無論、人里ができるよりも昔からその山の存在は有名であり、そんなところに踏み入るうとする者などいるはずもない。

しかし本日はその場所に酒を担いでえっちらおっちら歩いて踏み入る者が一人。

そう、俺である。

「なかなか鋭い角度の山だな。」

およそ40度もあるうかという激しい傾斜に悪戦苦闘しながらも歩を進める。

飛ばば楽なんだろうけど、せつかなのでハイキングを楽しもうと思っただけで歩いている。

道中の苦勞が頂上に辿り着いた時の感動となるという持論からの行動だ。

無論、鬼達が中腹とかに住んでるならそこでハイキングは早くも終了となるわけだが、

あいつらは高いところが好きな何とかなので、間違いなく頂上にいるだろう。

「あやややや、こんなところに人間とは珍しい。」

「おやややや、こんなところに天狗とは珍しい。」

「この山では天狗は珍しくありませんよ。」

「この国では人間は珍しくありませんよ。」

「それじゃ珍しくもない人間には珍しくもない対応をしないといけませんね。」

「そんな常識に囚われてはいけません。」

「放浪の時代ならそれでもよかったですけどね。ここの天狗社会に属した以上、常識を守り掟に従うということが必要なんです。」

「融通が利かないね。」

「融通を利かせる必要ありませんしね。」

「あつそう。それじゃ俺、急ぐから。」

「それじゃ、お送りしますよ。」

「どこに?。」

「地獄に。」

お分かりいただけただろうか。

相手は清く正しいでおなじみの射命丸文である。

今まさに善良な一般人が天狗の掟によって理不尽にもあの世へ送ら

れそうになっている。

妖怪が人を襲うという極々当たり前のことではあるが、この山はその割合が非常に高い。

彼女がしているように天狗が山の見回りをしているからだ。

しかも妖怪の中でも強い力を持ち、とりわけ速さでいえば向かうところ敵なしの種族。

人間ごとくでは到底逃げることも不可能。

妖怪に見つかりやすく、逃げることもままならない。正に人外魔境、妖怪の山。

ま、そんな人外魔境も俺にとってはまだの山だ。

ここよりやばいとこなんて世界中探せばいっぱいあるしね。世界は広い。

「地獄には用事もないんでお断りします。」

「あなたに断る権利はありませんよっと。」

ゴアッ！

強烈な風をこちらに向けて叩きつけてくる文。

その風でついでにスカートもめくれてくれるとおじさん嬉しいんだけど。

「あやややや。人間の癖になかなか耐えますね。」

「ん、まあ激流に身を任せてどうにかすればこのくらいはねえ。」

「それならこれはどうですか！」

突然超高速で飛び回り始めた文。

超速移動をしながらも妖力弾を撃ってくるこれはまさしく幻想風靡。俺は文を視界に捕らえ、弾幕をかわすので精一杯だ。

「ほう、これをかわしますか。しかし、いつまでかわし続けられま
すかね！」

答えを言うならいつまでもである。

かわすのが精一杯というのはそもそも弾幕がきついからではない。
俺の頭上を飛び交う文。当然、俺は文を下から見上げる形になるわ
けだ。

なにがどう見えてしまい、それを網膜に焼き付けるので手一杯だとい
うのは分かるな？

こんな素晴らしい光景を拝める私はきつと特別な存在なのだと感じ
ました。

「んー、埒があきませんねえ……。こつもかわすとは貴方、本当
に人間ですか？

そもそも私の仕事は哨戒ではないのでさっさと終わらせたいのです
が。」

と気だるそうに文が言う。

「そんなら見逃してくれてもいいじゃない。」

「ダメです。掟は掟ですから。侵入者は許しません。」

ちっ、本当に融通がきかねーな。

「それならお前等、なんで鬼が来たときは許したんだよ。」

「それは鬼が強かったから・・・ってなんでそんなことを？」

「そりゃ昔、鬼と一緒にいたからな。丁度ここに鬼が引つ越して来る前まで。」

「鬼と一緒にいた？貴方のような力のない人が一緒に入れるわけないじゃないですか。」

「そりゃ確かによける技術は人間とは思えませんが、霊力も全然ないようですし。」

「ん、そうか？それでも一応世界最強の一角だと自負してるんだけど。」

「あやや、なんの冗談ですか。そこらへんの陰陽師よりも力のないくせに。」

「そう？それじゃちよつと失礼。」

八意式隠蔽術を解除して、力を解放しないように抑えただけの状態にした。

すると文はその場にぺたんと座り込んでしまった。

「あやややや・・・ば、ばけもの・・・。」

「ひどっ！化け物はねーだろ、化け物は。」

威嚇も何もしてないのに明らかに怖がり化け物呼ばわりである。どうやら俺の内包する力の量をちゃんと測れたらしい。

威圧なり何なりしたというならともかく、何もしていない相手の力を測るのは何気にわりと難しい技術で長年生きた大妖クラスでやることができることだ。

にもかかわらず文はたやすくやってのけた。若いのにやるものだな。それとも実は紫並の年寄りだったりして。

ぐしゃっ

「痛っ！」

そんなことを考えていたらなぜか頭上から大岩が降って来て潰された。

「好機ッ！大天狗様に報告しないとッ！」

「あっ！おい、待て！！」

待てといわれて待つ奴はいないってよく言っけどホントだね。超スピードで一目散に文は去っていった。

くそう、なんか面倒なことになってきたぞ。

そもそもなんだこの岩は。いきなり降ってきやがって・・・！

と考えていたら、一枚の紙が目の前に降ってきた。

「なんだこれ。」

何か書かれているようなので読んでみる。

「『何か失礼な事を思われた気がしたので岩を送っておきましたわ。紫。』」

.....。

こ、怖え……。何でこの場にすらいないのに俺の思考が分かるんだよ。

これはあれか、超能力かなにかか。畜生、今度会ったらその力奪っちまうぞ。

っていうかそんな気がただけで岩落とすとかマジ鬼畜。

いや、実際年寄りとか失礼な事実を思っただのは確かなんですけど。

ズシンッ

「痛いっ！またか！」

また岩が落ちてきた。これ絶対読まれてるよね、俺の心。

あいつは覚りか、覚りなのか。種族スキマから覚りに変えろよ、畜生。

っていうか、あいつ擬似デス。ルス空間から抜けたのか。

まだ一ヶ月もたってないというのに、死にたくなるの早いね。

・・・ハッ！そうか！

もしかすると、その場にいない俺の心を読む力はデス。ルスでの極限生活で追い込まれ、

しにてエ状態になって死の淵に立ち、新たに目覚めた能力かも知れんな。

極限状態ってのは八意統計調査結果によるとなんらかの能力が目覚めやすいらしいし。

つまり、今後迷惑行為をしないよう反省を促すために罰を与えたつもりが、

俺にとって非常に迷惑な能力の開花を手伝ってしまった結果となったのかもしれない。

五十五話 宴の始まり

紫の落としてきた岩に腰をかけ、水筒から一杯の水を飲み一息つく。ハイキングには休憩も必要だ。

山という自然の風景に心を落ち着かせて休むというのもたまには悪くない。

ただ、今は山の風景をまるで見るできないが。

「貴様、一体この山に何のようだ！」

俺は今、夥しい数の天狗に囲まれている。

どこを向いても視界に入る景色は天狗。風情もくそもない。正直邪魔である。もっと自然を楽しませろよ。

「質問に答えろ、侵入者！」

うるさいな。そんなでかい声出さなくても聞こえてるっつの。

「宴会とついでに登山を楽しみに来たってとこかな。」

「宴会だと？」

「宴会と聞いて飛んできました！」

物凄い酒臭いちっこい鬼が物凄い勢いで飛んできた。

「よう萃香。久しぶりだな。」

萃香は俺の顔を見て、うーんと少し考えてるような顔をした。それから思い出したと言わんばかりの表情になった。

忘れてたんかい！いや、萃香にとっては何百年も会ってないわけだから仕方ないけど。

「公一じゃないか！随分久しぶりだねえ。何百年ぶりかな？」

「さてね。お前とはちよつと時間ずれちゃってるからな。」

「？　どういうこと？」

「ま、おいおい話すよ。」

「あ、あのー・・・伊吹殿？」

大天狗と思しき天狗が恐る恐るといった感じで萃香に話しかけた。さっきの威圧的な態度とは180度違う媚びへつらう様な態度である。

そんなに鬼が怖いのかな。

「ん、なんだい？」

「その方はもしかしてお知り合いでしょうか？」

「そうだね。旧友、ってところかな。」

「そ、そうですか・・・。」

そう言つてうなだれる天狗からは、やべえどうしようやっちゃったよ的な空気が漂う。

まあ上司の知り合いに高圧的な態度とつちまっただから分かんでもない。

でもそんなこと鬼が気にするとも思えんけどな。

「あ、あのう……。」「

「なんだ？」「

「先程は申し訳ありませんでした。伊吹殿の友人とは知らずの事でして……。」「

なんかもう見てて可哀想な表情で謝ってきた。

俺としては囲まれた時点で、一戦交えるのも已む無しと考えていただけに、

それもせずに済んで良かったと思うし、別に謝らんでもいいと思うが。

「ああ、いいよいいよ。気にすんな。」「

「そうですか……。誠に申し訳ございません。貴殿の広い心に感謝致します。」「

別に広くもないけどな、俺の心。

しかし、態度が一転して急に畏まれるってのも何か気持ち悪いね。

「そう畏まらんでもいいよ。ところでお前等、酒はいける口か？」「

「酒ですか？私共天狗は鬼に次いで酒に強い種族であると自負して

おります。」

そう自信満々に言い切る大天狗。この物言い、相当酒好きと見た。この分なら宴会にもすんなり加わってくれそうだな。

「そうか。そんな後、登山を楽しんだら宴会するから、お前等も加われよ。」

「よろしいのですか？」

読み通り簡単に乗ってきた。

「いいよ、宴会つてのは大人数の方が盛り上がるってもんさ。なあ萃香。」

「違うね。ところで公一、土産は持ってきてるかい？」

「おうよ、新しい酒を用意したぞ。」

「ふふ、そりゃあ楽しみだ。よし今日は久々に山を挙げての大宴会としようか！」

「では私共は山に住む者全てにその旨を伝えます。皆の者、いくぞ！」

包囲していた天狗達は一斉に飛んでいき、一瞬で姿が目視できなくなった。

張り切り具合が目に見えるようだ。

「速いねえ、天狗。」

「速いだけじゃなく、強いんだよあいつ等。」

「でも、お前等鬼よりは弱いんだろ？」

「んー、まあ全体的には。天狗によつては男鬼より強い奴もいると思う。」

でも、あいつ等最近はなかなか本気で戦わないからなあ。」

昔は全力で戦ってくれたのになあ、と言いたそうな顔をしながら言つた。

山の侵入者だった頃と山の上司になった今じゃ、態度が違うのは仕方ないだろう。

「まあ上のモン相手に本気で手を出しちゃ角が立ちそうじゃん？」

「そんなの私等は気にしないんだけどねえ。」

「もしもを考えてのことだろう。鬼と全面戦争はなんとしても避けたいってことさ。」

「そういうもんかねえ。ま、いいさ。それじゃ私は宴会の準備しに行くから。」

そう言つて萃香は頂上目掛けて飛んでいった。

やっぱり鬼は頂上に住んでいるようだな。あいつら本当に高いところ好きだなあ。

しばらくのんびりと歩き、時は夕方。

険しい山の頂上に辿り着き、そこから見える日の落ち際は神秘的なものを感ずる。

心地よい疲労感とこの神秘的な光景が心を洗ってくれるようだ。

感動の瞬間である。登山は本当にいいものだ。

そして日は落ち、静寂と暗闇が支配する妖怪の時間、夜が訪れる。

ここ妖怪の山頂上もまた、夜となり妖怪達が活発に動き出す時間だ。鬼や天狗をはじめ、様々な妖怪達が集まる。しかしそこは静寂とは無縁の場所。

「えー、それじゃ面倒な口上は抜きにして、乾杯ッ！！」

「乾杯ッ！！！」

萃香の乾杯の音頭で一斉に始まる宴。

山を挙げての大宴会と言うだけあって、所狭しと妖怪がうじゃうじゃいる。

酒とツマミに舌鼓を打ち、互いに語り合う者もいれば、飲み比べをはじめめる者、

ちよつとぶつかったからなどと因縁をつけて喧嘩を始める者、それを見物して

酒を楽しむ者など様々だ。共通して言えることは騒がしい、この一点である。

宴会つてのはやっぱりこうでなくちゃな。楽しく騒がしくてナンボだ。

「よっ！久しぶりだねえ。飲んでるかい？」

「おう、楽しく飲んでるよ。」

勇儀が絡んできた。実に久しぶりである。

服が体操服になってる以外は見た目は特に変わっていないな。持つてる盃も昔、俺が作ったやつだし。

「まだその盃使ってるのか。」

「ああ、ま、表面に傷がついたのか酒は出なくなっただけだねえ。」

「それなら白田にでも加工してもらえよ。」

「いやー、それが今は酒虫のよりうまい酒が沢山あってね。山から離れる用でもなけりゃそっちの酒を飲みたいのさ。」

「へえ、そんなのがあるのか。」

意外だな。鬼の酒文化は酒虫なくしては成り立たないものだと思っていたが。

「公一の酒よりも旨いよ。」

「へえ、そりゃ飲んでみたいね。」

「飲んでみるかい？」

そう言つて瓢箪を差し出す勇儀。ここはありがたくいただく。

「それじゃ遠慮なく。」

瓢箪から盃に一杯酒を出す。

澄んだ透明な液体、そこから香る匂いはただ事ではない旨さを予感

させる。

飲んでみると程よい辛さの後に上品な甘みが広がる、コクのある味わいだ。

口にキユツと残る後味で臭みもまるでなく、文句なし。旨い、実に旨い酒だ。

「これは本当に旨いな。」

「だろう？ 白田が最高傑作だって言ってたからな。」

「へえ、これ白田が作ったのか。」

「ああ、あいつは本当に酒にしか興味がないからなあ。」

さすがは酒の千年帝国の夢を持つ鬼だ。やりおる。

「でも、俺の持ってきた酒とどっちが旨いかな？」

「そういえば新しい酒持ってきたんだってね。萃香が言ってたよ。」

「ああ、これもまた自信作さ。これまでのとは比べられないくらいのだがな。」

そう、格別の自信作だ。

正直なところ白田の酒は確かに美味かったが、俺の酒の方が美味しいと思う。

「へえ、そいつは凄そうだねえ。一杯くれないかな。」

「どうぞどうぞ。」

持ってきた酒樽から酒を出し、勇儀の盃に注ぐ。

甘い香りがあたりに漂う。今回の俺のとおきはおきは芋焼酎だ。

慣れないときつい酒だが一度嵌ると病みつきになってしまう酒でもある。

俺はどつぷり嵌ってしまい、こだわり抜いて作ったのが今回の酒だ。酒好きの鬼だ。きっとこの深いまろやかな味わいには一撃で堕ちるだろう。

「それじゃあいただくよ。」

ごくごくと盃に注がれた焼酎を飲み干す勇儀。

きつい酒をごくごくの飲めるあたり、さすがは鬼といったところだ。できればもっと味わって飲んでほしいが。

「ぶはあ。」

「どうよ？」

「うんまいっ！確かにこれは格別だねえ。」

「だろ？自信作だからな。」

「でも私は白田の酒の方が好きかなあ。」

なん・・・だと・・・！

「よろしい、ならば戦争だ。」

「へっ？」

「俺の酒と白田の酒、どちらが美味いかこの場で競わせようじゃないか。」

勇儀は一瞬何言っただという顔をしたが、すぐに理解したようでありと笑った。

「なるほど、つまりこの場のみんなに飲み比べて貰おうってわけかい？」

「そういうことだ。仕切りは任せる。」

「任せな。おーい！みんなー！白田の酒に匹敵する酒で酒比べしなにかー！！」

白田の酒に匹敵する酒？なんだなんだ？酒比べ？面白そうだな！ななどと言いながら

がやがやと妖怪達が集まる。

勇儀は地面に二つ穴を開けて、傍にあった岩を砕き、石ころにした。

「さて説明しようか。ここにある酒と白田の酒を飲み比べて、この酒が美味しいと思ったら左の穴に、白田の酒が美味しいと思ったら右の穴にこの石を投げ入れる。それだけさ。なあにどっちの酒も美味しいんだ、この勝負に協力して損はないよ！さあ飲んだ飲んだ！！」

こうして俺の酒VS白田の酒が幕を開いた。

五十六話 人をからかうのは計画的に

滝のように消費されていく酒。

総消費量を数えたのならちよつとした湖くらいはいつてる気がする。俺の土産として持ってきた酒はすぐに底を尽き、スキマで補充。白田の酒もまだまだ貯蔵量があるらしく、次々と運ばれてくる。

一体この山のどこにそんな量の酒を保管しているというのだろうか。空間系の能力持ちでもいるのかなと考えてる内にもまた酒が消えていく。

鬼や天狗などの妖怪というものは実に不思議な生物である。

どう考えても体積以上の酒を飲み続けているからだ。

俺の飲む量も体積を超えたりするが、消化や代謝能力を最大限に發揮にして、飲んだものをたびたび排出しているからであって、奴等のようにトイレにすら行かず飲み続けるということはできない。腹にためれる量には物理的に限度があるからな。

一方、あいつ等の体は物理法則を無視して成り立っている。

この謎を解明すれば、ゆくゆくは四次元ポケ。トの開発ができるかもしれない。

さてさて酒対決の行方だが、今のところ俺のが劣勢のようだ。

現在、鬼や天狗はほぼ全員投票し終えて、残りの妖怪の半数程度の投票が済んでいる。

鬼や天狗の得票数はわずかに俺の方が優勢だが、それ以外の種族は圧倒的に白田の酒を支持している。ぐぬぬ、やはりいきなり芋はきついか。せめて麦か米ならあるいは……。

「どうやらこの勝負、俺の酒の勝ちのようだな。」

「おつ、白田か？ 久しぶり……。」

白田と思しき鬼が話しかけてきたが、俺の目には衝撃の映像が映っていた。

それはコック風の帽子と服装、そして上半身だけ異常にマッシヴな鬼の姿だ。

「おま……どうしたんだよその姿は。」

「ん？ どうしたって何がだ？」

「そんなバランスの悪い体型になってどうしたって聞いてんだよ。」

ついでに言うならコック風の服装もどうしたというところではあるが、

体型に比べれば些細なことなので、そこはこの際、置いておく。

「ああ、そのことか。酒の研究でほとんど外に出てなかったら脚が弱っちまってな。」

「いや、どうみても足が弱ったっつーか、上半身が強くなったというべきだろ。」

「そうか？ まあ酒作りのための材料は他の連中が集めてきてくれたから足使うことはほとんど無かったけど、そっから先は全部俺がやったからな。洗いと蒸しあたりで上半身が鍛えられたのかもしれないな。」

いやいや、そんなことでこのアンバランスな体型ができあがるわけねーだろ。

絶対ドーピングコンソメ的な何かを使ってるだろ。
と一瞬思っただけど、こいつも鬼の端くれ。嘘は死んでもつかないはずだ。

となればこのアホらしい話も信じざるを得ない。信じ難いけども。

「？ どうした？」

「ああ、いやなんでもない。お前も酒作りに苦労したんだな。」

「ああ。だが満足のいくものができてよかったよ。」

「そうか、そいつは良かったな。ところで、酒は一体どこに保管してるんだ？」

「既にとんでもない量出してるけど、まだ沢山あるみたいだし。」

「いくつか場所は分けてるな。今日の分は山の中の空洞にある保管庫から出してる。」

「へえ、空洞ねえ。よほどでかい空洞なんだな。」

「ああ、相当広い空洞になってるぞ。」

なんていうか地盤沈下的な何かとか土砂崩れ的な何かが気になる山だな。

もし万が一にもこの馬鹿でかい山が崩れるような災害が起こるうもんなら幻想郷終了のお知らせだからちゃんと注意しとかないといけない。

まあ、鬼が殴りこみして大丈夫な位だからそんな災害は起きないか。

それでも念のため空洞を調べるだけはしとこつ。

「その空洞ってのはどこにあるんだ？」

「今、酒運びしてる天狗がいるからそいつについてくといひ。」

「分かった。で、そいつってのはどいつだ？」

「ちよつと待つてろ。おーい！射命丸ー！！」

「はい、ただいま！なんの御用でしょう？」

酒運んでるのつて射命丸かよ。

まるで瞬間移動でもしたような速さで目の前に現れた。速すぎる。

「こいつが酒置いてる空洞行きたいらしいから案内してやってくれ。」

「この方？ あつ・・・貴方は・・・！」

「よう、また会ったな。」

「ん？ なんだ知り合いか？」

「ああ、こいつの腰が抜けるほどやりあった仲だ。」

「ちよつと！変な言い方しないで下さいよ！！」

「俺が下になった時なんかはお前ホント激しかったよなあ。」

主に弾幕とかが。

「そーかそーか、お前等そんなに仲がよかったのか。それじゃ空洞に行つてゆつくりしてきてくれ。他の奴はしばらくそっちに行かないように言つとくから。」

「お、いい氣遣いだ、白田。」

「ちよつと！何、変な方向で話をまとめようとしてるんですか！！」

「おう、射命丸。それじゃ案内頼むよ。」

「氣をつけてなー。」

「くうう！小一時間かけてでも弁明したいのに、鬼の方の命令じゃ従わざるを得ない！なんて世知辛い世の中でしょう……！」

こうして俺は射命丸と空洞まで行くことになった。
そしてその道中――

「おーい、ちよつとは何か喋ってくれてもいいんじゃないのか？」

「鬼に言われたのは貴方の案内です。相手をしろとは言われてません。」

あーらら、ものの見事に嫌われてるな。ちよつとからかっただけなのに。

流石にほぼ初対面の相手をからかうのはまずかったか？

いや、美鈴の時は問題なかったはず。個人差つてやつだな。

ま、このまま嫌われっぱなしじゃ嫌なので謝るとしよう。

「さっきは悪かったよ、ごめんな。謝るから機嫌直してくれよー。」

「誠意が感じられない謝罪なんて要りませんよ。」

ダメだ、生半可な言葉じゃ多分何言っても許してくれそうにないオーラが漂ってる。

ここは一つ、月で神速の土下座と言われる俺の匠の技を披露しよう。

秘技！十二王方牌大土下座！！

「申し訳ございませんでした！！！」

俺と十一人の分身で相手を取り囲み、一斉に完璧な土下座をする。あまりの謝罪オーラによって相手は許さざるを得ない雰囲気になる。お気づきの方も多いと思うが、これはかの有名な流。東方不敗の技の改変技だ。

そうだな、名づけるならば流派東方全敗とでもいったところか。土下座だし。

「・・・むう、まあいいでしょう。鬼の友人である貴方にそこまでさせて許さないわけにはいきません。今回は許しますけど、今後あのような冗談は私にはしないで下さい。」

「分かった。お前にはしないよ。」

こうして何とか許して貰うことができた。

まあ、まだ嫌われてる感はずいするけど、そこは追々好印象を与えるような行動をとっていけばいいだけの話。

妖怪は人間と違って寿命も長いし、時間はいくらでもあるからな。

五十六話 人をからかうのは計画的に（後書き）

はい、というわけで一週間近くぶりの更新です。

別にもう一個はじめた話の方の関係で更新に時間がかかったわけじゃないです。

エクバでギス相手にどうにもならなくて仕方ないからギスの練習してたら、仕事以外の時間が全てゲーセン現象が起こったためです。

ギスはやく修正される

五十七話 大空洞にて

妖怪の山にある空洞。

それはそれは広い場所で、空洞の中なのに何故か日の光が射す不思議空間だ。

来てみて分かったことだが、ここは以前来た事のある場所と座標が近い。

「なあ、文。」

「なんででしょうか？それと名前で呼ぶのはやめてもらえますか。馴れ馴れしいです。」

むむむ・・・、手厳しい。

「じゃあ射命丸。ここつてもしかして地獄に通じてたりする？」

「おや、良くご存知ですね。」

やっぱりか。

前に地獄探した時、この先の方にあつたからな。

ということは後々、この先の地獄は旧地獄になるわけだ。

「まあ地獄も何度か行ったことあるし。」

「そうなんですか。地獄に行き来するとは珍しい人もいたものですね。」

「なあに、鬼の友人やつてりや一度くらい死ぬのも珍しくないよ。」

「そうですね、人間が鬼と付き合っていれば普通死んじやいますよね。そしてそのまま裁かれて針の山で穴だらけの愉快的な置物にでもなってるのもお似合いだと思いますよ。」

針の山なんかに行かずとも辛辣な言葉の針で俺の心は穴だらけになりそう。

おかしいなー。天狗ってのはもつとこう、強い者には下手に出ると思っただけど、

俺、もの凄く強く当たられてるよね。全然下手に出てくれてないよね。

「山の客にはもうちょい優しく接してくれてもいいんでない？」

「十分優しくしてますよ。少なくともそこらへんの雑草に対してよりは。」

「うおい！俺と比べる対象おかしいだろ！そこらへんの雑草で！」

「え、そうですか？私の中での貴方の価値は大体そのくらいなんですけど。」

「ひでえ！俺、雑草と同価値かよ！」

「ええ。私に利も害もなさそうですし、興味もないので大体そのくらいですね。」

えるしっているか 無関心は きれいよりここにひびく
畜生、今はまだ新聞とかつくってないのかよ。

俺なんか取材攻めされてもおかしくない山にとっての謎の人物のはずなのに。

「射命丸、話は変わるが新聞って知ってるか？」

「新聞ですか？知ってますよ。この山の天狗が発行しているものですね。」

「お前は作ったりしないのか？」

「私はまだ新参者ですからね。哨戒の任ばかりでそんなことをしている暇はないです。」

「哨戒つて鴉天狗がすることなのか？」

「いえ、基本的に天狗の中では白狼天狗が哨戒にあたります。ただし、山の新参天狗はどんな天狗であれ、しばらく下っ端として哨戒の任をすることになるのです。」

「ふーん。大変だねえ。」

「そうでもないですけどね。見回りなんて私の速さをもってすればすぐ済みますから。」

「とはいえ日に何度も見回ることになりますからまとまった時間はとれないんですね。」

「せめて朝晩各一回とかなら新聞を書く暇もできるんですけど。」

休憩だらけで長時間拘束の仕事か。

嫌だなあ。非効率すぎてやりたくない仕事だわ。

「なんなら俺が口添えて哨戒から外すように鬼に言わせようか？」

「結構です。」

「結構ですか。それじゃさっそく・・・」

「あやや・・・そういう意味の結構ではないです。断るって意味の方ですよ。」

「ほう、断るときたか。なぜ？」

「二十日後、丁度この山に来て十年になります。それで哨戒の任が解かれるのです。」

「ああ、じゃあ今解いてもあんまり変わらんね。」

「そういうことです・・・おっと、そろそろ着きますよ。」

「おっ・・・ああ、あの山のような箱に酒が入ってるのか。」

「そのとおりです。」

なんとというか本当にちよつとした山くらいはある箱の山が置いてある。

射命丸曰く、あれが全部酒らしい。

多分、全部使えば湖の一つくらいはできるであろう量だ。はつきり言おう。正気の沙汰とは思えない。

「たまげたなあ・・・。」

「でしょう？でもこれ鬼の持つ酒の三割もいってないそうですよ。」

「これで三割もいってないっての！？」

「はい。実際、他のところにもこんな感じに置いてるところありますし。」

「はは、こりゃ呆れるしかないわ。」

「もし人間が鬼だったのなら今頃地球の海は酒になってただろうな。あいつら本当にどんだけ酒が好きなんだよ。」

「将来、歴史書とかに鬼の項目書くなら、酒と一言だけ書いときゃ間違いないレベル。」

「稗田の奴にもそう伝えようそうしよう。」

「さてと、ひとしきり呆れたところで仕事しますか。」

「仕事？」

「ん？ああ、ちょっと山崩れないか調査しようと思ってね。」

「俺は能力の領域を山を覆う程に広めた。」

「各地点の耐久力とその負荷を詳細に調べ上げて、不安なところが無いか調べるためだ。」

「まあ、詳細にはいってもこれだけ広げると末端の方はどうしても大まかになる。」

「とりあえず、この空洞が安定していれば多少の地滑りなんかはあるかも知れないが、」

「山そのものが崩壊するということはないと思うので、末端部分は大まかでも構わない。」

「ふむ。耐久力は余裕があるな。バランスはまあまあ、過負荷部はなし・・・か。」

「あおう、何をしているんですか？」

「山の力を調べてるのさ。崩れないか確認するためにね。」

「山の力？」

「そ、山の力。主に耐久力面な。要するにこんな馬鹿でかい風穴あいててこの上の地面が崩れないかってのを調べてるわけよ。」

「へえ、どうやって？」

「能力で。」

「どんな能力なんですか？」

「あらゆる力を奪い、扱う能力。といっても、今回はどのくらい力があるか見てるだけで奪っちゃいけないけどね。」

「なんか名前だけ聞くと凄くずるい能力に聞こえますね。」

「実際、凄くずるい能力だよ。さて調べ終えたし、戻るか。」

「と言って、歩くのも飛ぶのも面倒なのでスキマを開く。」

「・・・なんだろう、俺も紫みたいなものぐさ思考になってきたな。」

「ええ、……ってなんですかその気味の悪い割れ目は。」

「これはスキマって言ってね、空間の境界を操っているんだ。今、この宴会場の空間を繋げてるからこれに入ればすぐ戻れるよ。」

「便利な能力ですね。」

「便利でしょ。知り合いから奪ったんだ。」

「……汚い能力ですね。」

「うん、知ってる。」

汚いは褒め言葉。もうそう割り切ってる。

実際、あらゆる力を奪える上に扱えるとかマジ升だし。

俺じゃなく永琳とか紫がこの能力持ってたら、もう手がつけられねえ。

ま、それはともかく今は宴会に戻って文との距離を雑草クラスからせめて観葉植物並みまでは持ってけるように頑張ろう。

五十七話 大空洞にて（後書き）

最近のエクバ固定

敵セオー！*2相方セオー！俺セオー！↓エンドレスワロス確定
教えてくれ、俺はあと何回セオー！すればいい・・・

はい、というわけでまたギス戦ばかりしてました。

この駄文にかけるちよつとの時間すら惜しんだおかげでギスもある
程度動かせるようになったものの、糞ゲーが殺人的に加速してしま
いました。

ぶっちゃけ、つまらないので修正入るまで固定ガチ戦は控えようと
思います。

その関係でこの駄文もまた週二、三くらいの更新に戻りそうです。

五十八話 酒の山

宴会場に戻ると死屍累々の惨状が広がっていた。

どいつもこいつも酔いつぶれて転がっているのだ。

そうなって当然の量の酒は消費されていたわけだが、少しは考えて呑んでもらいたい。

こうなってしまうては片付け等は今起きている俺と文でやるしかないからな。

面倒くさいなあもう。

「なに露骨に面倒くさそうな顔してるんですか。後始末の心配でもしてるんですか？」

「その通りだ。今片付けやれるのは俺とお前だけ。これで面倒じゃないわけがない。」

「ここはこのままで構いませんよ。」

「このまま？　おいおい、いくらなんでもこれ放置はまずいだろ。」

あたり一面ゴミだらけ。

空き樽、食い残し、飲み残し、使った食器等、とにかく散らかり放題といったところ。

これで片付けるまでに悪天候に見舞われでもしたら、ゴミは山中に散らばってしまい、

最終的にはその名に恥じぬゴミの山が完成するだろう。そうなら最悪だ。

「いいんですよ。片付けは鬼の方がやってくれますから。」

そう言い残し、文はどこかへ飛んでいってしまった。

おそらく家に帰ったんだろう。もう朝だし。

「およ？ 静かになったと思って来たらもうお開きかい？」

「萃香。」

丁度文と入れ替わるようにして萃香が現れた。
ていうかこいつ、この酔いどれ共と呑んでたんじゃなかったのか。

「お前、どこ行ってたんだ？」

「ちょっと天魔の爺さんのところに。」

「天魔？」

「うん、天狗の頭領ってとこかな？ もういい歳の爺さんだからね、
こっぴどい騒がしい
宴会にや顔を出さないのさ。だからこっぴどちから出向いてサシで呑ん
できた。」

天魔。確か第六天魔王とかそんなん。仏界の奴等に話は聞いたことがある。

確か欲界に住んでるって話だったけど、なんでこんなところにいる
んだろうか。

いや、逆に考えるとこの山がそもそも欲界に属しているのかもしれ

ない。

まあ、今は深く考えないでおこう。考えても利はないし、面倒だし。

「さあて、片付けようかねえ。」

腕をぐるぐる回してやる気を見せる萃香。

しかし、文が帰って結局残るは二人だけ。状況は良くなってない。

「よくやる気が出るもんだな。この惨状の片付け役がたったの二人だつてのに。」

「ん？ いや、公一はいいよ。私一人でやるから。」

「へ？ お前一人でこれを片付けるのか？」

「うん。まあ見てなよ。」

そう言つて萃香は手を出した。

すると、みるみるうちにゴミが萃香の前に集まってゆく。

「・・・なるほど、能力か。」

「そ。私の能力でゴミと汚れを萃めればすぐに片付け終わりつてね。」

確かにすぐだ。もの凄い勢いでゴミが集まって・・・つて

「・・・集まりすぎじゃね？」

「・・・うん。これは予想外。」

ちよつとした屋敷並のゴミが集まった。

これじゃ廃棄するにも場所に困ってしまう量だ。

「・・・スキマでどこかに飛ばそうか？」

「いや、いいよ。本気出すから。」

萃香はとてつもない妖力を開放し、ゴミに掴みかかった。

そしてそのまま握りつぶしていく。いや正確に言うなら違うか。

「密度を高めてるのか。」

「そうだよ。極限まで密にしてゴミをまとめてるのさ。」

”密と疎を操る程度の能力”

これを用いてゴミを集め、更にゴミを圧縮している。

一家に萃香がいれば、掃除機なんていりません。

いまならポイントサービスポイント2倍！

「なんか失礼でアホなこと考えてない？」

「とんでもない。萃香の華麗なる美技に酔っただけのことですよ。」

「そう。なんだか露骨に態度が変わってるけど嘘ついてないよね？」

「嘘じゃない嘘じゃない。本当でござるよ。」

「ふーん、まあいいや。私じゃ判別できないし。」

ほっ。助かった。

こいつに限ったことじゃないけど、なんで俺の考えって読まれちゃうんだろう。

こいつらが鋭すぎるのか、俺が顔や挙動に出やすいのか。後者なら今後は多少意識して改善するでしょう。前者ならどうしようもないが。

「武狼乃が起きてれば調べてもらえるんだけどなあ。」

なんだそのスティッキイなフィンガーズを連想させる名前は。名は体をあらわしちゃうから、もう名前の時点でヤバイ匂いにするんだが。

それに名前が武狼乃ってのはないわ。日本ですよ、こっ。

「随分変わった名前だな。」

「でしょ？ 能力も名前に負けずに変わってるけどね。」

「どんな能力だ？」

「”嘘の味が分かる程度の能力”さ。変わった能力でしょ？」

「確かに変わってるな。限定的で珍しい能力だ。」

こいつは嘘をついてる味だぜとか言っちゃいそうな能力だわ。名は能力も現しちゃうのか。まあジッパー的な方の能力は無いようだけど。

「今度紹介してあげるよ。」

「いや、いいよ。遠慮しておく。」

「そうかい？ 面白い奴なんだけどねえ。」

「白狼天狗なんだろう？ それなら哨戒任務してるはずだから、ちょいちよい山に遊びに来てればいつか会えるだろうし。わざわざ紹介してもらわなくてもいいさ。」

「そうだね。ま、ちょいちよい遊びに来るならいいか。・・・よつと。」

「お、終わったか。」

話をしているうちにゴミの塊は小石程度の大きさまで圧縮されていた。

仕事が速いな、萃香は。

「さてと、後片付けも終わったことだし。」

「帰って寝るか？」

「呑もう！」

「いやなんでだよ！」

さっきまで呑んでたんじゃねーのかよ。
本当にこいつはどれだけ酒が呑みたいんだ。

「呑むのに理由は要らないよ！」

「ええい！なら一人で呑め！俺は疲れたし帰って寝る！！」

「なにい？ 私の酒が呑めないっての！？」

「明日にしろよ。それなら付き合ってやるから。」

「やーだー！私は今呑みたいんだ！」

駄々っ子のように手足をばたばたさせて転げまわる萃香。
すぐく・・・かわいいです・・・。

「仕方ないな、少しだけだぞ？」

「お、呑む気になったかい？ さあさあそれじゃ早速呑もう！」

仕方がない。あれだけかわいいとおじさん無理してでもお願い聞いちやう。

あの殺傷力の前ではどのような紳士でも悉く打ち碎かれるであろう。
紳士であるが故、致しかたなし。

結局、萃香と昼過ぎまでサシで飲み、そのあたりで起きだした妖怪達に加わって、

また宴会となり、二連徹するハメになった。

二度目の朝を迎えた頃には萃香も含めて全員寝静まったので、俺も家に帰って寝た。

これほど飲んだら流石の俺も間違はなく二日酔いになるだろう。

二日酔いの薬も切れてたし、起きたら永琳に薬を貰いに行こう。

五十九話 トラップカードオープン

「頭イテエ・・・。」

予想通りの二日酔い。

二日続けて鬼に付き合ったらそりやそうなる。

薬もないし、予定通り永遠亭に行って薬を貰おう。

スキマを開き、永遠亭へ。それと同時に頭痛が走る。

二日酔いによるものではない。何かが頭にぶつかった。

「いつてえ・・・。何だよ一体？」

俺の頭にぶつかって落ちた物を見る。

岩で出来たタライ、岩盤とでもいうのだろうか。

その特大サイズが俺の頭に落ちてきたらしい。ドリフか。

というかそもそもどこから落ちてきたんだろう。

永遠亭玄関前、上を見ても何も無い。周りは背の高い竹が生えてい
るだけ。

「背の高い竹か、成程な。」

竹というのはよくしなるものであり、その強度は抜群である。

しならせた複数の竹に岩を置くことくらい難はない。

ただし、これほど高い竹だとバランスをとるのは難しいだろう。

それこそ紐か何かで形を整えなければならぬほどに。

「よっ。」

竹の上まで飛び上がり、細工の有無を確認する。

案の定、革紐が先端付近に結ばれていた。

おそらくはこれで複数の竹をしながら結び合わせ、岩盤を置いていたのだろう。

そして俺がここに立ったのを確認してなんらかの方法で紐を解き、岩盤を落下させた。

まず間違いなくこれで合っているはずだ。

だとするなら犯人は少なくともこの永遠亭玄関前が確認できる場所にいたはず。

この視界の悪い竹林じゃ近場でないと無理だし、盤落としからそう時間は経っていない。

つまり、今ならまだ近場に犯人が潜んでいるはずである。

誰がやったかは検討がついているが、俺に仕掛けるとは運がない。

能力で周囲の生命力を確認すれば犯人の居場所なんて簡単に探れるからだ。

「二重の頭痛を治すよりこっちが先だな。」

逃げられる前にさっさと犯人を捕まえてお灸を据えろとしよう。

そう思い、俺は能力の範囲を広げた。

しかし、近場には犯人のものと思しき生命力が見つからない。

植物や虫などの自然の生命力のみだ。

もう少し広げてみるものの、依然として見つからない。竹林は自然の生命力のみ。

永遠亭の中には永琳と輝夜と数多の兎の生命力があるばかり。

おそらく犯人と思しき妖怪兎の生命力がまったく見当たらない。

そもそも犯人が見当違いなのだろうか。

仮に犯人が別人だしよう。

永琳だった場合、こんな幼稚な罠で済むはずもなく、また罠を俺に仕掛ける理由がない。

しかし、一応はこの罠を仕掛けることが出来るし、亭内から玄関前をなんらかの方法で監視することも永琳の技術があれば十分可能である。

輝夜だった場合、暇つぶし程度で仕掛ける可能性は十分にあるが、仮にも永琳の教え子、

こんな程度で済むはずはない。無論、永琳程えげつないトラップは使わないと思うが。

それでも一応は永琳と同じくこの罠の設置および発動は十分可能である。

その他の兎だった場合、まず普通の兎ではこの罠を作ること自体不可能。

となれば妖怪化している兎だが、現在空を飛べる兎はてゐ以外いなかったはず。

つまりこちらも罠の設置が不可能ということになる。

とするのなら、とてつもなく低い可能性ではあるが永琳、輝夜は犯人足り得る。

しかし、この見通しの悪い竹林をなんらかの方法で見通すことが出来るのなら、

この付近には居ないでゐだつて十分に犯人足り得る。

つまりはこの三名のいずれかが犯人であるということだ。

俺の勘ではダントツでゐ、次点で輝夜といったところだな。

ちなみに永遠亭に辿り着けるのは永遠亭の面子以外では今のところ俺だけなので、この三名以外が犯人ということはありえない。

三人中、二人は永遠亭の中にいる。

二人にこの件について話を聞くのが一番早い。

しかし、二人が真実を話すかどうかは定かではなく、それを確かめる術は俺にはない。

「あーあ、こんなことなら例の白狼天狗紹介してもらったな。」

もちろん能力を奪わせていただくために。

嘘の味が分かるのならこの難題に頭を悩ませることなどない。

ていうか頭痛い。色々考えてたら余計痛くなってきた。

やっぱりこの件は後回しにして、先に永琳に薬貰おう。

そう思い玄関に手をかける。

「あばばばばばばばばばばば」

その時、俺に電流走る――！！

取っ手から迸る電気の奔流に飲まれ痙攣を起こす。

電流が止まった頃には俺は体から煙を上げていた。

「殺す気かつ――！」

常人なら間違いなく死んでいた。

オ。ガなら骨が透けていただろう。そのくらいの電流。

この性質の悪さ、永琳や輝夜が犯人の可能性も否定できなくなってきた。

とりあえずは電流も収まったのでお邪魔するでしょう。

「おじゃまします。」

挨拶と共に一步踏み出すとそこは深い奈落の底だった。

しかも底がとりもちみたいなので一杯になっており、足が引つ付いてしまった。

「誠に深く、危急存亡であるッ！」

と、ひじりん風に言うも、声は虚しく木霊するのみ。

いやこれマジでヤバイ。なにがヤバイってこのとりもちみたいのがヤバイ。

無理やり飛ばうとすると足が千切れそうな感覚になる。超粘着されてる。

しかも超強靱。紫も吹っ飛ばす程の力を足から出しても吹き飛んだりしない。

じゃあ大妖怪より強靱なこのとりもちみたいなのってなによ？って事になるけど、

それは俺にはわからない。ヤバイ。俺にわからないなんて凄すぎる。・・・いやノリでいったけど、俺にわからないなんてのは別に凄くはないか。

特に出来ることもないので、ボーっとして早一時間。

ふと名案が思いつく。しかも二つも。

一つは独自空間を作る。俺と物が接触できない空間とかそんなんでもう一つは力を奪う。主に粘着力とかを。

とりあえず粘着力を奪おうとしたがとんでもない量の力だったので一旦やめて、

独自空間をつくることにした。

「そおい！」

小規模の空間なので簡単にできた。
それと同時に足からとりもちみたいなのがはがれた。

「やった！とれた！！」

うまくいったみたいだ。

ちなみに俺と物が接触できない空間なので服とかも俺からやや離れている。

すごいスースーして気持ち悪いので、さっさと穴から出て空間解除しようと思う。

「よし、無事生還。」

穴からの脱出に成功。同時に能力も解除した。
そしてそれと同時に盥が落ちてきた。

「何度も食らう俺じゃない！」

俺は身を翻し、見事にかわして盥の落下地点の横に着地した。
そしてまたも落とし穴へと儚く散っていった。

「とでも思ってたか！」

今度は完全に落ちる前に飛んで回避。

人間とは学習するものなのだよ、はっはっは。
と勝ち誇ったのも束の間。落とし穴の底から矢のようなものが飛んできた。

無論、落とし穴を回避して勝ち誇っている俺が気づけるはずもなく

「アッー！！」

ということになった。

痔の薬も追加決定となった瞬間である。

痛みに耐え、半泣きになりながら抜いた矢のようなものには紙がくくられていた。

「なになに・・・『ねえねえ今どんな気持ちウサ？^^』」

一連の罾の犯人と晩飯のメニューが決定した。

六十話 永琳の薬は万能だと思ってます

永遠亭内部。

数多のトラップが仕掛けられている初見殺しの集積所。

建物に触れるのは危険極まりないので、まず地に足をつけて進むのは早々に断念した。

その上で下方向への注意は決しておろそかにしてはいけない。

更に前後左右にも気を配りつつ、上から来るものに気をつける。

一瞬の油断が命取りになるこの場所では常に気を張り詰めていなければならぬ。

しかし、一体いつから永遠亭はこんな物騒なところになってしまったのだろうか。

こんなトイレにいくのも命がけ位の畏密度じゃ、住んでいる者が困るレベルだと思う。

永琳や輝夜はともかく兎達は全員食材になってもおかしくはない。てゐのいたずらだとしても限度があるだろう。永琳達はこれに何も言わないのか。

「おや？」

慎重に進んでいると、奥から兎が出てきた。

無造作に直進しているようだ、畏にかからないのだろうか。なんにしてもいいタイミングで現れてくれた。幸運の兆しだ。

仮に設置されている畏が自動発動系ならば、あの兎の通った場所は

安置というわけだ。

任意発動系の罠ならばあの兎がいれば罠の発動を見送らざるを得ないということ。

ここの危険な罠に兎がかかれば死んでしまうからな。

いずれにしても利用できることは間違いない。

俺の目の前まで進んで来た兎を捕まえて、抱きかかえる。

もっふもふである。なんという抱き心地。お持ち帰りしたくなるな。そんな夢心地に浸りつつ、兎が進んできた道をなぞるように進む。

特に罠が発動することもなくサクサクと進むことができた。兎様々だな。

そして無事に永琳の部屋まで辿り着いたので兎を解放した。ありがとうさぎ。

永琳の部屋。

一見、普通の和室に見えるが、実際は違う。

まず入り口。ただのふすまに見えるが、生体登録及び入退室管理機能を持っている。

さらに反振動生成機能によって部屋に対する一切の干渉を高いレベルで相殺できる。

この機能により、すでに登録済みで許可のある者以外は部屋に入ることが出来ない。

そして部屋内。空間歪曲機能によって6畳から200畳までの範囲で自在に変化できる。

診療室、薬剤保管庫、実験室等はその機能によって普段は1畳未満に縮められている。

更には思考認識型快適空間システムが適用されている。

それが何かと言うと、登録された一人の思考を読み取り、自動的に部屋に備えられた機能の粋を尽くして快適な空間を作り出す機能で

ある。

具体的には暑いと思ったなら冷房が効くし、寝ようと思えばベットが出てくる。

そんな素晴らしい機能だ。月の技術パネエ。

「永琳いるー?」

ふすまを開けて聞いてみる。まあ聞かなくとも見れば分かるのだが。

「あら、ボロ雑巾みたいな格好してどうしたの?」

「ボロ雑巾で。・・・いや確かにそんな感じだけどさ。」

主に電撃の罠のせいで。

「とりあえず、お茶でも用意しましょうか。」

「毒物以外でお願いします。」

「失礼ねえ、私がそんなもの淹れるはずないでしょう。」

いや月の奴等の相手した後、福寿草のお茶振舞ってくれたよね。

あれ完全に毒物だよ。俺、昇天しかけたもの。命にかかわることは忘れんよ。

ていうかあれちよつとしたトラウマだしね。

永琳もいつか冥界あたりで猛毒の茶を出されて嫌な気分になるがいさ。

「はい、お茶。」

「ありがとう。」

頂いたお茶に早速毒物判別薬の効力を与える。

・・・特に反応はないな。よし、普通のお茶だ。

「で、今日は何の用？」

「えーと、薬を貰いにちょっと話をしに、かな？」

「そう。それじゃちょっと診療するわね。」

・・・

「二日酔いの薬と傷薬と痔の薬があれば十分ね。」

「あ、二日酔いの薬はいくつか貰えないか？」

「いいわよ。いくつ要るの？」

「んー、まあ二、三個でいいや。」

「分かったわ。ちょっと待ってて。」

「はい。」

空間歪曲で薬剤保管庫を通常の大きさに戻して行く。

薬剤を取り出す永琳の表情が一瞬険しくなったが何かあったのだろうか。

「はい、薬よ。」

「ありがとう。ところで一瞬険しい顔してたけど、どうかしたのか？」

「ちょっと、薬が一つなくなってるね。まあそれはいいわ。で、話というのは？」

「ああ、実は――」

俺はここに来るまでの罾と探ってみたことについて詳しく話した。それを聞いた永琳は少し考えてからまた険しい表情になった。そして何かを出して確認するようにそれを見ると俺に向かって言った。

「結論から言っわ。てめは消えている。」

「消えている？」

「ええ、さっき薬が一つなくなったと言ったわよね。その薬の効果よ。」

「しかし生命力が消えるってことはないだろ？俺の探知にかからないはずは――」

「ないわね。でも貴方は見つけたことに気づけないのよ。」

「どういつことだ？」

「薬の名前は『ヤゴコロバニッシュα』 認識妨害薬よ。」

「認識妨害？」

「ええ、何をしてもされても認識されなくなる薬よ。」

「なるほど、俺の探知に引っかけなくても俺がそのことに気付けないわけか。」

「その通りよ。まあこの薬なら貴方の力で簡単にてゐを捕まえらるわね。」

「どうやって？ 俺はてゐを認識できないんだろ？」

「そんなの関係ないわ。この辺一帯に存在するこの薬の効力を全て奪えばいいのよ。」

「その手があつたか。」

さすが天才。考える事のスケールが違う。

「あとで薬の効力は返してもらうけどね。」

「分かってるよ。」

早速、認識妨害薬の効力限定で力を奪い始める。
この限定という制限のせいで結構疲れそうだが、他に用事もないし

問題無いだろう。

「お？　これか？」

奪った後に奪ったことに気付く。奪ってる最中は認識妨害のせいで気付けないからか。

なんともいえない新鮮な感覚だ。

それにしてもてゐは予想以上に近場にいたようだ。

「まさか永琳の部屋の前にいるとはなあ。」

「大方、貴方にいたずらしようとして初めからついて来てたんでしようね。」

「まあいいや。薬の効力はどれにやればいい？」

「これらにいれておいて。」

「了解。」

奪った薬の効力を全て薬剤に与えた。

一つくらい持つておきたかったけど、永琳にばれたら怖いのでやめておく。

「さあて、お仕置きの間だ。」

「程々にね。」

「ああ、ここに何でも治す名医がいるの踏まえた上での程々にな。」

さて、何倍返しにしようかな。
ここまで熱烈に歓迎してもらったんだ、お礼はきちんとしないとね。

六十話 永琳の薬は万能だと思ってます（後書き）

祝 ギス修正！

というわけでギスの修正っぷりを試してみました。

うん、確かにものすごく弱体化してるね。

でも最強の部類だね。25じゃないねコレ。

お前は修正されたんだぞ？

ダメじゃないか！修正された奴が強くちやあ！普通機体でなきゃあ
ああ！！

うん、まあこの駄文には全然関係ないです。

六十一話 交渉

「待てゐ！」

「待てといわれて待つわけないよ！」

永琳の部屋から出て縁側を抜け、竹林での追いかけっこが始まった。速度では俺のほうが無断上のはずなのだが、いかんせん竹が邪魔でうまく進めない。

一方でゐはすると竹の合間を抜けるように逃げていく。竹林での進行速度を比べるならばてゐの方がやや速いといったところ。

このまま追いかけるだけでは地の利を活かせるてゐに追いつくことは出来ない。

しかし、それはあくまで普通に追いかけた場合の話。

てゐの場所が目視できる今、そんなことをする必要はない。スキマで一発、これがベストだ。

俺の前にスキマを開き、てゐの前に繋げる。

「さあ、捕まえた。」

「ひっ！な、なんでいきなり……！？」

「能力で。」

「……ひどいこと、しようとしてる？」

「割と。」

「いや、その、実はさっきの罠は私もやりたくてやったわけじゃない。くても……。」

「ん、そうなのか。」

「い、いや本当だよ！？ホントにちょっとあのその」

「言い訳は地獄で聞く。遺言なら一言くらい聞いてやろ。」

「じゃあ、一言。かかったなアホが！！」

「！？」

パンッ！

音を立てて、てゐが破裂した。

どうやらダミーバルーンだったらしい。してやられた。

「くそう。一体いつから入れ替わってやがった。」

俺が能力で索敵してからてゐから目を離れた時間なんてほとんどない。

そのわずかな隙に入れ替わるとはまるで忍者の変わり身だな。

……あれ？なんか眠く、なって、きゅ……zzz……。

「・・・ちゃんと寝てるね。」

てゐ型ダミーバルーンに仕込まれていた無色無味無臭の強力睡眠ガスによって寝かされた俺の前に本物のてゐがやってきた。

「お師匠さまの部屋から出たところで私を見つけたことから考えると、多分あの盗み出した薬の件はお師匠さまにバレたんだよね。」

うーんと腕を組み、考え始めるてゐ。

ここを切り抜けたとしても、薬の件で永琳にお叱りを受けるのは明白。

どうにか策をめぐらせてこの件を不問で済ます方法がないかと考える。

今回のいたずらに他の兎は参加しておらず、てゐ単独の行動である。口八丁で責任逃れしようにも今回に限っては責任を押し付ける仲間がいない。

更に手持ちの便利な道具類は永琳に効果のありそうなものは何もない。

この条件のまま、てゐ単独で切り抜けるのはまず無理、不可能といえる。

そこで新たに手札に加えようと考えているのが目の前で寝ている男、佐原である。

いたずらの格好的になってくれた男を自軍に加える、これは難しいことではない。

永琳ならいざ知らず佐原程度ならばと、てゐは自分の交渉術に自信を持っていた。

そして佐原をうまく利用すれば切り抜ける術は十分に存在する。

客觀的にみて永琳の佐原に対する信頼はかなり厚い方だ。特に荒事に関しては。

例えばその佐原がすでに仕置きをしておいたと報告したのならどうなるだろう。

きつと永琳の中では、この件はもう片付いたこととして扱われる。

そうなれば、私はお咎めなしで今回の件を乗り切ることができる。

無論、仮定と憶測を繋いだだけの仮説ではあるが実際こうなる可能性は高い。

何を根拠に可能性が高いかと言われると、勘としか言いようはないのだが、それでもそれなりの年月を共に過ごした面々の行動について予想だ。そう的外れでもないだろう。

策は決まった、後は実行するのみ。

必要な物を取りに行き、交渉の舞台をセット。前準備は終了。

意を決して目の前の男を起こす。失敗すれば地獄、成功すれば無傷だ。

早速用意した（時代的に考えて非合法ではない）覚醒剤を佐原に与える。

「ん・・・、あれ？なんでこんなところで寝てたんだ？」

あれー？俺、竹林で寝るような趣味はないんだけどな。

それになんかびっくりするほどすっきり起きたな。

いつも寝起きは頭がボーっとするし、気だるさが残ってるものなんだが。

あれか、竹林という自然の環境が生んだ驚異のリラクゼーション効果とかか。

「おはよう、気分はどう？」

お、てゐだ。

なんか知らんけどすごいすっきりした気分だったのに一気にもやつとした気分になった。

「んー・・・まあまあかな・・・」

そう、まあまあだ。てゐを見るまでは最高にすがすがしい気分だったけど。

・・・あれ、ちょっと待てよ。・・・あつ。

「おまつ！よくもまあ俺の前に出てこれたもんだなオイ！」

思い出した。てゐを追って寝かされてたんだよ俺。

「まあまあ、ちょっと落ち着いてよ。」

「俺は落ち着いてるよ。落ち着いてやらないとまた逃がしちまうからね。」

「まあちょっと待ってよ。いたずらはちょっとやりすぎたよ。ごめん。」

「うん、謝罪は分かった。しかしギルティ。罪は罪、罰は罰だ。」

「道理だね。でもそれじゃ損を得には変えられない。」

「少なくとも損した分だけ気を晴らせれば十分だろ。」

「その気晴らしと実のある得を選べるとしたらどうする？」

「“人間を幸運にする程度の能力”で幸運をあげるから許してってか？断るね。」

「勘違いしてもらっちゃ困るね。そうじゃないよ。」

「ほう、なら一体どんな得を与えようと言った？」

「これをあげるよ。」

なんだこれ？紙切れ？

・・・・・・・・！！

「こ、こここれはっ・・・！？」

「どうかな？いたずらの対価としては妥当だと思うんだけど？」

「・・・・・・・・これは一体どうやって・・・？」

「この高速絵画作成機っていうのを使って。」

てゐが取り出したのは永琳特製の機器。

ちよつとゴツめのカメラのようなものだ。用途もカメラと同じである。

機器で出来上がったものを写真というか絵というかの違いくらいしかない。

「なるほど、本物ということか。」

「で、どう？」

「・・・いいだろう、コレで手を打とう。」

「そう、公一が話の分かる奴でよかったよ。」

「それじゃ、俺は帰るわ。」

今、手に入れた家宝を早く大事に仕舞わないと。

「あ、まだもう一つ用があるんだよね。」

「なに？急いでるんだけど。」

「私に薬の件も含めてお仕置きしたことにしといてくれない？」

「そこまでの義理はない。じゃあな。」

「いいや、貴方は断れない。」

「はあ？」

「今の私に公一がその絵を持っていることをお師匠さまに報告しない義理はない。」

「ぐぬっ！」

「でも、もし口裏合わせてくれるのなら、私にも口を閉ざすだけの義理ができる。」

「むむむ・・・！」

「どうかな？互いにとって有益なことだと思うんだけど。」

「・・・仕方ないな。今回はそういうことにしておいてやろう。」

「やった！ありがとう公ー！！やっぱり持つべきものは友だね！」

「・・・それじゃ永琳には一言いっておくから頃合を見て永遠亭に戻れよ。」

「了解！」

こうしててゐとの取引を終え、永琳に一言言ってから帰宅。

入手した家宝を最高の額に入れ飾り眺める。至福の傍観つ・・・！まさか永琳の入浴シーンをこんな形で拝めるとは思わなかった。

しかしてゐは一体どうやってこの撮影に成功したんだろう。

永琳も同性相手だとガードが緩くなるのだろうか。

まあなんにせよ最高の一枚が手に入ったんだ。いたずらの対価としては破格。

むしろ感謝したいくらいだな、てゐ様々だ。

この時、俺は長年追い求めたシーンに気を取られて気付いていなかった。

俺の手元にこの絵があるということをしてゐに知られているということとは、

てゐに俺の弱みを握られているといふことと同義だといふことに。

六十一話 交渉（後書き）

はい、前の投稿から随分たったような気がするので言い訳します。前の話の後、来る神霊廟に向けて東方リハビリを開始しました。

その後、夏の戦場にて無事入手。その他の戦利品も入手。

んで、まあ神霊廟やったり他の戦利品に目を向けたりと忙しかったわけです。

で、まあごらんの有様だよ！！ということでした。

この駄文の次話はT A Oマスターしたら投稿しようと思います。いつになるかな・・・。

六十二話 探し寺（前書き）

こっちの話は結構久々の投稿ですのう。

六十二話 探し寺

変態紳士の朝は早い。今日も家宝を拝むことから始まる。

家宝に向けて感謝の二礼二拍手一礼、最近の日課だ。

まるで神社の参拝でもしているかのような行動である。

俺は永琳の天才頭脳が思兼神を超える神域に達していると考えている。

人は神にも悪魔にもなれるというようなパスカルの言葉がある。

永琳は俺にとって既に人間を超越した神のようなものだ。

だから決して下心とかそういう低俗なアレで家宝を飾ってるわけじゃないんだ。

神に対する信仰の表れなんだよ。だから二礼二拍手一礼なんだ。嘘じゃないよ。

まあ仮に嘘だとしても、例の白狼天狗位にしか見抜けないだろうかな。ふひひ。

さて、日課も済ませたところでそろそろ次の行動に移ろうと思う。今日からまた俺の運命を鉛筆賽に委ねようと思う。

残りは守矢と命蓮寺。ぶっちゃけそろそろ命蓮寺が来て欲しいところだ。

何故かというと、聖が封印される時期がいまいち分からないからだ。知らないうちに黒歴史よろしく聖が封印されましたでは面白くない。是非ともそれより先にお会いしたいところである。

鉛筆賽振り始めた頃だとまだ余裕あるかなと思ってたけど、もう陰陽師とか活発に活動してるしそろそろヤバイのかもしれない。

とりあえず寺については場所の名前だけは知ってる。信貴山にある寺だ。

寺の名前は知らないし、信貴山つてのがどこにあるかは知らないが、とにかくその寺だということだけは、はっきりと覚えている。昔、魔神復誦見て「神綺様だ！信貴山だけに」なんて友人に言ったその日、俺は安易な駄洒落がどのような悲劇を招くのかを身をもって理解すると同時に、漢字の読みはきちんと確認するべきであることを学び、信貴山を深く心に刻んだからな。

・・・図らずも黒歴史のかけらが体の端から滲み出てしまった。とにかく、運命の一投といこうじゃないか。

「そおい！！」

掛け声とは裏腹に軽く丁寧に転がす。

コロコロコロ・・・

「きた！命蓮寺きた！これで勝つる！！」

出た目は俺の望んだ目、命蓮寺だった。

「それじゃ早速探索と行こうか。」

探索プランとしては、まず山村や山の周辺にある人里に行く。そしてそこにある山が信貴山かどうか聞いて外れなら他へ行く。これを繰り返し返せばいつかは信貴山に辿り着くというわけだ。要するに総当りである。山だらけの日本において、実に面倒なプランだ。

しかし、他にいい案が浮かばなかったので仕方ない。

とりあえず行動を起こして、途中でいい案が浮かんだらそちらへシフトすればいい。

そう思い、すぐに準備して出発した。

後の話になるが、いい案が浮かんだのは寺を見つけた後であった。いい案というものはえてして終わってから気付くものである。

老人探索中・・・

探索開始から約一ヶ月の時間が流れた。

今日も山、昨日も山、一昨日も山、その前も山。山尽くしの毎日である。

最初は山菜とか手に入るし、俺の好きな山菜そばなんか作ったりして山最高とか思っていたが、流石に連日山ばかり巡っているのは段々と飽きてくる。

もうなんか信貴山が来いつてくらいの気分になっている。

「次だ、次違ったら気分転換に都にでも行こう。」

気分転換は重要である。人が行動を起こす為に何よりも大切なのはやる気だ。

やる気が出なければ何をやってもうまく進まないものである。そのやる気を取り戻す為なら多少の時間的なロスには目を瞑る。

やる気がないまま続けるより、モチベ維持に時間を割いた方が探索が早く済むからだ。

それにもう奈良辺りまで来てるし、ちょっと都に寄るくらい大した時間じゃない。

よし、そうと決めたら本日の山探索といこうじゃないか。

今日は前方に見えるあの山にしよう。・・・おや、なんか立派な建物があるな。

・・・訂正、立派なボロ寺があるな。人はいなさうだなあ。

しかし折角近くまで来たので、まずは寺に寄ってみることにする。

「うーん、寄れば寄るほど人の気配がしないなあ。こりゃ無駄足かねえ。」

近くでみると遠くで見るとよりボロい寺。人が手入れしてるとは到底思えない。

せいぜいが山賊とかならばあるいはといったところだ。

「おや、参拝の方でしょうか？」

寺の前に着くと、虎っぽい人が声をかけてきた。

寺の人だろうか、よくこんなところに住んでいるものである。

俺の予想では無人の廃寺か山賊の根城の二択だったので、結構驚いた。

が、会っていきなり驚くと不審者っぽいので表面上は平静を保ちつつ返答。

「いや、悪いけど違うんだ。ちよいととある山を探して旅をしているんだが。」

「山？」

「ああ、信貴山って山なんだがどこにあるか分からなくてな。」

「この山が信貴山ですよ。」

「え、マジ？」

「まじ？」

ついこの時代では通じない言葉が出てしまった。
驚きの二連続で少し素が出てしまったようだ。

「あ、ああいや、本当にここが信貴山？」

「ええ。この山は信貴山です。」

どうやら目的の山はここらしい。

しかし寺は今のところ目の前のボロ寺しかないわけだが、まさか・

「ちょっと失礼。」

「？」

こっそり相手の力を探る。

・・・うん、これ妖怪だ。妖力がある。

虎っぽくて妖怪で信貴山で寺の方となるとこいつは星ちゃんなんだろうか。

「少し尋ねたいのですが、ここは毘沙門天を祀る寺なのでしょうか。」

「ええ、よくご存知で。」

お、ビンゴっばい。

一旦探索中断しようとした矢先の発見とは、奇跡的な何かを感じるな。

この奇跡感覚、守矢か！……いや関係ないよな、うん。
ていうかよく考えたら毘沙門天祀ってんだから仏界に行ってちょっと毘沙門天に案内してもらえばよかったな。

しかし、この寺の惨状からすると物凄く嫌な予感しかない。

「ここに聖という僧がいると伺ったのですが。」

「……聖はもう、ここには居りません。」

ああ、やっぱり。この荒れ具合から考えるとそうだと思ったよ。

こんな荒れ放題とかまともに信仰されてる寺じゃ有り得ないからな。
一足遅かったってことか。しかし、時の流れは早いもんだね。

輝夜の頃からそんなに経ってないと思つてたらもうこれだからな。

「あれ？貴方は佐原様ではないですか？」

ひょっこりと寺から出てきた灰色ずくめの少女が俺に向かってそう言う。

耳も尻尾も出てないけど、こいつはどう見てもディ……ナズーリン。

星ちゃんはやや見た目違って分かりづらかったけど、こいつはZ
UN絵そっくりだ。

「まあ俺は佐原ですけど。どっかで会いました？」

確か俺、面識ないよな。この夢の国のd・・・ナズーリンとは。

「私は毘沙門天様の使い、名をナズーリンと申します。貴方の御高
名は毘沙門天様よりかねがね承っております。」

「へえ、毘沙門天からねえ。」

俺、毘沙門天とはそんなに会ったりはしてないんだけどなあ。

あれか、俺が日本にいるから日本にいる使い達には注意勧告でも出
してんのかな。

仏界ではちよつとばかり暴れた前科があるからそうであつても仕方
ないが。

「あ、あのつ、ナズーリン・・・」

「ん、なんだいご主人？」

「この方は一体・・・？」

「ああ、ご主人は知らないのか。このお方は佐原公一様といって名
のある神だよ。」

「神!？」

「いや、人間だから。神じゃないから。」

「え、毘沙門天様は武神と仰られていたのですが。」

「いやいや、まだ人間辞めるつもりないから。そりゃ毘沙門天の勘違いってやつだよ。」

「しかし、毘沙門天様からこの話を伺ったのはもう百年以上前・・・

」

「長生きしてるけど人間です。」

「はぁ・・・。」

なんだか釈然としない表情で一応了解の意を示すナズーリン。

明らかに一人取り残されて状況を把握できてない星ちゃん。

聖封印前には間に会わなかったがこの二人に会えただけでもまあよしとしよう。

「ところでナズーリン。」

「なんででしょうか。」

「その言葉遣いやめないか。」

「いやしかし毘沙門天様からは粗相のないようにと。」

「何かその、うん・・・ぶっちゃけその言葉遣い、気持ち悪い。」

「きもっ・・・!?!?」

「うん、まあ普通に話してくれよ。固い言葉遣いされるの嫌いなんだ。」

「・・・そうですか、そうであれば仕方ありませんね。」

「あのー・・・。」

「ん？なんだご主人。」

「どうした？」

「立ち話も何ですので、中に入りませんか？」

「いいのか？」

「構いませんよ、大したお持て成しはできませんが・・・。」

「ん、そりゃ別にいいよ。それじゃお言葉に甘えて失礼します。」

こうして俺は目的地に到着した。

目的の半分は果たせなかったが仕方ない。無念。

六十二話 探し寺（後書き）

夏コミゲーやってたらゲーム製作のモチベがモチモチしてきました。
そろそろ来年の夏に向けてゲーム作り始めようかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1234q/>

升能力者の幻想入り

2011年9月20日20時02分発行